九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中国の文化大革命期における日本文芸の翻訳

謝, 帆

https://hdl.handle.net/2324/6787689

出版情報：Kyushu University, 2022, 博士（学術）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

令和四年度博士学位論文

中国の文化大革命期における
日本文芸の翻訳

地球社会統合科学府
地球社会統合科学専攻
3GS20013S
謝　帆

要　旨

本論文では、文革期に政治イデオロギーの宣伝を達成するために翻訳された日本の文学作品とその原作との比較検討を通し、中国の内政、外交政策を分析しながら、中国側の日本の文学作品に対する解読に焦点を当て、１０年間という長きにわたる文革期の中国における日本文学の翻訳実態を解明することを目指した。

本論文は、序章、本論、終章、参考文献、付録からなり、６章構成となっている。

第1章「序論」では、まず研究背景、先行研究、研究目的について述べ、そして博士論文全体の枠組みを示した。先行研究で残された課題を次の７つの研究設問に設定し、どのように文革期における日本文学の翻訳実態に接近するかを考えた。

①歴史的な観点と中国の対外政策の視点から、文革期の翻訳活動が政府の監視のもとに、どのように行われたか。

②文革期にどのような日本の文学作品が翻訳されたか。

③文革期の翻訳対象がどのような基準で選択されたか。

④各作品にどのような翻訳ストラテジーが採用されたか。

⑤日本の文学作品に対して、文革期の編集者や訳者がどの角度から解読しているか。

⑥翻訳テクストと原文テクストとの違いには、当時の中国の時代背景と社会状況がどのように作用しているか。

⑦政治イデオロギーを宣伝する翻訳活動において、賛助者、翻訳者、読者の立場が文革期にどのような役割を果たしたか。

第2章「文化大革命期の翻訳活動」において、まず文革期の政治背景という視座から、外国文学全体の翻訳事情を概観した。次に、「公開翻訳」、「内部翻訳」、「潜在翻訳」という３つの刊行形式と、翻訳文学誌『摘译』に見られる文革期の大まかな翻訳方針を手がかりとして、文革期に翻訳された日本の文学作品を分類し、整理した。

第3章「文革期における日本文学の選択基準」においては、翻訳作品につけられた出版説明、前言、後記、及び評論などへの検討を行うことにより、文革期に翻訳対象として選択された日本の文学作品に共通する特徴と作品に見られる全体的な翻訳ストラテジーをまとめた。さらに、考察を多角的にするために、国情の異なるソ連、アメリ

カ、日本のどのような文学作品が文革期において翻訳対象となったかという比較の視点も導入した。

第4章「文革期における日本文学の翻訳ストラテジー――作品の分析を中心に――」において、文革期に翻訳された、「優秀なプロレタリア革命戦士・作家」と見做された小林多喜二の作品『沼尻村』、『不在地主』と『蟹工船』、「反動作家」と「右翼ファシスト」と位置付けられた三島由紀夫の作品『憂国』と『豊饒の海』４部作、認知症と老人介護の問題をテーマにした有吉佐和子『恍惚の人』、木村琴美『穂波のゆくえ』、山田洋次・宮崎晃『故郷』、堺屋太一『油断！』などの日本の農業と石油問題を反映する作品、小松左京『日本沈没』、八住利雄『ノストラダムスの大予言』といった「科学幻想作品」、概要の形式で翻訳された結城昌治『不良少年』などを検討対象とした。作品の出版説明、前言などを検討しながら、翻訳テクストにおいて意訳、省略、抄訳、増訳、削除などの翻訳方法が使われたか、翻訳テクストの形式と構成が原文テクストと一致しているかなど、原文テクストへの忠実性を分析した。さらに、翻訳テクストに見られる注釈を分析し、翻訳者が訳文の注釈に意図的に特別な意味づけをし、原作者が狙っていない効果を訳出したかという側面も考察した。

第5章「文革期における日本文学の翻訳作品に関わる人々」の中では、極めて高度に組織化された文革期の翻訳作業において、賛助者である政府機関の監視と管理を受けて、翻訳対象の選択から翻訳用語の使用まで、厳密な行動規範を遵守しなければならなかった訳者の境遇を検討しながら、彼らの翻訳時の思惑を推察した。また、当時の読者がどのようなルートで作品を入手したか、作品をどのように読み取っているかなどについて考察した。さらに、文革期において、翻訳作品を読む読者側と、原作を翻訳作品に再構築する賛助者、翻訳者側との相対的な関係を検討した。

第6章「結論」において、本研究の締めくくりとして、「序論」で提起した７つの研究設問に対して、一定の結論を与えた。

本論文は、文革期の日本文学翻訳に対して、検閲政策を中心に、当時の中国の内政と外交政策を分析しながら、文化大革命という特殊な時期の翻訳活動に焦点を当てる。政治イデオロギーと密接な繋がりを維持する文革期の翻訳行為の本質をより深く理解するために有意義だと考えられる。

目　次

第1章　序論 1

第1節　研究背景 1
第2節　先行研究 4
第3節　各章の内容 14

第2章　文化大革命期の翻訳活動 16

第1節　文革期の政治的背景と翻訳活動 16
第2節　日本の文学作品について 20
2.2.1　「公開翻訳」 20
2.2.2　「内部翻訳」 22
2.2.3　「潜在翻訳」 25
第3節　翻訳文学誌『摘译』について 26

第3章　文革期における日本文学の選択基準 33

第1節　翻訳作品における「出版説明」や評論など 33
第2節　翻訳対象の選択基準 34
3.2.1　特定作家の代表作と関連作品 34
3.2.2　労働者の階級闘争と革命運動を宣揚する作品 38
3.2.3　軍事、戦争の面から、反帝国主義、反修正主義を唱える作品 40
3.2.4　日本の深刻な経済、政治、社会問題を反映する作品 44
3.2.5　日本における文学活動の紹介 52
3.2.6　まとめ 56
第3節　文革期におけるソ連、アメリカ、日本文学の翻訳作品の比較を軸にして 57
3.3.1　アメリカの黒人運動をめぐって――アメリカの文学作品 57
3.3.2　ソ連とアメリカの「デタント」と「世界制覇」 62
3.3.3　中日国交の正常化――日本の文学作品 68
3.3.4　「時代の英雄」の造形――ソ連の文学作品 72
3.3.5　まとめ 75
第4節　日本文学の翻訳ストラテジー 76
3.4.1　日本の映画のシナリオと演劇の戯曲 76
3.4.2　日本の文学作品の原文の出所 77
3.4.3　現代の作品への関心 79
3.4.4　翻訳活動と評論活動における各労働者階級の参加 80
3.4.5　文革期に出版された文学作品の芸術性 81

第4章　文革期における日本文学の翻訳ストラテジー――作品の分析を中心に――... 84
第1節　小林多喜二文学の翻訳――『沼尻村』、『不在地主』、『蟹工船』 84
4.1.1　中国における小林多喜二の翻訳 85
4.1.1.1　中国における小林多喜二への評価 85
4.1.1.2　文革期における小林多喜二の翻訳 91
4.1.2　文革期の小林文学..... 92
4.1.2.1　翻訳作品の「译后记」 92
4.1.2.2　翻訳テクスト..... 96
4.1.3　まとめ 109
第2節　三島由紀夫文学の翻訳①――『憂国』 110
4.2.1　中国における三島文学の翻訳 110
4.2.1.1　文革期における三島文学の翻訳 110
①三島由紀夫と文化大革命 111
②三島文学の翻訳――１回目の「三島が盛んに翻訳された時期」 112
4.2.1.2　文革後の三島文学の翻訳 115
①1980年代における三島文学 115
②1990年代における三島文学――２回目の「三島が盛んに翻訳された時期」. 117
③２１世紀以降の三島文学 119
4.2.1.3　中国の学界における三島評価の転換 121
4.2.2　『憂国』の訳本から見る文革期の三島文学 123
4.2.2.1　翻訳作品の「出版说明」 123
4.2.2.2　訳文のテクスト..... 127
4.2.3　まとめ 129
第3節　三島由紀夫文学の翻訳②――『豊饒の海』４部作..... 130
4.3.1　あらすじ 131
4.3.1.1　第1巻『春の雪』 131
4.3.1.2　第2巻『奔馬』 131
4.3.1.3　第3巻『暁の寺』 132
4.3.1.4　第4巻『天人五衰』 132
4.3.2　翻訳作品『豊饒的海』 133
4.3.2.1　訳本について..... 133
4.3.2.2　「三島研究資料」における『豊饒の海』への評価 136
4.3.2.3　訳文のテクスト..... 137
①第4巻『天人五衰』 138
②第3巻『暁の寺』 146
③第2巻『奔馬』 149
④第1巻『春の雪』 150
4.3.3　まとめ 153
第4節　有吉佐和子文学の翻訳――『恍惚の人』 154

4.4.1　原作『恍惚の人』 155
4.4.1.1　あらすじ 155
4.4.1.2　原作について 156
4.4.2　翻訳作品『恍惚の人』 160
4.4.2.1　訳本の「出版説明」 160
4.4.2.2　訳文のテクスト 168
4.4.3　まとめ 178
第5節　翻訳から見た日本の農業問題――木村琴美『穂波のゆくえ』、山田洋次・宮崎晃『故郷』など 178
4.5.1　文革期における中国の農業政策 179
4.5.1.1　「農業は大寨に学べ」運動 179
4.5.1.2　農業問題に関わる作品の翻訳について 183
4.5.2　日本の農業問題をめぐる翻訳作品 184
4.5.2.1　木村寿美『穂波のゆくえ』 184
①あらすじ 184
②能重誠一の自殺 185
③戦後における日本の農業国策 186
④訳本の「編者按」について 188
⑤訳文のテクスト 190
4.5.2.2　『故郷』 193
①あらすじ 193
②訳本の「出版説明」について 194
③訳文のテクスト 197
4.5.3　まとめ 201
第6節　石油危機に関わる翻訳――堺屋太一『油断！』など 201
4.6.1　文革期における中国の石油政策 202
4.6.1.1　「工業は大慶に学べ」運動 202
4.6.1.2　1950年代からの石油文学 205
4.6.2　日本の石油問題をめぐる翻訳作品――『油断！』 208
4.6.2.1　原作について 208
①あらすじ 208
②「警世の書」と「予測小説」 209
4.6.2.2　翻訳について 210
①訳本の「前言」について 210
②訳文のテクスト 216
4.6.3　公害問題に言及する作品 226
4.6.4　まとめ 228
第7節　科学幻想小説における終末論への批判――小松左京『日本沈没』、八住利雄『ノストラダムスの大予言』 228
4.7.1　中国における科学幻想小説 230

4.7.1.1　中国における「Science Fiction」の発展 230
4.7.1.2　「科学幻想小説」とは 232
4.7.1.3　文革期における科学幻想小説に関する定義 234
4.7.2　『日本沈没』と映画シナリオ『ノストラダムスの大予言』 236
4.7.2.1　あらすじ 236
4.7.2.2　1970年代前半の日本における終末論の流行 237
4.7.2.3　文革期における終末論への批判 239
4.7.3　翻訳作品『日本沈没』と『諾斯徳拉達謬斯的大預言』 242
4.7.3.1　訳本の「出版説明」 242
4.4.3.2　訳文のテクスト 247
①性的、恋愛的な描写 247
②科学知識と被災状況に関する描写 249
③中国の外交政策に関する内容 251
4.7.4　まとめ 253
第8節　翻訳作品の概要――結城昌治『不良少年』 253
4.8.1　原作『不良少年』 254
4.8.1.1　あらすじ 254
4.8.1.2　「非行少年」とは 255
4.8.1.3　「不良少年」とは 257
4.8.2　翻訳作品『不良少年』（日本中篇小説・梗概） 259
4.8.2.1　翻訳作品の「前言」 259
4.8.2.2　翻訳者のまとめた梗概 261
4.8.3　まとめ 264
第5章　文革期における日本文学の翻訳作品に関わる人々 265
第1節　翻訳活動の賛助者 265
5.1.1　「三結合」の創作方法 265
5.1.2　文革期の「写作組」 266
5.1.3　文革後の歴史清算 268
第2節　翻訳者の境遇と意識 270
5.2.1　「知識分子」としての遭遇 270
5.2.2　翻訳者の署名 272
5.2.2.1　「集体署名」 272
5.2.2.2　「偽名署名」 274
5.2.2.3　「署名無し」 276
5.2.3　翻訳者と「潜在翻訳」 279
第3節　読者の視点から見る文革期の翻訳 284
5.3.1　読者と編集者、翻訳者の相対的な関係 284
5.3.2　文革期の「地下読書運動」 285

第6章　　結論 288

参考文献(刊行年順) 296

【文革期の日本文学の翻訳】 296
【単行本】 302
【雑誌論文】 314
【学位論文】 326
【新聞記事とその他】 327

付録 332

付録①――文革期に翻訳された日本文学の単行本一覧 332
付録②――雑誌『摘译』に翻訳された日本文学の作品と関連作品一覧 332

第1章　　序論

第1節　　研究背景

プロレタリア文化大革命は、中国の現代史において空前の政治運動であり、1966年から1976年まで、資本主義の復活を阻止する社会改革運動などを名目として行われたものであるが、実際には大躍進政策の失敗によって国家主席の地位を劉少奇党副主席に譲った毛沢東主席が自身の復権を画策するための、中国共産党内部の大規模な権力闘争である。多数の人命が失われ、およそ１０年以上の実質的な鎖国状態を招き、中国の近代化は大きく遅れ、経済活動の長期停滞や文化の破壊をもたらした。

文革期の外国文学の翻訳活動も同じ状況である。1960年代後半、各文学組織や集団への批判闘争により、翻訳活動が「麻痺状態に陥って」[1]しまい、多くの翻訳作業が強制的に中止され、翻訳専門の出版物や定期刊行物も発行停止へと追いこまれた。文革期の外国文学の翻訳と出版に対して、曹治雄は『当代中国的出版事业』の中で、「如果说在“文化大革命”十年期间，文学出版园地基本上是一派荒芜，那么外国文学的翻译出版，则真正是一片空白【「文化大革命」の１０年間において、もし文学出版の田畑は荒れ果てたと言うならば、外国文学の翻訳と出版は真に全くの空白である】」[2]と指摘した。しかし、文革期における外国文学の翻訳活動が確かに弾圧されていたが、客観的に言えば、完全な空白ではなかった。1970年代に入り、外国との交流が活発になったことが契機となり、翻訳活動の重要性が再び確認された。中国の各出版社も政府の提案に応じて翻訳に着手し、新しい文学活動が始まった。それにより、ソ連、ア

1　閻暁宏「新中国图书出版五十年概述」、『中国出版年鉴』(2000)(中国出版年鑑社、2000年10月)7頁。中国語による参考文献の記載については、著者名、訳者名、出版社の表記は日本の常用漢字にしており、論文名、書名、雑誌名などは中国語（中国大陸の出版物は簡体字、台湾、香港の出版物は繁体字）にする。英語など、日本語、中国語以外の言語による参考文献の記載については、各言語の文献に準じる。

2　曹治雄『当代中国的出版事业』(下)(当代中国出版社、1993年8月)421頁。中国語の原文の日本語訳は引用者で、原文の後ろに「【日本語訳】」で表記する(以下同)。

メリカ、日本という三ヵ国の文学作品を中心として政治上の目的で単行本や翻訳雑誌『摘译』[3]などで紹介、翻訳された。この他、ラオス、ベトナム、北朝鮮やアルバニアなど社会主義国家の作品も出版された[4]。

そこで注目すべき現象として、新中国建国の1949年から文革の始まった1966年に至るまでの１７年間に、翻訳された日本文学は合計して１１９冊[5]で、全体の外国文学の翻訳のごく一部に過ぎない[6]。しかし、文革期に入ってから、日本文学の翻訳は合計２

3　『摘译』は1973年11月に上海人民出版社より出版され、『摘译』(外国文艺)、『摘译』(外国哲学历史经济)、『摘译』(外国自然科学哲学)という３つの種類がある。本文の中心として取り上げているのは、その中の『摘译』(外国文艺)である。全文は『摘译』と略称する。

4　謝天振「非常时期的非常翻译――关于中国大陆文革时期的文学翻译」、『中国比较文学』2009年第2期(2009年4月)23-35頁。

5　田雁主編『汉译日文图书总书目 1719-2011』(第2巻 1949.10-1999)(社会科学文献出版社、2015年10月)29-37頁、田雁『日文图书汉译出版史』(南京大学出版社、2017年12月)193-195頁を参照した。

6　例えば、卞之琳ら「十年来的外国文学翻译和研究工作」によると、1949年10月から1958年12月までの１０年間に、中国で出版された外国文学の作品は５３５６冊である。その中で、ソ連文学は３５２６冊で、翻訳作品全体の３分の２近くの分量を占めており、１７年間の外国文学の翻訳の中心である。卞之琳、葉水夫、袁可嘉、陳燊「十年来的外国文学翻译和研究工作」、『文学评论』1959年第5期(1959年)45-47頁。

３冊[7]であり、1966年から1976年まで合計８９冊[8]が翻訳された外国文学の中で２５．８％を占めている。文革期の翻訳専門誌『摘译』においても、ソ連文学、アメリカ文学と翻訳対象となった。日本文学の翻訳が注目されるようになったのは、言うまでもなく、中国政府の介入と統制がその変化をもたらした最も重要な一因であると考えられる。本論文では、国家の宣伝文化部門の指導を受け、文革期に翻訳された日本の文学作品に焦点を当て、中国の内政、外交政策を分析しながら、どのような日本の文学作品が誰により訳されたか、テクストにはどのような翻訳ストラテジー[9]が採用された

7　文革期に翻訳された日本文学の作品数について、馬慧嬌「『文革』時期における日本文学翻訳に関する一考察――単行本のテキスト対照を中心に」、『饕餮』第21号(2013年9月)25-49頁、中国の「全国图书馆参考咨询联盟」(http://www.ucdrs.superlib.net/、引用は2020年1月2日の時点で)のデータと以下の先行研究で論じた作品などを参考にした。また、前述した田雁主編『汉译日文图书总书目 1719-2011』や田雁『日文图书汉译出版史』も参照した。しかし、田雁主編『汉译日文图书总书目 1719-2011』や田雁『日文图书汉译出版史』においては、文革期の日本文学の翻訳作品は合計１９冊であると記されている。その中で、1966年に出版された西野辰吉『晨霜路上』は統計されていなかったが、雑誌『摘译』1975年第5期は統計された。そして、田雁は、本論文で日本文学として扱う1972年に出版された戸川猪佐武『田中角荣传』、田中角栄『我的履历书』、馬弓良彦『田中角荣其人』と1973年に出版された田中角栄『大臣日记』を「歴史、地理に関わる」日本作品として検討した。

8　李晶の統計によると、1966年から1971年までの文革期の前期において出版された外国文学は「公開翻訳」が３冊で、「内部翻訳」が５冊であり、1972年から1976年までの文革期の後期において出版された外国文学は「公開翻訳」が２６冊で、「内部翻訳」が５５冊である。合計８９冊である。その中に「潜在翻訳」が含まれていない。李晶『当代中国翻译考察(1966–1976)――“后现代”文化研究视域下的历史反思』(南開大学出版社、2008年9月)36-42頁。

9　翻訳ストラテジー(Translation Strategy)について、河原清志は「翻訳に関する全体的な方針・方策・身構え」のマクロ・ストラテジーと「訳出作業における個別の問題に対処するための詳細な方法」のミクロ・ストラテジーに分類した。本論文は、第2章の「文化大革命期の翻訳活動」と第3章の「文革期における日本文学の選択基準」においては、主に文革期に翻訳された日本文学から見られるマクロ・ストラテジーに注目し、第4章の「文革期における日本文学の翻訳ストラテジー――作品の分析を中心に――」においては、翻訳作品の訳文テクストから見られるミクロ・ストラテジーに着目する。河原清志「翻訳ストラテジー論の批判的考察」、『翻訳研究への招待』第12巻

かについて考察したい。そうした考察を通して、文革期の中国における日本文学の翻訳事情の一端も明らかになると考える。

文革期の翻訳事業は主流の政治イデオロギーによって統制され、他のあらゆる時期と比べ、より特徴的であり、中国における外国文学の翻訳史では、極めて稀な現象である。文革期における文学翻訳の特異性を捉えることは、この時期の翻訳事業を再評価し、更には中国と日本、世界の関係をより深く考察するために有意義だと考えられる。

第2節　先行研究

現時点で、文革期における外国文学の翻訳に関わる研究は以下の通り、主に２つの方面から展開する。

文革終結の直後、文革期の翻訳活動は中国の研究者に注目されていなかったが、1990年代に入ってから、文革思想の影響から脱していき、外国の翻訳理論も次第に受け入れた。中国では、翻訳に関する研究も、単に言語学的なアプローチとして捉えられているに止まらず、翻訳と文化、政治、イデオロギーとの関わりなど、多方面にわたっている。とくにこの時期については、「イデオロギーと翻訳」についての議論が盛んになった。王友貴「意识形态与20世纪中国翻译文学史(1899-1979)」[10]、查明建「文化操纵与利用：意识形态与翻译文学经典的形成——以20世纪50、60年代中国的文

(2014年10月)121-122頁。モナ・ベイカー、ガブリエラ・サルダーニャ『翻訳研究のキーワード』藤涛文子、伊原紀子、田辺希久子訳(研究社、2013年9月)なども参照した。

10　王友貴「意识形态与20世纪中国翻译文学史(1899-1979)」、『中国翻译』第24巻第5期(2003年9月)11-15頁。

学翻译为中心」[11]、王晓元「意识形态与文学翻译的互动关系」[12]、李晶「贯穿20世纪中国翻译史的意识形态操控行为」[13]、孫志詳「国内翻译的意识形态维度研究回顾与展望」[14]、叢小榕「文化大革命期の芸術作品におけるイデオロギーと芸術的表現手法について」[15]などの研究が見られる。

王友貴は「意识形态与20世纪中国翻译文学史(1899-1979)」の中で、2000年以前の中国翻訳文学史を、「开民智和求变革【開民智と求変革[16]】の時期」(1864年-1914年)、「多元【多元的イデオロギー】の時期」(1915年-1936年)、「战争意识形态【戦時イデオロギー】の時期」(1937年-1949年)、「准战争意识形态【準戦時イデオロギー[17]】の時期」(1950年-1976年)、「实现现代化，个人发财致富【現代化の実現、富国強民の実現】の時期」(1979年[18]-2000年)という５つの時期に分けた[19]。1937年から1949年にかけての「戦時イデオロギーの時期」の翻訳活動は「中国の対日防衛」を中心としていたが、1950年からの「準戦時イデオロギーの時期」に入ってから、「中国の社会主義防衛」へと目的を転換した。しかし、王によると、文革期を含めて、「準戦時イデオ

11　查明建「文化操纵与利用：意识形态与翻译文学经典的形成――以20世纪50、60年代中国的文学翻译为中心」、汪介之、唐建清編『跨文化语境中的比较文学』(訳林出版社、2004年5月)412-427頁。

12　王晓元「意识形态与文学翻译的互动关系」、厳辰松主編、《解放军外国语学院学报》編集部編『中国翻译研究论文精选』(上海外語教育出版社、2006年11月)326-337頁。

13　李晶「贯穿20世纪中国翻译史的意识形态操控行为」、『天津外国语学院学报』第15巻第5期(2008年9月)12-14頁。

14　孫志詳「国内翻译的意识形态维度研究回顾与展望」、『上海翻译』2009年第2期(2009年5月)18-22頁。

15　叢小榕「文化大革命期の芸術作品におけるイデオロギーと芸術的表現手法について」、『明星大学全学共通教育研究紀要』第1号(2019年3月)31-37頁。

16　「開民智、求変革」とは、「民智を開く、変革を求める」ことである。

17　「準戦時イデオロギー」とは、「平時における戦時イデオロギーの継続」である。

18　王友貴によると、1977年から1978年まで、文革終結直後の２年間は「整顿、准备的时间【整頓・準備の期間】」である。すなわち、外国文学の翻訳を含め、あらゆる文学活動が政治イデオロギーに左右されるという文革期の誤りを是正するため、社会環境を整え、改革開放へ移行する時期だと考えられる。

19　孫志詳「国内翻译的意识形态维度研究回顾与展望」、『上海翻译』2009年第2期(2009年5月)18-19頁も参照した。

ロギーの時期」の翻訳活動は、戦乱期の文学作品における軍事用語の濫用、功利主義、二極化思考、英雄主義、楽観主義など[20]の特徴をも引き継いだのである。また、1950年から1976年までの１７年間と他の時期との根本的な差異は、公式意見と主流のイデオロギーが完全に合致していることであると指摘された。

イデオロギーと翻訳についての研究の盛り上がりに従い、文革期の翻訳活動に関わる研究の重要性が再認識され、翻訳文学史の研究書において、独立した時期として紹介されるようになった。曹治雄『当代中国的出版事业』[21]、王向遠『二十世纪中国的日本文学翻译史』[22]、方華文『20世纪中国翻译史』[23]、孟昭毅・李載道編『中国翻译文学史』[24]、查明建・謝天振『中国20世纪外国文学翻译史』[25]、孟昭毅等『中国东方文学翻译史』[26]、田雁『日文图书汉译出版史』[27]など、中国の外国文学の翻訳史や出版事業に関わる作品が挙げられる。

その中で、王向遠は、文革期を含めた1949年から1978年にかけての３０年間における外国文学の翻訳の特徴を以下の２点にまとめた。一、翻訳対象への選択基準の市場から計画への変化。建国初期に、中国政府が翻訳と出版作業に対して統一的に主導するという体制が導入され、それにより翻訳活動の組織化と計画化が求められ、中国における外国文学の翻訳と出版が社会主義市場経済の軌道の一部に乗った。二、翻訳家及び翻訳方式の成熟。蕭蕭、李芒や劉振瀛など優秀な翻訳家が現れた。中国の現代語も定着し、1949年前の生硬な直訳、方言の使用、未熟な用語など十分に練れていなかった訳文から一変した。

20　陳思和「当代文学观念中的战争文化心理」、『上海文学』1988年第6期(1988年6月)72-75頁を参照した。

21　曹治雄『当代中国的出版事业』(下)(当代中国出版社、1993年8月)1-80頁。

22　王向遠『二十世纪中国的日本文学翻译史』(北京師範大学出版社、2001年3月)194-234頁。

23　方華文『20世纪中国翻译史』(西北大学出版社、2005年2月)433-643頁。

24　孟昭毅、李載道編『中国翻译文学史』(北京大学出版社、2005年7月)277-294頁、290-298頁。

25　查明建、謝天振『中国20世纪外国文学翻译史』(上)(湖北教育出版社、2007年2月)753-764頁。

26　孟昭毅等『中国东方文学翻译史』(下)(昆侖出版社、2014年4月)373-471頁。

27　田雁『日文图书汉译出版史』(南京大学出版社、2017年12月)184-241頁。

王は文革期を含めた1949年からの３０年間における中国の日本文学の翻訳を、中国人翻訳者(周作人の日本古典文学に対する翻訳)、日本の著名作家(二葉亭四迷、樋口一葉、石川啄木、夏目漱石、島崎藤村など)の翻訳作品、左翼文学(小林多喜二、徳永直、宮本百合子など)などを糸口として論じたが、文革期の日本文学翻訳について、簡単に触れた程度に過ぎない。羅選民編『外国文学翻译在中国』[28]、於麗萍『中日翻译文化交流史』[29]なども同じで、文革期の日本文学翻訳については、「1967年から1970年までは、中国での日本文学の翻訳はほぼゼロだと言え、その後は三島由紀夫作品、小林多喜二作品が翻訳された」とし、「日本文学の翻訳と紹介は完全に停頓状態に陥った」とだけ述べている。

また、田雁は『日文图书汉译出版史』の中で、1949年から1976年までの２８年間を一時期とし、各年代の中国の「日本観」を着眼点としながら、文学を含め、全体的な日本作品の翻訳について検討した。1950年代の中日関係は、親密な米日関係と日台関係により、政治上の敵対的局面に至った。1960年代の中国は、中ソ関係正常化を展望したが、日本の軍国主義の復活を危惧しながら、日本文学の翻訳を通し、「红色日本【赤い日本】」[30]を造形した。この2つの時期における中国の「日本観」は田雁により「疏离【疎遠】」とまとめられた。しかし、1960年代後期から公然化した中ソ間の対立により、中国は米日との接近を図り、関係の改善を求め、1972年に日本と国交を結んだ。1970年代の中国の「日本観」は対ソ意識から生まれた「趋同【収斂】」である。さらに、田雁は『日文图书汉译出版史』の中で、文革期の出版事業の発展や、周作人、豊子愷などの翻訳家の経歴についても言及した。

次は、1966年[31]から1976年までに翻訳された外国文学を主に扱う研究である。例えば、

28　羅選民編『外国文学翻译在中国』(安徽文芸出版社、2003年12月)257-258頁。

29　於麗萍編『中日翻译文化交流史』(遼寧大学出版社、2016年11月)203頁。

30　「红色日本【赤い日本】」について、日本人民がアメリカ帝国主義と対抗する中国人民の味方となり、アメリカ帝国主義との闘いの先頭に立ち、階級闘争の激しい戦いを行うという架空のユートピアが作られた。劉舸「百年中国文学中的日本形象演变研究」、『中国文学研究』2006年第4期(2006年12月)50頁、田雁『日文图书汉译出版史』(南京大学出版社、2017年12月)187頁。

31　中華人民共和国成立の1949年を１つの節目とし、1949年から文革終結の1976年までの中国における外国文学の翻訳を研究対象とする研究も多い。

陳思和「民间的浮沉——对抗战到文革文学史的一个尝试性解释」[32]、謝天振「译者的诞生与原作者的“死亡”」[33]、馬士奎「文革期间的外国文学翻译」[34]、李晶『当代中国翻译考察(1966−1976)——“后现代”文化研究视域下的历史反思』、謝天振「非常时期的非常翻译——关于中国大陆文革时期的文学翻译」[35]、馬士奎「“文革”未出版的外国文学译作」[36]、何輝斌「内部发行外国戏剧的考据与研究」[37]、王友貴『20世纪下半叶中国翻译文学史：1949-1977』[38]などがある。

その中で、謝天振は「非常时期的非常翻译——关于中国大陆文革时期的文学翻译」においては、文革期に出版された代表的な外国文学を国別に一つ一つ羅列した上で、この時期の翻訳活動の特徴を、「文学翻訳家が翻訳マシーンにさせられ」、「『見えない手[39]』が『見える手』にな」り、「読者の受け止め方を強制的に規定する」という３点に概括し、また「译者的诞生与原作者的“死亡”」という論文においては、具体的な訳例を挙げながら、訳者が原作にない語句を訳文に自由に挿入し、改作するという翻訳行為を、「達旨」(主旨を表す)と「イデオロギーの投射」と解釈し、さらにアメリカの翻訳理論家ローレンス・ヴェヌティの理論を引用し、「イデオロギーの投射」に関わる翻訳が文革期の外国文学から見られる特徴の１つであると指摘している。

また、上述した通り、文革期の外国文学全体を対象とした研究は少なくないが、日

32　陳思和「民间的浮沉——对抗战到文革文学史的一个尝试性解释」、『上海文学』1994年第1期(1994年1月)68-80頁。

33　謝天振「译者的诞生与原作者的“死亡”」、『中国比较文学』2002年第4期(2002年10月)35-36頁。

34　馬士奎「文革期间的外国文学翻译」、『中国翻译』第24巻第3期(2003年5月)65-69頁。

35　謝天振「非常时期的非常翻译——关于中国大陆文革时期的文学翻译」、『中国比较文学』2009年第2期(2009年4月)23-35頁。

36　馬士奎「“文革”未出版的外国文学译作」、『博览群书』2011年第2期(2011年2月)120-123頁。

37　何輝斌「内部发行外国戏剧的考据与研究」、『文化艺术研究』第7巻第2期(2014年4月)86-97頁。

38　王友貴『20世纪下半叶中国翻译文学史：1949-1977』(人民出版社、2015年9月)3-269頁、884-892頁。

39　ここでの「手」はイデオロギーのことである。

本文学の翻訳に限定したものは僅かしかない[40]。その中に、馬慧嬌「『文革』時期における日本文学翻訳に関する一考察――単行本のテキスト対照を中心に」[41]が見られる。馬慧嬌は、文革期に翻訳された日本の文学作品を、「翻訳対象の選択」、「テキストの翻訳方法」、「翻弄された訳者」、作品に付された「出版説明」について、という４つの面から考察した。まず、馬は当時の日本文学の翻訳作品を「プロレタリア革命作家の進歩的作品」、「反動的で政治的立場が正しくない作品」、「政治事件に関わる、国家の外交政策を有利に展開させる作品」、「当時の日本社会の現実を反映する作品、映画化された作品、賞をとった作品など」にまとめた。しかし、作品が肯定的に捉えられたか、否定的に捉えられたかという表面的な特徴による分類だけではなく、中国の外交方針、対内政策などを踏まえた上で、より具体的、深層的な分類方法について考察する必要があると思われる。

そして、馬は「テキストの翻訳方法」の部分で、『日本沈没』、『恍惚の人』、『憂国』、『日本改造法案――北一輝の死』の４作の翻訳テクストと原文テクストとの対照を行い、一定の結論を与えたが、本論文では、両テクストの違いが生まれた原因、その違いがイデオロギーによる意図的な改作であるか、単なるミスであるか、翻訳テクストと当時の時代背景との関わりなど、まだ解決していない問題を、上述した４作を含め、文革期に翻訳された日本文学のテクストへの検討を通し、さらに掘り下げたい。

馬は文革の時期に生きていた訳者に対して、「集体署名」、「偽名署名」、「署名なし」という3つの署名方法によって、「訳者の存在が抹消され、翻訳文学分野で得ら

40　1966年から1976年まで中国で翻訳されたソ連文学、英米文学をテーマとした研究について、董暁「论“文革”时期俄苏文学在中国的命运」、『广东社会科学』2014年第2期(2014年5月)149-153頁、余栄琦、黄燕芸「从生态翻译学看“文革”十年的苏联文学翻译」、『长春理工大学学报』(社会科学版)第31巻第4期(2018年7月)137-140頁、馬士奎「塑造美国形象――“文革”期间对美国当代文学作品的译介」、『临沂师范学院学报』第31巻第2期(2009年4月)64-67頁、焦雲俠「意识形态对文革时期美国文学翻译的操控――以荣如德的《爱情故事》译本为例」、『攀枝花学院学报』第30巻第6期(2013年12月)65-68頁が見られる。

41　馬慧嬌「『文革』時期における日本文学翻訳に関する一考察――単行本のテキスト対照を中心に」、『饕餮』第21号(2013年9月)25-49頁。

れるはずの尊重も無視された」のみ論じており、全面的とは言えない。文革期における訳者達の境遇、翻訳作品を完成するまでの過程や、文革イデオロギーの宣伝者の役割を担わされた訳者達の立場、訳者と「潜在翻訳」との関わりについてより深く検討する必要がある。しかし、馬の考察は文革期の日本文学の翻訳に関わる研究方法や着眼点などを、その後の研究者にある程度提供しており、重要な参考資料と見なし得る。

文革と日本との関係という視点では、歴史や外交に関する研究のほか、比較文学の方面で、陳泓「荒唐时代的“怪胎”文学――中国文革文学与日本国策文学初探」[42]、崔学松「中国文化大革命期における外来言語文化受容をめぐる論争」[43]、孫軍悦「悪と罪――文化大革命直後の中国大陸における日本推理映画の〈翻訳〉について」[44]、孫若聖「日本における新時期文学翻訳の黎明期と黄金期」[45]などがある。陳泓は「荒唐时代的“怪胎”文学――中国文革文学与日本国策文学初探」の中で、文革文学と同じく政治支配下で出現した日本の国策文学との相違点を社会背景、民衆心理、文化体制という３つの角度から考察し、文革文学と日本の国策文学は両方とも概念化、観念化と主題先行の特徴を持ち、人心を奮い立たせ、盲目的にする機能が働く、という結論に辿り着いた。その他、陸秀英「中国当代翻译文学系统中主体间关系的生态分析――以《世界文学》期刊为例」[46]、大野公賀「文化大革命期の中国知識人――豊子愷の思想と作品について――」[47]など、文革期の翻訳者などをテーマとする研究も見られる。

また、文革期の翻訳事業について、謝天振は「权力与意识形态对翻译的操控达到极

42　陳泓「荒唐时代的“怪胎”文学――中国文革文学与日本国策文学初探」、『现代日本经济』1987年第5期(1987年10月)40-43頁。

43　崔学松「中国文化大革命期における外来言語文化受容をめぐる論争」、『北東アジア地域研究』第17号(2011年10月)49-63頁。

44　孫軍悦「悪と罪――文化大革命直後の中国大陸における日本推理映画の〈翻訳〉について」、『日本文学』第61巻第2号(2012年2月)37-47頁。

45　孫若聖「日本における新時期文学翻訳の黎明期と黄金期」、『通訳翻訳研究』16巻(2016年)125-143頁。

46　陸秀英「中国当代翻译文学系统中主体间关系的生态分析――以《世界文学》期刊为例」(上海外国語大学博士学位論文、2010年5月)。

47　大野公賀「文化大革命期の中国知識人――豊子愷の思想と作品について――」、『東洋法学』第63巻第2号(2020年1月)309-334頁。

至【権力とイデオロギーの翻訳への操縦が極端になった】」[48]と表明した。文革期の翻訳というものは、「政治斗争的工具【政治闘争のための道具】」[49]、「政治性和阶级性任务【政治的、階級的な任務】」[50]になったとも述べられた。さらに、董暁は「对俄苏文学的这种态度其实为将来整个中国文艺界对俄苏文学的淡漠和忘却埋下了祸根，因为非客观的评论，无论是吹捧还是鞭笞，都无益于俄苏文学真正价值的真正体现【ロシア・ソ連文学に対するこのような態度は、実は将来中国文学界全体のロシア・ソ連文学に対する冷淡さと忘却という禍根を残した。非客観的な評論は、賞賛であれ、非難であれ、ロシア・ソ連文学の真の価値の表現には無益だから】」[51]と、文革期の翻訳が将来の中国学術界に対する消極的な影響に言及した。李晶は「外国文学翻译几乎丧失了其审美功能和艺术追求【外国文学の翻訳は美的機能と芸術的追求をほぼ失っている】」[52]と、文革期の翻訳における芸術性の欠如についても触れた。田雁は「选择性的翻译文本，尤其限定于“为无产阶级服务”的文本，毫无疑问，是无法令民众真正理解和解读日本文化和日本民族的【選択的な翻訳テクスト、特に「プロレタリアートに奉仕する」ことに限定したテキストは、無論、民衆に日本文化と日本民族を真に理解、解読させることができない】」[53]と、読者の視点から文革期の翻訳の文化交流における「無効性」を指摘した。

また、以下のように、文革期の翻訳に対するある程度積極的な評価も見られる。馬士奎は「文革十年的确是近百年以来外国文学翻译的最低潮，但对翻译工作者们在这一特别时期所取得的成就也不能完全抹杀【文革の１０年間は、最近百年の外国文学の翻訳の中で最も停頓期だったことは事実だが、翻訳者たちがこの時期で獲得した成果を

48　謝天振「非常时期的非常翻译——关于中国大陆文革时期的文学翻译」、『中国比较文学』2009年第2期(2009年4月)23頁。

49　查明建、謝天振『中国20世纪外国文学翻译史』(上)(湖北教育出版社、2007年2月)559頁。

50　焦雲俠「意识形态对文革时期美国文学翻译的操控——以荣如德的《爱情故事》译本为例」、『攀枝花学院学报』第30卷第6期(2013年12月)67頁。

51　董暁「论“文革”时期俄苏文学在中国的命运」、『广东社会科学』2014年第2期(2014年5月)153頁。

52　李晶『当代中国翻译考察(1966–1976)——“后现代”文化研究视域下的历史反思』(南開大学出版社、2008年9月)155頁。

53　田雁『日文图书汉译出版史』(南京大学出版社、2017年12月)241頁。

完全に否定してはならない】」[54]と、余栄琦、黄燕芸は「从翻译群落生态来看，虽然政治意识形态干扰严重，译者的身份被边缘化，但并不能就此否认译者在翻译实践过程中的中心地位【翻訳コミュニティの生態[55]から見ると、政治的イデオロギーが深刻に介入し、翻訳者のアイデンティティが疎外されたとはいえ、翻訳実践の過程における翻訳者の中心的地位を否定することはできない】」[56]と、田雁は「只要存在有日文图书的翻译，我们就不能简单地抹杀这一时期所有的日文图书的翻译成就，也不能简单地无视这一时期译者们对日文图书的翻译奉献【日本書の翻訳が存在する限り、この時代の全ての日本書の翻訳の業績を簡単に抹殺することはできない。この時代の訳者たちの日本書の翻訳への貢献を無視することもできない】」[57]と述べた。しかし、上記した比較的肯定的な言葉は、文革期の訳本の完成度、文学性などに対する評価というより、翻訳活動の一翼を担った翻訳者に対するものだと考えられる。さらに、同じ研究者として、文革期に生きてきた翻訳者に対する共感的な思いのようなものでもある。

上述した先行研究では、様々な視点から文革期における外国文学の翻訳を読み取ることができるが、これらの著書や論文はいずれも文革期に出版された翻訳作品全体を検討範囲として、ほぼ翻訳家の紹介や作品の羅列にとどまり、細部まで具体的に検討しているとは言えない[58]。先行論文においては、翻訳の外部的な要素にこだわりすぎる

54　馬士奎「文革期间的外国文学翻译」、『中国翻译』第24巻第3期(2003年5月)65頁。

55　ここの「翻訳コミュニティの生態」について、中国の翻訳理論研究者の胡庚申より提出された「生態翻訳学(Eco-translatology)」の翻訳理論から由来する。「生態翻訳学」はダーウィンの進化論に基づき、生態学の観点から翻訳を包括的かつ総合的に研究することや、訳者を中心とする翻訳過程を唱える。胡庚申「生态翻译学的研究焦点与理论视角」、『中国翻译』2011年第2期(2011年3月)5-9頁。

56　余栄琦、黄燕芸「从生态翻译学看“文革”十年的苏联文学翻译」、『长春理工大学学报』(社会科学版)第31巻第4期(2018年7月)137頁。

57　田雁『日文图书汉译出版史』(南京大学出版社、2017年12月)241頁。

58　英語圏では、文化大革命をテーマとした研究は少なくないが、文革と文学との関わりについては、主に文革の影響を受けた、文革後に出版された中国の現代文学という視点からの研究である。その中で、Paul Clark, *Popular Chinese Literature and Performing Arts: in the People's Republic of China 1949-1979*, University of California Press, 1984、Richard King, *A shattered mirror: the literature of the Cultural Revolution*, University of British Columbia, 1984、Yibing Huang, *Contemporary Chinese Literature: From the Cultural Revolution to the Future*,

傾向も見られる。すなわち、上述のように、翻訳ストラテジーにおける全体的な方針というマクロの視点から文革期の翻訳を分析対象とする研究が少なくないが、訳文の翻訳テクストに対する分析の中で、馬慧嬌の論文や、欧米文学の中国訳と中国作品の英訳を研究対象とする李晶『当代中国翻译考察(1966–1976)――“后现代”文化研究视域下的历史反思』、アメリカ文学の翻訳を研究課題とする焦雲俠「意识形态对文革时期美国文学翻译的操控――以荣如德的《爱情故事》译本为例」しか見られない。文革期の外国文学の翻訳テクストそのものに対して、どのような翻訳ストラテジーが取られたか、原文テクストとの違いが起こる原因、その原因には当時の中国の時代背景と社会状況が作用しているかなどについて再考の余地を残している。

そのため、本論文は、以上の研究成果を踏まえつつ、文革期の翻訳事情を概観した上で、文革期に出版された２３冊の日本文学の単行本と翻訳専門誌『摘译』などに焦点を当て、訳本の翻訳テクストにおいて実施された詳細な翻訳ストラテジーに着眼し、どのように文革期の翻訳に接近するかを考える。文化大革命の１０年間、翻訳という行為がどのような相貌を呈しているか、歴史の流れの中でどのような役割を果たしたか、そして、文革の渦にあった中国が同時代の日本作家、日本文学、日本をどのように見ていたかを考察していきたい。

本論文は、上記の先行研究で残された問題を含め、研究課題を次の７つにまとめて論じる。

①歴史的な観点と中国の対外政策の視点から、文革期の翻訳活動が政府の監視のもとに、どのように行われたか。

②文革期にどのような日本の文学作品が翻訳されたか。

③革期の翻訳対象がどのような基準で選択されたか。

Palgrave Macmillan, 2007などが見られる。また、文革期に翻訳された外国文学について、Shuyu Kong, “For Reference Only: Restricted Publication and Circulation of Foreign Literature During the Cultural Revolution”, *Yishu: Journal of Contemporary Chinese Art*, Volume 2(Summer), 2002, pp. 76-85が見られるが、上述した中国と日本の文献と同じ、マクロ的視点からの分析だといえる。Lingchie Letty Chen, "Contemporary Chinese Literature: From the Cultural Revolution to the Future by Yibing Huang", *China Review International*, Volume 17 Number 2, University of Hawai'i Press, 2010, pp. 237-240も参照した。

④各作品にどのような翻訳ストラテジーが採用されたか。

⑤日本の文学作品に対して、文革期の編集者や訳者がどの角度から解読しているか。

⑥翻訳テクストと原文テクストとの違いには、当時の中国の時代背景と社会状況がどのように作用しているか。

⑦政治イデオロギーを宣伝する翻訳活動において、賛助者、翻訳者、読者の立場が文革期にどのような役割を果たしたか。

本論文は上記の７つの研究設問を考えに入れながら、先行研究を踏まえつつ、１０年間という長きにわたる文革期の中国における日本文学の翻訳実態を考察する。

第3節　各章の内容

本論文は、序章、本論、終章、参考文献、付録からなり、６章構成となっている。

第1章「序論」では、まず研究背景、先行研究、研究目的について述べ、博士論文全体の枠組みを示す。先行研究で残された課題を上述した７つに設定し、どのように文革期における日本文学の翻訳実態の課題に取り組むべきかを考える。

第2章「文化大革命期の翻訳活動」においては、まず文革期の政治背景という視座から、外国文学の全体の翻訳事情を概観する。次に、「公開翻訳」、「内部翻訳」、「潜在翻訳」という３つの刊行形式と、翻訳文学誌『摘译』に見られる文革期の大まかな翻訳方針を手がかりとして、文革期に翻訳された日本の文学作品を分類し、整理する。

第3章「文革期における日本文学の選択基準」においては、翻訳作品の出版説明、前言、後記、及び評論などへの検討を行うことにより、文革の頃、翻訳対象として選択された日本の文学作品に共通する特徴と作品に見られる全体的な翻訳ストラテジーをまとめる。さらに、考察を多角的にするために、国情の異なるソ連、アメリカ、日本のどのような文学作品が文革期において翻訳対象となったかという比較の視点も導入したい。

第4章「文革期における日本文学の翻訳ストラテジー――作品の分析を中心に――」においては、「優秀なプロレタリア革命戦士・作家」と見做された小林多喜二の作品

『沼尻村』、『不在地主』と『蟹工船』、「反動作家」と「右翼ファシスト」と位置付けられた三島由紀夫の作品『憂国』と『豊饒の海』４部作、認知症と老人介護の問題をテーマにした有吉佐和子『恍惚の人』、木村琴美『穂波のゆくえ』、山田洋次・宮崎晃『故郷』、堺屋太一『油断！』などの日本の農業と石油問題を反映する作品、小松左京『日本沈没』、八住利雄『ノストラダムスの大予言』といった「科学幻想作品」、概要の形式で翻訳された結城昌治『不良少年』などを検討対象とする。作品の出版説明、前言などを検討しながら、翻訳テクストにおいて意訳、省略、抄訳、増訳、削除などの翻訳方法が使われたかどうか、翻訳テクストの形式と構成が原文テクストと一致しているかどうかといった、原文テクストへの忠実性について考察する。さらに、翻訳テクストに見られる注釈を分析し、翻訳者が訳文の注釈に意図的に特別な意味づけをし、原作者が狙っていない効果を訳出したかどうかという側面も考察する。

第5章「文革期における日本文学の翻訳作品に関わる人々」では、極めて高度に組織化された文革期の翻訳作業において、賛助者である政府機関の監視と管理を受けて、翻訳対象の選択から翻訳用語の使用まで、厳密な行動規範を遵守しなければならなかった訳者の境遇を検討しながら、彼らの翻訳時の個人的意識を推察する。また、当時の読者がどのようなルートで作品を入手したか、政治イデオロギーの宣伝を達成するために翻訳された日本の文学作品をどのように読み取っているかなどについて考察する。さらに、文革期において、翻訳作品を読む読者側と、原作を翻訳作品に再構築する賛助者、翻訳者側との関係を検討する。

第6章「結論」において、本研究の締めくくりとして、「序論」で提起した７つの設問に対して、一定の結論を与える。

第2章　　文化大革命期の翻訳活動

第1節　　文革期の政治的背景と翻訳活動

1966年2月、上海で毛沢東の指示の下に行われた「部隊文芸工作座談会」[59]で、建国以降の文学事業が「毛主席思想と対立」し、「反動路線を実行」し、「反党反社会主義の毒草」であると全面的に否定された。1966年5月16日に、文革の発端と見られる「中国共产党中央委员会通知」（通称「五・一六通知」）[60]が党中央政治局拡大会議で通過し、『人民日报』に公表された。この綱領は明確に「全党必须遵照毛泽东同志的指示【全党は毛沢東同志の指示に従わなければならず】」、「高举无产阶级文化革命的大旗【プロレタリア文化革命という旗を高々と掲げる】」という路線を推し進めた。「五・一六通知」の中では「彻底揭露那批反党反社会主义的所谓“学术权威”的资产阶级反动立场，彻底批判学术界、教育界、新闻界、文艺界、出版界的资产阶级反动思想，夺取在这些文化领域中的领导权【反党、反社会主義のいわゆる「学界の権威」のブルジョア階級の反動的立場を徹底的に暴露し、学術界、教育界、マスコミ界、文学界、出版界におけるブルジョア階級の反動思想を徹底的に批判し、これらの文化領域の指導権を奪取する】[61]」ということも明記され、さらに「混进党里、政府里、军队里和文化领域的各界里的资产阶级代表人物【党に、政府に、軍隊に、文化領域の各界に紛れ込んだブルジョア階級の代表的人物】」を攻撃するよう指示も出された。

59　「部隊文芸工作座談会」とは、江青が毛沢東の指示で、1966年2月に上海で秘密的に開いた解放軍部隊の文芸工作座談会である。部隊文芸工作座談会の会議記録は、「林彪同志委托江青同志召开的部队文艺工作座谈会纪要」（略称「部隊文芸工作座談会の紀要」）であり、その主要内容が1966年4月18日『解放军报』に掲載され、1966年6月に中央文件として公布された。岩佐昌暲「文革期の地方文学雑誌について」、『言語文化論究』第20号（2005年1月）13-23頁を参照した。

60　「中国共产党中央委员会通知」、1967年5月16日『人民日报』。

61　該当部分の日本語訳について、上別府親志『中国文化革命の論理』（東洋経済新報社、1971年2月）51頁を参照した。

「五・一六通知」を機に、１０年にわたる「プロレタリア文化大革命」の波が中国全土を席巻した。各文学組織や集団は、毛沢東、江青らの文革派に攻撃され、次第に正常な機能を失い、翻訳などの出版活動を停止するようになった。文革初期の出版事業について、閻暁宏「新中国图书出版五十年概述」[62]によると、「国家以及各省市区的出版行政管理机构即陷于瘫痪，全国各出版机构和出版工作也处于停滞状态【国家及び各省市区の出版行政管理機関が麻痺状態に陥り、全国各出版機関と出版作業も停滞状態になってしまった】」のである。

文革期の外国文学に関わる翻訳活動は、おおよそ下記の２つの時期に分けられた。

１つは1966年から1971年までであり、毛沢東や江青らの文革派の指示により、上述したように外国文学の翻訳活動が停滞期に入った時期である。ただソ連の修正主義文学への批評はまだ続いていた。1960年代の国際共産主義運動の原則をめぐる中ソ論争[63]を契機に、ソ連の対中経済援助が中断され、中ソ関係は急速に悪化していった。1966年、両国の国境での武力衝突も起こり、中ソ対立が公然化され、中国はソ連指導部を「修正主義」と、ソ連は中国指導部を「教条主義」と非難した。ソ連はアメリカに代わって、中国の最大の敵国とみなされ、その姿勢は「社会帝国主義」と批判された。ソ連文学への批判が1966年から1971年までの外国文学の翻訳活動の中心である。

その時期に出版された唯一の日本の文学作品は西野辰吉『霜の朝の路上で』(龐春蘭等訳)[64]である。短編小説集『霜の朝の路上で』は、1966年5月に中国の作家出版社より出版された。共産主義者である西野辰吉は、早くも文革前の1963年に『世界文学』に掲載された、劉振瀛「论西野辰吉的反美短篇小说」[65]の中で、日本の進歩的な革命作家と高く評価された[66]。それをきっかけとして、西野辰吉とその作品が中国で認識され、

62　閻暁宏「新中国图书出版五十年概述」、『中国出版年鉴』(2000)(中国出版年鑑社、2000年10月)7頁。

63　新中国建国後の中ソ論争について、羅平漢『“文革”前夜的中国』(人民出版社、2007年12月)93-163頁などを参照した。

64　西野辰吉『晨霜路上』龐春蘭訳(作家出版社、1966年5月)。

65　劉振瀛「论西野辰吉的反美短篇小说」、『世界文学』1963年1月号(1963年1月)105-113頁。

66　1963年から1964年までの『世界文学』において、西野辰吉について頻繁に言及されている。例えば、周斌、応年「日本各界人民隆重集会纪念小林多喜二被害三十周年」、

注目され始めた。短編小説集に収録された「霜の朝の路上」、「米系日人」、「産めない」、「C町でのノート」という４篇の翻訳が文革前に『人民日报』[67]、雑誌『译文』[68]などに掲載された。小説集の題目である「霜の朝の路上で」[69]は、作者の西野辰吉が私小説的な手法を用い、朝鮮戦争下の米軍基地のある市での、日雇労働者たちの日常生活を描いた小説である。建国されて以来、中国側では、アメリカを一貫して意識形態の対立した国と見なし、長い間、「米帝国主義」がアメリカの代名詞の１つになっていた。西野辰吉の作品に見られる「米国帝国主義への批判」や「労働者への同情」が、まさに文革という敏感な時期の政治イデオロギーと一致していることから、翻訳されたと考えられる。

もう１つは、1971年から文革の終わりまでである。前期の外国文学の翻訳と研究活動の全面的な停滞に対して、1970年代に入ってから、国際的な影響力と地位を高めるため、文学活動を含めて、それまで外国文化の「侵入」を避けることに執着していた政府側もある程度外国に目を向けるようになった。周恩来が毛沢東の指示を受け、国務院文化組、科学教育組、各出版社の責任者に接見し、翻訳などの出版活動を活発化させるように提言した[70]。それがきっかけとなり、翻訳作品が増え始め、新しい文学活動の始まりを示した。1973年9月に、国家出版事業管理局が国務院直属となり、全国の出版、印刷、発行の統一管理に責任を負う機構がここに正式に復活した。日本文学の

「世界文艺动态」、『世界文学』1963年4月号(1963年4月)121-122頁、渭渠「日本革命文学运动简况」、「世界文艺动态」、『世界文学』1963年9月号(1963年9月)118-119頁、渭渠「日共出版《赤旗文学丛书》」、「世界文艺动态」、『世界文学』1963年12月号(1963年12月)119-120頁、葉周陳「日本“现实主义研究会”召开首次全国会议」、『世界文学』1964年3月号(1964年3月)142-143頁、卞立強「日共中央出版第二部批判现代修正主义文集《通向革命文学的路标》」、「世界文艺动态」、『世界文学』1964年11月号(1964年11月)149-150頁などが見られる。

67　西野辰吉「早晨，在落了霜的路上」龐春蘭訳、李芒校、1961年6月4日『人民日报』。

68　西野辰吉「夜间的营火」(作品名原文不明)張夢林訳、『译文』1958年第9期(1958年)97-107頁など。劉振瀛「论西野辰吉的反美短篇小说」、『世界文学』1963年1月号(1963年1月)106頁を参照した。

69　西野辰吉「霜の朝の路上で」、『新日本文学』1951年第7号(1951年7月)108-111頁。

70　中共中央文献研究室編『周恩来年谱(1949-1976)』下巻(中央文献出版社、1997年5月)394頁を参照した。

みならず、文革期の外国文学の翻訳作品がほぼこの時期に出版されたのである。また、中日国交正常化が実現した1972年も日本文学の翻訳活動の重要な節目だと考えられる。文革当時に日本の内閣総理大臣を務めていた田中角栄の訪中前後、彼の著した自伝的な作品『私の履歴書』(秦新訳)[71]、『大臣日記』(吉林師範大学日本研究室訳)[72]と、彼を主題とする伝記小説、戸川猪佐武『田中角栄伝』(復旦大学歴史系・経済研究所・国際政治系等訳)[73]、馬弓良彦『人間田中角荣』(復旦大学歴史系・政治系・上海中医学院等訳)[74]が出版された。1972年以降、日本文学の翻訳作品において、中日国交の正常化について言及された。

1971年から、外国文学の翻訳の数が増えたが、基本的には、該当時期の翻訳作業は文革初期と同じく、政治理念の支配下で行われた。主流の政治イデオロギーに左右される翻訳活動の局面が一変したのは、文革後の1979年からのことと思われる。中共中央教育部により行われた外国語教育座談会の会議記録「外国語教育強化の何点かの意見」[75]が国務院の承認を受け、1979年3月に公布された。出版界や文学界の「資本主義的思想」、「西洋崇拝に毒された」知識人を反動と見なしてきた閉鎖的な言説がそれにより一掃され、外国語の教育および翻訳活動の重要性が再び浮上した。

先述したように、文革期の翻訳活動の中で出版された外国の文学作品の数は決して多くはない。しかし、当時、政治イデオロギー、政権と政党の翻訳に対する介入が極点に達した。そうした政治情勢の下、文革期の翻訳文学は、中国における日本文学の翻訳史において前例がなく、一度きりの大実験の如くであった[76]。他の時期よりもっと特徴的であると言え、極めて独特な文学翻訳の情況を提供している。したがって、プ

71　田中角栄『我的履历书』秦新訳(商務印書館、1972年8月)。

72　田中角栄『大臣日记』吉林師範大学日本研究室訳(商務印書館、1973年5月)。

73　戸川猪佐武『田中角荣传』復旦大学歴史系、経済研究所、国際政治系、上海中医学院、上海新聞出版系統“五・七”干校翻訳組等訳(上海人民出版社、1972年8月)。

74　馬弓良彦『田中角荣其人』復旦大学歴史系、政治系、上海中医学院等訳(上海人民出版社、1972年9月)。

75　李伝松、許宝発『中国近现代外语教育史』(上海外語教育出版社、2006年9月)291-300頁。

76　謝天振「非常时期的非常翻译——关于中国大陆文革时期的文学翻译」、『中国比较文学』2009年第2期(2009年4月)24頁。

ロレタリア文化大革命という敏感な時期の翻訳活動に関わる研究は、２０世紀後半から２１世紀にかけての中国における日本文学の翻訳史を語る上では、重要な価値を持っていると考えられる。

第2節　日本の文学作品について

2.2.1　「公開翻訳」

文革期における外国の文学作品の翻訳は、主に３つの形式[77]に分けられた。

１つ目は「公開翻訳」で、一般の市民が文革当時に本屋で買うことができるように、各出版社が一般向けに出版した訳書である。文革の頃、「公開翻訳」として出版された外国の文学作品は僅かしかない。ラオス、ベトナム、北朝鮮やアルバニアなど、当時外交的に友好的な関係を結んだ社会主義国家の作品が「公開翻訳」の中心となった[78]。前述したように、1966年か1976年にかけて、翻訳、出版された日本の文学作品は合計２３冊である。その中で、「公開翻訳」として出版された訳本は３冊[79]しかない。その

77　馬士奎「文革期间的外国文学翻译」、『中国翻译』第24巻第3期(2003年5月)65-69頁、孟昭毅、李載道編『中国翻译文学史』(北京大学出版社、2005年7月)390-396頁、査明建、謝天振『中国20世纪外国文学翻译史』(上)(湖北教育出版社、2007年2月)755-760頁などを参照した。

78　張国俊「权力话语与文革时期的外国文学翻译」、『华南农业大学学报』(社会科学版)2008年第4期(2008年10月)101頁。

79　文革期において公開的に出版された日本文学の翻訳作品数について、翻訳史に関わる各学術書、専門書や研究論文の中では統一が取れていない。馬士奎「文革期间的外国文学翻译」、『中国翻译』第24巻第3期(2003年5月)66頁、陳鳴「Translation of Foreign Literature in Contemporary China: A Study from the Perspective of Manipulation Theory(1949-2008)」(山東大学博士学位論文、2009年8月)107-108頁などによると、３冊であるが、査明建、謝天振『中国20世纪外国文学翻译史』(上)(湖北教育出版社、2007年2月)756頁、謝天振「非常时期的非常翻译――关于中国大陆文革时期的文学翻译」、『中国比较文学』2009年第2期(2009年4月)25頁などによると、５冊であり、５冊の中で、３冊は小林多喜二作品で、残りの２冊は、遍照金剛『文镜秘府论』周維

３冊は、小林多喜二の作品『沼尻村』(李徳純訳)[80]、『不在地主』(李芒訳)[81]、『蟹工船』(葉渭渠訳)[82]である。文革期において、小林多喜二は「日本の優秀なプロレタリア革命戦士・作家」であり、彼の作品は「プロレタリア傑作」[83]であると見なされた。文革期の「公開翻訳」に共通するプロレタリア性に、政治イデオロギーを翻訳対象の選択における絶対的な価値基準としている傾向が見られる。

文革期における外国文学の「公開翻訳」の対象となった作品の翻訳はほぼ文革前にも出版されていた。例えば、『蟹工船』は文革前の1955年[84]に作家出版社より、1958年[85]と1965年[86]に人民文学出版社より、『不在地主』は文革前の1956年[87]に作家出版社より、1958年[88]に人民文学出版社より、出版された。文革思想の高まりにつれて、「公開発行」という出版形式は一種の政治的な危険を伴ったと考えられる。新しい作品を翻訳、出版し、市場に投入して、読者の反応を待つというより、過去に翻訳されたことのある作品を出版したほうが無難であると思われる。文革期の翻訳活動において、編集者や翻訳者は、その危険性を十分に考慮に入れて、予想外の「事故」を回避するため、翻訳対象に対して慎重に選択したと考えられる。

徳校訂(人民文学出版社、1975年5月)、吉田精一『現代日本文学史』斉干訳(上海人民出版社、1976年1月)である。吉田精一『現代日本文学史』について、作品の本扉に「内部発行」と記されているため、「内部翻訳」の可能性が非常に高いと言える。作品には明確な表記がないため、遍照金剛『文镜秘府论』の刊行形式について、再検討の余地があると考えられる。

80 小林多喜二『沼尾村』李徳純訳(人民文学出版社、1973年5月)。

81 小林多喜二『在外地主』李芒訳(人民文学出版社、1973年10月)。

82 小林多喜二『蟹工船』葉渭渠訳(人民文学出版社、1973年10月)。

83 訳者「译后记」、小林多喜二『蟹工船』葉渭渠訳(人民文学出版社、1973年10月)115-118頁。

84 小林多喜二『蟹工船』適夷訳(作家出版社、1955年3月)。

85 小林多喜二『蟹工船』適夷訳、小林多喜二『小林多喜二选集』(第1巻)適夷、王健、震先訳(人民文学出版社、1958年12月)115-198頁。

86 小林多喜二『蟹工船』適夷訳、小林多喜二『小林多喜二小说选』適夷等訳(人民文学出版社、1965年2月)69-152頁。

87 小林多喜二『不在地主』震先訳(作家出版社、1956年8月)。

88 小林多喜二『不在地主』震先訳、小林多喜二『小林多喜二选集』(第1巻)適夷、王健、震先訳(人民文学出版社、1958年12月)199-312頁。

2.2.2　「内部翻訳」

２つ目は「内部翻訳」で、読者が極めて限定され、一般の市民は買えないもので、各出版社が内部的に発行した訳書及び内部向け定期刊行物に発表された翻訳作品である。「内部翻訳」の刊行形式の記載については、作品の表紙にある「供内部参考【内部参考に供する】」[89]の表記、本扉にある「内部発行」[90]や「内部読物」[91]の表記、「出版说明」にある「供内部研究参考【内部の研究と参考に供する】」[92]、「供有关文艺部门和专业人员批判研究【関連する文芸部門と専門家の批判的研究に供する】」[93]、「内部出版三岛有代表性的反动作品的译本【三島の代表的な反動作品の訳本を内部的に出版する】」[94]などの表記などが見られる[95]。

「内部発行」[96]は文革期に入ってからではなく、文革前に誕生した出版形式である。1950年代後半からの中ソ関係の悪化につれ、杜金采夫(ドゥディンツェフ)『不是单靠面包』(Дудинцев, *Не хлебом единым*, 1956)(白祖芸等訳)[97]をはじめ、ソ連文学の多くは中国の公式の政治イデオロギーとは一致しないと見なされ、「内部発行」されるようになった。「内部翻訳」は、前述したように、一般の市民は購入できないものであり、主に関連単位の中で配布されていたため、その読者は政府の高級幹部や一部の

89　松本清張『日本改造法案――北一辉之死』、小松左京『日本沉没』、五味川純平『虚构的大义――一个关东军士兵的日记』という３冊である。

90　戸川猪佐武『田中角荣传』、馬弓良彦『田中角荣其人』、山田洋次等『故乡――日本的五个电影剧本』、戸川猪佐武『党人山脉』(小説《吉田学校》第二部)という４冊である。

91　田中角栄『我的履历书』、田中角栄『大臣日记』という２冊である。

92　有吉佐和子『恍惚的人』という１冊である。

93　橋本忍、山田洋次、広沢栄、熊井啓『日本电影剧本《沙器》《望乡》』という１冊である。

94　三島由紀夫『忧国』、『春雪』、『奔马』、『晓寺』、『天人五衰』という５冊である。

95　「内部翻訳」の表記なしの作品について、遍照金剛『文镜秘府论』、堺屋太一『油断』という２冊がある。

96　謝天振「非常时期的非常翻译――关于中国大陆文革时期的文学翻译」、『中国比较文学』2009年第2期(2009年4月)25頁などを参照した。

97　杜金采夫『不是单靠面包』白祖芸等訳(作家出版社、1957年8月)。

研究者などに限られていた。1971年以降、出版事業の復活により、一部の「内部翻訳」が本屋に置かれるようになったが、一般の市民が買うには、身分証明書および政府や関連部門の紹介状が必要であった[98]。

文革期において、「内部翻訳」として出版された日本の文学作品は、「公開翻訳」より圧倒的に多い。文化大革命期の日本文学の翻訳作品の中で、最初の「内部翻訳」は、先ほど述べた1966年5月に作家出版社から出版された西野辰吉『霜の朝の路上で』である。文革期に最も翻訳された日本作家は、当時「日本の反動作家」、「右翼ファシスト」と位置付けられた三島由紀夫だと言える。『憂国』（訳者不明、以下４作品同じ）[99]と、第一部『春の雪』[100]、第二部『奔馬』[101]、第三部『暁の寺』[102]、第四部『天人五衰』[103]の全４巻から成る『豊饒の海』という５冊の三島作品が翻訳された。そして、前述した『私の履歴書』（秦新訳）など、田中角栄が書いた作品と彼をテーマとする伝記小説も見られる。また、1970年代の日本における認知症と老人介護の問題をテーマにした有吉佐和子『恍惚の人』（秀豊・渭慧訳）[104]、1973年にベストセラーとなったSF小説の小松左京『日本沈没』（李徳純訳）[105]、1973年の石油危機を背景とし、日本の石油問題を反映する堺屋太一『油断！』（渭文・慧梅訳）[106]なども見られる。そのほかに、山田洋次等『故乡——日本的五个电影剧本』（以下『故郷——日本のシナリオ５篇』）（石宇訳）[107]、橋本忍・山田洋次・広沢栄・熊井啓『日本电影剧本《沙器》《望

98　印紅標「文革後期における青年たちの読書と思想的探求」土屋昌明訳、『専修大学社会科学研究所月報』第585号（2012年3月）68-80頁、廖七一「翻译批评话语：1966—1976」、『东方翻译』2018年第3期（2018年6月）9-15頁を参照した。

99　日本反動作家　三島由紀夫『忧国』訳者不明（人民文学出版社、1971年11月）。

100　日本反動作家　三島由紀夫『春雪』訳者不明（人民文学出版社、1973年12月）。

101　日本反動作家　三島由紀夫『奔马』訳者不明（人民文学出版社、1973年5月）。

102　日本反動作家　三島由紀夫『晓寺』訳者不明（人民文学出版社、1972年8月）。

103　日本反動作家　三島由紀夫『天人五衰』訳者不明（人民文学出版社、1971年12月）。

104　有吉佐和子『恍惚的人』秀豊、渭慧訳（人民文学出版社、1975年4月）。

105　小松左京『日本沉没』李徳純訳（人民文学出版社、1975年6月）。

106　堺屋太一『油断』渭文、慧梅訳（人民文学出版社、1976年8月）。

107　山田洋次等『故乡——日本的五个电影剧本』石宇訳（上海人民出版社、1974年6月）。その中で、原作、監督：山田洋次、改編：山田洋次、宮崎晃『故乡』（1-43頁）、原作：有馬頼義、改編：鈴木尚之、監督：今井正『啊，无声的朋友们』（45-120頁）、

乡》』（以下『日本のシナリオ「砂の器」、「望郷」』）（訳者不明）[108]、松本清張『日本改造法案――北一輝の死』（吉林師大日本研究室文学組訳）[109]など、映画などのシナリオも翻訳され、文革期に出版された日本の文芸作品の中で、大きな比重を占めている。

また、「内部翻訳」の文学作品の多くは、以下のように「灰皮書」、「黄皮書」、である。文化大革命の目印の１つと考えられる「灰皮書」、「黄皮書」[110]は、その名が示すように、何の装飾もなく、表紙一面が灰色あるいは黄色である本のことを指す。その他、「白皮書」、「藍皮書」など、単一の色の表紙も見られる。「灰皮書」は主に「古顔の修正主義者、日和見主義者の著作」[111]であり、「黄皮書」は「現代修正主義者の著作、外国文学の作品」[112]であり、一部の作品を別として、ほぼは文革期において反面教材として扱われた。

原作、監督：山田洋次、改編：山田洋次、朝間義隆『男人的烦恼――柴又恋情』（121-198頁）、原作：三浦哲郎、改編：長谷部慶次、熊井啓、監督：熊井啓『忍川』（199-287頁）、原作：金志軒、斎藤耕一、改編：石森史郎、監督：斎藤耕一『约会』（289-362頁）という５篇がある。

108　橋本忍、山田洋次、広沢栄、熊井啓『日本电影剧本《沙器》《望乡》』訳者不明（人民文学出版社、1976年3月）。その中で、橋本忍、山田洋次『沙器』（1-110頁）、広沢栄、熊井啓『望乡』（110-187頁）という２篇がある。

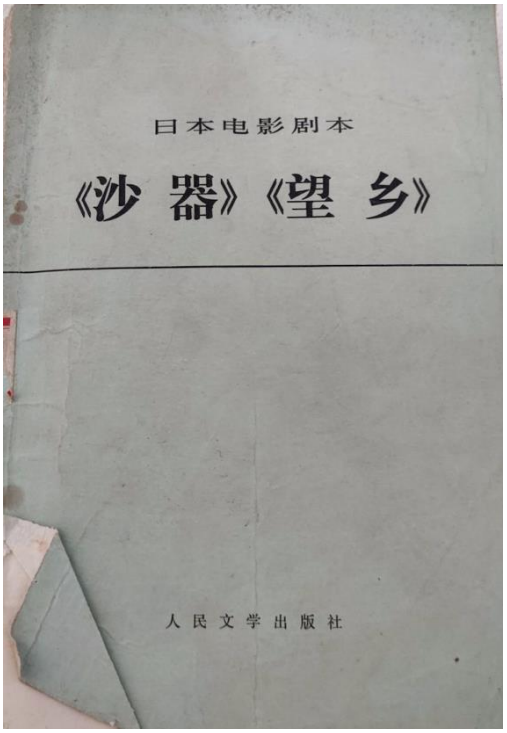
109　松本清張『日本改造法案――北一辉之死』吉林師大日本研究室文学組訳（人民文学出版社、1975年4月）。

110　「灰皮書」、「黄皮書」などについて、方厚枢「内部发行图书出版的历史记忆」、『党史博览』2010年第12期（2010年）4-6頁、許立以『春天的脚步――许立以回忆录』（華齢出版社、2012年2月）319頁、鄭瑞君「“灰皮书”、“黄皮书”在社会的流传及其影响」、『新闻界』2014年第22期（2014年）40-46頁、孫沛東「京滬知青階層化的個人閲讀」、『二十一世紀』2016年第8期（2016年8月）78-98頁などを参照した。

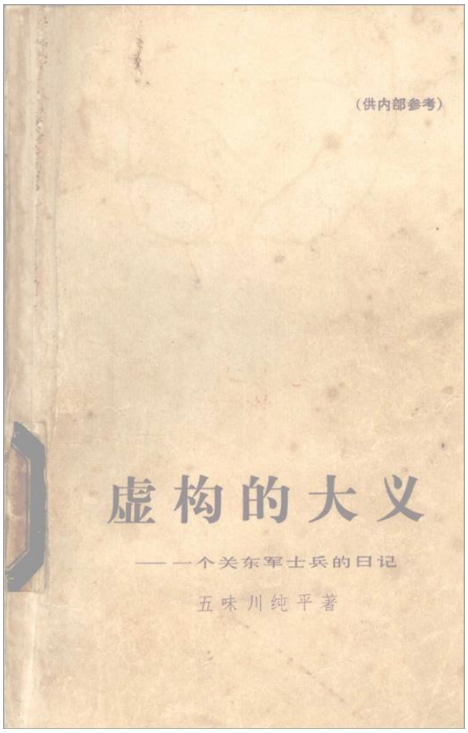
111　その翻訳について、草野文男『毛沢東思想と文化大革命』（民主主義研究会、1968年）163頁などを参照した。

112　「灰皮書」は社会科学に関わる書籍で、「黄皮書」は文学作品であるという分類方法もある。田雁『日文图书汉译出版史』（南京大学出版社、2017年12月）208頁。

橋本忍など『日本のシナリオ「砂の器」、「望郷」』の表紙



五味川純平『虚構の大義――関東軍私記』の表紙



2.2.3　「潜在翻訳」

最後は「潜在翻訳」で、文革期に完成した翻訳作品でありながら、当時の翻訳活動の基本方針に背馳していたため、文革が終わってから発表された翻訳作品である。文革期の「潜在翻訳」の数は少なく、馬士奎の統計[113]によると、外国文学全体で７冊である。日本の文学では、著者不明『落窪物語』[114]、芥川龍之介『芥川龙之介小说十一篇』（以下『芥川龍之介小説十一篇』）[115]という２冊がある。楼適夷により訳された『芥川龍之介小説十一篇』は文革後の1980年に湖南人民出版社より出版され、豊子愷により訳された『落窪物語』は文革後の1984年に人民文学出版社より出版された。

113　「潜在翻訳」について、馬士奎「“文革”未出版的外国文学译作」、『博览群书』2011年第2期(2011年2月)120-123頁などを参考にした。

114　著者不明『落洼物语』豊子愷訳(人民文学出版社、1984年2月)。

115　芥川龍之介『芥川龙之介小说十一篇』楼適夷訳(湖南人民出版社、1980年5月)。

「潜在翻訳」という名づけは「潜在創作」から由来したと考えられる。「潜在創作」は、「由于种种历史原因，一些作家的作品在写作其时得不到公开发表，“文革”结束后才公开出版发行【様々な歴史的な理由で、一部の作家の作品は書かれた時点で出版されることができず、「文革」が終わってから出版され、流通し】」、「从作家创作的角度来定义，也就是指作家不是为了公开发表而进行的写作活动【作家の創造という視点から定義すると、作家は公開する目的で書いているわけではない】」作品であり、書簡、日記、随筆など私的性格の強い「ノンフィクションの文学作品」と、作者の個人的な意志に基づく「自主創作の文学作品」という２種類に分けられた[116]。

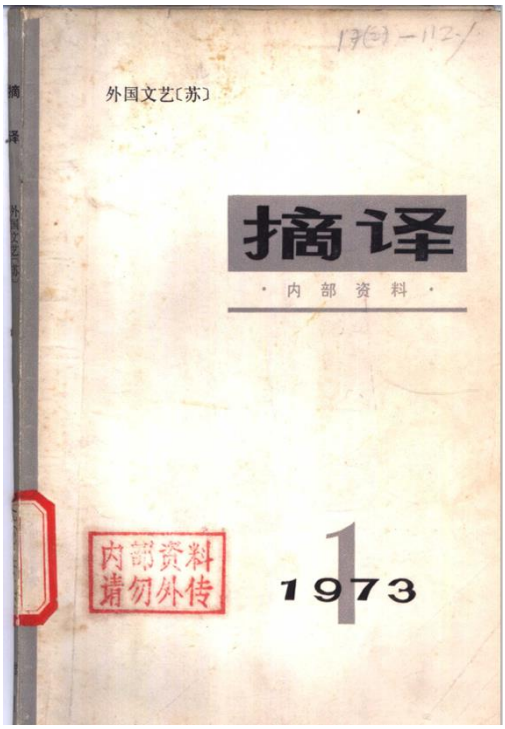
「潜在翻訳」と「潜在創作」には共通する点が多いと考えられる。すなわち、「潜在翻訳」とは、翻訳者が引き受けさせられた政治的な任務ではなく、出版が不可能なのを知りながら、自主的に翻訳を始めた作品だと考えられる。「潜在翻訳」には、翻訳者の文革そのものに対する反抗、翻訳者の文学に対する自分の審美観への誠実が見られる。翻訳者と「潜在翻訳」との関わりについては、後に詳述する。

第3節　翻訳文学誌『摘译』について

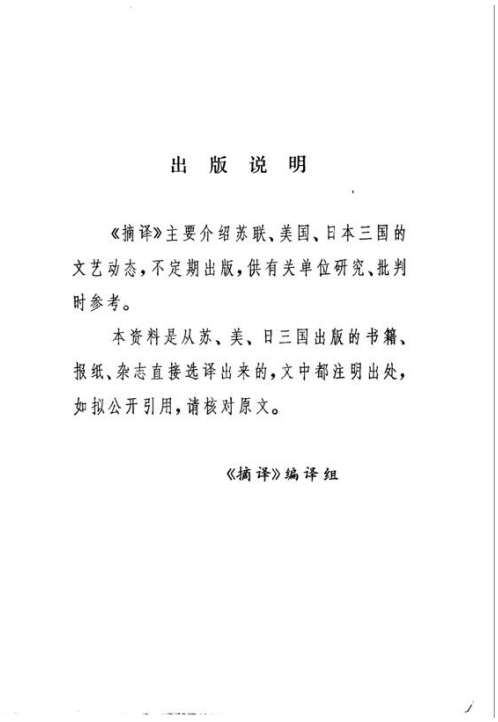
文革期の文学雑誌は国家の宣伝文化部門の指導を受けることが常態であり、個人的な信条に基づいて結成された同人誌や雑誌の存在は政府に認められなかった。雑誌『摘译』は1973年11月に、「内部翻訳」として、当時の外国の最新情報、文学思潮と作品を翻訳・紹介する専門的な翻訳雑誌という位置付けで、政府側の指示を受け、上海人民出版社から発行された。

116　陳思和「试论当代文学史(1949-1976)的“潜在写作”」、『文学评论』1999年第6期(1999年11月)104-113頁を参照した。

『摘译』創刊号の表紙



『摘译』創刊号の「出版说明」



出 版 说 明

《摘译》主要介绍苏联、美国、日本三国的文艺动态，不定期出版，供有关单位研究、批判时参考。

本资料是从苏、美、日三国出版的书籍、报纸、杂志直接选译出来的，文中都注明出处，如拟公开引用，请核对原文。

《摘译》编译组

文革期においては、翻訳活動に対して政府からの具体的指示は布告されていなかったが、単行本を含め、翻訳活動におけるごく大まかな翻訳方針は、下記のように、1973年11月刊行の『摘译』創刊号の「出版说明」と、『摘译』1976年第1期に掲載された「答读者——关于《摘译》的编译方针【読者に答える——『摘译』の編訳方針について】」から窺うことができる。

《摘译》主要介绍苏联、美国、日本三国的文艺动态，不定期出版，供有关单位研究、批判时参考。

本资料是从苏、美、日三国出版的书籍报纸、杂志直接选译出来的，文中都注明出处，如拟公开引用，请核对原文。

【『摘译』は主にソ連、アメリカ、日本という３ヵ国の文芸動態を紹介する不定期刊行物で、関係部門の研究、批判の参考に供する。

該当資料はソ、米、日の３ヵ国で出版された書籍、新聞、雑誌から直接に抄訳したもので、本文中に出典を示し、公に引用する場合、原作と照合して

ください。】[117]

《摘译》是一本只供有关研究部门和专业单位参考的内部刊物。(中略)它的主要任务是通过文艺揭示苏、美、日等国的社会思想、政治和经济状况，为反帝反修和批判资产阶级提供材料；所发表的作品主要是根据这个原则选定的。

【『摘译』は、関連する研究部門や専門部門が参照するためだけの内部刊行物である。(中略)雑誌の主要任務は、文芸を通して、ソ、米や日などの国における社会思想、政治と経済状況を指摘し、反帝反修とブルジョア階級の批判のために、材料を提供することである。雑誌に掲載された作品は主にこの原則に従って選ばれたのである。】[118]

『摘译』は「主要介绍苏联、美国、日本三国的文艺动态【主にソ連、アメリカ、日本という３ヵ国の文芸動態を紹介する】」雑誌であった。そして、雑誌の主要任務は「通过文艺揭示苏、美、日等国的社会思想、政治和经济状况，为反帝反修和批判资产阶级提供材料【文芸を通して、ソ、米や日などの国における社会思想、政治と経済状況を指摘し、反帝反修とブルジョア階級の批判のために、材料を提供する】」ことにあった。上記の文は、ある程度文革期の翻訳活動におけるおおよその方向性を示している。

先に述べたように、文革期にソ連がアメリカや日本に代わり、中国最大の脅威になったため、ソ連文学への批判が文革期における外国文学の翻訳活動の中心となり、作品の出版や『摘译』の翻訳の主な目的となった。文革期に翻訳された「ソ修[119]社会帝国主義」の作品には、「它所面临的正在日益激化的各种社会矛盾【この国が直面する日増しに激化している様々な社会矛盾】」、「它的张牙舞爪的侵略野心和扩张行动【この国の牙を剥いた侵略野心や拡張行動】」、また「它在意识形态和社会道德方面的日益腐朽堕落【この国の意識形態と社会道徳における次第に増している腐朽堕落】」

117　《摘译》編訳組「出版说明」、『摘译』1973年第1期(1973年11月)1頁。

118　《摘译》(外国文芸)編訳組「答读者――关于《摘译》的编译方针」、『摘译』1976年第1期(1976年1月)172頁。

119　ここの「ソ修」は「ソ連修正主義」を指す。

[120]などが見られる。中国はソ連と対抗し、自国の生存のためにアメリカや日本との関係を改善したが、意識形態における対立の局面は完全には変わらなかった。したがって、文革期に出版された資本主義国家の文学作品の大部分は、「了解敌人【敵を了解し】」[121]、批評するという目的で存在していた。

『摘译』は1973年に創刊されてから、1976年の廃刊まで合計３１期ある。その中の１１期[122]がソ連文学に関わる内容で、２期[123]がアメリカ文学に関わる内容で、２期[124]が日本に関わる内容であり、このほかの１６期が以上３ヵ国を含む総合的な文学誌である。それ以外に、２期[125]のソ連文学の特集、１期[126]のアメリカ文学の特集、合計３期の増刊も刊行された。日本文学[127]については、短編小説が６篇、中・長編小説及びその梗概が２篇、映画のシナリオが９篇、戯曲が６篇、文学評論が８篇、詩歌が３篇、

120　《摘译》(外国文芸)編訳組「答读者――关于《摘译》的编译方针」、『摘译』1976年第1期(1976年1月)172頁。

121　梅希雪「帮凶和帮忙――读《苏修短篇小说集》」、尤利・格拉契夫斯基(作家名原文不明)など『苏修短篇小说』(『摘译』1975年増刊)復旦大学外語系俄語専業75届二班工農兵学員など訳(上海人民出版社、1975年12月)1頁。

122　ソ連文学に関わる『摘译』は、1973年第1期、第3期、1974年第3期、第8期、1975年第1期、第3期、第6期(1975年第6期で仲禾編集「《水浒》在外国」(1975年10月)177-184頁も掲載され、主にソ連の文学界の『水滸伝』への評価をまとめた内容である)、1976年第1期、第4期、第6期、第9期である。

123　アメリカ文学に関わる『摘译』は、1974年第1期、1975年第7期である。

124　日本文学に関わる『摘译』は、1973年第2期、1975年第5期である。

125　謝苗・拉什金『绝对辨音力』(作家名原文不明、作品名原文不明)(『摘译』1975年増刊)上海外国語学院俄語系三年級師生訳(上海人民出版社、1975年5月)、尤利・格拉契夫斯基など『苏修短篇小说』(『摘译』1975年増刊)復旦大学外語系俄語専業75届二班工農兵学員など訳(上海人民出版社、1975年12月)。

126　詹姆斯・A・米切納『百年』(James Albert Michener, *Centennial,* 1974)(『摘译』1976年増刊)龐渤訳、朱仲学校(上海人民出版社、1976年6月)。

127　『摘译』に翻訳された文学作品のジャンルを分類する方法について、「《摘译》(外国文艺)1973-1974年总目录」、『摘译』1974年第8期(1975年3月〔ママ〕)181-185頁、「《摘译》(外国文艺)1975年总目录」、『摘译』1975年第8期(1975年12月)223-227頁、「《摘译》(外国文艺)1976年总目录」、『摘译』1976年第12期(1976年12月)166-172頁を参照した。

文芸の動態・記事が７篇、資料・作家と作品の紹介が２篇あり、合わせて４３篇の翻訳が見られる。さらに、翻訳作品をめぐって、編集者が４篇の外国文学批評・評論と１篇の出版説明を発表した。

そして、中国の一部の県立図書館、市立図書館、大学図書館は、『摘译』の何期かを所蔵しているが、『摘译』を揃えた図書館は僅かしかない[128]。北京大学図書館[129]は増刊を含め、全３４期の『摘译』を揃えた。中国国家図書館[130]は1975年第1期から第4期までを除いて３０期、その他、南京図書館[131]は１９期、上海図書館[132]は１６期を所蔵している。何輝斌「内部发行外国戏剧的考据与研究」[133]によると、『摘译』の発行部数は１万５０００部であり、当時６～７億の中国の人口に対し、非常に少なかったが、1960年代初頭の「黄皮書」の600部前後の発行部数に比べ、『摘译』の発行部数は大幅に増加したといえる。しかし、中国最大の古書サイト「孔夫子旧書网」[134]において、『摘译』の全期を入手することが可能である。ある程度からいえば、中国の図書館はほぼ全ての『摘译』を網羅していないことから、文革期の翻訳専門誌としての、学術的に重要視すべきはずだった『摘译』が注目されておらず、『摘译』に対する研究の欠如の実態が窺える。

また、1949年から文革の終わりまで、「文芸を通して」、帝国主義の「批判のために、材料を提供する」翻訳誌は、『摘译』だけではなかった。新中国建国直前、1949

128　中国の「全国图书馆参考咨询联盟」（http://www.ucdrs.superlib.net/、参照は2022年6月7日の時点で）のデータを参考にした。

129　「北京大学图书馆」（https://www.lib.pku.edu.cn/portal/cn、参照は2022年6月7日の時点で）のデータを参照した。

130　「中国国家图书馆・中国国家数字图书馆」（http://www.nlc.cn/、参照は2022年6月7日の時点で）のデータを参照した。

131　「南京图书馆」（http://www.jslib.org.cn/、参照は2022年6月7日の時点で）のデータを参照した。

132　「上海图书馆（上海科学技术情报研究所）」（https://library.sh.cn/、参照は2022年6月7日の時点で）のデータを参照した。

133　何輝斌「内部发行外国戏剧的考据与研究」、『文化艺术研究』第7巻第2期（2014年4月）90頁。

134　「孔夫子旧書网」（https://www.kongfz.com/、参照は2022年7月1日の時点で）のデータを参照した。

年9月に上海翻訳工作者協会により創刊された『翻译月刊』は「学习苏联社会主义、批判欧美帝国主义【ソ連の社会主義を学べ、欧米の帝国主義を批判せよ】」[135]を編訳の方針とし、翻訳における政治性や革命性を強調した。もう１つの代表的な翻訳専門誌は、1950年7月に北京で刊行された『翻译通报』である。翻訳理論、翻訳批判の研究を主としている『翻译通报』は、建国後の翻訳業の新しい規範体系を築くという目的で生まれた[136]が、政治情勢を利用し、翻訳者の「思想改造」を図り、訳文への批判から「翻訳者への批判」までの転換を果たした[137]。また、『翻译通报』は前述した1949年後の翻訳活動の組織化と計画化の体現でもある。その後、中国の翻訳専門誌の中心は、1953年に中華全国文学工作者協会により刊行された『译文』に移った。『译文』はソ連の「社会主義」、「現実主義」の優秀な文学作品の翻訳と、資本主義国家や植民地、半植民地の「革命的」、「進歩的」な文学作品の翻訳を主眼とする[138]。上述した３誌は文革前に停刊になったが、その代わりに『摘译』は1973年に出版されるようになった。文革前と文革後の他の雑誌と比べ、以前の雑誌の「文芸を通し、帝国主義を批判する」という特徴を継承しながら、出版活動の組織化と計画化の強化により、翻訳における政治的役割を極端な形で果たしたというのが、文革期に出版された『摘译』の最も特徴的な要素だと考えられる。文革期において、当代ソ連の文芸政策、文学創作、文学理論と批判の状況を紹介する、1973年6月に北京師範大学外国問題研究所ソ連文学研究室により創刊された『苏联文学资料』と1975年1月に上海師範大学ソ修文学評論組により創刊された『苏修文学资料』[139]も見られるが、翻訳の作品数の多さ、ソ連、ア

135　季淑鳳「《翻译》月刊编译出版考论：1949—1951——新中国第一份瞭望世界的期刊」、『安康学院学报』第32巻第3期(2020年6月)89頁。

136　李春「《翻译通报》与建国初的翻译改造」、『文艺理论与批评』2016年第4期(2016年7月)52-58頁、操楽鵬「“十七年”文学翻译批评的场域、路径与进程——以译家书信、日记为中心」、『中国翻译』2021年第4期(2021年)26-22頁などを参照した。

137　趙稀方「思想改造与翻译转型」、『中国翻译』2015年第1期(2015年)35-39頁。

138　査明建、謝天振『中国20世纪外国文学翻译史』(上)(湖北教育出版社、2007年2月)557-561頁。

139　『苏联文学资料』は1973年の創刊から1979年の廃刊まで合計１６期で、不定期に刊行されており、『苏修文学资料』は1975年の創刊から1977年の廃刊まで合計９期である。両誌とも「内部刊行物」である。羅巧玲「中国新时期以来的俄苏文学译介专刊研究」(華東師範大学修士学位論文、2009年5月)3-4頁。

メリカ、日本、イギリス、オーストラリアなど翻訳の対象国の比較的多様性から見れば、『摘译』は「了解外国文学发展状况的主要窗口【外国文学の発展状況を知る主な窓口】」[140]であった。

140　馬士奎「文革期间的外国文学翻译」、『中国翻译』第24巻第3期(2003年5月)67頁。

第3章　文革期における日本文学の選択基準

第1節　翻訳作品における「出版说明」や評論など

前述したように、文革期の翻訳活動について、ごく大まかな翻訳方針は記されているが、どのような選択基準でどのような文学作品が訳されたかなど、具体的な翻訳ストラテジーは明記されていない。しかし、翻訳という行為は、言語の形式で異文化の交流という機能を果すが、基本的には、他の人間活動と同様に、特定の社会環境の中で行われ、政治、経済、宗教、文化などの要件に左右される。文革期において、編集者及び翻訳者による翻訳行為は、政治イデオロギーを宣伝するという目的を果たすために行われた。翻訳活動の過程で、ある種の目的を遂げるために採用された翻訳ストラテジーの痕跡は確実に、訳文に残されていると考えられる。

文革時代の編集者[141]は、原文の性質の解釈や説明を評論の形で翻訳作品に入れることを常としていた。編集者が案内人の役割を務め、翻訳作品の前言、後記、評論などで作品をどのように読むべきか、その背後にどのような背景があるか、作品の意味がどこにあるかなどを述べ、「正確な政治ガイド」として、読み方において「誤解」を起こさないように読者を導くことが文革期における翻訳作品の１つの特徴であった。

これらの「出版説明」、「前言」、「後記」、「编者按」[142]、評論などの作用[143]は、

141　文革期の編集者は、翻訳活動の大まかな翻訳方針の決め手であると考えられるが、文革終了後、ある程度「清算」の対象となり、政治的に敏感な立場に立っていたため、先行研究の中で各訳本の編集者が誰だったか、実際にどんな仕事を行ったかなどについて、ほぼ言及されていない。公開されている資料から見れば、編集者の具体的な身分に関して、現時点では把握しにくいという状況にある。第5章「文革期における日本文学の翻訳作品に関わる人々」の中で、既知の『摘译』の編輯部に対して検討を進める。文革期の翻訳活動において、他の作品の編集者の具体的な身分、経歴、アイデンティティについて今後の課題としたい。

142　「编者按」は「編集者の言葉、評語」のことである。

143　ジェラール・ジュネット『パランプセスト：第二次の文学』和泉涼一訳（水声社、

別宮貞徳、藤濤文子、真銅正宏によると、一種の「暗号解読」[144]であり、「翻訳者の可視化、想定読者、翻訳の目的などの情報を大いに含み、作品と読者を仲介する橋渡しをする役割を担」[145]い、また翻訳作品の「テクストの外部にありながらも、テクストの本質を指し示す」[146]のである。文革期の翻訳対象の選択基準を分析するには、編集者の視点から作品の解読方法を明示する「出版説明」、「前言」、「後記」や評論などを理解することが、極めて意義深いと考えられる。

第2節　翻訳対象の選択基準

本節では、上述した作品の前言、後記、及び評論などへの検討を行うことにより、文革の頃、翻訳対象として選択された日本の文学作品に共通する特徴を、以下の５つにまとめることを試みる。

3.2.1　特定作家の代表作と関連作品

前記した通り、単行本と『摘译』を含め、文革期に出版された日本文学において、最も翻訳された日本の作家は小林多喜二と三島由紀夫である。文革期に出版された『沼尻村』と『蟹工船』の「译后记」によると、小林多喜二は「日本无产阶级作家【日本のプロレタリア作家】」、「优秀的革命作家【優秀な革命作家】」[147]であり、「日本优秀的无产阶级革命战士和作家【日本の優秀なプロレタリア革命戦士・作家】」[148]である。しかし、文革期に人民文学出版社から出版された『憂国』や『豊饒の海』

1995年8月）18頁などを参照した。

144　別宮貞徳『翻訳と批評』（講談社、1985年2月）197頁。

145　藤濤文子「翻訳とパラテクストとしての挿絵――プロイスラーの作品を例に――」、『国際文化学研究：神戸大学大学院国際文化学研究科紀要』第42巻（2014年8月）92頁。

146　真銅正宏『小説の方法――ポストモダン文学講義』（萌書房、2007年4月）76頁。

147　訳者「译后记」、小林多喜二『沼尾村』李徳純訳（人民文学出版社、1973年5月）101頁。

148　訳者「译后记」、小林多喜二『蟹工船』葉渭渠訳（人民文学出版社、1973年10月）115

４部作の「出版说明」において、三島由紀夫は「臭名昭著的右翼法西斯分子【悪名高い右翼ファシスト】」[149]となる。

２人の作家のうち、１人は「プロレタリア作家」の代表者であり、１人は「ブルジョア作家」の代表者であり、その評価は全く逆である。文革期において、２人の作家への評価は、日本文壇に対する中国の公式的な考え方の縮図だと考えられる。文革期において、中国側は、一部の日本の作家の「先進的」な思想を認める一方で、政治イデオロギーにて対極にある一部の日本の作家を否定的に捉えていた。国家レベルで１人の外国の作家の「性質」を定めるのは稀な現象であると言える。第4章では、小林多喜二とその作品、三島由紀夫とその作品が文革期においてどのように読み取られたかなどについて、分析する。

先述のように、文革期に日本映画のシナリオに関わる作品が３冊、合計８篇翻訳された。わずか８篇のシナリオの中に、山田洋次が脚本を務めた作品、松本清張の同名小説から改編した『砂の器』[150]、『故郷』[151]、『男はつらいよ　柴又慕情』[152]という３篇が見られる。３篇のシナリオに共通しているのは、故郷というテーマだと考えられる。『砂の器』はハンセン病への差別と偏見の被害者として、故郷を追い出され、最終的に殺人にまで至る天才音楽家の和賀英良の宿命を描き、『故郷』は資本が工業の進出に伴い、工業の近代化という波に追われて故郷の広島をやむを得ず故郷を離れた精一、民子夫婦という人物を造形し、『男はつらいよ　柴又慕情』は、旅に出たり、故郷に戻ったりする寅さんと彼の失恋話を主軸としている。

作品に見られる「失われた家と家族と故郷への郷愁」[153]は、山田洋次が満州で過ご

頁。

149　「出版说明」、日本反動作家　三島由紀夫『忧国』（人民文学出版社、1971年11月）。

150　原作について、橋本忍、山田洋次『砂の器』、『シナリオ＝Scenario』31(1)(318)(1975年1月)102-147頁を参照した。

151　原作について、山田洋次、宮崎晃『故郷』、『キネマ旬報』1972年11月下旬号(第591期、1972年11月)94-106頁を参照した。

152　原作について、山田洋次、朝間義隆『男はつらいよ　柴又慕情』、『キネマ旬報』1972年夏の特別号(第582期、1972年7月)80-101頁を参照した。

153　山田和夫『日本映画の歴史と現代』（新日本出版社、2003年8月）41頁。

した子供時代[154]に由来したものと思われる。山田洋次[155]は1931年に山田家の次男として大阪に生まれた。満州事変勃発後、父親の満鉄勤務への赴任に伴い、ハルビン、瀋陽や大連など中国の東北地方で暮らした。1947年に、１６歳の山田は終戦により日本に引き揚げた。戦争中において中国人に対する日本人としての優越感、大連で日本の敗戦を自分の目で見た後の衝撃、日本に戻って戦争そのものや当時中国人に対して持っていた差別意識への反省[156]など、旧満州での中国経験が山田の創作の原点となると言える。実体験した戦争は山田洋次に故郷への再考を促した。山田によると、戦争により失われた故郷は「遠きにありて思うもの」で、「侘しい旅の起き伏し」に、「思わず涙を拭う」[157]のである。彼の故郷観は、「抽象的」であり、「理想的」[158]である。山田洋次は映画を通して、故郷を追い出された『砂の器』の和賀英良、故郷を離れざるを得ない『故郷』の精一夫妻、故郷を出て旅をし続ける『男はつらいよ　柴又慕情』の寅さんなど、自分と同じ立場である「故郷喪失者」[159]たちの心を癒やしていると示唆された。

３篇の山田洋次作品が翻訳対象として選択された理由は、訳本の「出版说明」によると、「为了从多方面了解日本的社会现状，以及垄断资本主义的腐朽没落本质【日本社会の現状、および独占資本主義の腐朽し没落する本質を、多方面から理解する】」[160]ところにあるが、山田本人の、作品に「故郷喪失」の思想をもたらした満州での戦争体験、および戦後の左寄りの政治的立場とも関連していると考えられる。

1976年3月に、人民文学出版社より出版された五味川純平『虚構の大義――関東軍私

154　川西玲子『映画が語る昭和史：いつもヒロインたちがいた』(ランダムハウス講談社、2008年8月)292頁。

155　山田洋次『山田洋次作品集』(第8巻)(立風書房、1985年7月)256-261頁などを参照した。

156　NHK番組『戦争証言アーカイブス』(「終戦で覆った街と人々」、放送日：2015年8月9日)における山田洋次へのインタビューを参照した。

157　山田洋次、朝間義隆『男はつらいよ』(第5巻　青春篇)(ちくま文庫、1997年9月)125頁。

158　都築政昭『寅さんの風景：山田洋次の世界』(近代文芸社、1997年8月)283頁。

159　川西玲子『映画が語る昭和史：いつもヒロインたちがいた』(ランダムハウス講談社、2008年8月)292頁。

160　都築政昭『寅さんの風景：山田洋次の世界』(近代文芸社、1997年8月)62-63頁。

記』(本社翻訳組訳)の「出版说明」においても、以下のように述べられている。

> 五味川纯平是日本资产阶级作家，一九一六年出生于我国东北，一九四〇年毕业于日本东京外语学校英文系，同年入日本侵略者在我国东北开设的昭和炼钢厂任职。他于一九四三年参加侵华战争，日本投降后被苏联红军俘虏，一九四八年遣返日本。自一九五五年起他开始写作，主要著作有《人的条件》、《战争和人》以及《诺蒙坎》等，都是以日本帝国主义者发动的侵略战争为背景的。
>
> 【五味川純平は、日本のブルジョア階級の作家であり、1916年に我が国の東北に生まれ、1940年に日本の東京外国語学校の英語科を卒業し、同年、日本の侵略者が我が国の東北に開設した昭和製鋼所に入社する。彼は、1943年の中国侵略戦争に参加し、日本の降伏後にソ連赤軍の捕虜となり、1948年に日本に送還された。1955年から、彼は作品を書き始め、主な著書に『人間の條件』、『戦争と人間』、『ノモンハン』などがあり、いずれも日本の帝国主義者による侵略戦争を背景としている。】[161]

『虚構の大義――関東軍私記』の訳本の「出版说明」の中で、五味川純平の中国での経歴について詳しく説明されている。五味川純平は、山田洋次と同じ、「我が国の東北」である関東州生まれ、子供時代を中国で過ごし、その創作も中国と密接に関わっている。文革大革命期において、五味川純平と山田洋次の作品が翻訳されたことは、２人の中国での体験と非常に関係が深いと考えられる。

また、1975年4月に人民文学出版社より出版された有吉佐和子『恍惚の人』の「出版说明」において、有吉佐和子は「日本知名的资产阶级女作家【日本の有名なブルジョア女性作家】」でありながら、「她对我国友好，曾多次访问我国【彼女は我が国に対して友好的で、何度も我が国を訪問したことがある】」[162]と述べられている。日本の

161 「出版说明」、五味川純平『虚构的大义――一个关东军士兵的日记』本社翻訳組訳(人民文学出版社、1976年3月)1頁。

162 「出版说明」、有吉佐和子『恍惚的人』秀豊、渭慧訳(人民文学出版社、1975年4月)1頁。

「ブルジョア作家」を肯定的に評価するというのは、文革期には極めて稀である。しかし、この積極的な評価は、『恍惚の人』の訳本の編集者が説明した通り、作家本人と中国との関わりにかかっている。第4章では、有吉佐和子とその作品、また有吉と中国との関係などについて、詳述する。

3.2.2　労働者の階級闘争と革命運動を宣揚する作品

『摘译』1973年第2期において、日本で日増しに深刻化する社会階級の分化に際して、階級闘争と革命への決意を固めた青年たちのことを描いた劇団はぐるま座『川下の街から』（瞿麦訳）と創作者の著した「前言」が翻訳された。『川下の街から』の創作意義について、以下のように述べられている。

> 因为这位青年工人一家人经历的道路普遍贯穿着成千上万的劳动人民的喜悦、悲哀、愤怒、骄傲、愿望、斗争，把这些故事加工提炼，就有可能反映出更广泛的日本全国劳动人民的心情、不屈不饶的战斗精神、对胜利不可动摇的信念。（中略）
>
> 这一部作品就是这样从劳动人民当中产生出来，和劳动人民共呼吸，并将和劳动人民共同成长。
>
> 【この青年労働者の一家が歩いた道は、何千何万もの労働人民の喜び、哀れ、怒り、誇り、願い、闘争に貫かれている。これらの物語を練り上げて、日本全国の労働人民の思い、不撓不屈の戦闘精神、勝利への揺るぎない信念をより確実に反映できる。（中略）
>
> この作品は労働人民の中から生まれ、労働人民と呼吸を合わせ、さらに労働人民と共に成長する。】[163]

「前言」の中で言及された「労働人民」は、「工農兵」を指す。毛沢東が1942年の

163　「前言」、歯輪座劇団集体『河流下游的市镇』瞿麦訳、『摘译』1973年第2期（1973年12月）2-3頁。また、劇団はぐるま座の上演した演劇について、須川渡「戦後日本におけるコミュニティ・シアターの形成と展開」（大阪大学博士学位論文、2016年3月）175-176頁を参照した。

「延安文芸座談会における講話」[164]の中で、「私たちの文学芸術はすべて人民大衆のためであり、まずは工農兵のためで、工農兵のために創作し、工農兵のために利用される」と論じた。その文学理念ものちほど文化大革命の文学路線の方針の１つとみなされる。文革期の外国文学の編集者は、毛沢東の文学路線を実行するため、「工農兵」、即ち工人・農民・兵士をはじめとする各労働者階級の人民大衆が主導権を持ち、革命闘争の舞台で戦うことを描いた作品に重点を置いていると考えられる。1966年から1971年までの『人民日报』の社説において、「工農兵」もしばしば言及された[165]。同誌には、海上自衛隊の軍艦を建造する造船所での、日本独占資本主義者や修正主義者と闘う労働者を描いた劇団はぐるま座『波涛』（薛毅訳）[166]、過酷な労働条件で自殺した沖縄出身の少年に端を発する青年労働者たちの革命運動を主題とする劇団はぐるま座『沖縄の朝』（陽新訳）[167]の翻訳も見られ、その翻訳方針が貫かれていると考えられる。

『摘译』1976年第8期において、労働者の「我々が資産家の手から権力を奪い取る」と訴えるアメリカの詩歌、安妮・羅曼「回击之歌」(Anne Romaine, *Fight Back*, 1975)（史起訳）[168]が掲載された。また、翻訳者は「苏修文艺界为柯切托夫举行葬礼」[169]という「文艺动态」の中で、多くの作品においてソ連の「英勇的工人阶级【勇敢な工人階級】」を主要な登場人物にした「杰出的苏联作家、著名的社会活动家【傑出したソ連作家、著名なる社会活動家】」のコチェトフを肯定的に評価する。ブルジョア階級と戦う、労働者をはじめとするプロレタリア階級への賛美が見られる。

前述したように、小林多喜二作品『沼尻村』、『不在地主』、『蟹工船』の翻訳は1973年に人民文学出版社より出版された。『沼尻村』の「译后记」において、北海道の沼尻村を背景に、その近くにある郁秋別炭山で働く「日本工人阶级中的先进分子兼

164　戦鼓編委会「誓与修正主义文艺黑线血战到底——纪念《在延安文艺座谈会的讲话》发表25周年」、1967年5月2日『战鼓』創刊号。

165　廖迅喬「认知视角下《人民日报》社论（1966-1971）的批评语篇分析」（北京外国語大学博士学位論文、2014年6月）186-198頁。

166　歯輪座劇団集体『波涛』薛毅訳、『摘译』1973年第2期（1973年12月）80-90頁。

167　歯輪座劇団集体『冲绳的早晨』陽新訳、『摘译』1973年第2期（1973年12月）48-79頁。

168　安妮・羅曼「回击之歌」史起訳、『摘译』1976年第8期（1976年8月）60-61頁。

169　「苏修文艺界为柯切托夫举行葬礼」、『摘译』1974年第2期（1974年2月）138頁。

一郎和吉枝等人不畏强暴，排除万难，领导工农大众反抗地主资产阶级的法西斯统治，并同混进革命队伍的机会主义分子进行尖锐复杂斗争【日本の労働者階級の先進分子である兼一郎やヨシエは、強暴を恐れず、万難を排し、労農大衆を指導して地主ブルジョア階級のファシスト支配に反抗し、革命の隊列に紛れ込んだ日和見主義者と激しく複雑な闘争を繰り広げる】」[170]と描かれている。そして、作品の「译后记」によると、『不在地主』は「北海道矶野农场佃农的减租斗争【北海道の磯野農場における小作人の作料引き下げ闘争】」[171]に取材した作品であり、過酷な労働を強いられて、その後プロレタリア思想に覚醒し、資本側に反抗する『蟹工船』の労働者たちは「不怕牺牲，勇于斗争的先进工人的英雄【犠牲を恐れず、敢然と戦う先進的な労働者の英雄】」であり、「日本人民的希望【日本人民の希望】」[172]でもある。

上記の作品は、日本の「労働者の階級闘争と革命運動を宣揚する作品」を中国の読者に紹介するという目的で、編集者が選択し、翻訳したと考えられる。

3.2.3　軍事、戦争の面から、反帝国主義、反修正主義を唱える作品

広沢栄・熊井啓『望郷』(訳者不明)は、1976年3月に人民文学出版社より内部的に出版された。原作者の１人である熊井啓は、『サンダカン八番娼館　望郷』[173]の主人公のからゆきさんに対して、『キネマ旬報』1974年10月上旬号に掲載された「『サンダカン八番娼館・望郷』の撮影にあたって」[174]において、「『からゆきさん』の足跡は、北はシベリア、中国、南はフィリピン、マレーシア、シンガポール、ジャワ、スマトラか

170　訳者「译后记」、小林多喜二『沼尾村』李徳純訳(人民文学出版社、1973年5月)103頁。

171　訳者「译后记」、小林多喜二『在外地主』李芒訳(人民文学出版社、1973年10月)150頁。

172　訳者「译后记」、小林多喜二『蟹工船』葉渭渠訳(人民文学出版社、1973年10月)116-117頁。

173　脚本・廣澤栄、熊井啓『サンダカン八番娼館　望郷』、『キネマ旬報』1974年11月下旬号(1974年11月)77-96頁。山崎朋子『サンダカン八番娼館――底辺女性史序章』(筑摩書房、1972年5月)も参照した。

174　熊井啓「『サンダカン八番娼館・望郷』の撮影にあたって」、『キネマ旬報』1974年10月上旬号(1974年10月)101-102頁。

らインド、オーストラリアまで及んでいる。そしてこの地図は、太平洋戦争のとき、日本軍が侵略した地域といみじくも重なり合うことになる」と述べ、軍事的な面から、戦争に対する再考を試みた[175]。文革期に出版された『望郷』に対して、翻訳者は訳本の「出版说明」において以下のように述べている。

> 《望乡》的历史背景时期是一九〇七年至一九三一年。当时，日本统治集团把大批渔村农寨的劳动妇女，卖到南洋一带作妓女，赚取外汇，准备和发动侵略战争。故事描写了一个出身于九州天草地区的贫苦妇女阿崎所遭遇的痛苦和不幸。但由于剧作者的阶级立场，影片没有揭示日本劳动妇女身受压迫的根源在于资本主义社会制度，在于日本帝国主义的侵略战争政策。
>
> 【『望郷』の歴史背景の時期は1907年から1931年までである。当時の日本の統治集団は外国為替を稼ぎ、侵略戦争の準備と発動を行うため、農漁村の労働婦女を売春婦として南洋に売った。作品は九州天草地区出身の貧乏な婦女おサキが遭遇した苦痛と不幸を描いている。しかし、作者の階級立場により、この映画は、日本労働婦女が身をもって受けた圧迫の根源が資本主義の社会制度にあり、日本帝国主義の侵略戦争政策にあることを明らかにしていなかった。】[176]

「出版说明」において、「日本の統治集団は外国為替を稼ぎ、侵略戦争の準備と発動を行うため、農漁村の労働婦女を売春婦として南洋に売った」という編集者の作品に対する指摘は、上記した熊井啓の論説と極めて類似している。また、「売る」という言葉に、戦争準備に取り掛からされた「からゆきさん」が協力者ではなく、「明治以後の日本海外侵略史」[177]、すなわち日本の南進政策や軍国主義の犠牲者という意味合いが強いと言える。

175　熊井啓、俞虹『熊井启的电影 从《望乡》到《爱》』森川和代訳（中国電影出版社、1997年8月）132-138頁を参照した。

176　「出版说明」、橋本忍、山田洋次、広沢栄、熊井啓『日本电影剧本《沙器》《望乡》』訳者不明（人民文学出版社、1976年3月）1-2頁。

177　熊井啓「『サンダカン八番娼館・望郷』の撮影にあたって」、『キネマ旬報』1974年10月上旬号（1974年10月）102頁。

先に述べたように、『摘译』1973年第2期に『沖縄の朝』が掲載された。劇団はぐるま座の著した「前言」も翻訳され、以下の内容が見られる。

> 冲绳和本土的工人紧紧地团结起来，早日赶走美军，打倒出卖冲绳、出卖国家的垄断资本，才能真正夺回冲绳，把日本全国夺回到我们人民手里。(中略)只要世界上有帝国主义，有军国主义和侵略战争，‘岛上的痛苦’是不会完结的。
>
> 【沖縄と本土の労働者は緊密に団結し、早めに米軍を追い払い、沖縄と国家を売る独占資本を打倒してこそ、真に沖縄を、日本全国を私たち人民の手に奪い返す。(中略)世の中には帝国主義、軍国主義と侵略戦争が存在する限り、「島の苦痛」は終わらない。】[178]

プロレタリア階級の敵は、上述のように、「帝国主義」、「軍国主義」、「侵略戦争」であると規定された。政府の方針に従い、翻訳作品を通して、編集者は「前言」や「编者按」などで文革期における国家政府の敵を明確に批判していると考えられる。

『摘译』1973年第2期において、山本薩夫『戦争と人間』(完結篇)[179](薛毅訳)の梗概とそのシナリオに関わる映画評論、佐古誠「颠倒了的侵略战争史——评山本萨夫导演的《战争和人・末集》」(薛毅訳)も翻訳された。映画評論において、「把“军部”当作侵略战争的罪魁祸首，却掩盖了真正的凶手垄断资产阶级的罪恶。侵略战争的根源，本来应该是贪得无厌追求利益、掠夺市场和资源的资本主义制度，而影片却抹杀了这一点【「日本軍」を侵略戦争の元凶とし、真の犯人である独占ブルジョア階級の罪を覆い隠す。侵略戦争の根源は、本来なら欲張りで利益を追求し、市場と資源を略奪する資本主義制度であるが、この映画はこれを抹消している】」[180]という文が見られる。

---

178 「前言」、歯輪座劇団集体『冲绳的早晨』陽新訳、『摘译』1973年第2期(1973年12月)49頁。

179 監督：山本薩夫、脚本：武田敦、山田信夫『战争和人・末集』薛毅訳、『摘译』1973年第2期(1973年12月)121-127頁。

180 佐古誠「颠倒了的侵略战争史——评山本萨夫导演的《战争和人・末集》」薛毅訳、『摘译』1973年第2期(1973年12月)118頁。

侵略戦争を引き起こしたのが「資本主義制度」にあると、作品の編集者は示唆した。同誌に掲載された、劇団はぐるま座『春雷』（石宇訳）[181]、中原瑛「白色的桥【白い橋】」（薛毅訳）[182]、吉川徹也「日本电影向何处去【日本映画はどこへ行く】」（廖望訳）[183]、今井正『海軍特別年少兵』（葉新斌訳）[184]と、それに関わる評論、吉川徹也「谈不上什么反战——评今井正的《海军特别少年兵》」（廖望訳）[185]、前述した五味川純平『虚構の大義——関東軍私記』（本社翻訳組訳）などの翻訳作品に、編集者の日本の軍国主義への批判も見られる。

また、『摘译』1973年第1期に阿・約爾金「核潜艇听到警报出发」（作家名原文不明、作品名原文不明、訳者不明）という中編小説の梗概が掲載された。編集者は前言において以下のように述べている。

> 这篇所谓“文献性中篇小说”主要描写苏修核潜艇舰队的建立和发展过程。（中略）内容主要有两个方面：第一是搬出沙皇俄国的历史，反复夸耀历史上俄国舰队和探险者的“功绩”及其广阔的活动范围，（中略）第二是吹嘘今天苏修海军的技术水平和“爱国主义”，美化苏修海军，炫耀武力。
>
> 【このいわゆる「文献的中編小説」は主にソ修の原子力潜水艦艦隊の設立と発展の過程を描いた。（中略）内容は主として以下の２つに分けられた。１つ目はロシア帝国の歴史を取り上げ、歴史上のロシア艦隊と探検者の「功績」及びその広々とした活動範囲を繰り返し自慢する。２つ目は今日のソ修海軍の技術水準と「愛国主義」を吹聴して、ソ修海軍を美化し、武力をひけらかす。】[186]

181　歯輪座劇団集体『春雷』石宇訳、『摘译』1973年第2期（1973年12月）25-47頁。

182　中原瑛「白色的桥」薛毅訳、『摘译』1973年第2期（1973年12月）97-107頁。

183　吉川徹也「日本电影向何处去」廖望訳、『摘译』1973年第2期（1973年12月）111-117頁。

184　監督：今井正、脚本：鈴木尚之『海军特别少年兵』葉新斌訳、『摘译』1973年第2期（1973年12月）134-138頁。

185　吉川徹也「谈不上什么反战——评今井正的《海军特别少年兵》」廖望訳、『摘译』1973年第2期（1973年12月）128-134頁。

186　阿・約爾金「核潜艇听到警报出发」訳者不明、『摘译』1973年第1期（1973年11月）120

編集者は作品に対して、ソ修海軍が「愛国主義」という名目で、自分の「広々とした」所を侵略する武力を美化し、さらに正当化していると指摘した。ソ連の海軍を主題とした映画のシナリオの阿・格列鮑涅夫、尤・拉兹曼「礼节性的访问」（作家名原文不明、作品名原文不明、訳者不明）の前言によると、該当作品は「苏修社会帝国主义的侵略扩张政策【ソ修社会帝国主義の侵略拡張政策】」[187]を宣伝する。また、同誌には中編小説の佐洛托特羅波夫（海軍中佐）「鸢门」（作家名原文不明、作品名原文不明、訳者不明）[188]の梗概も翻訳され、前言の中では「鼓吹对青年进行军国主义教育，宣扬扩张、争霸有理【青年の軍国主義教育を鼓吹し、拡張を広く宣伝し、覇権の争いを正当化する】」と述べられている。さらに、作品の原作者は「佐洛托特羅波夫（海軍中佐）」と記されている。翻訳作品の編集者は「海軍中佐」という作者の職業を強調し、「軍国主義を唱える」ことがソ連政府側の公式的な主張であると暗示したと考えられる。

3.2.4　日本の深刻な経済、政治、社会問題を反映する作品

資本主義国家の深刻な経済問題を指摘した作品は、文革期の外国文学の活動において、翻訳対象の中心であると考えられる。

例えば、『摘译』1975年第8期に訳された短編小説、森村誠一「虫の土葬」（金錚訳）[189]は、電力会社の職員である４６歳の上松は会社の圧力で仕事を辞めさせられて、送別会の帰り道で不注意のため穴の中に落ち、二日間の血みどろの苦戦をした後、ついに穴から逃げるが、現実世界に戻った上松は、あの「穴」がまさしく自分の属する場所だと感じるという物語を描いている。同誌に掲載された評論、達明・賀焰「两个剪影——评美国剧本《二号街的囚徒》、日本短篇小说《小虫的土葬》」に、次のように述べられている。

頁。

187　阿・格列鮑涅夫、尤・拉兹曼「礼节性的访问」訳者不明、『摘译』1973年第1期（1973年11月）1頁。

188　佐洛托特羅波夫（海軍中佐）「鸢门」訳者不明、『摘译』1973年第1期（1973年11月）125-129頁。

189　森村誠一「小虫的土葬」金錚訳、『摘译』1975年第8期（1975年12月）163-194頁。

一言以蔽之曰：经济危机。

近年来，一场深刻的经济危机猛烈地冲击着整个资本主义世界，使资本主义国家的经济生活和社会生活，象经过一次瘟疫的破坏一样，陷入了瘫痪和混乱。美国统治集团不得不承认，美国经济出现了“全面地衰退”；日本垄断资产阶级也哀叹，现在日本的经济，问题成堆，“病情”严重。(中略)这种矛盾以及由此而来的频繁的经济危机，不是资本主义制度本身所能解决的，恰恰相反，“要消灭危机，就必须消灭资本主义”。

【一言でこれを表現すれば、経済危機である。

近年、深刻な経済危機が資本主義世界全体に猛烈な衝撃を与えている。資本主義国家の経済生活と社会生活は、まるで疫病に侵されたように、麻痺と混乱状態に陥っている。米国の統治集団は、米国経済が「全面的な衰退」をしてきたと認めざるを得ない。日本の独占ブルジョア階級も、現在の日本経済には、問題が山積し、「病状」は深刻だと嘆き悲しんでいる。(中略)この矛盾とそれに起因する頻発した経済危機は、資本主義制度自身が解決できるようなものではない。逆に「危機を消滅させるには、資本主義を消滅させるほかない」のである。】[190]

編集者は「虫の土葬」の主人公である上松の失業と自殺した理由を、資本主義制度の内部的な矛盾から生まれる頻繁な経済危機に結びつけており、この経済危機は「資本主義制度自身が解決できるようなものではない」と断言している。さらに、経済危機を解決する唯一の方法として、「危機を消滅させるならば、資本主義を消滅させるほかない」と述べている。

そのほかに、文革期に翻訳された文学作品において、日本の経済危機やインフレーションに言及する「出版説明」、「前言」、「後記」や評論も多く見られる。例えば、『摘译』1973年第2期に掲載された、劇団はぐるま座『川下の街から』(瞿麦訳)の「前言」において、日本の「物价上涨，日益败坏的社会风气【物価の上昇、日増しに退廃

190　達明、賀焰「两个剪影——评美国剧本《二号街的囚徒》、日本短篇小说《小虫的土葬》」、『摘译』1975年第8期(1975年12月)84-87頁。

していく社会の風潮】」[191]が問題視された。1975年6月に人民文学出版社に出版された、小松左京のSF小説『日本沈没』(李徳純訳)に関わる評論「伟大的日本人民永远沉没不了！——评反动小说《日本沉没》」(著者不明)の中で、「人所共知，第二次世界大战后，在美帝扶植下，日本经济走向恶性膨胀和畸形发展。特别是进入七十年代以来，日本经济危机迭起，垄断资本的固有矛盾更趋激化，尤其是扩大生产力同国内资源贫乏和市场狭窄的矛盾更为突出【周知のように、第二次世界大戦後、アメリカ帝国の扶植のともに、日本経済は悪性インフレーションと奇形的な発展に向かった。特に1970年代以降、日本の経済危機は次々と起こり、独占資本に内在する矛盾が激化する傾向が強い。その中で特に生産力の拡大と国内資源の乏しさ、市場の狭さとの矛盾が際立つ】」[192]と論じられている。

また、先に述べた、山田洋次・朝間義隆『男はつらいよ　柴又慕情』に対して、翻訳者は、訳本の「出版说明」の中で以下のように紹介した。

> 《男人的烦恼——柴又恋情》是长篇喜剧片《男人的烦恼》中的一部。它通过主人公到处碰壁的漂泊生涯，描绘出当前日本小市民阶层的困难处境。从剧本中，我们可以间接看到，由于通货膨胀的恶性发展，日本的物价、房租等等不断飞涨，正使日本中下层人民的生活日益贫困化。
>
> 【『男はつらいよ　柴又慕情』は長編コメディ映画『男はつらいよ』シリーズの１作である。この作品は、主人公の至るところで障害にぶつかり、放浪する生涯を通して、目下日本の小ブルジョア階級の困難な境遇を描き出した。このシナリオから、インフレの悪化による日本の物価、家賃の急騰は、日本の中下層人民の生活を日一日と貧困化させることが間接的に読み取れる。】[193]

191　「前言」、歯輪座劇団集体『河流下游的市镇』瞿麦訳、『摘译』1973年第2期(1973年)2頁。

192　著者不明「伟大的日本人民永远沉没不了！——评反动小说《日本沉没》」、小松左京『日本沉没』李徳純訳(人民文学出版社、1975年6月)1-2頁。

193　「出版说明」、山田洋次など『故乡——日本的五个电影剧本』石宇訳(上海人民出版社、1974年6月)1-2頁。

翻訳者の強調した「日本の物価、家賃」については、原文テクストにおける以下の対話から見られる。

> 親父「(ポケットから印鑑や領収証を出しながら)家賃の一ヵ月分ですから六千円ということになります」
> 寅「もとはと言やあ、そっちが悪いんだぞ、そうじゃねえか、俺のたった一つの安息の場所を、何の断りもなしによ、見知らぬ他人に貸し与えて小銭稼ごうなんて汚え魂胆だから罰があたったんだ」[194]

「家賃の一ヵ月分」、「六千円」、「小銭」などの描写から、訳者に言及された「急騰」ということは読み取れないと考えられる。訳者は原作の中心である寅の歌子に対する「慕情」と前述した「故郷喪失」のテーマから視線を外し、「目下日本の小ブルジョア階級の困難な境遇」と「日本の中下層人民の生活を日一日と貧困化させること」に目を留めている。また、「出版説明」における「主人公の至るところで障害にぶつかり、放浪する生涯」という一文から、訳者により原作にある「自発的に放浪生活を選択する」寅は「止むを得ず放浪生活をする」寅に書き換えられたと言える。

『男はつらいよ　柴又慕情』の「出版説明」から見れば、『男はつらいよ』の原作におけるコメディの特質もある程度失われ、訳者の意図と原作の主旨との間でその意味のずれは顕著である。中国の読者に日本人民の生活上の貧困を紹介するには、最善の選択とは必ずしも言えない『男はつらいよ　柴又慕情』の「出版説明」には、文革期の翻訳者が日本の経済危機とインフレーションを強調する傾向が見られる。文革期に翻訳された、経済問題を反映する日本文学において、日本の農業、石油問題を反映している作品も見られる。それについては、後ほど詳述する。

また、『摘译』1974年第5期と1974年第6期に、山崎豊子・山田信夫『華麗なる一族』のシナリオ(上海師大外語系日語教研組訳)[195]が訳された。富と権力獲得への手段とし

194　山田洋次、朝間義隆『男はつらいよ　柴又慕情』、『キネマ旬報』1972年夏の特別号(第582期、1972年7月)84頁。

195　原作者：山崎豊子、改編者：山田信夫『华丽的家族』(第1部)上海師大外語系日語教研組訳、『摘译』1974年第5期(1974年9月)143-219頁、原作者：山崎豊子、改編者：山田信夫『华丽的家族』(第2部)上海師大外語系日語教研組訳、『摘译』1974年第6期

て、華麗なる閨閥をはりめぐらす万俵一族を主役にする山崎豊子の長編小説『華麗なる一族』は、1974年に監督の山本薩夫により映画化された。編集者は翻訳作品の「前言」の中で、この小説が下位銀行の「日本几个大银行的合并【上位銀行への吸収合併】」を描写したことを通し、「资本家之间的勾心斗角【資本家の間の暗闘やいがみ合い】」、また背後で暗躍する「政界和财界相互倾轧、相互勾结的卑鄙行径【政界と財界が互いに軋轢、結託する卑劣な行為】」を暴露すると述べており、また『華麗なる一族』が金融界の「圣域【聖域】」である銀行を主題とし、「虽没有特定的模特儿，但却是一部描写事实的小说【特定のモデルはないが、事実に基づく小説である】」[196]と指摘した。

『華麗なる一族』の訳文の前言の中で、「政界と財界が互いに軋轢、結託する」ことについても言及された。文革期の翻訳活動には、資本主義国家の政治問題に関わる作品にも重きが置かれている。例えば、戸川猪佐武『小説党人山脈』〈第2部〉（訳者不明）[197]は、1976年6月に上海人民出版社より出版された。この作品に対して、編集者は「译者的话」の中で、以下のように述べている。

> 日本资产阶级学者惯于把日本统治阶级中的政治头面人物划分为“官僚”和“党人”。被他们称作“官僚”的，专指沿着正统的仕途升迁而爬上尊爵显位的当权者。被他们称作“党人”的，在未掌握或分享实权的时侯，不甘心遭受“官僚”的排挤打击，便假借资产阶级的“议会民主”，倾心于争夺官职和权势。所以，“官僚”和“党人”实际上不过是日本垄断资产阶级中不同集团的政治代表，分别代表了这些不同集团的利益、要求。他们之间围绕着在朝与在野、“专权”与争权而展开的不可调和、旷日持久的搏斗，是日本垄断资产阶级内部这一派反对那一派的斗争。日本垄断资产阶级利用这类争斗转移人民的视线，并在本阶级内部进行财产和权力的再分配。
>
> （中略）不论“党人”也好，“官僚”也好，毕竟都是日本垄断资产阶级的

（1974年11月）109-184頁。

196 「前言」、原作者：山崎豊子、改編者：山田信夫『华丽的家族』（第1部）上海師大外語系日語教研組訳、『摘译』1974年第5期（1974年9月）143頁。

197 戸川猪佐武『党人山脉』（小説《吉田学校》第二部）訳者不明（上海人民出版社、1976年6月）。

忠实工具。他们在为垄断资产阶级的统治、剥削服务这一点上，是完全一致的。

【日本のブルジョア階級の学者は、日本の支配階級における中心的な政治家を「官僚」と「党人」に分類することに慣れている。彼らに「官僚」と呼ばれた者は、正統的な仕途から昇格し、尊い位に登った権力者のことである。彼らに「党人」と呼ばれた者は、実権を握っていない、あるいは共有していない時に、「官僚」からの排斥と打撃に甘んじることなく、ブルジョア階級の「議会民主制」を利用し、官職と権勢の奪い合いに執着したのである。そのため、実際には「官僚」と「党人」はただ日本の独占ブルジョア階級における異なった集団の政治的代表者であり、それぞれの異なった集団の利益と要求を代表している。与党と野党、「独裁」と権力闘争から発展した、両者の間の和解不可能で長年に渡った闘いは、日本の独占ブルジョア階級内部の一派と他派との闘いである。日本の独占ブルジョア階級は、こうした闘争を利用し、人民の視線をそらして、階級内部で財産と権力を再配分している。

（中略）結局のところ、「党人」も「官僚」も日本の独占ブルジョア階級の忠実な道具である。彼らは独占ブルジョア階級の支配と搾取に奉仕するという点では、完全に一致する。】[198]

戸川猪佐武『小説党人山脈』は、1955年から1964年の１０年間における日本の政局の変化、とくに「党人と官僚との果てしない抗争」[199]、すなわち「党人」の「官僚」への反抗を主題としている。それに対して、翻訳者は、その「抗争」は実際には「日本の独占ブルジョア階級内部の一派と他派との闘い」であり、「階級内部で財産と権力を再配分する」ため、「这两大帮投机家，互相争斗又互相勾结，互相排斥又互相转化【この２つの投機家の集団は、互いに争い、結託しながら、互いに排斥し、変容する】」[200]と指摘した。訳者の翻訳作品に対する解釈が、原作者の本来の意図と異なっ

198　戸川猪佐武「あとがき」、戸川猪佐武『小説党人山脈』〈第2部〉（流動社、1972年3月）380頁。

199　「译者的话」、戸川猪佐武『党人山脉』（小説《吉田学校》第二部）訳者不明（上海人民出版社、1976年6月）2-3頁。

200　「译者的话」、戸川猪佐武『党人山脉』（小説《吉田学校》第二部）訳者不明（上海人民出版社、1976年6月）3頁。

た傾向が見られる。文革期において、資本主義国家の政治上の不安定さの指摘が翻訳対象の選択基準の１つだと考えられる。

文革期に翻訳された日本の社会問題を反映する作品には、1976年3月に人民文学出版社から出版された、松本清張の同名小説[201]から改編した映画シナリオ『砂の器』（橋本忍・山田洋次）も含まれる。「癩病」、「ハンセン氏病」への偏見と差別の実態について、日本社会に対して問題を投げ掛ける作品である。『砂の器』に対して、訳者は「出版说明」の中では、「ハンセン氏病」に纏わる内容に言及しているが、「作者还站在同情的立场，去渲染主人公的极端个人主义思想，极力美化日本资产阶级的统治工具――警察【作者は同情的な立場から、極端なる個人主義の思想を大げさに語っており、ブルジョア階級の統治手段――警察を極力美化する】」[202]とも述べている。

『砂の器』の「出版说明」における「警察を極力美化する」、すなわち「ブルジョア階級の国家機構を美化する」ということも文革期の日本文学の翻訳作品に対する評論の中で頻繁に論じられている。例えば、『摘译』1976年第2期に掲載された映画シナリオ、新藤兼人『わが道』（上海外国語学院日語教研究組訳、安可校）[203]をめぐる評論「新藤兼人的道路和苏修叛徒的险恶用心――评苏修对日本电影《我的道路》的吹捧」において、作者の「上鋼三廠　梁賛魯」は、以下のように述べている。

> 众所周知，资本主义国家的警察和法院，是保护垄断资产阶级利益、镇压劳动人民的主要工具。(中略)这样，作者就给人们制造了一种假象，似乎资本主义国家机器不是阶级压迫的工具，而是主持正义和公道的机关；无产阶级和广大劳动人民无须进行革命，只要依靠这种国家机器，在资产阶级法律允许的范围内进行斗争，就可以得到解放。(中略)无产阶级要不要打碎资产阶级国家机器、建立无产阶级政权，这是真假马克思主义的分水岭。
>
> 【周知のように、資本主義国家の警察と裁判所は、独占ブルジョア階級の利

201　松本清張『砂の器』（上）（新潮社、1973年3月）、『砂の器』（下）（新潮社、1973年4月）を参照した。

202　「出版说明」、橋本忍、山田洋次、広沢栄、熊井啓『日本电影剧本《沙器》《望乡》』訳者不明（人民文学出版社、1976年3月）1頁。

203　新藤兼人『我的道路』上海外国語学院日語教研究組訳、安可校、『摘译』1976年第2期（1976年2月）98-179頁。

益を保護し、労働人民を鎮圧するための主要な道具である。(中略)こうして、資本主義の国家機構は階級圧迫の道具ではなく、正義と公正を主張する機関のようであり、プロレタリア階級と広範な労働人民は革命を起こす必要はなく、この国家機構に頼ってブルジョア階級の法律が許す範囲内で闘争さえ行えば、解放を手に入れられると作者は人々に一種の仮象を作り出して与えた。(中略)プロレタリア階級がブルジョア階級の国家機構を打ち砕いて、プロレタリア階級の政権を打ち立てようとするかどうかというのは、本物と偽物のマルクス主義の分水嶺だ。】[204]

上記の内容から見れば、文革期の翻訳活動において、編集者や翻訳者は、翻訳作品の原作者が警察をテーマとした作品群において、警察などの「ブルジョア階級の国家機構」を美化することを、ブルジョア体制を強化するための「资产阶级改良主义【ブルジョア改良主義】」[205]の行為だと指摘した。また、編集者や翻訳者は「ブルジョア階級の国家機構」を打ち砕くことを、「プロレタリア階級の政権」を打ち砕くことに結びつけて、それによりブルジョア体制の破壊を唱えた。

また、1974年6月に出版された日本の映画シナリオ、金志軒・石森史郎・斎藤耕一『約束』(石宇訳)の「出版说明」において、翻訳者は「在今日的日本，盗匪流氓横行无忌，奸淫、凶杀、抢劫成风，到处是一片乌烟瘴气、糜烂堕落的景象【今の日本では、強盗やごろつきが横行し、強姦、殺人、強奪も日常茶飯事だ。何処も彼処も混乱して、腐敗し、堕落の一途を辿っている】」と述べており、「腐朽的资本主义制度是一切罪恶的渊薮【腐朽した資本主義制度は諸悪の根源である】」[206]と強調した。また、「暴力組織」や犯罪に纏わる社会問題や青少年の教育問題については、日本の中編小説、結城昌治『不良少年』(薛毅訳)[207]の訳文などで言及された。その他、文革期の編集者

204　上鋼三廠　梁賛魯「新藤兼人的道路和苏修叛徒的险恶用心——评苏修对日本电影《我的道路》的吹捧」、『摘译』1976年第2期(1976年2月)88-90頁。

205　上鋼三廠　梁賛魯「新藤兼人的道路和苏修叛徒的险恶用心——评苏修对日本电影《我的道路》的吹捧」、『摘译』1976年第2期(1976年2月)89頁。

206　「出版说明」、山田洋次等『故乡——日本的五个电影剧本』石宇訳(上海人民出版社、1974年6月)2頁。

207　結城昌治『不良少年』薛毅訳、『摘译』1974年第4期(1974年4月)183-187頁。

は、前述した有吉佐和子『恍惚の人』（秀豊・渭慧訳）における高齢化問題など、資本主義国家の深刻な社会問題も中国の読者に提示した。

3.2.5　日本における文学活動の紹介

日本での文学活動にまつわる内容としては、例えば、『摘译』1974年第4期に、1973年の芥川賞、直木賞、日本推理作家協会賞、太宰治賞、日本文学大賞、谷崎潤一郎賞、野間文芸賞の受賞者と受賞作[208]、及び日本映画雑誌『キネマ旬報』の選出した1973年度の「日本映画ベスト・テン」、「日本映画監督賞」、「脚本賞」[209]に関わる「文艺动态」が掲載された。また、『摘译』1975年第2期において、1974年11月に『新日本文学』に掲載された評論「インフレ下の文芸時評」の概要[210]が訳され、当時日本の文学評論の質の粗雑さや原稿料の安さが論じられている。

また、吉田精一『現代日本文学史』（斉干訳）が1976年1月に上海人民出版社より出版された。『現代日本文学史』は日本の近代文学史を５つの時期に分けて、明治から戦後への日本近代文学とその流れの変遷を解説しながら、代表的作家と作品を紹介しており、日本近代文学を理解する入門書だと言える。前述したように、文革期に出版された日本の文学作品の訳本において、その多くは、編集者が出版説明、前言、後記などで読者を「導く」のが常態であるが、『現代日本文学史』において、編集者の批判などが見られないことから、該当作品は政治イデオロギーに奉仕するため出版されたのではなく、作品の編集者が単に日本の近代文学を中国の読者に紹介するために出版されたと考えられる。

日本における中国文学の翻訳や研究に関する情報としては、次のようなものがある。

まず、遍照金剛が編纂した、中国の六朝から唐までの詩文に関する文学理論書である『文鏡秘府論』（周維徳校訂）が1975年5月に人民文学出版社より出版された。そして、

208　「获得一九七三年度日本主要文学奖的作品」、『摘译』1974年第4期（1974年4月）188頁。

209　「日本《电影旬报》杂志发表1973年度十部最佳影片」、『摘译』1974年第4期（1974年4月）189頁。

210　「《新日本文学》杂志登载短文《通货膨胀下的文艺时评》」、『摘译』1975年第2期（1975年5月）196頁。

『摘译』1973年第2期において、「《艳阳天》等中国文艺作品译成日文发表」[211]と題された「文艺动态」が掲載されており、その中で農業集団化をめぐる農村の各階層の対立を生き生きと描いた浩然『艶陽天』(伊藤克訳)[212]、鉱山での人民解放運動を描いた李雲徳『沸きたつ群山』(島田政雄・さねとう　けいしゅう訳)[213]、及び旧社会の農村で、財力と権力を笠に横暴な振る舞いで貧しい農民を搾取した地主を描写した高玉宝『夜中に鶏が啼く』(伊藤克訳)[214]などの中国作品が日本で翻訳されたと紹介された。これらの作品はすべて農民労働階級の闘争をテーマとしている。

また、1975年第6期、第7期、第8期の『摘译』に、ソ連[215]、アメリカやイギリス[216]、日本[217]の文学界における『水滸伝』研究に関わる資料「《水浒》在外国」も掲載された。その中で、滝沢馬琴、正岡子規、幸田露伴など１６人の研究者の『水滸伝』研究に言及された。

明代の中国で施耐庵により書かれた伝奇歴史小説の大作『水滸伝』がなぜ文革期に注目されたのか。文革の初期、「四旧打破」、すなわち旧文化、旧思想、旧風俗、旧習慣の打破というスローガンが掲げられ、古代の文物、遺跡、書画、古典などは焼き払われ、『水滸伝』を含む古典名著も「封建的文化」などの名目で批判対象とされた

211　「《艳阳天》等中国文艺作品译成日文发表」、『摘译』1973年第2期(1973年12月)148頁。

212　浩然『艶陽天』伊藤克訳(青年出版社、1974年)。中国語の原作について、浩然『艳阳天』(作家出版社、1964年9月)を参照した。

213　李雲徳『沸きたつ群山』島田政雄、さねとうけいしゅう訳(東方書店、1972年11月)、李雲徳『沸きたつ群山』(第2部)島田政雄、さねとう　けいしゅう訳(東方書店、1974年7月)。中国語の原作について、李雲徳『沸腾的群山』(人民文学出版社、1971年1月)を参照した。

214　高玉宝『夜中に鶏が啼く』、高玉宝『高玉宝』伊藤克訳(青年出版社、1972年12月)187-197頁。中国語の原作について、高玉宝『半夜鸡叫』、高玉宝、胡万春『半夜鸡叫』(上海文芸出版社、1961年10月)25-34頁を参照した。

215　仲禾編集「《水浒》在外国」(ソ連)、『摘译』1975年第6期(1975年10月)177-184頁。

216　復旦大学外語系現代英語研究小組編集「《水浒》在外国」(米英)、『摘译』1975年第7期(1975年11月)224-237頁。

217　上海外国語学院日語教研組編集「《水浒》在外国」(日本)、『摘译』1975年第8期(1975年12月)199-222頁。

[218]。文革の後期に『水滸伝』が再び注目されたのは、1975年8月に「毛主席关于《水浒》的谈话」[219]が発表されてからのことである。毛沢東の『水滸伝』に対する評価は、その「談話」から伺うことができる。

> 《水浒》这部书，好就好在投降。做反面教材，使人民都知道投降派。
>
> 《水浒》只反贪官，不反皇帝。屏晁盖于一百零八人之外。宋江投降，搞修正主义，把晁的聚义厅改为忠义堂，让人招安了。宋江同高俅的斗争，是地主阶级内部这一派反对那一派的斗争。宋江投降了，就去打方腊。
>
> 【『水滸』という書物は絶妙であるが、どこが絶妙かといえば投降するところだ。反面教材にして、人民にもれなく投降派だと知らせるがいい。
>
> 『水滸』は、ただ悪徳官吏に反くだけで、皇帝には反かない。晁蓋を百八人の外に退けた。宋江は投降しおって修正主義をやり、晁の聚義廳を忠義堂と改名し、人さまに招安[220]されてしまった。宋江と高俅の闘争は、地主階級内部のこちらの派に反対するといった闘争だ。宋江は投降すると、さっそく方臘討伐にでかけていった。】[221]

毛沢東は、宋江が前首領の晁蓋を棚上げして実権を握り、自ら首領となったが、最終的に朝廷に帰順したことを革命事業への裏切りと見做し、宋江の「投降主義」や「修正主義」を批判した[222]。毛沢東は自分を晁蓋に喩え、また中国共産党の内部で周恩来を代表とする文革を断固として支持する姿が見られない「投降派」を宋江に喩え、彼らへの間接的な非難として水滸伝の批判を行った[223]。1975年の「毛主席关于《水

218　岩崎菜子「現代中国の伝統文化復興と蘇る『水滸伝』もの」、『アジア遊学』第131号(特集「『水滸伝』の衝撃――東アジアにおける言語の接触と文化受容」、2010年4月)63頁を参考にした。

219　「毛主席关于《水浒》的谈话」、『中央文件』1975年196号(1975年8月)。

220　「招安」とは、「帰順させる」ことである。

221　日本語の翻訳について、竹内實「『水滸傳』批判について」(創立五十周年記念論集)、『東方學報』第52巻(1980年3月)718-719頁を参照した。

222　川村一彦『江戸の群像・歌川国芳』(歴史研究会、2020年6月)77-81頁。

223　辻田智子「文革期文芸の一考察：『春苗』の書きかえを中心として」、『京都産業大学

浒》的谈话」の発表により、『水滸伝』は否定されるようになった。それと共に、『水滸伝』に対する公式的な批判運動の幕が開かれて、京劇の上演や連環画の出版[224]などの『水滸伝』研究が文革期に復活した。それを背景として、日本の『水滸伝』研究も文革期の翻訳作品の編集者にも注目されるになり、翻訳された。井坂錦江『水滸傳と支那民族』[225]は、次のように評されている。

> 帝国主义分子井坂锦江于1942年写的《水浒传与支那民族》一书，就极力吹捧宋江，吹捧《水浒》对中国民族的研究是个“无与伦比的好材料”。什么“好材料”？好就好在吹鼓投降。他说：“替天行道”和盼望招安“正是支那民族，尤其是知识阶级所共有的心理和思想”。
>
> 【1942年に書いた『水滸傳と支那民族』の中で、帝国主義分子の井坂錦江は、宋江を極力持ち上げ、『水滸伝』を中国民族の研究における「比類がなく良い資料」として褒めそやす。どこが良いかと言えば、投降を鼓吹するところだ。「天に替わりて不義を討つ」ことが、帰順を待ち望むことが、「まさに支那民族、特に知識階級の共通的な理念と思想である」と彼は言った。】[226]

井坂錦江は、中国の民族性を「天に替わりて不義を討つ」ことと「帰順を待ち望む」ことという２つの特徴にまとめた。しかし、毛沢東が「天に替わりて不義を討つ」ことの正当性を強調し、「帰順」を反面教材としているため、井坂の理論は、毛の思想

論集』(人文科学系列)第42巻(2010年3月)45-46頁などを参照した。

224　文革期の『水滸伝』の京劇や連環画の中で、作者は李逵の形象を美化し、宋江のイメージを貶することにより、毛沢東の宋江の「投降主義」、「修正主義」への批判を表し、さらに水滸英雄の「锄奸惩恶【悪人を取り除き、悪事を懲らす】」の精神を強調した。温虎林「叙事的延伸与升华：《水浒传》连环画考述」、『宁夏大学学报』(人文社会科学版)2015年第4期(2015年7月)149頁、聶煒、張白樺「文化浩劫中的译者意志」、『重庆交通大学学报』(社会科学版)第18巻第4期(2018年8月)112頁、川村一彦『江戸の群像・歌川国芳』(歴史研究会、2020年6月)79頁などを参照した。

225　井坂錦江『水滸傳と支那民族』(大東出版社、1942年5月)。

226　上海外国語学院日語教研組編集「《水浒》在外国」(日本)、『摘译』1975年第8期(1975年12月)201頁。

の方向性とは正反対だと考えられる。井坂と毛との間に、『水滸伝』の読み方において、「中国民族の研究」と「政治批判」という目的性の相違が見られる。「帰順」を「中国民族」と結びつけた井坂は、政治イデオロギーの基準で、訳本の編集者に「帝国主義」的と位置付けられた。

3.2.6　まとめ

本節で翻訳作品の出版説明、前言、後記、評論などの検討を行った結果、文革期の翻訳対象として選択された日本の文学作品に共通する特徴を、以下の５つにまとめるのは可能であろう。

まず、小林多喜二、三島由紀夫、山田洋次、五味川純平、有吉佐和子など、特定作家の代表作と関連作品である。作品を通して作者が表わそうとする思想を選択基準とするより、上述の作家の作品が文革期に翻訳、出版されたのは、作家本人の政治的な立場、作家と中国との関係など、作品の外部的な要素と密接に関わっていると考えられる。

次は、毛沢東の文学路線を実行するため、「工農兵」をはじめとする各労働者階級の人民大衆が主導権を持ち、革命闘争の舞台で戦うことを描いた作品である。文革期に翻訳された日本の文学作品から、過酷な労働を強いられたプロレタリア階級への編集者の同情、ブルジョア階級と戦ったプロレタリア階級の闘争性と革命性への編集者の賛美が見られる。

また、軍事、戦争の面から、反帝国主義、反修正主義を唱える作品も見られる。作品の編集者は政府の政治イデオロギーに従い、前言などにおいて、文革期における国家政府の敵、すなわち「帝国主義、軍国主義、侵略戦争」を明確に批判し、さらにこれらを引き起こした根本的な原因が「資本主義制度」であると示唆した。

そして、農業の過疎化、公害問題、高齢化問題、青少年の精神障害など、資本主義国家の深刻な社会、政治、経済問題を反映する作品である。これらの作品は、文革期に翻訳された日本の文学作品の中でかなりの比重を占めている。しかし、作品の出版説明、前言などからみれば、編集者は作品を解読する際に、世界中の人々が直面する普遍的な社会問題に潜む本質を見極めておらず、その発生の原因を「資本主義」、「修正主義」、「帝国主義」など中国との政治イデオロギー上の違いに帰着させ、単

純化する傾向が強い。

最後は、日本の芥川賞、直木賞などの文学賞の受賞者と受賞作や『キネマ旬報』の選出した「日本映画ベスト・テン」など、日本文学界における文学活動の紹介に関わる内容である。また、日本において農民労働階級の闘争をテーマとした中国文学の翻訳や日本における『水滸伝』研究に関する情報も大々的に紹介された。

文革期において、翻訳する作品を選ぶ基準となる条件は、「労働者階級の賛美」、「革命運動の称揚」、「反帝反修の訴え」、「軍国主義批判」、「資本主義の堕落の指摘」ができるということであった。翻訳作品の編集者は前言、後記、評論などにおいて、文学作品における本質を読み取るというより、「正しい」思想に同調する傾向が見られた。前言、後記、評論などにおいて、類似した文革的な用語が頻繁に使用され、様式化された。

第3節　文革期におけるソ連、アメリカ、日本文学の翻訳作品の比較を軸にして

ソ連、アメリカ、日本という三ヵ国の作品がなぜ翻訳対象として選択されたのかについて考察する際、中国の対外関係や外交方針に目を配ることは必須条件である。また、考察を多角的にするために、国情の異なるソ連、アメリカ、日本のどのような文学作品が文革期において翻訳対象となったかという比較の視点も導入したい。

3.3.1　アメリカの黒人運動をめぐって——アメリカの文学作品

アメリカの黒人運動[227]は、文革期に訳されたアメリカ文学において１つの重要なテーマである。例えば、1974年第1期と1975年第7期の『摘译』は、黒人運動を主題とした作品の特集である[228]。黒人運動を主題とする作品は、文革期に翻訳されたアメリカ

227　馬士奎「塑造美国形象——“文革”期间对美国当代文学作品的译介」、『临沂师范学院学报』第31卷第2期(2009年4月)66-67頁を参照した。

228　1974年第1期、1975年第7期のほかに、『摘译』における黒人運動に関する作品につい

文学の中で大きな比重を占めている。黒人運動がなぜ文革期の編集者に注目されたのか。『摘译』1974年第1期に掲載された評論「一股颠倒黑白的逆流——评苏修美帝合伙对所谓“黑人新浪潮”影片的吹捧」の中で、作者の剣刃は以下のように述べている。

> 特别重要的是，经过长期的斗争实践，使得越来越多的黑人群众，逐步懂得了“民族斗争，说到底，是一个阶级斗争问题”的真理，看清了白人中间的广大劳动人民是他们的朋友，真正的敌人只是那一小撮吸血鬼。这就是今天美国黑人的斗争。“美国黑人的斗争，不仅是被剥削、被压迫的黑人争取自由解放的斗争，而且是整个被剥削、被压迫的美国人民反对垄断资产阶级残暴统治的新号角。”（中略）“美国黑人争取解放的斗争，是全世界人民反对美帝国主义的总斗争的一个组成部分。是当代世界革命的一个组成部分。”
>
> 【特に重要なのは、長期にわたる闘争の実践を経て、ますます多くの黒人が「民族闘争は、とどのつまり、階級闘争の問題である」[229]という真理を徐々に理解するようになり、白人の中の大衆の労働者は彼らの友であり、本当の敵はそのほんの一握りの吸血鬼であると認識できることである。これは、

て、「美国黑人女诗人举行集会纪念菲利斯・惠特利的诗集出版二百周年」、1974年第2期（1974年2月）171-172頁、「黑人影片《分崩离析》上演」、1974年第7期（1974年12月）136頁、「歌颂黑人和白人工人团结斗争的新闻记录片《这里没有藏身之处》」、1975年第8期（1975年12月）195-196頁、「进步黑人电影工作者的队伍不断壮大」、1975年第8期（1975年12月）196-197頁、「戴维・G・杜波依斯写的长篇小说《……还要请他唱》出版」、1975年第8期（1975年12月）197-198頁など、アメリカの「文艺动态」が掲載された。また、温特・懐特「自由」（作家名原文不明、作品名原文不明）美徳訳、1974年第5期（1974年9月）125-142頁、奥維迪奥・馬丁斯(Ovídio Martins)など「美国黑人诗歌二首」江聞序訳、1976年第5期（1976年5月）105-107頁、查爾斯・H・小富勒「觉醒」（Charles H. Fuller Jr. 、作品名原文不明）上海師範大学中文系外国文学教研組鐘聞訳、1976年第5期（1976年5月）108-178頁、赫伯特・斯托克斯「两度相信魔鬼的人」(Herbert Stokes, *The Man Who Trusted the Devil Twice*, 1969)田濱訳、1976年第5期（1976年5月）179-189頁などの短編小説、詩歌、シナリオが訳された。

229 引用部分の日本語の翻訳について、毛沢東「アメリカ黒人の人種差別反対の闘争を支持するよう呼びかける声明」、中国研究所編『新中国年鑑』（1964年版）（極東書店、1964年4月）402頁を参考にした。

今日のアメリカ黒人の闘争である。「アメリカ黒人の闘争は、搾取され、抑圧されている黒人の、自由と解放をめざす闘争であるばかりでなく、すべての搾取され、抑圧されているアメリカ人民の、独占ブルジョア階級の暴虐な支配に反対する新たな進軍ラッパである。」（中略）「解放をめざすアメリカ黒人の闘争は、アメリカ帝国主義に反対する全世界人民の闘争全体の一構成部分であり、現代の世界革命の一構成部分である」[230]。】[231]

評論の中の「民族闘争は、とどのつまり、階級闘争の問題である」という一文は、毛沢東が1963年に発表した「アメリカ黒人の人種差別反対の闘争を支持するよう呼びかける声明」[232]から引用されたものである。評論の作者は、アメリカの黒人運動が１つの人種を解放する運動であるだけでなく、アメリカの帝国主義を打倒するための「現代の世界革命」の一部であると明言した。アメリカの黒人問題を「人種問題」として捉えるという圧倒的な影響力を持っている立場から切り離して、「階級闘争」と見なし、アメリカの資本主義の構造に組み込まれた問題、すなわち「社会体制の問題」として把握するというマルクス主義的立場が見られる[233]。

また、文革期の翻訳作品の編集者は、黒人問題の本質が「階級闘争」にあると読者に認識させ、その解決策を提出しようとした姿勢が見られる。『摘译』1975年第7期において、馬文・埃克斯「黑鸟」(Marvin X, *Black bird*, 1969)（林驤華訳）というシナリオが訳され、作品の前言の中では、「剧本不分阶级、把一切白人都叫做“魔鬼”，同

230　引用部分の日本語の翻訳について、「中国共産党中央委員会主席毛沢東同志のアメリカ黒人の抗暴闘争を支持する声明」、『アジア経済旬報』第719号（1968年5月）12-13頁を参照した。

231　剑刃「一股颠倒黑白的逆流——评苏修美帝合伙对所谓“黑人新浪潮”影片的吹捧」、『摘译』1974年第1期（1974年1月）2-3頁。

232　毛沢東はアメリカの黒人運動の問題に関する声明を２回発表した。１つは、毛沢東「支持美国黑人反对种族歧视斗争的声明」、1963年8月9日『人民日报』であり、もう１つは、毛沢東「支持美国黑人抗暴斗争的声明」、1968年4月16日『人民日报』である。文革期の編集者は黒人運動を題材として論じている際には、２つの声明から内容を引用し、自己の主張を説明する傾向がみられる。

233　上杉忍「日本におけるアメリカ黒人史研究の歩み」、『一橋研究』第30巻（1975年12月）179-191頁を参照した。

时也没有能够为被压迫的黑人指出什么积极的斗争道路，这表现了作者的局限【この脚本は階級を区別せず、すべての白人を「悪魔」と呼び、それと同時に、抑圧された黒人に対して、何か積極的な闘争の道筋をも指摘していない。これは、作者の限界を表す】」[234]と論じられている。1976年第5期に訳された蘭斯頓・休斯(Langston Hughes)など「黑人诗歌十首」（司馬平訳）の前言では、「与高高举起的黑拳头“并排举起的还有那白种工人的白拳头”，这说明，美国黑人运动正在冲破种族的界限而与工人运动结合起来【高く上げられた黒拳『と並びに掲げられたのは、白人労働者の白拳であり』、これによって、アメリカの黒人運動は種族の境界を突破し、労働者運動と連結していると説明できる】」[235]と述べられている。前述した毛沢東の「アメリカ黒人の人種差別反対の闘争を支持するよう呼びかける声明」においても、「在美国压迫黑人的，只是白色人种中的反动统治集团。他们绝不能代表白色人种中占绝大多数的工人、农民、革命的知识分子和其他开明人士【アメリカで黒人を抑圧しているのは、白色人種のなかの反動的支配グループだけにすぎない。かれらは、白色人種のなかで圧倒的多数を占めている労働者、農民、革命的知識人その他の良識をもった人びとを絶対に代表することができない】」[236]というような類似した内容が書かれている。すなわち、黒人問題の解決策として、文革期の翻訳作品の編集者により提出されたのは、黒人のみならず、白人をも含んだ、あらゆる労働者階級を中心とする闘争運動であると読み取れる。

さらに、『摘译』1975年第7期に掲載された、詹姆斯・鮑徳温「迷路前后」(James Baldwin, *One Day When I Was Lost: A Scenario*, 1973)[237]をめぐる評論、復旦大学外

---

234 「前言」、馬文・埃克斯「黑鸟」林驤華訳、『摘译』1975年第7期（1975年11月）208頁。

235 「前言」、蘭斯頓・休斯など「黑人诗歌十首」司馬平訳、『摘译』1975年第7期（1975年11月）195頁。

236 毛沢東「支持美国黑人反对种族歧视斗争的声明」、1963年8月9日『人民日报』。この部分の翻訳は、毛沢東「アメリカ黒人の人種差別反対の闘争を支持するよう呼びかける声明」、中国研究所編『新中国年鑑』（1964年版）（極東書店、1964年4月）402頁を参考にした。

237 詹姆斯・鮑徳温「迷路前后」復旦大学外語系部分英語教師訳、『摘译』1975年第7期（1975年11月）7-194頁。

語系外国文学評論組「以暴力对付暴力——读美国电影剧本《迷路前后》」の中では、「在美国，黑人要寻求解放没有别的出路，而只有“以暴力对付暴力”。(中略)美帝国主义者还会继续采取各种手段破坏黑人运动，用“非暴力主义”去瓦解黑人的斗争意志【米国で黒人が解放を求めるためには、ほかの活路はなく、『暴を以て暴に易う』のみである。(中略)アメリカの帝国主義者は、黒人運動を弱体化するために様々な手段を使い続け、『非暴力主義』を用いて黒人の戦いの意志を崩壊させる】」[238]と書かれている。評論の作者は、アメリカ黒人が自分を解放するには、暴力の革命をすべきだと明言した。また、査爾斯・H・小富勒「觉醒」(上海師範大学中文系外国文学教研組鐘聞訳)の翻訳の「前言」の中で、訳者は「美国黑人的斗争就是“当代世界革命的一个组成部分”，当他们和其他民族的无产阶级一起为推翻垄断资产阶级统治、建立无产阶级专政而斗争时，才能说是真正的“觉醒”【アメリカ黒人の闘争は「現代の世界革命の一構成部分」であり、彼らがほかの民族のプロレタリア階級と共に、独占ブルジョア階級の統治を打倒して、プロレタリア階級の専制を建立するために戦ってこそ、真の「覚醒」と言える】」[239]と述べている。文革期の翻訳作品の編集者は、「黒人が解放を求める」ために、「黒人と白人の労働者階級との団結」、「暴力の革命」から「プロレタリア階級の専制」の建立まで、解放の方法を提示した。また、アメリカの黒人は「独占ブルジョア階級の統治」下における被害者でありながら、アメリカ帝国主義に対抗する反抗者でもあるとも示唆された。文革期の翻訳活動において、アメリカ黒人の文学作品の翻訳は、黒人運動を支持し、毛沢東思想を宣伝し、中国側の政治的立場を表明する手段[240]である。

1960年代に入ると、毛沢東はアメリカの黒人運動に関する声明を２回発表した。彼の声明からは、彼がアメリカと競り合い、各国の人民を解放するために、アメリカ黒人を「世界革命」同盟の一員として見なしていることが読み取れる。毛の思想は、戦後の日本人民がアメリカ黒人と同じく、アメリカに支配されていたという日本のマル

238　復旦大学外語系外国文学評論組「以暴力对付暴力——读美国电影剧本《迷路前后》」、『摘译』1975年第7期(1975年11月)3-5頁。

239　「前言」、査爾斯・H・小富勒「觉醒」上海師範大学中文系外国文学教研組　鐘聞訳、『摘译』1976年第5期(1976年5月)108頁。

240　馬士奎「塑造美国形象——“文革”期间对美国当代文学作品的译介」、『临沂师范学院学报』第31卷第2期(2009年4月)66-67頁を参照した。

クス主義者の考え方とある程度合致し、彼らの支持を得たのである[241]。しかし、中国では日本と同様に、アメリカ黒人という課題をどのように捉えるかは、すべてアメリカとの外交関係に左右されていると考えられる。1979年に実現した米中の正式な国交正常化という政治関係上の変化を機に、両国の間に交流が進んでいき、中国におけるアメリカ史の研究は、従来のアメリカを批判、攻撃する姿勢を変更し、学術的な方向に転換するようになったと思われる[242]。

3.3.2　ソ連とアメリカの「デタント」と「世界制覇」

文革期の翻訳活動において、編集者はソ連とアメリカの「デタント」策と「世界制覇」にも注目した。前述した戸川猪佐武『小説党人山脈』の訳本における「译者的话」の中で、「日苏恢复邦交和修改日美安全条约，又是和苏美两个超级大国逐步激化的争夺霸权的活动紧密联系在一起的【日ソの国交回復と日米安保条約の改定は、ソ米という２つの超大国間の覇権闘争の激化とも密接に関係していた】」[243]と論じられている。また、『摘译』1975年第2期に掲載された、卡赞采夫「比时间更有力」(Казанцев, *Сильнее времени*, 1973)(迅行訳)[244]、艾倫・徳魯里「尼尼微和推罗重现」(Alan Drury, *Come Nineveh, Come Tyre*, 1973)(復旦大学外語系外国文学評論組訳)[245]という２篇のSF小説などをめぐる評論、范毅平「行将就木者的梦呓——评苏修、美帝两篇预言未来的小说」の中で、以下のように述べられている。

> 两幅图画里都充分暴露了两个超级大国互相争夺，妄图独霸世界的野心

241　Yukiko Koshiro, "Beyond an Alliance of color: The African American Impact on Modern Japan", *Positions east asia cultures critique[special issue: the afro-asian century]*, Volume 11 Number 1, Duke University Press, 2003.3, p.199.

242　李剑鸣「改革开放以来的中国美国史研究」、『史学月刊』2009年第1期(2009年1月)30-49頁。

243　「译者的话」、戸川猪佐武『党人山脉』(小説《吉田学校》第二部)訳者不明(上海人民出版社、1976年6月)4頁。

244　卡赞采夫「比时间更有力」迅行訳、『摘译』1975年第2期(1975年5月)7-31頁。

245　艾倫・徳魯里「尼尼微和推罗重现」復旦大学外語系外国文学評論組訳、『摘译』1975年第2期(1975年5月)32-123頁。

（中略）。反映出两个超级大国互相争夺的尖锐和激烈的程度。它已经渗透到一切方面，在文艺作品中，甚至在一个具体的细节描写中也表现了出来。（中略）列宁说：“帝国主义的一个重要的特点，是几个大国都想争夺霸权”。“世界霸权”，这就是压迫和奴役世界人民以享受垄断高额利润的权利，关系着一小撮垄断资产阶级的根本利益。（中略）在美苏之间只可能有争夺，而不可能有真正的“缓和”。今天，美国和苏修的争夺遍及世界各地，引起第三世界人民的强烈反抗，也引起第二世界的不满，他们自己国家的人民也在起来反对他们。

【この２篇の作品は、２つの超大国が互いに競争し、世界を支配しようとする野心を完全に暴露した（中略）。２つの超大国の争いにおける鋭さと激しさを反映している。それはあらゆる方面に浸透し、文芸作品の中で、さらに具体的な描写の細部に至るまで表現している。（中略）「帝国主義の１つの重要な特徴は、いくつかの大国が覇権を争うことである」とレーニンは言った。「世界覇権」とは、世界の人々を抑圧し、奴隷にして、高い利益を独占する権利であり、一握りの独占ブルジョア階級の基本的利益と関わっている。（中略）米ソの間に競争しかなく、真の「デタント」は不可能である。今日、アメリカとソ修の競争は世界中に広がり、第三世界の人々の激しい抵抗も、第二世界の不満も引き起こし、自国の人々も反対し始めた。】[246]

1960年代のベトナム戦争が終結してから、アメリカは戦争の失敗により経済力が低下し、ソ連との関係を改善することが必要であると認識した一方、ソ連の方はブレジネフ体制が長期化する中で慢性的な経済停滞をもたらし、中ソの関係も悪化の一途をたどった。そうした背景のもとで、経済状況を改善するために、ソ連とアメリカの間に「デタント」政策が解決策として提出された[247]。それに対して、作品の編集者は「米ソの間に競争しかなく、真の『デタント』は不可能である」と述べている。ソ連

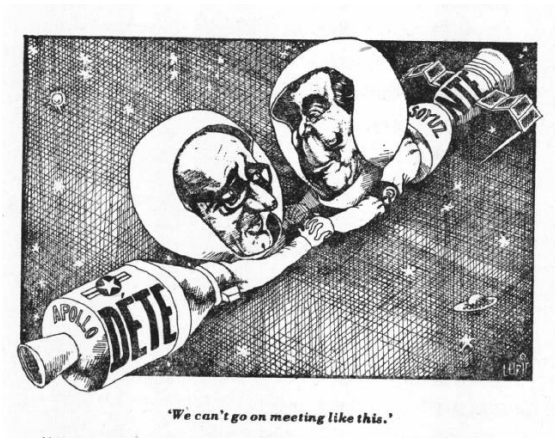
246　范毅平「行将就木者的梦呓——评苏修、美帝两篇预言未来的小说」、『摘译』1975年第2期（1975年5月）1-2頁。

247　橋口豊「冷戦下の米・ソ覇権システムと第三世界」（2）、『名古屋大學法政論集』第171巻（1997年12月）305-335頁、八塚正晃「文革後期の中国における対外開放政策の胎動」、『アジア研究』60巻1号（2014年10月）37-55頁などを参照した。

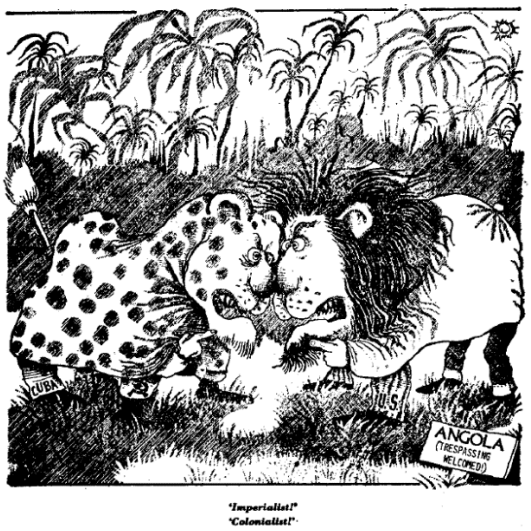
とアメリカとの三角関係の中で、ソ米[248]の対立状態が緩和したことで、ある程度中国が孤立する立場に陥る危機感があったと容易に推測できる。ソ米の「デタント」政策への批判は、1975年4月に上海人民出版社より出版された内徳・卡爾黙『阿维马事件』(Ned Calmer, *The Avima Affair*, 1973)(鐘衛訳)[249]などの作品においても見られる

また、文革期の翻訳文学誌『摘译』に発表された外国の作品には、小説、評論、詩歌、戯曲、映画のシナリオなどに止まらず、漫画という形式も含まれた。1976年第1期と1976年第3期の『摘译』に、以下の２つの漫画が掲載された。

「We can't go on meeting like this.」



「Imperialist! Colonialist!」



左側の漫画「We can't go on meeting like this」(「我们总不能老是这样会见吧」)[250]は、1975年7月に行われた「アポロ――ソユーズテストプロジェクト」[251]を表した。

248　「ソ米」はソ連とアメリカのことを指す。文革期において、ソ連が中国の最大の敵と見做されたため、本論文では、原作から見られる「米ソ」を翻訳する場合を除き、その他は「ソ米」を使う。

249　内徳・卡爾黙『阿维马事件』鐘衛訳(上海人民出版社、1975年4月)。

250　漫画「我们总不能老是这样会见吧」、『摘译』1976年第1期(1976年1月)138頁。Lurie, "We can't go on meeting like this.", *Newsweek*, 1975.7.21, p.19も参照した。

251　「アポロ――ソユーズテストプロジェクト」について、Vasil Teigens『スペースレ

「アポロ――ソユーズテストプロジェクト」において、ソ連「ソユーズ」宇宙船とアメリカ「アポロ」宇宙船がドッキングに成功し、両国の５名の宇宙飛行士が共同実験を行い、お互いの船を訪問し、握手を交わした後に、贈り物を交換した。それを機に、ソ連とアメリカという２つの超大国は、宇宙発展の面において共同して１つのプロジェクトを実行し、競争より協力の時期に入った[252]。右側の漫画「Imperialist! Colonialist!」（「“帝国主义者！”“殖民主义者！”」）[253]は、1975年3月から始まった「アンゴラ内戦」[254]をテーマとした。冷戦に巻き込まれた「アンゴラ内戦」を発端とし、アフリカはソ米対立の主戦場になった。「アンゴラ内戦」は冷戦時代の「ソ米代理戦争」の典型の１つであった。２つの漫画を通して、編集者はソ米という２つの超大国の「結託」と「世界覇権の争い」を批判した。

また、前述のように、中国はアメリカの帝国主義と対抗するために、アメリカの黒人文学に目を向けた。それだけではなく、文革期の翻訳作品の編集者は、アメリカ、ソ連という２つの超大国からなる「第一世界」に支配された「第二世界」の国々および「第三世界」の国々をテーマとする文学にも関心を寄せた[255]。

ース』C.S.B.Equipment訳（Cambridge Stanford Books、2014年）を参考にした。

252 Peter Gwynne et al., "The U.S.-Soviet space link-up", *Newsweek*, 1975.7.21, p.34.

253 漫画「“帝国主义者！”“殖民主义者！”」、『摘译』1976年第3期（1976年3月）183頁。Lurie, "'Imperialist!' 'Colonialist!'", *Newsweek*, 1976.1.12, p.11も参照した。

254 花井等、岡部達味編集『現代国際関係論』（東洋経済新報社、2005年4月）73-74頁を参考にした。

255 「三つの世界論」は、1974年4月に鄧小平が正式に提起し、毛沢東が1946年に打ち出した、「亜拉非」（アジア、アフリカ、ラテンアメリカ諸国）を「第一中間地帯」とし、西欧諸国、カナダなどを「第二中間地帯」とする「中間地帯論」から発展したものである。「三つの世界論」は、世界を、ソ米両超大国からなる「第一世界」、ヨーロッパ、カナダ、オートラリアや日本などの「第二世界」、「亜拉非」とそのほかの発展途上国を「第三世界」に分け、「第三世界」がその中心として、「第二世界」と連携しながら、ソ米と対抗する戦略である。「三つの世界論」について、「第Ⅱ編　アジア　第4章　華国鋒政権下の対外政策の展開」、『国際年報』第19巻（日本国際問題研究所、1977年）217-220頁、喜田昭治郎「中国と第三世界――『条約』の締結状況からみた中国外交――」、『国際政治』第76号（1984年5月）158-176頁、坂本義和、松本繁一編『変動するアジア国際政治』（アジア経済研究所、1984年10月）98-100頁。

文革期の翻訳作品の中で、西欧各国およびオーストラリア、日本など、「第二世界」の国に言及された。『摘译』1976年第3期に掲載されたオーストラリア作家、科林・梅森「人质」(Colin Mason, *Hostage*, 1973)(復旦大学外語系外国文学評論組訳)[256]に関わる評論、奚文熙「谁是当今世界的巨人？——评美国出版的澳大利亚长篇小说《人质》」の中では、「当今的世界决不象苏美两霸所说的逐步走向“缓和”，而确实如小说作者所描写的那样：极不安宁。不安宁的根源是苏美之间的激烈争夺。(中略)面对这种形势，作者十分忧虑：西欧等第二世界国家的命运，将是什么样的命运呢【今日の世界は、ソ米という二大覇権国が主張するような「デタント」に向かって徐々に進んでいるのではなく、まさにこの小説の著者が描いたように、極めて不穏な状態である。この不穏の根源は、ソ米の間の激しい対立にある。(中略)このような状況に直面し、著者は、西欧などの第二世界の国々の運命はどうなるのだろうかと非常に心配している】」と、「作者通过澳大利亚作为“人质”的遭遇，形象化地表明了自己的看法。在作者笔下，澳大利亚是一个牺牲品【著者は、オーストラリアの「人質」としての体験を通して、自分の意見を如実に表明した。著者の文章では、オーストラリアは犠牲者である】」[257]と述べられている。さらに、文革期の翻訳作品において、「以“援助”，“友好相处”等冠冕堂皇的口号【『援助』、『仲良し』などの表向きが堂々としたスローガンのもとに】」[258]、ソ連は「第三世界」のアフリカ諸国、ラテンアメリカ諸国、アラブをはじめとする中東諸国に浸透し、「同美帝争夺势力范围【米帝と勢力圏を争う】」[259]と指摘された。

そして、『摘译』1974年第5期に掲載された、伊・別里亜耶夫「秘密活动」(作家名原文不明、作品名原文不明、崔恵之訳)[260]をめぐる評論、郭季竹「是朋友还是敌人？—

256　科林・梅森「人质」復旦大学外語系外国文学評論組訳、『摘译』1976年第3期(1976年3月)7-140頁。

257　上海戯劇学院　奚文熙「谁是当今世界的巨人？——评美国出版的澳大利亚长篇小说《人质》」、『摘译』1976年第3期(1976年3月)1-2頁。

258　「前言」、阿・斯彼什涅夫「夜晚纪事」(Алексеи Спешнев, *Хроника ночи*, 1973)訳者不明、『摘译』1973年第1期(1973年11月)130頁。

259　「前言」、卡爾敏「熊熊燃烧的大陆」(Rармен, *Пылающий континент*, 1972) 訳者不明、『摘译』1973年第1期(1973年11月)137頁。

260　伊・別里亜耶夫「秘密活动」崔恵之訳、『摘译』1974年第5期(1974年9月)7-124頁。

—评《秘密活动》」の中で、作者は以下のように述べている。

> 总之，在中东，苏修和美帝国主义扮演着同样的角色。它们象两只饿狼一样互相争夺着，而且，为了更激烈的争夺，又不时地互相勾结，出卖阿拉伯人民的利益。但是，它们的妥协和勾结，只能是局部的，暂时的，相对的，而他们之间的争夺则是全面的，长期的，绝对的。它们的争夺，遍及全球。它们争夺到那里，那里就出现动乱。它们这种又勾结、又争夺的关系，是中东不安宁的根源，也是世界不安宁的根源。无数的事实已经证明，苏修和美帝这两个超级大国是一丘之貉，而打着“社会主义”旗号的苏修社会帝国主义则更狡猾阴险，更有欺骗性，在欺负人方面尤为恶劣。
>
> 【概して言えば、中東では、ソ修と米帝が同じ役割を果たす。彼らは２匹の空腹のオオカミのように互いに競い合い、しかもより激しい戦いをするために、時々互いに結託し、アラブ人の利益を裏切る。しかし、彼らの妥協と結託は、局部的、一時的、相対的であり、彼らの競争は全面的、長期的、絶対的である。彼らの競争は、世界中に広がり、彼らはどこかで争い、そこで不安が起こる。彼らの結託と争奪の関係は、中東の不穏の原因になり、世界の不穏の原因になる。ソ修と米帝、この２つの超大国が同じ穴のむじなであるが、社会主義と銘打ったソ修は、より狡猾、より欺瞞的であり、人をいじめる面において特に下劣である、というような数え切れないほどの事実がすでに証明された。】[261]

1970年代に入ってから、中国はソ連とアメリカによる世界の支配に反対し、アフリカ諸国、アラブ諸国といった「第三世界」に対して、平和五原則を基調とする外交政策をとり、招待外交、経済援助などを踏み台にして、数多くの国家との関係の改善に努め、「第三世界」諸国との提携を強化した[262]。中国がソ米に対抗しながら、「第二

261　郭季竹「是朋友还是敌人？——评《秘密活动》」、『摘译』1974年第5期(1974年9月)5-6頁。

262　1972年『人民日报』元旦社説「团结起来，争取更大的胜利」、1972年1月1日『人民日报』、徐涛「中国のアイデンティティの変容：東アジア近現代史の視点から」、『筑紫

世界」、「第三世界」、すなわち小国の立場を支持することにより、国連における正当な権利を回復し、ソ米に対する相対的な地位および国際的影響力を高めることに尽力したという中国当時の外交方針も文革期に翻訳された文学作品の評論に反映された。さらに、ソ連に対して、作者は「社会主義と銘打ったソ修は、より狡猾、より欺瞞的で、人をいじめる面において特に下劣である」と述べている。中国が1949年に建国後、アメリカは国際の思想形態という領域の競争において、中国の対立面に置かれており、「帝国主義」、「米帝」が長い間アメリカの代名詞となっていたが、1971年のピンポン外交を経て、ニクソン訪中の実現により、中国の対米政策は実質的な転換をとげ、両国の政府間関係は進展し[263]、さらに経済、文化の交流の面で顕著な進展が見られた[264]。しかし、アメリカを非難する意向は軟化しながらも、反米闘争の姿勢は依然堅持していたと考えられる。それと同時に、1966年、中ソの国境での武力衝突を契機に、両国対立が公然化し、中国はアメリカとの間に「デタント」などの政策を実行したソ連を「修正主義」、「ソ修」と批判し、米帝国主義に代る主要敵であるという態度を示した。ソ連に対抗するために、「反米帝」を相対的に弱めたという中国の採用した外交政策の影響が文革期の翻訳の評論にも及んでいる。それにより、ソ連文学への批判が文革期における外国文学の翻訳活動の中心となったと考えられる。

3.3.3　中日国交の正常化――日本の文学作品

政治イデオロギーの面においては、中国と日本が対立するという局面は変わっていなかったが、ソ米という２つの超大国の覇権と対抗するために、日本との外交交渉による関係改善を図るという中国側の姿勢が、文革期の翻訳作品からも窺える。

先ほど述べた1975年5月に人民文学出版社より出版された遍照金剛『文鏡秘府論』の郭紹虞「前言」において、以下のように述べられている。

女学園大学研究紀要』第16号(2021年1月)55-57頁などを参考にした。

263　三宅康之「中国の『国交樹立外交』、1965～1971年」、『愛知県立大学外国語学部紀要』第43号(地域研究・国際学編)(2011年)107-108頁を参考にした。

264　馬士奎「塑造美国形象――“文革”期间对美国当代文学作品的译介」、『临沂师范学院学报』第31卷第2期(2009年4月)64-67頁。

今天校印文鏡秘府論，正可看作是對中日文化交流有功的弘法大師的紀念。日本人民和中國人民一向有着友好的感情，尤其在一九七二年九月實現了中日兩國邦交正常化以後，中日兩國的睦鄰友好關係正在不斷發展。我相信通過文鏡秘府論的校印出版，一定能在中日兩國人民的友好關係和兩國文化交流方面，起到良好的作用。

【今日の『文鏡秘府論』を校正、出版することは、中日間の文化交流に功績を上げた弘法大師に対する記念と見做せるであろう。日本人民と中国人民は常に友好的な感情を持っており、特に1972年9月に中日国交正常化が実現されて以降、中日間の善隣関係は発展しつつある。『文鏡秘府論』の校正、出版を通して、中日両国人民の友好関係と両国の文化交流に良い役割を果たすと確信している。】[265]

『文鏡秘府論』の出版について、「前言」の作者の郭紹虞は、「中日国交正常化」と「中日間の善隣関係」に言及し、「中日両国人民の友好関係と両国の文化交流に良い役割を果たす」という意義があると述べている。さらに、1983年7月に中国社会科学出版社より出版された、遍照金剛『文镜秘府论校注』(王利器校注)[266]に対しても、「作为中日和平友好条约签订周年的献礼。(中略)此书之出版，又将在中日文化交流史上写下新的一页【中日平和友好条約締結周年に対する贈り物とする。(中略)本書の出版は、日中文化交流の歴史に新たな１頁を加えることになるだろう】」[267]と評価した。1970年代から、『文鏡秘府論』は何度も出版され、中日両国間の文化交流に大きく貢献した作品と見なされた[268]。同書は1972年の日中国交正常化と1978年の平和友好条約締結に貢献したと考えられた。

文革期の翻訳文学誌『摘译』において、1972年の中日国交正常化に言及した「文艺

265　郭紹虞「前言」、遍照金剛『文镜秘府论』周維徳校訂(人民文学出版社、1975年5月)8頁。下線部は原文のまま。

266　遍照金剛『文镜秘府论校注』王利器校注(中国社会科学出版社、1983年7月)。

267　趙朴初「《〈文镜秘府论〉校注》颂」、『社会科学战线』1979年第2期(1979年5月)94頁。

268　朱迎平「中日文化交流的奇葩――《文镜秘府论》」、『文史知识』第8期(1986年8月)46-48頁。

动态」もいくつか見られる。例えば、1973年第2期に掲載された「纪录影片《是人民的力量恢复了日中邦交》摄制完成」において、編集者は「实现恢复日中邦交、反对日本军国主义【日中の国交回復を実現し、日本の軍国主義に反対する】」[269]ことをテーマにしたドキュメンタリーの撮影終了に関わる情報を読者に紹介した。また、1974年第6期に掲載された「河原崎长十郎《天平之甍》在东京公演」の中では、『天平の甍』の上演の意義[270]について、編集者は河原崎長十郎の話を引用して、「将鉴真和尚的丰功伟绩艺术化，从古为今用观点保卫邦交恢复后日中友好的飞跃和世界和平【鑑真の偉大な業績を芸術化し、古為今用[271]の視点から国交回復以降に飛躍した日中友好と世界平和を守る】」[272]と述べている。1975年第2期に掲載された「文艺动态」の中でも、「为庆祝中华人民共和国成立二十五周年、日中邦交恢复两周年和欢迎日中通航的首航班机【中華人民共和国の建国２５周年、日中国交正常化２周年を記念し、日中通航後の初就航を歓迎するために】」、日本で上演された中国の演劇『雷雨』は「在话剧界内有力地跨出了提倡日中友好、与广大群众相结合的新戏剧活动的第一步【演劇界で、日中友好を促進し、広範な大衆と結びついた、新しい演劇活動への力強い第一歩を踏み出した】」[273]と高く評価された。

また、『摘译』1974年第2期に掲載された「日本出版访华诗集《火红的海》」という「文艺动态」において、1972年11月に山口県文学者訪中団の一員として、詩人の磯永

---

269 「纪录影片《是人民的力量恢复了日中邦交》摄制完成」、『摘译』1973年第2期(1973年3月)148頁。

270 孫軍悦は『現代中国と日本文学の翻訳：テクストと社会の相互形成史』において、毛沢東思想や文革に深く共鳴した河原崎長十郎、前進座と中国の関係、日中関係史の中にある『天平の甍』などについて詳述した。孫軍悦『現代中国と日本文学の翻訳：テクストと社会の相互形成史』(青弓社、2021年2月)46-144頁。

271 「古為今用、洋為中用」は毛沢東の言葉で、「昔のものを今に役立て、西洋のものを中国に役立てる」の意味である。毛沢東「对中央音乐学院的意见」、『群众反映』第79期上(1964年9月)。

272 「河原崎长十郎《天平之甍》在东京公演」、『摘译』1974年第6期(1974年11月)185頁。

273 「日本“话剧人社”演出中国话剧《雷雨之前》」、『摘译』1975年第2期(1975年5月)195頁。

秀雄が中国を１ヵ月間訪問してから書いた日本初の訪中詩集『燃える海』[274]に対して、編集者は以下のように述べている。

> 他歌颂的“海”，就是人的可贵，人民的伟大，对明天充满信心的人。在《火红的海》中，可以看出他在社会主义中国找到了他不断追求的那个“海”而很感动。在颓废和怠惰、末世学和灭亡之歌的泛滥中，诗人的这本赞扬社会主义中国和人的可爱的诗集，一定会激励日本人民。
>
> 【彼の謳歌した「海」は、人の貴い精神、人民の偉大さ、明日を信じる人たちのことである。『燃える海』から、彼は自分が絶えず追求していた「海」を社会主義中国で見出したことに感動していると窺える。頽廃と怠惰、終末論および滅亡の歌が氾濫する世の中で、社会主義中国およびその国民の可愛さを称揚した詩集は、必ず日本人を鼓舞する。】[275]

上述の「文艺动态」の中で、編集者は詩集『燃える海』における「人」、特に中国の「人」に着眼し、中国人民の前向きな精神が日本人民に与える積極的な影響を強調した。また、『摘译』1974年第5期に掲載された「齿轮座剧团演出新作《一个出发点》」の中で、「此剧歌颂了日中两国人民的无产阶级国际主义的团结，收到真正希望日中友好的工人，学生和市民的全力支持。（中略）“社会主义中国和日本人民的解放斗争正在胜利前进，他们是互相支持、紧密联系的。”【この演劇は、日中両国の人民のプロレタリア国際主義的な団結を称え、日中友好を真に望む労働者、学生、市民から全面的な支持を得た。（中略）『社会主義中国と日本人民の解放闘争は勝利に進んでおり、彼らは互いに支え合い、密接に結びついている』】」[276]と述べられている。この時期、1972年『人民日报』の元旦社説「团结起来，争取更大的胜利」において、帝国主義と戦うために、中国はベトナム、北朝鮮、アラブ、アフリカ、ラテンアメリカなど「第三世界」の人々との「団結」と「支え合い」を求めているのみならず、「日本人民」

274　磯永秀雄『燃える海：磯永秀雄訪中詩集』（長周新聞社、1973年11月）。

275　「日本出版访华诗集《火红的海》」、『摘译』1974年第2期（1974年2月）155頁。

276　「齿轮座剧团演出新作《一个出发点》」、『摘译』1974年第5期（1974年9月）220頁。

との緊密な連携も期する[277]と記された。文革期に翻訳された作品からも、中国と日本との国家間の関係を築くことに止まらず、さらに人と人の関係、すなわち日本の国民との繋がりも期待されるという傾向が見られた。

しかし、文革期に翻訳された日本の文学作品の中で、中日国交正常化や日中両国の友好関係を話題とした作品は極めて少数派である。全体として言えば、中国はソ米の２つの超大国と対抗し、自国の生存のために日本との関係を改善しようとするが、政治イデオロギーの面において中日対立は変わっていなかったため、編集者は依然として「日本批判」を文革期の翻訳作品の全体的な方針としていた。

3.3.4　「時代の英雄」の造形――ソ連の文学作品

文革期に翻訳されたソ連の文学作品の編集者は、ソ修政府が小説、戯曲、映画などにおいて、「時代の英雄」を造形することを通して、自分たちの直面している、誤った政治的路線による困難を解決しようとする姿勢を批判していた。1975年の『摘译』増刊『苏修短篇小说』[278]に掲載された評論、梅希雪「帮凶和帮忙――读《苏修短篇小说集》」の中で、以下のように述べられている。

> 近几年来，谁不知道苏修文坛上出现了一批叫做“当代英雄”的人物呢？(中略)一个个相继登场；每一个人的登场都引起文艺界一阵喧嚣和喝彩，说什么这些人物的出现是“时代的命令”。什么“时代的命令”？说穿了，无非是官僚垄断资产阶级摆脱困境的政治需要。“当代英雄”们凭借什么帮助官僚垄断资产阶级摆脱困境？据说，靠他们的“党性和公民性”。而这“党性和公民性”究竟是什么东西，(中略)就是对社会帝国主义的无限忠诚和对修正主义面临的困难局面“高度责任感”。在这种“党性和公民性”里，直接反映了官僚垄断资产阶级的愿望和要求，毫不隐瞒地说出为了摆脱困境他们打算干什么和怎么干。

277　1972年『人民日报』元旦社説「团结起来，争取更大的胜利」、1972年1月1日『人民日报』。

278　尤利・格拉契夫斯基など『苏修短篇小说』(『摘译』1975年增刊)復旦大学外語系俄語専業75届二班工農兵学員など訳(上海人民出版社、1975年12月)。

【近年、周知のとおり、ソ修の文壇に「時代の英雄」と呼ばれる作中人物が出現した。(中略)一人また一人と相次ぎ登場し、文芸界で次から次へと歓声と喝采を呼び起こしており、更にこれらの人物の出現は「時代の要請」であるといわれている。何の「時代の要請」か、はっきり言うと、官僚独占ブルジョア階級が苦境を脱するための政治的需要にほかならない。「時代の英雄」らがどのように官僚独占ブルジョア階級が苦境を脱するのを手助けするのか。話によると、彼らの「党性および公民性」を頼りとするとのことである。この「党性および公民性」は一体どんなものなのか。(中略)すなわち社会帝国主義に対する無限の忠誠および修正主義が困難に当面する時の「強い責任感」である。この種の「党性および公民性」に、官僚独占ブルジョア階級の願望と要求が直接に反映されており、苦境を脱するために彼らは何をするか、どのようにするかということがあからさまに表明された。】[279]

評論の作者は、政府側の困難を解決するという目的を達成するために、「時代の英雄」を造形するソ連作家とその作品、さらにソ連作家とその作品を利用したソ連の独占ブルジョア階級を批判した。また、評論の作者は「時代の英雄」から「官僚独占ブルジョア階級の願望と要求」が見られると述べている。すなわち、「時代の英雄」が何のために、どのように造形されたのかを分析することにより、ソ連政府の政治的路線及び政策を解読しようとする、という文革期の翻訳作品の編集者の姿勢が見られる。『摘译』1975年第6期に掲載された小説、鮑利斯・阿納申可夫「劳动过程所构成的……」(作家名原文不明、作品名原文不明、褚戟訳)の「前言」の中では、「显然，文章作者希望苏修作家能够更积极地去塑造“当代英雄”的形象，以便帮助苏修统治者摆脱当前工业生产中的困境【明らかに、ソ修の統治者が目前に迫る工業生産における困難から抜け出すのを手助けするために、ソ修の作家たちが、「時代の英雄」の人物像を積極的に造形することを、作品の作者は望んでいる】」[280]と述べられている。

279　梅希雪「帮凶和帮忙——读《苏修短篇小说集》」、尤利・格拉契夫斯基など『苏修短篇小说』(『摘译』1975年増刊)復旦大学外語系俄語専業75届二班工農兵学員など訳(上海人民出版社、1975年12月)1-3頁。

280　「前言」、鮑利斯・阿納申可夫「劳动过程所构成的……」褚戟訳、『摘译』1975年第6期(1975年10月)146頁。

文化大革命期の中国においても、文学作品の中で英雄的人物を際立たせる政策は存在した。中華人民共和国が成立した際に、毛沢東は1949年に「向ソ一辺倒」という方針を打ち出し、社会主義陣営のソ連から中央集権の政治制度および経済制度のみならず、それに対応する政治文化をも学び取り、ソ連の援助と指導を期したのである[281]。徹底的に親ソ路線に従い、中国政府はソ連の文化を中国の中に強制的に植え付けた。浸透したソ連文化は1966年に始まった文革期の文学政策にも深刻な影響を及ぼした。文学作品において英雄的人物を作り上げることもソ連文化からの影響の１つである[282]。

1968年5月23日『文汇报』の中で、当時の中国文化部部長を務め、文学界の急進派であった于会泳は、「我们根据江青同志的指示精神，归纳为“三突出”作为塑造人物的重要原则，即：在所有人物中突出正面人物来；在正面人物中突出主要人物来；在主要人物中突出最主要的即中心人物。江青同志的上述指示精神，是创作社会主义文艺的极其重要的经验，也是以毛泽东思想为武器，对文学艺术创作规律的科学总结【私たちは江青同志の指示と精神に従い、『三突出』を作品人物の造形の重要な原則とする。すなわち、あらゆる人物の中で肯定的人物を際立たせ、肯定的人物の中で主要人物を際立たせ、主要人物の中で最も主要な、すなわち中心人物を際立たせる。上述した江青同志の指示と精神は、社会主義の文学作品を創作する極めて重要な経験であり、毛沢東思想を武器とする文学作品の創作基準の科学的な総括でもある】」[283]と述べ、江青の提唱した「三突出」理論を正式に提出した。さらに、「四人組」の姚文元も1969年に「三突出」理論を「あらゆる人物の中で肯定的人物を際立たせ、肯定的人物の中で英雄的人物を際立たせ、英雄的人物の中で主要な英雄的人物を際立たせる」に修正し、「プロレタリア階級文芸が必ず従う原則の一つ」に昇格させた[284]。

281　ソ連文化と文革期の文学政策の繋がりについては、須藤真志『20世紀現代史』(一藝社、2005年3月)95頁、劉忠、劉国忠「“文革”时期的社会生活及其对后现代文化的影响」、『甘肃理论学刊』2006年第6期(2006年11月)93-94頁を参照した。

282　胡星亮「论苏联戏剧左倾教条与中国当代戏剧」、『文艺争鸣』2003年第4期(2003年)63-69頁、吳萍「从英雄主义到人道主义——苏联反法西斯战争文学的嬗变」、『俄罗斯文艺』2015年第1期(2015年)62-67頁を参照した。

283　于会泳「让文艺界永远成为宣传毛泽东思想的阵地」、1968年5月23日『文汇报』。

284　武善增「论“文革文学”话语在1964年的生成」、『江苏社会科学』2011年第4期(2011年)157頁を参照した。

『摘译』1974年第8期に掲載された評論、M・弗拉索夫「时代所要求的主人公」(Власов М, *Герой, которого требует время*, 1974)(吉揮訳)の「编者按」において、編集者は「让人一眼就看出他们的冷酷无情，因而缺少“魅力”。(中略)作家们在这些“英雄”身上加进一些“人性”和“善良”的东西【人々が一目で英雄の冷酷さと非情さを見抜けるため、「魅力」に欠けている。(中略)作家たちがこれらの「英雄」に「人間性」と「善良さ」を加える】」[285]と、気高く完璧な英雄的人物像が真実から離れるという「社会帝国主義の英雄論」を批判した。なぜなら、馮雪峯[286]によると、文学芸術の中の英雄は、現実の英雄と比べて、より完璧、より理想的であるべきで、このようにしてこそ、文学芸術は人々の審美要求をよりよく満たし、教育の役割をよりよく果たすためである。中国に規定された「共産階級の英雄的人物」は、「必ず完璧な人物像」であり、「必ず文化の戦線においてブルジョア階級と指導権を奪い合う」[287]のである。文革期に翻訳されたソ連文学から、中国の文学指導者が1949年以降ソ連文化から継承した文学政策を政治の都合で「改善」して、またそれを利用してソ連文化を批判する姿勢が読み取れる。

3.3.5　まとめ

文革の頃、翻訳作品の編集者は、三ヵ国の社会イメージを政治イデオロギーの都合に従って形作り、中国とは対照的なものに仕立てあげた。さらに、「反帝」、「反修」というスローガンの下で、日本などの「第二世界」、「第三世界」との連携を図り、「世界革命」を呼びかけた。中国は「帝国主義」、「修正主義」を否定することにより、自己を肯定しようとしたと考えられる。翻訳活動を通して、主流のイデオロギーの価値観に従って作品を解釈し、作品および作品の背後にあるソ連、アメリカ、日本に対して読者が一定のイメージを抱くよう誘導し、そのイメージを標準的なものにし

285　「编者按」、M・弗拉索夫「时代所要求的主人公」吉揮訳、『摘译』1974年第8期(1975年3月〔ママ〕)161-163頁。

286　馮雪峯「英雄和群众及其他」、『文艺报』1953年第24期(1953年)3-6頁、江曾培、馮牧主編『中国新文学大系 1949-1976』(第2集 文学理论)(上海文芸出版社、1997年11月)76-85頁も参照した。

287　武善增「论“文革文学”话语在1964年的生成」、『江苏社会科学』2011年第4期(2011年)157頁を参照した。

ようとする傾向が見られる。

さらに、中国が1949年に成立した後、ソ連との関係が「友好」から、1950年代後半に「冷却」へと、さらに文革期に「敵対」へと変化したことも、文革期の翻訳作品に反映した。中国は世界の政治的状況の変更、とくに文革の時期におけるソ連、アメリカとの外交関係の変化に従い、自国の文学政策を修正しようとする傾向が強かったと考えられる。

翻訳というものは、ある言語から別の言語への変換というだけではなく、政治、権力、イデオロギーなどと密接に関係している。文革という特殊な時期の翻訳を分析するには、この点に留意することが特に必要であろう。

第4節　日本文学の翻訳ストラテジー

前述したように、文革期においては、政府機関が指揮者として編集者と翻訳者を組織し、翻訳活動を一元化して支配した。そのため、文革期の翻訳ストラテジーを論じると、政府側は公表したことがなかったが、必ずしも恣意的ではなく、統一された決まりがあったと考えられる。本節では、文革期に翻訳された日本の文学作品を取り上げ、編集者により選択された作品の種類、出典、掲載時期などに着眼し、作品の外部から見られる全体的な翻訳ストラテジーを以下のように総括してみる。

3.4.1　日本の映画のシナリオと演劇の戯曲

文革期に翻訳された日本の文学作品は短編小説、長編小説に止まらず、映画のシナリオ、戯曲、評論、詩歌なども見られる。先述した通り、シナリオが、文革期に出版された日本の文学作品の中で、一定の比重を占めている。単行本として出版されたシナリオに関わる作品、山田洋次等『故郷――日本のシナリオ５篇』、橋本忍・山田洋次・広沢栄・熊井啓『日本のシナリオ「砂の器」、「望郷」』、松本清張『日本改造法案――北一輝の死』という３冊、合計８篇が翻訳された。『摘译』において、映画のシナリオは９篇、演劇の戯曲は６篇が見られる。

文化大革命期に、「最も激しい批判の的となった」[288]映画、演劇が文革運動の中で比較的に注目された理由について、尹鴻、凌燕は、映画は「『臨場感』、『迫真性』を持ち、往々にして特別に効力を持ったイデオロギー効果を生み出すことができる」[289]と述べている。物語の構成、場面変化の順序、登場人物のセリフや動作の描写が文字化されたシナリオを通し、映像の「臨場感」と視覚上の「迫真性」の再現により、読者にも強烈なインパクトを与えると思われる。外国文学の翻訳作品の出版が極めて制限されていた文革期の中国で、プロパガンダの大きな効果を発するために、視覚的効果を持つ映画のシナリなどが翻訳されるようになったのだと考えられる。

1976年3月に人民文学出版社から出版された『望郷』に対して、訳本の「出版说明」[290]の中で訳者は「《望乡》也被选为一九七四年度日本十部优秀影片之一【『望郷』も1974年度日本映画ベスト・テンに選ばれた】」と述べている。また、先ほど述べたように、『摘译』1974年第4期には、『キネマ旬報』の選出した「日本映画ベスト・テン」に関わる「文艺动态」も掲載された。文革期の翻訳者が日本のシナリオを選択、翻訳する際に、日本の映画界における受賞歴や注目度、影響力なども、その翻訳対象の選定基準の一つとなったと考えられる。

3.4.2　日本の文学作品の原文の出典

文革期に翻訳された日本の文学作品の原文の出典について、『摘译』1973年第2期の「前言」の中で、以下のように述べられている。

> 本期主要译载了日本革命文艺团体齿轮座剧团创作演出的几个话剧剧本，还选择了日共(左派)所属报刊上发表的一些文艺作品和评论文章。译文都是从

288　辻田智子「映画『南海長城』について：中国当代文芸政策に関する一考察」、『京都産業大学論集』(人文科学系列)45号(2012年3月)216頁。

289　尹鴻、凌燕『新中国电影史：1949－2000』(湖南美術出版社、2002年11月)83頁。その翻訳は、辻田智子「映画『南海長城』について：中国当代文芸政策に関する一考察」、『京都産業大学論集』(人文科学系列)45号(2012年3月)216頁を参照した。

290　「出版说明」、橋本忍、山田洋次、広沢栄、熊井啓『日本电影剧本《沙器》《望乡》』訳者不明(人民文学出版社、1976年3月)2頁。

《人民之星》、《长周新闻》和《文艺战士》上译出的。

【今期は主に、日本革命文芸団体の劇団はぐるま座の創作、演出した演劇の脚本をいくつか翻訳し、掲載した。この他、日共(左派)の機関紙に掲載された文芸作品と評論も選んだ。訳文は全て『人民の星』、『長周新聞』と『文芸戦士』から選択し、翻訳したものである。】[291]

すなわち、『摘译』1973年第2期の編集者は、劇団はぐるま座の演劇の脚本、『人民の星』、『長周新聞』、『文芸戦士』に掲載された文学作品を選択し、翻訳した。しかし、具体的になぜ上述の雑誌の作品を選んだのかについてまで言及されていない。「前言」の中で、「日共」に「左派」という注釈がつけられた。「日本共産党(左派)」[292]は、日本共産党内部における文革への評価をめぐる論争の中で、文革を肯定的に捉えるため、日本共産党から除名された、福田正義をはじめとする親中派が結成した組織であり、「毛沢東思想を指導原理とする」と奉じていた。

また、前記した劇団はぐるま座[293]は、「日共(左派)」の指導を受け、山口県を中心に全国で活動を行い、「毛沢東思想宣伝隊」と自称した。さらに、劇団はぐるま座は、文革の最中である1967年7月30日から約４ヵ月にわたり、中国に出かける訪中公演を行い、北京、ハルピン、上海などで『野火』と『嵐も吹雪もどんとこい』を上演し、『野火』などの演劇の中で、「毛沢東語録」を繰り返し唱えており、さらに毛沢東の接見も受けていた[294]。『人民の星』と『長周新聞』は「日共(左派)」の機関紙と関連紙であり、『文芸戦士』は劇団はぐるま座の機関紙である。さらに、文革期において、『長周新聞』が文革期の中国で購読を許されていた唯一の日本の新聞であり、中国の

291　「前言」、『摘译』1973年第2期(1973年12月)1頁。

292　馬場公彦「“文化大革命”在日本(1966～1972)――中国革命对日本的冲击和影响」、『书城』2009年第7期(2009年)50-69頁、馬場公彦『世界史のなかの文化大革命』(平凡社、2018年9月)109-112頁を参考にした。

293　馬場公彦『世界史のなかの文化大革命』(平凡社、2018年9月)276-278頁を参考にした。

294　須川渡「戦後日本におけるコミュニティ・シアターの形成と展開」(大阪大学博士学位論文、2016年3月)76-77頁。

各ホテルの各階で閲覧できるようになっていた[295]。文革期において、大多数の日本の文学作品が批判されていた当時の背景の下に、これは異例だと言える。「日共(左派)」が中国側と政治的な緊密な関係を築いていたと考えられる。

また、先述の通り、文革の頃、翻訳対象として選択された日本の文学作品に共通する特徴として、「労働者の階級闘争と革命運動を宣揚する」という要素が見られる。『摘译』に掲載された「労働者の階級闘争と革命運動を宣揚する作品」の中で、その多くは上述した『人民の星』、『長周新聞』など、すなわち確実に政治路線の間違いのないと考えられる団体や組織の発行する雑誌、新聞から選ばれたのである。しかし、批判を目的とし、選択した日本の文学作品の出典については、日共の機関紙『赤旗』、『文化評論』、新日本文学会の機関誌『新日本文学』、文藝春秋が発行する娯楽月刊小説誌『オール讀物』と総合誌『文藝春秋』、講談社発行の月刊小説誌『小説現代』、映画雑誌『キネマ旬報』、演劇雑誌『テアトロ』、『毎日新聞』、『問題小説』、『中央公論』などがあり、編集者の選択傾向にはその関連性や統一性がないと言える。文革期に単行本の形式で出版された日本の文学作品の出典も同じく、青木書店、日本経済新聞社、新潟日報事業社、鶴書房、ダイヤモンド社、新潮社、光文社、文芸春秋社、筑摩書房などが出版した作品が見られる。各雑誌と各出版社の特徴から見ると、思想的共通性がないと考えられる。そのため、批判が必要である文学作品については、日本の文学作品の原著の出版社よりも、作品の種類や作家本人などを選択基準とするという傾向が見られた。

3.4.3　現代の作品への関心

『摘译』に訳された日本文学の原作は、全体にわたって1970年代以降に発表された作品である。単行本の形式で出版された日本の文学作品も同じく、小林多喜二作品『沼尻村』、『不在地主』、『蟹工船』、遍照金剛『文鏡秘府論』、三島由紀夫『憂国』などの原作は文革前に出版されたが、そのほかの原作は、ほぼ全て1970年代以降に発表されたのである。文革期の編集者は、現代の作品と比べて、古典物への関心が非常に薄いと考えられる。前述の通り、文革期において、外国文学を翻訳する目的は、

295　馬場公彦『世界史のなかの文化大革命』(平凡社、2018年9月)277頁を参考にした。

ソ連、アメリカ、日本の「社会思想、政治と経済状況」、すなわち資本主義国家の堕落を指摘することにより、「反帝反修とブルジョア階級」を批判するために、材料を提供することにあった。その堕落を表現するため、古典作品より、当時の日本経済、政治、社会問題を中国の読者に紹介したほうがより効率的であったと考えられる。

3.4.4　翻訳活動と評論活動における各労働者階級の参加

文革の頃、「集体翻訳」が翻訳手段の１つとして数多く存在していた。１つの作品が多くの翻訳者によって訳され、「集体署名」の形で署名された。その他、「偽名署名」や「署名なし」などの形も多くある。しかし、『摘译』1976年第2期に掲載された評論「新藤兼人的道路和苏修叛徒的险恶用心――评苏修对日本电影《我的道路》的吹捧」[296]の著者は、「上鋼三廠」の梁賛魯と明確に記された。また、『摘译』1974年第7期に掲載された評論「彩票的力量」[297]の著者は「彭浦機器廠工人」の陳大康であり、1975年第6期に載った評論「在“HTP”的掩盖下――苏修社会生活面面观之三」[298]の著者は「上海電機廠五・一工人大学文科班」に属する范毅平である、と記載された。

そこで注目すべき現象として、翻訳作品やそれに関わる評論などの中で、個人著者名が明確に記されたことは極めて稀である文革期において、上述の評論の中で、著者名だけではなく、著者の所属も記された。文革期の翻訳活動や評論活動において、翻訳者、学者、研究者のみならず、「上鋼三廠」、「機器廠」、「電機廠」の工人など各労働者階級も参加していたと読み取れる。その方針は、先述した毛沢東の文学活動における「工農兵」の参加を重視する理念と合致していると考えられる。文革期の翻訳作品の訳者についても、「上海師大外語系俄語三年級工農兵学員」[299]、「復旦大学

296　上鋼三廠　梁賛魯「新藤兼人的道路和苏修叛徒的险恶用心――评苏修对日本电影《我的道路》的吹捧」、『摘译』1976年第2期（1976年2月）88-90頁。

297　彭浦機器廠工人　陳大康「彩票的力量」、『摘译』1974年第7期（1974年12月）98-100頁。

298　上海電機廠五・一工人大学文科班　范毅平「在“HTP”的掩盖下――苏修社会生活面面观之三」、『摘译』1975年第6期（1975年10月）1-10頁。

299　奥基耶・約塞利安尼「趁大车还没有翻倒的时候」（作家名原文不明、作品名原文不明）上海師大外語系俄語三年級工農兵学員集体翻訳、『摘译』1974年第3期（1974年3月）30-113頁、尤里・特里方諾夫「交换」（Юрий Валентинович Трифонов,

外語系俄語専業75届工農兵学員」[300]、「上海外国語学院俄語専業76届工農兵学員、部分教師」[301]などの署名に見られるように、「工農兵」の身分が強調された。しかし、文革期の翻訳作品の多くは公開的に出版されず、「内部翻訳」として発行されており、一般の民衆の手に入らず、その読者が極めて特定されていることから見ると、その点において一種の矛盾も感じられる。

3.4.5　文革期に出版された文学作品の芸術性

『摘译』1976年第1期において、『摘译』の編訳組の著した「答读者——关于《摘译》的编译方针【読者に答える——『摘译』の編訳方針について】」も掲載された。文革期に出版された文学作品の芸術性に対して、読者の李菁は以下の質問をした。

> 看完之后，大家都好象有些不大满足。因为我们都是爱好文艺的青年，并且都爱写点东西。原想看一些外国文艺作品能够开开眼界，在艺术创作上也能有所借鉴；但《摘译》上所发表的作品除少数(如日本电影剧本《华丽的家族》)可以在这方面给我们一点帮助外，大部分作品，特别是苏修作品，艺术上都是很拙劣的，有的简直叫人读不下去。看得出编者的意图是要通过这些作品揭露苏修社会帝国主义的面目，这当然是正确的。但能不能同时也选一些在苏修、美国和日本有代表性的作品呢？

Обмен, 1969)上海師大外語系俄三工農兵学員集体訳、『摘译』1974年第6期(1974年11月)8-79頁、符拉基米爾・田徳里亜科夫「毕业晚会后的一夜」(Владимир Фёдорович Тендряков, *Ночь после выпуска*, 1974)上海師大外語系俄語三年級工農兵学員及部分教師訳、『摘译』1976年第4期(1976年4月)94-189頁などが見られる。

300　上尼古拉・雷日赫「万卡・普罗斯库林」(Рыжих Прокофьевич, *Ванька Проскурин*, 1973)復旦大学外語系俄語専業75届工農兵学員集体訳、『摘译』1975年第3期(1975年6月)76-203頁、米哈依爾・阿列謝耶夫「俄罗斯的田野」(Михаил Алексеев, *Русское поле*, 1972)復旦大学外語系俄語専業75届工農兵学員集体訳、『摘译』1975年第4期(1975年7月)7-70頁などが見られる。

301　瓦列里・戈爾布諾夫「该做个有志气的好男儿」(作家名原文不明、作品名原文不明)上海外国語学院俄語専業76届工農兵学員、部分教師訳、『摘译』1976年第11期(1976年11月)8-145頁などが見られる。

【読み終えて、みんなが少し物足りなさを感じたようだ。私たちは皆、書くのが好きで、文芸を好む若者だ。しかし、『摘译』に掲載された作品の中で、この面で私たちに役に立てる一部の作品(例えば、日本の映画シナリオ『華麗なる一族』)を除き、ほとんどの作品、特にソ連の作品は芸術的に非常に拙劣で、さらに読むに耐えないものもある。これらの作品を通じて、ソ連の社会帝国主義の真の顔を暴露するという編集者の意図は読み取れる。これはもちろん正しい。しかし、それと同時に、ソ連、アメリカ、日本の代表的な作品を選ぶこともできるだろうか。】[302]

読者は編集者に対して、掲載された作品は「芸術的に非常に拙劣で、さらに読むに耐えないものもある」と指摘し、「ソ連、アメリカ、日本の代表的な作品」、すなわち芸術性の高い作品を選んで欲しいという意見を投稿した。読者の翻訳作品の芸術性への質疑に対して、『摘译』の編訳組は、以下のように回答した。

这些作品在艺术上确实都是很拙劣的，迫切的政治需要使勃列日涅夫叛徒集团及其文艺界已无暇顾及艺术性。这也告诉我们，当今的苏修文艺已经堕落到什么地步了。我们并不反对借鉴外国的艺术技巧。《摘译》也应该在这方面做点工作。但是，这毕竟不是我们研究当今资本主义世界文艺的主要目的(中略)。对当今帝国主义文艺、修正主义文艺和资产阶级文艺在艺术上估计过高，不仅不符合实际，而且是十分有害的。

【これらの作品は、確かに芸術的には拙劣なものばかりである。差し迫った政治的要請により、ブレジネフ裏切り者集団とその文芸界は、芸術性を考慮する余裕がないからだ。これも今日のソ連文芸がいかに堕落しているかということを私たちに語っている。(中略)外国の芸術的表現手段を参考にすることに反対しているわけではない。『摘译』もこの点で何とかすべきだ。しかし、結局のところ、これは我々が今日の資本主義世界の文芸を研究する主要な目的ではない(中略)。今日の帝国主義文芸、修正主義文芸、ブルジョア階

302 《摘译》(外国文芸)編訳組「答读者——关于《摘译》的编译方针」、『摘译』1976年第1期(1976年1月)171頁。

級文芸の芸術性を過大評価することは、非現実的であるだけでなく、非常に有害である。】[303]

翻訳作品の編集者は、自分の選んだ作品において、「確かに芸術的には拙劣なものばかりである」と認めている一方、これらの作品を掲載する主要な目的は、「今日の資本主義世界の文芸」、すなわち文学の芸術性を「研究する」のではなく、文学作品から見られる資本主義世界の堕落を暴露することにあると指摘した。さらに、ソ連、アメリカ、日本の「帝国主義文芸、修正主義文芸、ブルジョア階級文芸の芸術性を過大評価する」ことは「非常に有害」であると述べている。従って、文革期の外国文学の翻訳活動は、当時の重要な政治活動の一環として、作品の芸術的価値、学術的価値よりも、政治的意味を重視していたと考えられる。

303 《摘译》(外国文芸)編訳組「答读者――关于《摘译》的编译方针」、『摘译』1976年第1期(1976年1月)173頁。

第4章　文革期における日本文学の翻訳ストラテジー――作品の分析を中心に――

原作の行為主体は原文の作者であり、翻訳作品の行為主体は翻訳者であるため、両者が作品を通して、読者に対して伝えたい内容と思想が、必ず合致しているとは言いがたい。文革期の翻訳活動において、翻訳者は翻訳という行為を通して、作者や作品、作品に含まれている思想を単純に伝えたりする異言語間の媒介者としてではなく、政治イデオロギー的に一定の高さから、原作者とその作品を見下ろす審査員の立場にあると考えられる。原作者との間に、文革期の日本の文学作品の翻訳者が意図的に作り上げた、作品の解読方法に関わる相違を分析することは、本章の主題と密接に関わってくる。

文革期において、外国文学の翻訳テクストには、意訳、省略、抄訳、増訳、削除などの翻訳方法がよく見られる。本章では、作品の解読方法を読者に提示する、編集者や翻訳者の書いた出版説明、前言、後記などを検討しながら、翻訳テクストにおいて上述した翻訳方法が使われたか、翻訳テクストの形式と構成が原文テクストと一致しているかなど、原文テクストへの忠実性を検討する。さらに、翻訳テクストに見られる注釈を分析し、中国の読者には説明が必要と思われる一般名詞の解釈以外に、翻訳者が訳文の注釈に意図的に特別な意味づけをし、原作者が狙っていない効果を訳出したかを考察する。翻訳者による翻訳行為が、原作の主旨を理解することにどのように影響しているかに注目する。

第1節　小林多喜二文学の翻訳――『沼尻村』、『不在地主』、『蟹工船』

前述した通り、翻訳活動を政治活動の一環とする文革期において、外国文学の翻訳は、主に「公開翻訳」、「内部翻訳」、「潜在翻訳」という３つの形式に分けられた。作品数が極めて限られている文革期の「公開翻訳」の中で、プロレタリア革命作家と見なされる小林多喜二の作品が３冊ある。人民文学出版社から、1973年5月に『沼尻村』

[304]、1973年10月に『不在地主』[305]、『蟹工船』[306]の翻訳が出版された。文革期において、公開出版が可能な小林作品は、政治的に「正しい」ものと見做されたと考えられる。

本節は、文革期と文革期の前後に中国で小林多喜二に対する評価、小林多喜二作品の中国での翻訳に関わる先行研究を踏まえつつ、小林多喜二と上記の３つの作品に焦点を当て、文革期において小林作品がどのように翻訳されたかを解明する。

4.1.1　中国における小林多喜二の翻訳

4.1.1.1　中国における小林多喜二への評価

1920年代末期の中ソ紛争により両国間の対立が深まり、文学を含めて思想上の交流がある程度行き詰まる状況に陥っていた。日本においてちょうど最高潮に達したプロレタリア文学運動は、郭沫若らに代表される日本滞在経験のある中国の革命文学者の注目を集めた。1930年4月に、潘念之訳の小林多喜二『蟹工船』[307]が大江書舗より出版された。この版は戦旗社初版本により装幀も同じである[308]。作家自身が以下の「序文」を描いた。

304　小林多喜二『沼尾村』李徳純訳（人民文学出版社、1973年5月）。原作について、小林多喜二『党生活者・地区の人々・沼尻村』（青木書店、1964年9月）5-91頁を参照した。中国語の原文を引用する場合、全て頁数のみを表記する。中国語の原文の日本語訳は引用者で、原文の後ろに「【日本語訳】」で表記する（以下同）。日本語の原文の引用は原作から引用する。日本語の原文を引用する場合、全て頁数のみを表記する（以下同）。中国語と日本語の原文を引用する場合、下線は引用者による（以下同）。

305　小林多喜二『在外地主』李芒訳（人民文学出版社、1973年10月）。原作について、小林多喜二『蟹工船・不在地主・暴風警戒報』（青木書店、1974年6月）107-234頁を参照した。

306　小林多喜二『蟹工船』葉渭渠訳（人民文学出版社、1973年10月）。原作について、小林多喜二『蟹工船・不在地主・暴風警戒報』（青木書店、1974年6月）5-106頁を参照した。

307　小林多喜二『蟹工船』潘念之訳（大江書舗、1930年4月）。

308　「解題」、小林多喜二『蟹工船・不在地主・暴風警戒報』（青木書店、1974年6月）284-285頁を参照した。

中國普羅列答利亞底英雄的奮起，對於切膚相關的日本普羅列答利亞，是怎樣地增加其勇氣呢。我現在想到『蟹工船』由着潘念之同志底可敬的努力，得在這英雄的中國普羅列答利亞之中被閲讀的了，感到異常的興奮。在這作品上所採取着的事實，像在日本底這麼一般，對於中國普羅列答利亞，或許是關係較淺罷。然而！假如把『蟹工船』底極度殘虐着的原始榨取、囚人勞動，和被各種帝國主義底鍛煉所緊縛着、被強迫在動物線以下虐使着的中國普羅列答利亞底現狀，就這麼換置了過來，是不能夠的麼？是可以的啊！那麼，這個貧弱的作品，雖是貧弱，但是成為一種力量。我堅確地相信着這一點。

哦，同道的中國的朋友們啊，我永久地祝頌你們底健康與光明！

【支那プロレタリアの英雄的な奮起は、膚を隣り合わせている日本のプロレタリアをどのくらい力づけ、はげましているか分らない。——私は今「蟹工船」が、同志潘念之の尊敬すべき努力によって、その英雄的な支那プロレタリアの中に読まれるであろうことを考え、異常な興奮を感じている。この作で取扱われている事実は、日本のそれのようには支那のプロレタリアには或は縁遠いかも知れない。然し！仮に、「蟹工船」の残虐を極めている原始的搾取、囚人的労働は、各国帝国主義の鎖にしばられて、動物線以下の虐使を強いられている支那プロレタリアの現状と、そのまゝ置きかえられることは出来ないだろうか。出来るのだ！とすれば、この貧しい一作は、貧しいと雖も一つの「力」となり得る。私は何よりもこのことを信じている。

では道を同じくする支那の仲間等よ、私は、君達が、常に健康で、朗らかであることを望んでいるのだ。】[309]

小林多喜二は「序文」の中で、ある程度中国のプロレタリア文学運動に関心を示し、自分の作品が中国に革命経験を与えると望んでいた。『蟹工船』の出版に対して、「左翼作家連盟」の結成に参加した劇作家の夏衍が「假使有人問：最近日本普羅列塔

309　「序文」、小林多喜二『蟹工船』潘念之訳（大江書舗、1930年4月）1-2頁。その翻訳の一部は、小林多喜二『蟹工船· 不在地主· 暴風警戒報』（青木書店、1974年6月）284-285頁を参照した。

利亞文學的傑作是什么?那么我們可以毫不躊躇地回答：就是《一九二八年三月十五日》的作者小林多喜二的《蟹工船》【最近の日本プロレタリア文学の傑作が何であるかと聞かれると、私たちは『一九二八年三月十五日』の作者小林多喜二の『蟹工船』だと躊躇なく答える】」[310]と高く評価した。また、魯迅も1930年2月に雑誌『文艺研究』の創刊号で、「《蟹工船》出版预告」を発表し、以下のように述べている。

> 日本普羅列塔利亞文學，迄今最大的收穫，誰都承認是這部小林多喜二的《蟹工船》。在描寫為帝國主義服務的《蟹工船》中，把漁夫縛死在船欄上，這一工船專為自身利益寧願犧牲求救的別一工船的數百性命，這種悽慘的場面中，驚心動魄地顯示出了兩大階級的對立。
>
> 【日本のプロレタリア文学、ここまで最大の収穫は小林多喜二のこの『蟹工船』である。帝国主義のために働くことを描写する『蟹工船』の中で、漁夫が船の手すりにしっかりと縛りつけられ、該当工船が自身の利益を追求するために、救いを求めるもう１つの工船にいる数百人の命を犠牲にしようとする。この種の悲惨な場面において、人の心を強く揺さぶる２つの階級間の対立が示されている。】[311]

小林多喜二の『蟹工船』が「日本のプロレタリア文学、ここまで最大の収穫」であり、「帝国主義」と対抗し、「２つの階級間の対立」を明示すると魯迅の称賛を博した。また、上記の小林多喜二への評価から、創造社、太陽社や左翼作家連盟など中国の革命文学団体が日本の左翼作家と交流を保っていたと考えられる[312]。

1950年代から、翻訳文学の質を高め、進歩的な作品や世界の名著を訳すという呼びかけのもと[313]、「小林多喜二ブーム」が中国に起きていた。作家出版社より1955年に

310　若沁（夏衍の筆名）「关于“蟹工船”」、『拓荒者』第1期（1930年1月）391頁。

311　魯迅「《蟹工船》出版预告」、『文艺研究』創刊号（1930年2月）。

312　楽融「从一份捐赠书目看日本左翼文学对中国的影响」、『上海魯迅研究』2010年春（2010年2月）19-38頁を参照した。

313　王向遠『二十世纪中国的日本文学翻译史』（北京師範大学出版社、2001年3月）196頁などを参照した。

『蟹工船』(適夷訳)、『党生活者』(李克異訳)[314]、1956年に『不在地主』(震先訳)[315]が出版され、そして人民文学出版社より1958年から『小林多喜二选集』第1～3巻(適夷・王康等訳)[316]、『一九二十八年三月十五日』(適夷訳)[317]、『小林多喜二小说选』(適夷等訳)[318]が出版され、上海文芸出版社より1962年に『安子』(楼適夷訳)[319]が出版された。1955年3月に翻訳された『蟹工船』(適夷訳)における「内容説明」は以下である。

> 小林多喜二(一九〇三-一九三三年)是日本最傑出的革命作家，在他短促的十年創作活動和實際鬥爭中，寫出了不少的輝煌的作品，為日本社會主義現實主義文學樹立了旗幟。(中略)『蟹工船』是作者創作中最著名的作品。它通過蟹工船博光丸中的奴隸勞動的描寫，揭發了面臨末日的日本壟斷資本家和海軍部隊相互勾結，在堪察加蘇聯領海中進行海盗式的捕蟹事業；並且由此反映出在日本帝國主義制度下殘酷的剝削行為和侵略本質，以及日本工人階級從自發鬥爭到自覺鬥爭的發展道路。
>
> 【小林多喜二(一九〇三-一九三三年)は日本で最も傑出した革命作家である。わずか１０年という短い創作活動と実際の闘争の中で、輝いた作品を数多く描いて、日本の社会主義リアリズム文学の模範を立てている。(中略)『蟹工船』は作者の創作の中で最も著名な作品である。この作品は博光丸における奴隷労働に対する描写を通して、終末期を迎えている日本独占資本家が海軍とぐるになって、カムチャツカというソ連の領海内で海賊的にカニ漁の事業を行っていると摘発した。そして、これにより、日本帝国主義の制度下での残酷な搾取行為と侵略の本質、および日本労働者階級が自発的な闘争

314　小林多喜二『党生活者』李克異訳、適夷校(作家出版社、1955年4月)。

315　小林多喜二『不在地主』震先訳(作家出版社、1956年8月)。

316　小林多喜二『小林多喜二选集』第1巻、適夷、王康、震先訳(人民文学出版社、1958年12月)；第2巻、金中、周鴻民、李長信訳(人民文学出版社、1958年6月)；第3巻、舒暢、李克異等訳(人民文学出版社、1959年4月)。

317　小林多喜二『一九二十八年三月十五日』適夷訳(人民文学出版社、1958年9月)。

318　小林多喜二『小林多喜二小说选』適夷等訳(人民文学出版社、1965年2月)。

319　小林多喜二『安子』楼適夷訳(上海文芸出版社、1962年4月)。

から自覚的な闘争へと発展していく道筋が反映されている。】[320]

1950、1960年代における中国の翻訳方針について、査明建は「意识形态、翻译选择规范与翻译文学形式库——从多元系统理论角度透视中国五十——七十年代的外国文学翻译」の中で、以下のように述べている。

当时论及外国文学翻译的文章，在谈到翻译取向时，都提出要译介「优秀」、「进步」的世界文学。(中略)五六十年代中国文化多元系统是根据意识形态和诗学标准来判断作品是否「优秀」和「进步」的，即作品在意识形态上有利于社会主义意识形态的建立和巩固，在创作方法上体现了现实主义创作原则，尤其是社会主义现实主义创作原则。因此，社会主义意识形态和现实主义诗学规范才是五六十年代实际的翻译选择标准。

以「优秀」、「进步」命名的翻译选择规范规导着五十—七十年代的翻译价值取向，从而也就决定了这一时期翻译文学的基本特点。

【当時、外国文学翻訳の文章に言及し、翻訳方針を論じる場合、「優れた」、「進歩」的な世界文学を訳すということが求められた。(中略)1950～1960年代、中国の文化多元システムがイデオロギーと詩学の標準に従い、作品が「優れて」いるか、「進歩」であるかを判断しており、すなわち作品が意識形態の面で社会主義のイデオロギーの構築と強化に有利であるか、創作方法の面で現実主義の創作原則、特に社会主義リアリズムの創作原則を体現できるか、ということである。それゆえ、社会主義のイデオロギーとリアリズムの詩学の規範こそ1950～1960年代における実際的な翻訳の選択基準である。

「優れた」、「進歩」と命名された翻訳の選択基準が1950～1970年代の翻訳の価値の方向を導き、それによりこの時期の翻訳文学の基本特徴が決められた。】[321]

320　「内容説明」、小林多喜二『蟹工船』適夷訳(作家出版社、1955年3月)1頁。

321　査明建「意识形态、翻译选择规范与翻译文学形式库——从多元系统理论角度透视中国五十——七十年代的外国文学翻译」、『中外文学』第30巻第3期(2001年8月)66-67

査が叙述した通り、政治イデオロギーの視点から言えば、「日本の社会主義リアリズム文学の模範を立てている」小林文学が代表する日本プロレタリア文学がまさしく「優れた」、「進歩」的な文学の典型に合致していた[322]と考えられる。

1950年代から文革期までの中国におけるプロレタリア文学の翻訳傾向は1980年代以降までも続いた[323]。1983年7月に人民文学出版社から出版された『小林多喜二小说选』(文潔若等訳)[324]の「译本序」においては、小林多喜二の「革命知識分子」という立場が言及された。2009年1月に訳林出版社より出版された『蟹工船』(葉渭渠訳)[325]の「译序」においても、「プロレタリアートの傑出した作家」、「偉大なるプロレタリア文学作家」など類似した用語が使われた。中国の学界では、小林多喜二とその文学をどのように評価すべきかについて、1930年から現在まで、長い間にわたって、一方向に向かって、相変わらず文学そのものというより、文学外の問題に重きが置かれている。作品の人物描写に関する分析など[326]を除いては、中国における小林研究が政治意識の視点から文学と美学の視点へと転換する姿勢が現在の段階で見られていないと考えられる。

頁。

322 查明建、謝天振『中国20世纪外国文学翻译史』(上)(湖北教育出版社、2007年2月)557-576頁、楊静傑「日本无产阶级文学(1921-1934)在中国的传播」(上海外国語大学修士学位論文、2012年12月)18-22頁を参照した。

323 王向遠「当代中国的日本文学阅读现象分析」、『名作欣赏』2014年第1期(2014年1月)5-10頁を参照した。

324 劉振瀛「译本序」、小林多喜二『小林多喜二小说选』文潔若等訳(人民文学出版社、1983年7月)1頁。

325 葉渭渠「译序」、小林多喜二『蟹工船』葉渭渠訳(訳林出版社、2009年1月)1-27頁。

326 張朝柯「小林多喜二对典型化的认识和实践」、『辽宁大学学报』(哲学社会科学版)1980年第6期(1980年12月)86-91頁、顔東「关于《蟹工船》中人物描写的翻译研究报告」(吉林大学修士学位論文、2012年5月)、張桂丹「鲁迅与小林多喜二笔下农民形象比较研究」、『山花』2014年第24期(2014年)123-124頁、舒熳「一步一步走向黎明——浅析小林多喜二《蟹工船》中的渐变性描写」、『大众文艺』2018年第19期(2018年10月)28-29頁などを参照した。

4.1.1.2　文革期における小林多喜二の翻訳

先述した通り、文化大革命期において、小林多喜二の３作が翻訳された。その直前の1973年3月11日の『人民日报』に「日本人民纪念小林多喜二遇害四十周年　日共(左派)中央号召继承他的革命遗志创作新的革命文艺作品」という社説が掲載されており、「小林多喜二于一九〇三年出生于日本秋田县一个贫苦农民家庭里，一九三三年二月二十日在东京被捕入狱，惨遭日本特务警察的杀害【小林多喜二は1903年日本秋田県の貧農家に生まれ、1933年2月20日に東京で逮捕され入獄させられて、日本の特務警察に惨殺された】」[327]と述べられ、また小林の革命運動がまとめられた。そして、僅か２ヵ月後の1973年5月に、『沼尻村』の訳本が出版された。出版理由について、以下の『沼尻村』の「译后记」と『蟹工船』の「译后记」から伺うことができる。

> 今年是日本无产阶级作家小林多喜二诞生七十周年，也是他遇害四十周年。为了纪念这位优秀的革命作家，我们翻译了他的中篇小说《沼尾村》。这部小说的中译本还是第一次同我国的读者见面。
>
> 【今年は日本のプロレタリア作家小林多喜二生誕７０年であり、殺害されて４０周年でもある。この優秀な革命作家を記念するため、私たちは彼の中篇小説『沼尻村』を翻訳した。この小説の中国語訳を初めて我が国の読者に紹介する。】(101頁)[328]

> 小林多喜二是日本优秀的无产阶级革命战士和作家。他的名字和文艺作品，早已为中国读者熟悉。(中略)今年，是小林多喜二诞生七十周年、遇害四十周年，我们又出版这部无产阶级的杰出作品的新译本，使我们读者能更好地向小林多喜二学习，向日本人民学习。
>
> 【小林多喜二は日本の優秀なプロレタリア革命戦士・作家である。彼の名と文芸作品は、中国の読者にとってすでに身近な存在である。(中略)今年は、

327　「日本人民纪念小林多喜二遇害四十周年　日共(左派)中央号召继承他的革命遗志创作新的革命文艺作品」、1973年3月11日『人民日报』。

328　訳者「译后记」、小林多喜二『沼尾村』李徳純訳(人民文学出版社、1973年5月)101頁。

小林多喜二生誕７０年、殺害されて４０周年である。私たちがこのプロレタリア傑作の新訳を出版したことにより、我々読者がよりよく小林多喜二に、日本人民に学ぶことができる。】(115-118頁)[329]

「今年は、小林多喜二生誕７０年、殺害されて４０周年である」ということが、頻繁に言及されている。また、1973年3月に『人民の星』に掲載された杉田光二「竹根――多喜二被害四十周年」と題した詩歌(薛毅訳)[330]も『摘译』1973年第2期に翻訳された。文化大革命期の前期において、公式にはほぼ言及されていないが、1973年という小林「生誕７０年、殺害されて４０周年」を節目として、小林の作品により「鼓舞中国人民的革命斗争【中国人民の革命闘争を鼓舞】」するため、「增进中日两国人民的战斗友谊【中日両国人民の戦闘的友誼を促進】」[331]するために積極的な役割を果たすという効果が期待されたと考えられる。

4.1.2　文革期の小林文学

4.1.2.1　翻訳作品の「译后记」

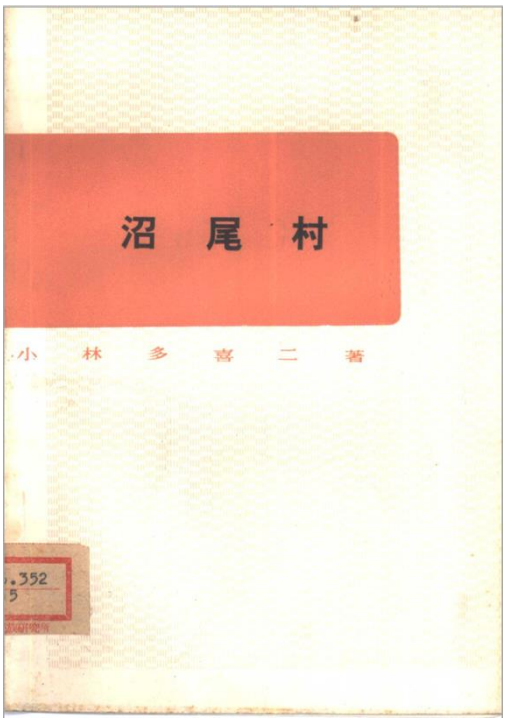
文化大革命期において、小林多喜二『沼尻村』、『不在地主』、『蟹工船』は人民文学出版社に翻訳された。小林作品の３冊の表紙は、以下のようにカラー版でありながら、さらに小林の肖像写真も訳本に添えられている。

329　訳者「译后记」、小林多喜二『蟹工船』葉渭渠訳(人民文学出版社、1973年10月)115-118頁。

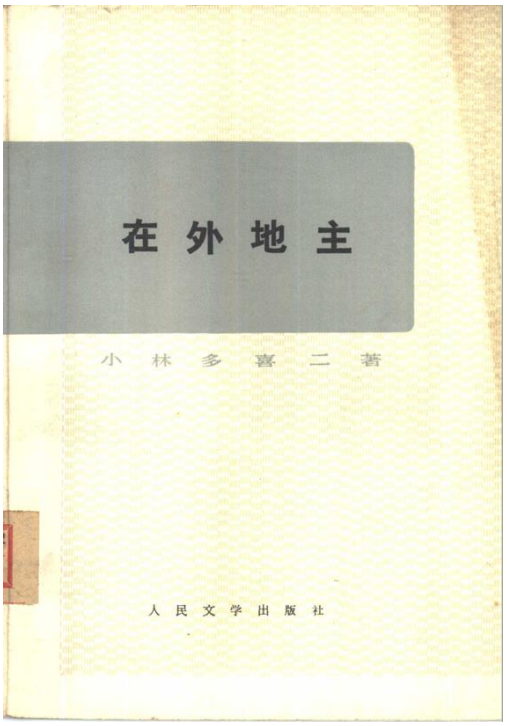
330　杉田光二「竹根――多喜二被害四十周年」薛毅訳、『摘译』1973年第2期(1973年12月)109-110頁。そのほかに、『摘译』に翻訳された小林多喜二に関わる作品は、「《人民之星》发表文章 批判胜山俊介的电影剧本《小林多喜二》」、『摘译』1974年第2期(1974年2月)156頁、K「妄图以小资产阶级人性论歪曲革命作家的形象――批判胜山俊介著电影剧本《小林多喜二》」文耀訳、『摘译』1975年第5期(1975年8月)3-10頁、勝山俊介「小林多喜二」斉邁、漳泉訳、『摘译』1975年第5期(1975年8月)11-91頁、「资料：小林多喜二简介」、『摘译』1975年第5期(1975年8月)91頁などが見られる。

331　訳者「译后记」、小林多喜二『蟹工船』葉渭渠訳(人民文学出版社、1973年10月)117-118頁。

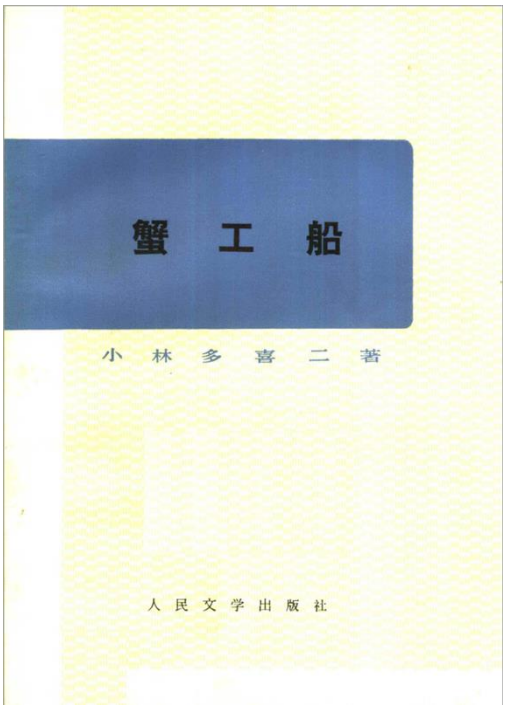
『沼尻村』



『不在地主』



『蟹工船』



訳本にある小林の写真

また、すべての訳本において、「译后记」が付けられている。内容的にすこし違っているが、全体的に見れば、その構成は以下のように極めて類似している。

『沼尻村』：

小林多喜二于一九〇三年十月出生在日本秋田县的一个贫苦农民的家庭里，曾经作过面包工人和银行职员，从二十四岁起就积极参加工农斗争和革命文学运动，并于一九三一年加入日本共产党，(中略)。牺牲时年仅二十九岁，但他为日本革命和日本的无产阶级文学作了很大的贡献。(中略)《沼尾村》是他的代表作之一。二十世纪二十年代前后，资本主义世界发生了一次严重的经济危机，这次危机的风暴也猛烈地袭击了日本，而日本农村所受到的冲击最为严重。

【小林多喜二は一九〇三年十月、日本の秋田県の貧農家に生まれ、パン工場で手伝い、銀行に勤務し、二十四歳から労農闘争と革命文学運動に積極的に参加して、一九三一年日本共産党に入党し、(中略)犠牲になった時はわずか二十九歳であり、日本革命と日本のプロレタリア文学のために大いに貢献した。(中略)『沼尻村』は彼の代表作の１つである。二十世紀二十年代において、資本主義世界では深刻な経済危機が発生した。この危機のあらしが日本をも席巻し、その中で日本の農村に与えた衝撃が最も大きかった。】(『沼尻村』101-102頁)

『不在地主』：

小林多喜二，1903年10月出生于一个贫苦农民家庭，1931年10月参加日本共产党。由于他为日本无产阶级的解放事业积极斗争，坚持革命文学活动，(中略)。在小林多喜二战斗的一生中，留下了不少重要的作品，《在外地主》就是其中具有代表性的一部。(中略)第一次世界大战后，从二十年代初期到中期，日本发生经济危机，人民生活愈来愈苦。

【小林多喜二、1903年10月貧農家に生まれ、1931年10月日本共産党に入党した。日本のプロレタリアートの解放の事業のために積極的に闘争し、革命文学運動のために努力を続ける。(中略)戦闘的な一生の中で、重要な作品を数多く残している。『不在地主』はその中で代表的な一作である。(中略)第

一次世界大戦後、二十年代初期から中期まで、日本で経済危機が発生し、民衆の生活がますます苦しくなる。】(『不在地主』150頁)

『蟹工船』：

小林多喜二于一九〇三年十月出生在一个贫苦农民的家庭，后来在高等商科学校毕业，当过面包工人和银行职员。他从二十年代开始，投身革命运动，(中略)。他领导着日本的无产阶级文学运动，写下了许多富有战斗性的革命文芸作品和评论，为日本无产阶级革命事业和文学事业，做出了巨大的贡献。(中略)《蟹工船》是小林多喜二最主要的作品之一，发表于一九二九年，(中略)。当时，日本卷进了资本主义总危机的漩涡之中。

【小林多喜二は一九〇三年十月、貧農家に生まれて、その後高等商業学校から卒業し、パン工場の手伝いや銀行で勤務した。二十年代から、革命運動に身を投じる。(中略)日本のプロレタリア文学運動を率いて、戦闘性に富んだ革命文芸作品と評論を数多く描き、犠牲になった時はわずか二十九歳であり、日本のプロレタリア革命事業と文学事業のために大いに貢献した。(中略)『蟹工船』は小林多喜二の最も重要な作品の一つであり、一九二九年に発表された。(中略)その当時、日本が資本主義の大きな危機の渦の中に巻き込まれている。】(『蟹工船』115-116頁)

上記の３つの「译后记」において、訳者はまず「短暂而伟大【短いが、偉大な】」(『不在地主』150頁)小林多喜二の一生をまとめ、その中で特に生涯にわたって革命運動に従事したことを強調し、そして小林が革命文学運動に大いに貢献し、プロレタリア作家としての地位を確立したと述べ、最後に該当する翻訳作品の重要性とそこに反映された「资本主义世界发生了一次严重的经济危机【資本主義世界で深刻な経済危機が発生した】」ということに頻繁に言及した。訳者は「译后记」において、以上のように同じ図式に従う傾向が見られる。「労農闘争」、「資本主義の大きな危機」など類似した「文革言語」[332]が頻繁に使用され、様式化されていると考えられる。

332　劉瓊「文革语言研究」(山東大学修士学位論文、2006年5月)、劉苹、李松「“文革”语言特征研究述评」、『重庆理工大学学报』(社会科学)2013年第4期(2013年4月)77-81

4.1.2.2　翻訳テクスト

文化大革命期に出版された小林多喜二作品の訳者について、『沼尻村』の訳者は李徳純、『不在地主』は李芒、『蟹工船』は葉渭渠である。３人とも中国における日本文学研究の権威である。そのため、訳本の質がかなり高い。文革期に翻訳された小林作品には、誤訳がほぼ見られない。３作にある誤訳を、以下のように例として挙げる。

原作	訳文
皆は死ぬことを覚悟した。漁夫は何時でも「安々と」死ぬ覚悟をすることに「慣らされて」いた。(38頁)	环境迫使渔工们都“习惯”于作好随时“无辜”死去的思想准备。 【環境が漁夫たちが何時でも「罪なく」死ぬ覚悟をすることに「慣らさせられて」いた。】(『蟹工船』38頁)
然し、初め皆はやっぱり、分らない言葉を云ったり、髪の毛や眼の色の異う外国人であるということが不気味だった。(38頁)	不过，这些外国人说话听不懂，肤色又不同，起初大家还是有点不太自然。 【然し、この外国人たちが分らない言葉を云ったり、髪の毛が異ったり、初め皆はやっぱり、すこし不自然に感じた。】(『蟹工船』39頁)

以上のように、『蟹工船』において、初めてロシア人に出会った漁夫たちの「不気味さ」が「不自然」に、いつでもどこでも死ぬことを覚悟している漁夫の死が「安々と死ぬ」が「罪なく死ぬ」に翻訳された。しかし、このような誤訳は、数は少なく、作品の主旨を理解するのに全体的に差し障りはないと考えられる。

また、訳文において、以下の意訳も見られる。

頁、李雅静「“文革”时期标语研究」(河北大学修士学位論文、2016年5月)などを参照した。

原作	訳文
それに、中積船には日附の違った何通りもの手紙、シャツ、下着、雑誌などが送りとゞけられていた。(中略)彼等はその何処からでも、陸にある「自家」の匂いをかぎ取ろうとした。乳臭い子供の匂いや、妻のムッとくる膚の臭いを探した。(64頁)	交通船还带来了许多发信日期不同的信件、衬衫、内裤、杂志之类的物品。(中略)他们渴望从这些物品中嗅到一些“家乡”的气息，嗅到孩子的乳臭和妻子肌肤的芳香。 【それに、中積船には日附の違った何通りもの手紙、シャツ、下着、雑誌などが送りとゞけられていた。(中略)彼等はその何処からでも、「自家」の匂いをかぎ取ろうとした。乳臭い子供の匂いや、妻のムッとくる膚の香りを探した。】(『蟹工船』66頁)
いやしくも監督に対し、少しの反抗を示すときは銃殺されるものと思うべし。(87頁)	如有违抗监督者，格杀勿论。 【いやしくも監督に対し、反抗を示すものがあれば、切り捨て御免。】(『蟹工船』93頁)
領海内に入って漁をするために、船を入れるように船長が強要された。船長は船長としての公の立場から、それを犯すことは出来ないと頑張った。(88頁)	监工强迫船长把船开入俄国领海捕蟹，船长依照国际公法的规定，坚持不让侵犯别国的领海。 【ロシアの領海内に入ってカニ漁をするために、船を入れるように船長が監督に強要された。船長は国際法の規則に従って、他国の領海を犯すことは出来ないと頑張った。】(『蟹工船』94頁)
毎年の例で、漁期が終りそうになると、蟹	按每年惯例，在渔汛快过的时候就要特制“贡品”蟹肉罐头。可是在特制时，是“很不恭敬”的，从来都不特地斋戒沐浴。往常渔工认为监工这种作法是对天皇的不敬。但是，这回的想法却完全不同了。 【毎年の例で、漁期が終りそうになると、

罐詰の「献上品」を作ることになっていた。然し「乱暴にも」何時でも、別に斎戒沐浴して作るわけでもなかった。その度に、漁夫達は監督をひどい事をするものだ、と思って来た。――だが、今度は異ってしまっていた。(103頁)	蟹罐詰の「献上品」を作ることになっていた。然し「乱暴にも」何時でも、別に斎戒沐浴して作るわけでもなかった。その度に、漁夫達は監督のやり方が天皇に対する不敬だ、と思って来た。――だが、今度は異ってしまっていた。】(『蟹工船』111頁)

訳者は原作にある「銃殺される」を「切り捨て御免」という中国の慣用句に置き換えた。また、漁夫の郷愁を表すとき、「妻のムッとくる膚の臭い」と比べ、「妻のムッとくる膚の香り」のほうが中国の読者が慣れている言語表現であることを意識し、翻訳したとも考えられる。そして、「公の立場」は「国際法の規則」に、「ひどい事をする」は「天皇に対する不敬」に意訳されており、文脈を詳しく説明するという傾向が見られ、意味的には訳文と原作との差異がほぼないと言える。また、『蟹工船』における「船長、大変です。Ｓ・Ｏ・Ｓです」(23頁)における「Ｓ・Ｏ・Ｓ」が「緊急求救信号【救援を求める緊急信号】」(21頁)に翻訳されており、その後に出現した「Ｓ・Ｏ・Ｓ、Ｓ・Ｏ・Ｓ、これが二、三度続いて、それで切れてしまいました」(25頁)における「Ｓ・Ｏ・Ｓ」に「海上轮船遇难的紧急求救信号【船舶が遭難時の救援を求める緊急信号である】」(23頁)という注釈を付けられた。訳文全体から見れば、誤訳が少なく、違和感が感じられず、構造的にバランスが取れている。

原文の削除について、『沼尻村』と『不在地主』の訳文ではほぼ見られないが、『蟹工船』の中で、以下の段落の下線部分が削除された。

> トモのハッチに近く、蟹の脳味噌の匂いがムッとくる。網が山のように積まさっている間に、高さの跛な二つの影が佇んでいた。
>
> 過労から心臓を悪くして、身体が青黄く、ムクンでいる漁夫が、ドキッ、ドキッとくる心臓の音でどうしても眠れず、甲板に上ってきた。(中略)――すぐ考え込まされた。その時、網と網の間に誰かいるのに、漁夫が気付いた。
>
> 蟹の甲殻の片を時々ふむらしく、その音がした。
>
> ひそめた声が聞こえてきた。
>
> 漁夫の眼が慣れてくると、それが分ってきた。十四、五の雑夫に漁夫が何

か云っているのだった。(中略)然し、そのまゝ動かなくなった。――その瞬間だった。柔かい靄の中に、雑夫の二本の足がローソクのように浮かんだ。下半分が、すっかり裸になってしまっている。それから雑夫はそのまま蹲んだ。と、その上に、漁夫が蟇のように覆いかぶさった。それだけが「目の前」で、短い――グッと咽喉につかえる瞬間に行われた。見ていた漁夫は、思わず眼をそらした。酔わされたような、撲ぐられたような、興奮をワクワクと感じた。

漁夫達はだんだん内からむくれ上ってくる性慾に悩まされ出してきていた。四ヵ月も、五ヵ月も不自然に、この頑丈な男達が「女」から離されていた。――函館で買った女の話や、露骨な女の陰部の話が、夜になると、きまって出た。一枚の春画がボサボサに紙に毛が立つほど、何度も、何度もグルグル廻された。

……

床とれの、

こちら向けえの、

口すえの、

足をからめの、

気をやれの、

ホンに、つとめはつらいもの。

誰か歌った。(中略)「畜生、困った！どうしたって眠れないや。」と、身体をゴロゴロさせた。「駄目だ、仆が立って！」

「どうしたら、えゝんだ！」――終いに、そう云って、勃起している睾丸を握りながら、裸で起き上ってきた。大きな身体の漁夫の、そうするのを見ると、身体のしまる、何か凄惨な気さえした。度胆を抜かれた学生は、眼だけで隅の方から、それを見ていた。(中略)「閉めろッ！今、入ってくると、この野郎、タタキ殺すぞ！」(『蟹工船』42-45頁)

便所から、片側の壁に片手をつきながら、危い足取りで帰ってきた酔払いが、通りすがりに、赤黒くプクンとしている女の頬ぺたをつッついた。

「何んだね。」

「怒んなよ。――この女子ば抱いて寝てやるべよ。」

そう云って、女におどけた恰好をした。皆が笑った。（中略）

「この前、竹田って男が、あの沖売の女ば無理矢理に誰もいねえどこさ引っ張り込んで行ったんだとよ。んだけ、面白いんでないか。何んぼ、どうやっても駄目だって云うんだ……。」酔った若い男だった。「……猿又はいてるんだとよ。竹田がいきなりそれを力一杯にさき取ってしまったんだども、まだ下にはいてるッて云うんでねか。――三枚もはいてたとよ……。」男が頸を縮めて笑い出した。（『蟹工船』13-14頁）

翻訳者が以上の性的描写を意図的に省略する理由は、文革期において、国民は基本的に禁欲主義を要求されており[333]、男女関係に対する言及も社会のタブー[334]として忌避されており、文学作品で文字にしているのもことさら数える程しかない[335]という当時中国の社会背景に関わっている。これを踏まえて、翻訳作品における性的描写も文革期の中国社会に受け入れられなかったと考えられる。文革期に刊行された翻訳雑誌『摘译』の何篇かの文学作品に、作品に出てくる「一些黄色内容的段落、字句，已经译者作了删节【ポルノ的な段落及び字句を訳者はすでに削除した】」[336]という訳注が付けられた。『摘译』に掲載された文学作品のみならず、小松左京『日本沉没』（李徳純訳）、有吉佐和子『恍惚的人』（秀豊・渭慧訳）などの単行本の場合も同じで、原文テクストにある性的描写がほぼ削除された。

『蟹工船』において、同じ理由で、以下のように省略、意訳、訳注に特別な意味づけをすることなどの翻訳手法も使われた。例えば、原作テクストの「あの白首、身体

333　李秉奎『狂澜与潜流：中国青年的性恋与婚姻（1966-1976）』（社会科学文献出版社、2015年7月）55頁。

334　馬慧嬌「『文革』期における日本文学翻訳に関する一考察――単行本のテクスト対照を中心に」、『饕餮』第21号（2013年9月）25-49頁。

335　楊健『文化大革命中的地下文学』（朝華出版社、1993年1月）325頁を参照した。

336　揚・潘傑列耶維奇・徳魯采「榲桲飘香」（作家名原文不明、作品名原文不明）孫培倫訳、『摘译』1976年第6期（1976年6月）148頁、米哈依爾・阿列謝耶夫「俄罗斯的田野」（Михаил Алексеев, *Русское поле*, 1972）復旦大学外語系俄語専業75届工農兵学員集体翻訳、『摘译』1975年第4期（1975年7月）70頁などの翻訳作品から見られる。

こったらに小せえくせに、とても上手えがったどオ」にある「とても上手えがったどオ」は「とても……」に翻訳された。省略記号を使って、余白を残し、読者の想像に委ねていたと考えられる。

原作	訳文
「あの白首、身体こったらに小せえくせに、とても上手えがったどオ！」（10頁）	“那个婊子，个子虽小，可……” 【「あの白首、身体こったらに小せえくせに、とても……」】（『蟹工船』5頁）
「あッ、もッちょこい！」沖売の女が頓狂な声を出して、ハネ上った。「人の尻さ手ばやったりして、いけすかない、この男！」（13頁）	“嗳呀，不害臊的。”做小买卖的女郎大嚷着跳了起来，说：“乱摸人家，讨人嫌呵！这个臭家伙。” 【「あッ、もッちょこい！」沖売の女が頓狂な声を出して、ハネ上った。「人を触ったりして、いけすかない、この男！」】（『蟹工船』9頁）
おそゝにかつれて困っている、 三銭切手でとゞくなら、 おそゝ罐詰で送りたい――かッ！ やけに大声で「ストトン節」をどなった。（64頁）	有人自暴自弃地大声哼起《斯东小调》①。 ① 大正末期在关东地方流行的一种淫荡曲调。 【やけに大声で「ストトン節」①をどなった。 ① 大正末期に関東地方で流行した一種のみだらな歌謡。】（『蟹工船』67頁）
「イヤ、大変さ。ガブガブ飲みながら、何を話してるかって云えば――女のアレがどうしたとか、こうしたとかよ。」（71頁）	“哎哟，真够呛！他们在大吃大喝呀。你猜他们扯些什么。原来是东拉西扯女人的事儿。” 【「イヤ、大変さ。ガブガブ飲みながら、何を話してるかって云えば――女のことをとりとめなく話してるよ。」】（『蟹工船』

75頁）

しかし、『不在地主』において、以下の部分は削除修正の対象にはならなかった。

小指程のちんぽの先きが、露のようにしめっていた。（113頁）

暑苦しいので寝られずにいた母親が、眼をさまして声をかけた。お恵はだまったまゝ上ってきた。寝床のそばで、暗がりに伊達巻を解くシュウシュウという音だけがした。（147頁）

「な、ええオ――イ、勝見さんよ、ボヤ、ボヤしてると、キンタマの毛ッこひん抜かれてしまうべよ。」（155頁）

訳者は上記の段落における性器に関わる表現、性を暗示する描写などに「削除すべき要素」を認めておらず、訳者の判断により「削除すべき要素」に該当していないとされたためであると考えられる。作品における性的描写が禁じられていたということは大まかで暗黙の翻訳方針として存在しているが、どの部分が「ポルノ的な要素」であるか、どの部分が削除すべきかなど、各作品における具体的な翻訳ストラテジーが訳者によりそれぞれ決められたと推測できる。

そして、次のように、主語が抜けた「それを何より恐れていた」や「その事を巧みに『国家的』富源の開発ということに結びつけて」という原文テクストに対して、訳者は翻訳テクストにおいて主語の「資本家」を追加した。日本語の中で省略が許容される主語は中国語では一般的に省略されないため、翻訳者は中国人読者の読解習慣に合わせて、文の中で主語である「資本家」を補ったと理解することができる。また、「その金の出所」、「あっちの方」、「金持」、「大金持」は直訳しておらず、意図的に「資本家」と結びつけるところも散見する。『蟹工船』の訳文において、「資本家」という言葉に繰り返し触れており、中国人読者に自らの階級を自覚させ、それにより、ある程度そもそも原作に表現された「２つの階級間の対立」を一層明確にしたと思われる。

原作	訳文
函館の労働組合は蟹工船、カムサツカ行の漁夫のなかに組織者を入れることに死物狂いになっていた。青森、秋田の組合などとも連絡をとって。――それを何より恐れていた。(14頁)	函馆的工会拚命想派一些工作人员到开往堪察加的蟹工船上做渔工的工作。同青森、秋田等地的工会，也取得了联系。――资本家对此比什么都害怕。 【函館の労働組合は蟹工船、カムサツカ行の漁夫のなかに組織者を入れることに死物狂いになっていた。青森、秋田の組合などとも連絡をとって。――資本家はそれを何より恐れていた。】(『蟹工船』12頁)
そこでは誰をも憚らない「原始的」な搾取が出来た。「儲け」がゴゾリ、ゴゾリ掘りかえってきた。しかも、そして、その事を巧みに「国家的」富源の開発ということに結びつけて、マンマと合理化していた。(52頁)	资本家在那儿，可以肆无忌惮地进行原始的剥削。利润就是这样子源源流进资本家的腰包。而且，资本家将这种剥削巧妙地同开发“国家的”资源结合起来，使之合理化了。 【資本家はそこで、誰をも憚らない「原始的」な搾取が出来た。「儲け」がゴゾリ、ゴゾリ掘りかえってきて、資本家の懐に入った。しかも、そして、資本家はその事を巧みに「国家的」富源の開発ということに結びつけて、マンマと合理化していた。】(『蟹工船』52頁)
「ところが、金持はこの船一艘で純手取り	“而资本家光仗这一条船就可以实赚四五十万元。喏，这就是资本家发财之道，无本生利嘛。(中略)说到底，资本家怕咱们，咱们用不到怕资本家。(中略)资本家的钱，是靠剥削咱们挣来的啊！没有咱们工人也就没有资本家……” 【「ところが、資本家はこの船一艘で純手

四、五十万円ッて金をせしめるんだ。――さあ、んだら、その金の出所だ。無から有は生ぜじだ。(中略)底のことになれば、うそでない、あっちの方が俺達をおッかながってるんだ。ビクビクすんな。(中略)俺達から搾り取って行きやがった金なんだ。――金持と俺達とは親と子なんだ……。」(91頁)	取り四、五十万円ッて金をせしめるんだ。――さあ、んだら、それは資本家の金の出所だ。無から有は生ぜじだ。(中略)底の底のことになれば、うそでない、資本家の方が俺達をおッかながってるんだ。俺達が資本家に対してビクビクすんな。(中略)俺達から搾り取って行きやがった資本家の金なんだ。――資本家と俺達とは親と子なんだ……。」】(『蟹工船』97-98頁)
	“我现在才明白，咱们只有依靠自己，再没人帮助我们了。”“什么帝国军舰，叫得倒漂亮，其实还不是大资本家的走狗。什么帮助老百姓，真笑话，去他妈的吧。”
「俺達には、俺達しか、味方が無えんだな。始めて分った。」「帝国軍艦だなんて、大きな事を云ったって大金持の手先でねえか、国民の味方？おかしいや、糞喰えだ！」(103頁)	【「俺達には、俺達しか、味方が無えんだな。始めて分った。」「帝国軍艦だなんて、大きな事を云ったって大資本家の手先でねえか、国民の味方？おかしいや、糞喰えだ！」】(『蟹工船』110頁)

小林多喜二の作品の訳文において、訳者は以下のように「文革言語」を常用し、翻訳する傾向も見られる。例えば、社会主義中国が成立してから、「老爷【旦那さま】」、「少爷【若旦那・坊ちゃま】」、「太太【奥さま】」、「小姐【お嬢さま】」などが旧社会の呼称語と見なされ、用いられなくなり、その代わりとして、文革期において、共産主義的な色合いの濃い「同志」が一般的な呼称として定着するようになった[337]。『沼尻村』の翻訳テクストにおいて、「旦那様」を使うことにより、ブルジョア階級の観念を反映し、それを通して作中人物を批判する傾向が見られる。また、『蟹工船』の翻訳テクストにある「侵略されたくないものは、団結せよ！」の「団結

337　李錚強「時代とともに変化してきた呼称語」、『中国語の環』第102号(2016年4月)14頁。

せよ」は、共産党宣言のスローガン「万国の労働者よ、団結せよ！」から由来し、文革前から文革期にかけて、「全世界无产者联合起来反对我们的共同敌人」[338]、「关于国际共产主义运动总路线的建议——中国共产党中央委员会对苏联共产党中央委员会 一九六三年三月三十日来信的复信」[339]など、『人民日报』の社説において繰り返し唱えられた。そのほか、「堕落分子」、「反動派」、「造反」、「変節分子」、「裏切り者」などの「文革言語」も翻訳テクストにおいて多用された。

原作	訳文
病人様(8頁)	病号老爷【病人になった旦那様】(『沼尻村』4頁)
ダラ幹(28、40、41頁)	蜕化分子【堕落分子】(『沼尻村』27、41頁)
反動になる、反動どもの懐(45、82頁)	变成反动派、反动派的怀抱【反動派になる、反動派の懐】(『沼尻村』47、92頁)
仕事の合間々々(107頁)	劳动的余暇【労働の合間々々】(『不在地主』1頁)
「監獄部屋」(161頁)	“猪仔馆”【「豚小屋」】(『不在地主』64頁)
謀叛(192頁)	造反【造反】(『不在地主』100頁)
不穏分子(204頁)	捣乱分子【攪乱分子】(『不在地主』114頁)
叛逆(49頁)	造反【造反】(『蟹工船』49頁)
「殺されたくないものは来れ！」(84、85	“不愿被宰割的人们，联合起来！”【「侵略

338 「全世界无产者联合起来反对我们的共同敌人」、1962年12月15日『人民日报』。

339 「关于国际共产主义运动总路线的建议——中国共产党中央委员会对苏联共产党中央委员会 一九六三年三月三十日来信的复信」、1963年7月20日『人民日报』。その他、「关于国际共产主义运动总路綫的建議」、編集者不明『关于国际共产主义运动总路线的论战』(人民出版社、1965年3月)5頁も参照した。

頁)	されたくないものは、団結せよ！」】(『蟹工船』90頁)
寝がえり者(49頁)	变节分子【变節分子】(『蟹工船』104頁)
「不届者」(102頁)	“破坏分子”【「破壊分子」】(『蟹工船』110頁)
「不忠者」(102頁)	“叛徒”【「裏切り者」】(『蟹工船』110頁)

また、『不在地主』の訳文において、原文テクストの「女は女同志」は、次のように「婦女が婦女と団結」、「婦女が婦女を同情」に翻訳された。文革期において、「婦女の力」が重要視される傾向が見られる。

原作	訳文
伴の家では、伴のお内儀さんや阿部のお内儀さんも出て来て、てきぱきと家の中の細かい仕事を片付け、――暇々には、小作の家を廻って歩いて「女は女同志」その方からも結束を固めていた。(212頁)	在伴的家里，伴的老婆和阿部的老婆都出马了。她们爽爽利利地做完家里的一切琐事，一有功夫，就到佃农家去串门儿。“妇女团结妇女”，把妇女们也紧密地团结起来了。【伴の家では、伴のお内儀さんや阿部のお内儀さんも出て来て、てきぱきと家の中の細かい仕事を片付け、――暇々には、小作の家を廻って歩いて「婦女が婦女と団結」その方からも結束を固めていた。】(『不在地主』124頁)
	留在家中的农妇也不能安闲度日。她们说是‘妇女同情妇女’，而欲向地主太太请愿。五位农妇留下老人和儿童，背井离乡来樽。她们身穿发硬的衣服，脚穿积满灰土的鞋子，露出红呢子裹腿，背着幼儿……”云云。

留守宅の細君等も安閑として日を過ごすことが出来ない。「女は女同志」奥様にお願いをしようというので、家に老人や子供を残し、村を後に出樽した五名の妻君はゴワゴワの木綿着物に澱粉靴をはき、毛布の赤いキャハンを出して、幼児を背に……云々。(225頁)	【留守宅の細君等も安閑として日を過ごすことが出来ない。「婦女が婦女を同情」奥様にお願いをしようというので、家に老人や子供を残し、村を後に出樽した五名の妻君はゴワゴワの木綿着物に澱粉靴をはき、毛布の赤いキャハンを出して、幼児を背に……云々。】(『不在地主』139-140頁)

小林作品『不在地主』の訳文のみならず、文革期の翻訳者は、作者の女性という身分と作品に登場する女性を常に意識していると考えられる。例えば、訳文や評論の後記にて、「作者は女性である」[340]と明記した。また、『摘译』1974年第6期に掲載されたアメリカの「文艺动态」を紹介する記事「授奖仪式怪事多」にて、以下のように述べられている。

> 女诗人艾德里安娜・里奇的《潜入破船：1971-1972年的诗歌》(中略)获诗歌奖。艾德里安娜・里奇的获奖声明从侧面反映了美国当前妇女解放运动的高涨。她宣布她代表自己和另外两个候选的女诗人——艾丽丝・沃克和奥德里・洛德——以妇女的名义领奖，因为妇女的声音在这个“父系世界”里一直被置若罔闻。
>
> 【女性詩人アドリエンヌ・リッチの「難破船へ潜る——1971-1972年の詩歌」は(中略)詩歌賞を受賞した。アドリエンヌ・リッチの受賞声明は、アメリカにおける目下の盛り上がった婦女解放運動を間接的に反映している。自分ともう２人の候補の女性詩人——アリス・ウォーカーとオードリー・ロード——を代表して婦女の名で賞を受けると宣言する。婦女の声がこの「父系

340　克裏斯廷・亨特『我是怎样经营起食品杂货业的』(Kristin Hunter, *How I Got into the Grocery Business*, 1972)程征訳、『摘译』1974年第1期(1974年2月)46頁、尤金妮亜・科利爾『山芋馅饼』(Eugenia Collier, *Sweet Potato Pie*, 1972)程征訳、『摘译』1974年第1期(1974年1月)64頁、「美国黑人女诗人举行集会纪念菲利斯・惠特利的诗集出版二百周年」、『摘译』1974年第2期(1974年2月)171-172頁。

社会」においてずっと無視されているためである。】[341]

「授奖仪式怪事多」の編集者は、「婦女解放運動」、「婦女の名で」、「婦女の声」、「父系社会」などのキーワードを用いて、世界中における婦女解放という意識の覚醒が描かれた。1976年3月に人民文学出版社より出版された『日本のシナリオ「砂の器」、「望郷」』の「出版说明」においても、「日本劳动妇女的解放，同日本整个无产阶级的解放是不可分割的【日本労働婦女の解放は、プロレタリア全階級の解放と切り離すことができない】」[342]という文言が見られる。

新中国建国以降、マルクス主義的男女平等観により、「婦女解放」という旗が公的に掲げ続けられている。1949年9月に制定された「中国人民政治協商会議共同綱領」は「中華人民共和国は、婦人を束縛する封建制度を廃止する。婦人は政治的、経済的、教育文化的社会的生活の各方面において、すべて男子と平等の権利を有する」[343]という政策を掲げ、それにより、法律上、男女同権が明確に定められた。また、文革の時期に至っては、大躍進政策の後遺症として、農業も工業も労働力不足の問題が生じており、男性が農業から経済収益率のより高い工業部門へと移転していく[344]とともに、農業における空隙を埋めるため、婦女は男性の仕事を引き受けることとなり、社会主義建設への参加が求められた。それと同時に、婦女は「労働婦女」という身分に「昇格」させられた。労働婦女を動員するために、毛沢東の言葉「女性は天の半分を支える」などが頻繁に用いられた。

---

341 「授奖仪式怪事多」、『摘译』1974年第6期(1974年2月)108頁。

342 「出版说明」、橋本忍、山田洋次、広沢栄、熊井啓『日本电影剧本《沙器》《望乡》』訳者不明(人民文学出版社、1976年3月)2頁。

343 「中国人民政治協商会議共同綱領」(1949年9月)、『季刊法律学』第17号(1954年1月)153-157頁。中国における婦女解放運動について、潘允康『在亚社会中的沉思——社会学者对社会的警告』(中国婦女出版社、1989年3月)134頁、譚琳、姜秀花主編『中国妇女组织发展的理论与实践』(社会科学文献出版社、2007年12月)369-375頁、末次玲子『二〇世紀中国女性史』(青木書店、2009年5月)328頁などを参照した。

344 金一虹「振り返り再考する——中国文化大革命期のジェンダーと労働、そして『鉄の娘』運動——」大橋史恵訳、『ジェンダー史学』第6号(2010年)5-28頁を参照した。

また、婦女解放を唱えるという文革期の政策は、文学作品にも反映していた。例えば、伝統京劇を改編した「革命模範劇」において、短髪、軍装を身につける[345]女性主人公「鉄の娘」[346]がよく見られる。婦女解放の呼びかけは文革期の外国文学の翻訳ストラテジーにも及んでいたのである。

4.1.3　まとめ

小林多喜二の作品が最初に翻訳された1930年から、1966～1977年の文革期まで、さらに現在まで、中国の学術界で、政治イデオロギーの影響を受け、小林に対する評価は終始一貫している。その人物は「優秀なプロレタリア文学の代表者」、「革命者」であり、その作品は「進歩」的で、「戦闘性に富んだ革命文芸作品」である。

文革期において、小林多喜二の３作『沼尻村』、『不在地主』、『蟹工船』がすべて中国の民衆を指導する「公開翻訳」として出版された。小林の翻訳作品には、誤訳がほぼ見られず、訳本の質はかなり高いと言える。また、翻訳テクストから見れば、当時、外国作品のごく大まかな翻訳方針が存在していたが、性的描写のような、「問題がある」と翻訳者に見做された描写に対して、どの部分を削除すべきかなど、各作品における具体的な翻訳ストラテジーは統一されておらず、すべて翻訳者により決められたと考えられる。訳文において、訳者は意図的に「資本家」という言葉を繰り返し使っており、階級間の対立を中国の読者に意識させる傾向が見られる。また、「文革言語」の多用と「婦女の力」の重視も見られる。

345　田村容子「革命叙事と女性兵士――中国のプロパガンダ芸術における戦闘する女性像」、『地域研究』14巻2号(2014年2月)92-111頁。

346　文革期に作られた「鉄の娘」の形象について、秋山洋子「中国女性NGOの発展　解題」、『国立女性教育会館研究ジャーナル』第11号(2007年8月)119-120頁、呉麗萍「文化大革命中的女紅衛兵」、『二十一世紀』第68期(香港中文大学、2007年11月)、金一虹「振り返り再考する――中国文化大革命期のジェンダーと労働、そして『鉄の娘』運動――」大橋史恵訳、『ジェンダー史学』第6号(2010年)5-28頁、加藤靖子「中国における女性の就業・教育・政治参加――改革開放前後を中心に――」、『東京大学大学院教育学研究科紀要』第53巻(2013年)43-53頁、李妍淑「中国のジェンダー法政策推進過程における婦女聯合会の役割(2)」、『北大法学論集』第65巻第6号(2015年3月)225-283頁などを参照した。

第2節　三島由紀夫文学の翻訳①――『憂国』

中国の文革期において、単行本として翻訳された日本の文学作品は合計２３冊あり、その中で、最も多く翻訳された日本の作家は三島由紀夫である。「三島事件」発生から１年後の1971年11月に、三島作品『憂国』が人民文学出版社に「内部翻訳」として刊行された。その後、『春の雪』、『奔馬』、『暁の寺』、『天人五衰』の全４巻から成る『豊饒の海』も内部的に出版された。

三島は日本の近現代文学史において無視できない作家の一人であるが、政治的イデオロギーに従って文学作品を選別する文革の頃、なぜこれほどまでに注目されたのだろうか。『憂国』の翻訳に掲載された「出版説明」や「反动作家、右翼法西斯分子三岛由纪夫――其人其作品及其思想简介」[347](以下、略称「三島研究資料」)などの評論[348]から見ると、一言でいうと、「批判」するためである。

本節は、先行研究を踏まえつつ、三島由紀夫と1971年に出版された『憂国』に焦点を当て、文革期における三島作品の翻訳のしかたと、それが文革後の三島評価に及ぼした影響を解明する。

4.2.1　中国における三島文学の翻訳

4.2.1.1　文革期における三島文学の翻訳

347　作者不明「反动作家、右翼法西斯分子三岛由纪夫――其人其作品及其思想简介」(原載『参考资料文艺专辑』第60期、1970年12月)、日本反動作家　三島由紀夫『忧国』訳者不明(人民文学出版社、1971年11月)1-19頁。全文は「三島研究資料」と略称する。

348　文革期に出版された三島由紀夫『忧国』において、掲載された評論は「三島研究資料」のみならず、作家不明「三岛由纪夫自编自导自演的反动色情电影《忧国》」(原載『参考资料文艺专辑』第60期、1970年12月)、53-59頁)という参考資料も、訳文の後に付録として添えられた。その内容は「三島研究資料」と類似しているため、本論文では詳述しない。

①三島由紀夫と文化大革命

三島由紀夫は川端康成、安部公房、石川淳と共に、文革開始から９ヵ月後の1967年2月28日に、『東京新聞』に以下の「文化大革命に関する声明」を連名で発表した。

> 昨今の中国における文化大革命は、本質的には政治革命である。百家争鳴の時代から今日にいたる変遷の間に、時々刻々に変貌する政治権力の恣意によって学問芸術の自律性が犯されたことは、隣邦にあって文筆に携はる者として、座視するには忍ばざるものがある。（中略）
>
> われわれは、学問芸術の原理を、いかなる形態、いかなる種類の政治権力とも異範疇のものとみなすことを、ここに改めて確認し、あらゆる「文学報国」的思想、またはこれと異形同質なるいはゆる「政治と文学」理論、すなはち、学問芸術を終局的には政治権力の具とするが如き思考方法に一致して反対する。[349]

三島が起草した[350]この声明文は、文革の幕開けに発表されたものであり、中国で文学創作の自由が圧殺されたとして文革に真正面から抗議したものである。「文化大革命に関する声明」に対して、中国側からは反論や抗言はなかった。しかし、毛沢東および彼が主導的な立場で遂行した文化大革命にとっては、三島らの行為はきわめて反動的なものであったと容易に推測できる。文革の初期から、三島由紀夫はこの声明により「中国の政治革命の敵となっており、それは最も許しがたい反革命的な作家」[351]として位置づけられたと考えられる。

三島はまた『論争ジャーナル』1969年2月号において「反革命宣言」[352]を発表し、

349　三島由紀夫、川端康成、安部公房、石川淳「文化大革命に関する声明」（原載『東京新聞』、1967年2月28日）、『三島由紀夫全集』（全35巻）「第35巻　補遺　雑纂　詩他」（新潮社、1976年4月）635頁。

350　川端康成「われわれはなぜ声明を出したか――芸術は政治の道具か?（座談会）」、『中央公論』1967年第6号（1967年5月）318-327頁を参照した。

351　テレングト・アイトル「アジアにおける三島文学：自決後40周年によせて」、『北海学園大学人文論集』第45号（2010年3月）69-70頁。

352　三島由紀夫「反革命宣言」（原載『論争ジャーナル』1969年2月号、収録『文化防衛

「われわれはあらゆる革命に反対するものではない」が、「護るべき日本の文化・歴史・伝統」を保持するため、「天皇の存在と相容れない」ため、また「言論の自由を守るため」、「われわれは共産主義に反対する」と記し、共産主義と日本における共産政権の誕生に対して強い危惧と断固たる反対を表明した[353]。「反革命宣言」は「明らかな反共宣言」であり、「共産主義と妥協する勢力への宣戦布告」[354]であった。1960年代末から、三島とその作品には「反文革」、「反共」という印が刻み付けられていたと考えられる。

②三島文学の翻訳――１回目の「三島が盛んに翻訳された時期」

中国において「三島が盛んに翻訳された時期」[355]は過去２回訪れた。1970年代と1990年代である。１回目は1970年代初頭から半ばまで続いた。上記したように、三島は「反文革」、「反共」的な作家だと位置づけられていた。そこに、「三島事件」が1970年11月25日に発生し、日本国内でも大きな論争を巻き起こした。中国では、日本の右翼勢力と軍国主義が再び立ち上がったのではないかという議論が現れ、政府が警戒し始めた。

「三島事件」発生から４日後の1970年11月29日に、『人民日报』に「日本军国主义复活的又一铁证」という社説が掲載された。「十一月二十五日，日本反动派经过精心

論』「第1部　論文」、新潮社、1969年4月)、『三島由紀夫全集』(全35巻)「第34巻　評論　10」(新潮社、1976年2月)9-25頁。

353　三島由紀夫と共産主義と文化大革命の関係について、李徳純「日本当代三作家」、『外国文学研究』1980年第2期(1980年)66-71頁、李徳純「“殉教美学”的毁灭」、『日语学习与研究』1987年第4期(1987年8月)46頁、王奕紅「《假面的告白》和《金阁寺》刍议」、陳敬詠、章祖徳主編『外国文学论集――世纪末的探索与思考』(訳林出版社、1997年)307頁を参考にした。

354　徳岡孝夫『五衰の人　三島由紀夫私記』(文藝春秋、1999年11月)86頁を参考にした。

355　中国における２回の「三島が盛んに翻訳された時期」について、朱雪琴「虹影与三岛由纪夫比较论」(華中科技大学修士学位論文、2006年5月)、久保田裕子「翻訳者・三島由紀夫と村上春樹の文化戦略」、『日本文学』(特集　近現代文学における〈交通〉)第57巻第11号(2008年11月)36-43頁、張明「论改革开放与中国对日本文学的翻译」(南京師範大学修士学位論文、2012年2月)などを参照した。

安排，在东京演出了一个由右翼法西斯分子三岛由纪夫用反动的武士道式的自杀来煽动日本军队搞政变，以加速军国主义化的所谓“三岛事件”【11月25日、日本反動派の入念な段取りのもと、東京で右翼ファシスト分子の三島由紀夫が行った反動的な武士道式の自殺により、日本の軍隊のクーデターをあおり立て、軍国主義化を急ぐための、いわゆる「三島事件」が演出された】」[356]と述べられている。1980年以前の『人民日报』において、三島由紀夫に言及する評論が合計１２篇[357]あり、三島は文革期において最も頻繁に論じられていた日本作家である。『人民日报』によると、三島の自殺に日本戦後の「軍国主義復活」との密接な繋がり[358]が見られる。

また、「中央文革領導小組」[359]も「三島事件」に注目し、三島の切腹自殺の動機を

---

356 「日本军国主义复活的又一铁证」、1970年11月29日『人民日报』。

357 1980年以前の『人民日报』において、三島由紀夫に言及する評論が合計１２篇である。内容的には極めて類似している。具体的には、以下の通りである。「日本军国主义复活的又一铁证」（1970年11月29日）、「一个危险的信号」（1970年12月4日）、「日本舆论强烈谴责日本反动派导演的“三岛事件”丑剧 日本人民必须加强反对军国主义的斗争　指出佐藤、中曽根之流和三岛是一丘之貉」（1970年12月4日）、「朝鲜《劳动新闻》就“三岛事件”发表评论 谴责美日反动派加速复活日本军国主义 指出佐藤反动统治集团是培植右翼法西斯组织的罪魁祸首」（1970年12月5日）、「无耻吹捧法西斯分子三岛　竭力贩卖军国主义思想 日本反动派利用“三岛事件”加速军国主义化」（1970年12月18日）、「三岛由纪夫阴魂不散 日本反动派为这个法西斯狂徒大搞“葬礼” 鼓吹继承“三岛精神”宣扬“武士道”和“大和魂”」（1971年2月20日）、「日本反动派力图恢复“天皇制” 要重建封建的军事法西斯专政，再走对外侵略扩张的老路」（1971年6月11日）、「揭穿佐藤政府搜罗炮灰的骗局——评日本反动影片《啊，海军》」（1971年7月20日）、「日本一小撮反华反共势力又在蠢动 “青岚会”叫嚷同蒋帮加紧“合作”破坏日中友好关系」（1974年2月2日）、「一个值得注意的动向」（1974年2月2日）、「猖狂反华反共 竭力煽动复活军国主义 日本一小撮右翼反动势力加紧活动 这是日本政局中一个值得注意的动向，它正遭到人民的强烈反对」（1974年3月17日）、「日本反华反共分子决没有好下场」（1974年3月23日）。

358 鈴木正信、浜勝彦「或る中国体験：混沌の時代・回想と省察」、『創大中国論集』第8号(2005年3月)182頁。

359 「中央文革領導小組」について、『文汇读书周报』に掲載された、文革期の三島作品の翻訳と携わった訳者の葉渭渠へのインタビューを参照した。また、文革期における三島作品の出版について、田雁は『日文图书汉译出版史』において「周恩来指示尽快译出三岛的书【周恩来は三島の本を早く翻訳するよう指示した】」と述べ、周恩

探ろうとして、その研究資料として、『憂国』の翻訳を北京大学の学者、卞立強に指示した[360]。文革期において、『憂国』に続き、『春の雪』、『奔馬』、『暁の寺』、『天人五衰』も批判のモデルとして内部的に出版された。１回目の「三島が盛んに翻訳された時期」が巻き起こった文革期においては、三島の実際の読者は限定的であった。中国の国民は三島を、日本文学の作家というより、軍国主義を復活させようとす

来の指示によるものだ。しかし、田雁の参照した張福生「我了解的“黄皮书”出版始末」によると、「1971年遵照周总理指示，出版社重新组建，恢复工作。当时发生了三岛由纪夫剖腹事件，上面有文件，明确指示尽快出版三岛的作品。很快，人民文学出版社就以“内部书”的名义出版了三岛的4部作品【1971年、周総理の指示により、出版社は再編成され、業務を再開した。その頃、三島由紀夫の割腹自殺事件が発生し、上層部から文書があって、三島由紀夫の作品を早く出版せよと明確に指示した。人民文学出版社はすぐ「内部翻訳」の名で三島作品を４冊出版した】」のである。周恩来と三島作品の出版との間には直接的な関係は見られない。張福生「我了解的“黄皮书”出版始末」の代わりに、田雁は人民文学出版社のソ連文学の編集者を務めていた孫縄武「关于“内部书”的杂忆与随感」を参照したという可能が考えられる。孫縄武は「关于“内部书”的杂忆与随感」の中で「作家三岛由纪夫在自卫队的集会上号召为日本帝国主义效忠，并当众剖腹自杀。周总理得知这件事后，即交待有关负责人通知人文社，尽快将三岛由纪夫主要作品译出，让我国社会人士了解这一动向，加强警惕【作家の三島由紀夫は、自衛隊の集会で日本帝国主義への忠誠を訴え、公衆の面前で割腹自殺した。三島由紀夫の主要作品を早急に翻訳するよう人民文学出版社に言い伝え、我が国の社会人がこの動きを把握して、警戒を強めていくと、このことを知った周総理は関連担当者に指示した】」と述べている。文革期の三島作品の翻訳を指示したのは、江青をはじめとする「中央文革領導小組」であるか、「周恩来」であるかについて、再考の余地がある。「让学者回归学者学术回归学术——访日本文学专家叶渭渠先生」、2005年10月14日『文汇读书周报』、田雁『日文图书汉译出版史』（南京大学出版社、2017年12月）214-215頁、張福生「我了解的“黄皮书”出版始末」、2006年8月23日『中华读书报』、孫縄武「关于“内部书”的杂忆与随感」（原載『中华读书报』2006年9月6日）、孫縄武『孙绳武诗文集』（人民文学出版社、2016年3月）221-222頁を参考にした。

360　1971月11日に人民文学出版社から出版された三島由紀夫『忧国』は、訳本の翻訳者が記載されていないが、李平が2003月4月8日に行った北京大学の学者卞立強へのインタビューによると、卞であると推測できる。李平「中国における日本文学研究の現況」、『日本文化研究』第9輯（2003年10月）7-20頁を参照した。

る日本反動派の１人であると考えていたふしがある。また、三島の作品を読める中国の学者たちもマルクス主義、毛沢東思想を基本にして研究を行い、国内と海外の情勢を念頭に置き、『憂国』および『豊饒の海』における政治性のみを掘り起こす傾向があった。

4.2.1.2　文革後の三島文学の翻訳

①1980年代における三島文学

1978年に、中国が「改革開放」の政策を打ち出し、民衆が文革期の思想的束縛から徐々に解放されることになり、中国の学者も外国文学に対して、政治や歴史と関係なく、次第に文学性という視点から作品を批評することができるようになった。

文革終了後、三島の翻訳は一時的に停止した。1986年12月に出版された『春の雪』[361]は文革後最初の三島の翻訳である。中国社会科学院の唐月梅が中国文聯出版社の編集者から日本の小説の翻訳を依頼され、中央委員会政治局の責任者に同意の指示を仰いだあとに、『春の雪』を訳した[362]。唐は作品の「前言」の中で、三島作品を翻訳した動機について、以下のように述べている。

> 三岛由纪夫是战后才正式走上文坛的日本著名小说家、剧作家，备受川端康成的推崇，也深受欧美读者的欢迎。(中略)由于他又是轰动一时的右翼政治家，这不能不影响到他的文学声誉，妨碍人们对他的文学创作进行全面的科学的研究和评价，或有选择地翻译介绍他的某些作品。但作为了解日本现代文学的发展，他的创作也还有加以研究讨论的余地。(中略)三岛的文艺观和创作实践是极为复杂的，翻译他的某些作品，并不等于赞同他的政治观点和文艺观点；同样，批判他的政治观点和文艺观点，也并无意味着否定他的全部创作。我们对于一个作家及其作品需要的是采取实事求是的态度，具体作品具体分析。译者译出他的这部《春雪》，意在从文学艺术的角度加以借鉴，倘使有助于读者了解现代日本文学的一个方面，译者也就感到满足了。

361　三島由紀夫『春雪』唐月梅訳(中国文聯出版社、1986年12月)。

362　唐月梅「日本文学与当代中国邂逅的命运」、『日本研究』2008年第1期(2008年3月)81-84頁。

【三島由紀夫は戦後本格的に文壇に登場した日本の著名な小説家、劇作家であり、川端康成に高く評価されており、欧米の読者にも大いに受けている。(中略)彼も世間を騒がせた右翼政治家であるため、彼の文学的名声に影響せざるを得ず、人々が彼の文学創作に対する全面的、科学的な研究と評価をすることに支障をきたし、また彼の一部の作品が意図的に翻訳、紹介されることになった。しかし、日本現代文学の発展を理解ためには、彼の創作を再検討する余地が残っている。(中略)三島の文芸理念と創作実践は極めて複雑であり、彼の作品を翻訳したのは、彼の政治観と文芸理念を賛同することではない。これと同様に、彼の政治観と文芸理念を批判したのは、彼のすべての創作を否定することを意味していない。一人の作家とその作品に対して、われわれに必要なのは実事求是の態度で具体的な作品に具体的な分析を加えることである。訳者が『春の雪』を翻訳したのは、文学の芸術という角度から作品を鑑賞するのを意図している。もし読者が現代日本文学の一方面を理解するのに役立つならば、訳者も満足である。】[363]

唐は「前言」の中で、中国で三島は「右翼政治家」として位置づけられたため、彼の文学創作に対する全面的、科学的な研究と評価が行われておらず、一部の作品が意図的に翻訳、紹介されたという文革期の翻訳方法を間接的に批判した。しかし、唐が提唱したのは、文革期の三島評価を完全的に覆すことではなく、「改革開放」の政策の１つ、すなわち「実事求是の態度」で文学の芸術という視点から作品を鑑賞することである。唐は、現代日本文学の一面を理解する上での三島研究の必要性と重要性を強調したが、三島の「政治観と文芸理念」をどのように解釈し、どのように位置付けるべきかということに対しては、唐は回答を示していない。文革終結後の1980年代になっても三島文学の研究には、依然として「一種の政治的な危険性をも伴」っていた[364]と考えられる。

363　訳者「前言」、三島由紀夫『春雪』唐月梅訳(中国文聯出版社、1986年12月)1-6頁。

364　テレングト・アイトル「アジアにおける三島文学：自決後40周年によせて」、『北海学園大学人文論集』第45号(2010年3月)70頁。

②1990年代における三島文学――２回目の「三島が盛んに翻訳された時期」

中国における三島文学研究の第一人者である唐月梅によって訳された『春の雪』を筆頭に、1980年代中期から三島の翻訳作品が増え、三島文学が中国で普及しつつある傾向が見られる[365]。1990年代に入ってから、三島文学の翻訳と研究も直ちに新しい段階に入った。

三島研究において、1994年に唐の著した『怪异鬼才三岛由纪夫传』[366]が出版された。唐が該当作品において日本の資料に基づき、三島の生涯を比較的忠実に、全面的に描出したことは、読者が三島由紀夫という人間を再認識する上で大いに役立ったと思われる。また、唐は「文艺上古典美之展现――三岛由纪夫美学思想的核心」[367]、「关于三岛由纪夫“武道”新论」[368]、「三岛由纪夫的一生」[369]、「鬼才三岛由纪夫的文学世界」[370]などの論文で、日本文化と審美思想の視点から、三島の美学と「武道」と三島作品における文学性を分析し、比較的肯定的な評価を下した。

また、中国社会科学院の教授であり、日本文学の専門家である葉渭渠も、中国における三島文学の普及に力を尽くしている。1996年5月に、葉と日本の千葉宣一とアメリカ出身のドナルド・キーンが共同編集した『三岛由纪夫研究』[371]が、中国最初の三島研究論文集として、開明出版社から出版された。『三岛由纪夫研究』は政治、伝統文化、美学という３つの要素から、三島とその作品における文学性を分析することを旨とする。葉は序文において、三島は中国の「歴史の特定の時期」に、「特定の政治概

365　王向遠『中国外国文学研究的学术历程』陳建華主編(重慶出版社、2016年9月)213-216頁を参照した。

366　唐月梅『怪异鬼才三岛由纪夫传』(作家出版社、1994年12月)。

367　唐月梅「文艺上古典美之展现――三岛由纪夫美学思想的核心」、『外国文学评论』1994年第4期(1994年)60-66頁。

368　唐月梅「关于三岛由纪夫“武道”新论」、『日本研究』1994年第2期(1994年)59-64頁。

369　唐月梅「三岛由纪夫的一生」、『外国文学』1994年第3期(1994年3月)3-7頁。

370　唐月梅「鬼才三岛由纪夫的文学世界」、『外国文学』1994年第3期(1994年3月)38-44頁。

371　葉渭渠、千葉宣一、ドナルド・キーン主編『三岛由纪夫研究』(開明出版社、1996年5月)。

念に位置付けられ」、「客観的で全面的な評価を受けていない」ため、この「新時期」に「三島由紀夫現象」を再認識すべきことを提唱した[372]。葉は三島研究を政治イデオロギーの束縛から脱却させ、独立した学術研究の方向に導き、彼の発表した「文学概念上の天皇制」と「精神革命」など[373]の三島研究理論は若手研究者たちに大きな影響を与えている。

唐、葉などの学者が築き上げた研究の基礎の上に、1990年代の半ばから、中国の学術界で三島文学への関心が高まり、２回目の「三島が盛んに翻訳された時期」が訪れることになった。中国で特に権威ある学術雑誌といえる『世界文学』[374]が1991年に、『外国文学』[375]が1994年に、三島の作品特集を掲載した。1994年から2000年にわたって、中国作家出版社から出版された三島作品シリーズが合計１０冊[376]あり、中国文聯出版社が出版した作品集が合計８冊[377]ある。短編小説集、散文随筆集から、歌舞伎戯

372　葉渭渠「序一」、葉渭渠、千葉宣一、ドナルド・キーン主編『三岛由纪夫研究』(開明出版社、1996年5月)1-8頁を参照した。

373　葉渭渠「“三岛由纪夫现象”辩析」、『外国文学』1994年第2期(1994年2月)68-75頁も参照した。

374　『世界文学』(日本作家三島由紀夫特集)1991年第1期(1991年)。

375　『外国文学』1994年第3期(1994年)。

376　1990年代において、中国作家出版社に翻訳された三島の作品シリーズが合計１０冊であり、三島由紀夫『弓月奇谈』申非、許金龍訳(作家出版社、1994年12月)、三島由紀夫『爱的饥渴 午后曳航』唐月梅、許金龍訳(作家出版社、1995年3月)、三島由紀夫『天人五衰』林少華訳(作家出版社、1995年5月)、三島由紀夫『假面自白 潮骚』唐月梅訳(作家出版社、1995年5月)、三島由紀夫『忧国 仲夏之死 短篇小说集』唐月梅等訳(作家出版社、1995年6月)、三島由紀夫『春雪』唐月梅訳(作家出版社、1995年6月)、三島由紀夫『金阁寺』唐月梅訳(作家出版社、1995年7月)、三島由紀夫『奔马』許金龍訳(作家出版社、1995年8月)、三島由紀夫『阿波罗之杯 散文随笔集』申非等訳(作家出版社、1995年10月)、三島由紀夫『晓寺』劉光宇、徐秉潔訳(作家出版社、1995年10月)。

377　1990年から2000年まで、唐月梅、葉渭渠が主編として、中国文聯出版社より、三島由紀夫の作品集が８冊出版された。具体的には、以下の通りである。三島由紀夫『三岛由纪夫小说集 禁色』楊炳辰訳(中国文聯出版社、1999年1月)、三島由紀夫『春雪』唐月梅訳(中国文聯出版社、1999年9月)、三島由紀夫『沉潜的瀑布』竺家栄訳(中国文聯出版社、1999年10月)、三島由紀夫『恋都』唐月梅、林青華訳(中国文聯

曲、旅行記、自伝まで、1990年代以前に重要視されていなかった三島作品が相次いで翻訳された。

しかし、1990年代にも、三島由紀夫の反動思想と切腹自殺という「武士道行為」への批判は続いた[378]。特に「抗日戦争・世界反ファシズム戦争勝利50年」の意義が付加された1995年という年に、武漢で開催予定の「三島由紀夫文学の国際シンポジウム」も政治的な理由で中止となった。李芒や文潔若などの学者は、文革期における三島への歴史の評価を覆そうとすることを旨とするこのシンポジウムに猛烈に反対し、政府機関に報告した。李は1999年に三島由紀夫をめぐる議論を思い返し、「三岛是顽固反华、反共、反民主、为法西斯激进分子大唱赞歌的反动作家，学界对三岛由纪夫及作品的接受是关乎政治大局的大是大非问题，关乎祖国和民族的尊严【三島は反中、反共、反民主、ファシズムの急進派のために、賛歌を歌う頑迷な反動作家であり、学界における三島とその文学の受け入れは政治の大局における是非の問題に関わり、祖国と民族の尊厳に関わるものである】」[379]と論じている。主催者の一人である葉は、李と文が三島作品を政治的に利用し、国民の「民族感情」を煽りたてるというのは「文革式の卑劣な手段」だと批判した[380]。

③２１世紀以降の三島文学

２１世紀に入ると、2001年に行われた日本の首相小泉純一郎の靖国神社参拝と日米関係の一層の緊密化、2005年に中国で発生した大規模な反日デモによる中日関係の「政冷経熱」が相まって、中国の学術界における三島への関心が冷めていき[381]、三島

出版社、1999年10月)、三島由紀夫『走尽的桥』唐月梅等訳(中国文聯出版社、1999年10月)、三島由紀夫『纯白之夜』汪正球、王建新訳(中国文聯出版社、1999年10月)、三島由紀夫『残酷之美』唐月梅訳(中国文聯出版社、2000年4月)、三島由紀夫『太阳与铁』唐月梅訳(中国文聯出版社、2000年4月)。

378　王姍姍「三岛由纪夫研究在中国」(湖南大学修士学位論文、2018年6月)。

379　李芒「三岛由纪夫的反动言行不能翻案」、『采玉集』(訳林出版社、2000年5月)253-257頁。

380　葉渭渠「学术腐败风漂洋过海——读《从三岛由纪夫的国际会说起》随感」、『日本新華僑報』2006年1月号(2006年1月)を参照した。

381　テレングト・アイトル「アジアにおける三島文学：自決後40周年によせて」、『北海

文学の翻訳も一時期停滞したが、2010年頃に中日関係の緩和が進展したのに伴い、中国社会科学院と各地の社会科学院を始め、各大学の研究者や翻訳者が三島文学の翻訳と研究を再開した。

上海訳文出版社が2011年から、人民文学出版社が2013年から、三島文学作品シリーズの編集に着手し始めた。2020年という時点で、三島の主な文学作品はほぼ翻訳された。また、近年では、亨利・斯各特・斯托克斯『三島由紀夫　生と死』(Henry Scott Stokes, *The Life and Death of Yukio Mishima*, 1974)(于是訳)[382]、克里斯托弗・羅斯『三岛由纪夫之剑』(Christopher Ross, *Mishima's Sword: Travels in Search of a Samurai Legend*, 2006)(王婷婷訳)[383]、瑪格麗特・尤瑟納爾『三島あるいは空虚のヴィジョン』(Marguerite Yourcenar, *Mishima ou La vision du vide*, 1981)(姜丹丹・索叢鑫訳)[384]など欧米の三島研究書や、澁澤龍彦が著した『三島由紀夫おぼえがき』(鄒双双訳)[385]も翻訳され、中国の読者は三島とその作品への理解を深めている。

２１世紀の三島研究の範囲は、三島の政治観と美学思想の分析から、「生と死」観念、古典主義、哲学、哲学観、ジェンダー意識、性的分析まで広がり、ある程度多様化しているが、研究対象となる作品は『憂国』、『潮騒』、『金閣寺』、『豊饒の海』など、三島の代表的な作品に絞られ、基本的に1990年代半ばの研究の範囲を超えていないというのが現状である[386]。

学園大学人文論集』第45号(2010年3月)72頁を参考にした。

382　亨利・斯各特・斯托克斯『美与暴烈 三岛由纪夫的生与死』于是訳(上海書店出版社、2007年7月)。作品名の翻訳について、スコット・ストークス・ヘンリー『三島由紀夫　生と死』徳岡孝夫訳(清流出版、1998年11月)を参考にした。

383　克里斯托弗・羅斯『三岛由纪夫之剑』王婷婷訳(江蘇人民出版社、2012年1月)。

384　瑪格麗特・尤瑟納爾『三岛由纪夫，或空的幻景』姜丹丹、索叢鑫訳(上海三聯書店、2014年10月)。作品名の翻訳について、マルグリット・ユルスナール『三島あるいは空虚のヴィジョン』渋澤龍彦訳(河出書房新社、1982年5月)を参考にした。

385　澁澤龍彦『三岛由纪夫追记』双双訳(広西師範大学出版社、2017年8月)

386　テレングト・アイトル「アジアにおける三島文学：自決後40周年によせて」、『北海学園大学人文論集』第45号(2010年3月)72頁を参照した。アイトルが2010年の時点で提出した２１世紀の中国における三島研究への評価は、2022年の時点でも適用できると考えられる。

4.2.1.3　中国の学界における三島評価の転換

戦後の日本において、三島由紀夫の反逆の価値体系の特異さは、同時代の多くの他の文学に内在している価値基準と対照的に図式化してみれば、明らかになる[387]。中国の学術界では、三島とその文学を如何に評価すべきかについて、長い間にわたって、大きな議論と論争の的となった。

前述したように、文革期の中国においては、政治的イデオロギーにより、三島の作品、三島の自殺、さらには三島由紀夫という人が日本戦後の「軍国主義復活」と結び付けられるようになった。文革後、中国の文学研究も徐々に正常な軌道に乗ってきている。それと共に、中国の文学研究者たちもある程度政治意識の視点から文学と美学の視点へと転換し始め、三島文学を見直し、その作品における文学の本質を探り始めるという姿勢が見られる[388]。

その中で、典型的な研究者は中国社会科学院の李徳純である。李は1980年代初期から、『戦後日本文学管窺――中国的視点』（杉山太郎等訳）[389]、『战后日本文学』[390]、『愛・美・死――日本文学论』[391]などの著作を発表しており、中国の学術界で最初に日本戦後文学を系統的に研究し始めた第一人者として認められている。三島文学への評価については、1979年に発表した「战后日本文学概貌」[392]、1987年に発表した「“殉教美学”的毁灭」[393]において、軍国主義と共に滅びる武山中尉夫婦を描写した『憂国』が武士道の「忠」と「義」を鼓吹するとし、『豊饒の海』は三島の間違った政治観と文学理念の「集大成」であると、李は批判した。また、1980年に発表した「日本当代三作家」においては、三島の文学活動は1960年代を区切りとして、前期と後期に分けられているとし、前期は異常心理を描写した作品とポルノ小説であり、後

387　高橋和巳「仮面の美学――三島由紀夫」、高橋和巳『逸脱の論理』（河出書房新社、1996年11月）123頁を参照した。

388　王奕紅「《假面的告白》和《金阁寺》刍议」、陳敬詠、章祖徳主編『外国文学论集 世纪末的探索与思考』（訳林出版社、1997年）307頁。

389　李徳純『戦後日本文学管窺――中国的視点』杉山太郎等訳（明治書院、1986年5月）。

390　李徳純『战后日本文学』（遼寧人民出版社、1988年2月）。

391　李徳純『愛・美・死――日本文学论』（中国社会出版社、1994年7月）。

392　李徳純「战后日本文学概貌」、『世界文学』1979年第5期（1979年10月）295-296頁。

393　李徳純「“殉教美学”的毁灭」、『日語学習与研究』1987年第4期（1987年8月）46頁。

期は軍国主義小説と退廃主義小説であると述べ、三島を「反動作家」、その作品を「毒草」であると説明した[394]。

しかし、1999年に発表した「三岛由纪夫论」の中で、李徳純は「三岛大节有亏，从文学史来看，对他的作品和影响仍应给予客观的评价【三島は大節にて瑕疵はあるが、文学史から見れば、彼の作品と影響には客観的な評価が与えられなければならない】」[395]と述べている。李は、『春の雪』が「漂亮得异乎寻常的悲剧故事【尋常ならざる美しさの悲劇的な物語】」であり、『志賀寺上人の恋』が「崇高而浪漫【崇高でロマンチック】」で、「具有令人迷醉的艺术魅力【人を酔わせる芸術的魅力を有した】」と三島作品を高く評価した[396]。三島文学に対して、李は以下のように述べている。

> 他的文学作品精华与糟粕共存，之所以赢得不同时代不同国度的众多读者，在于他的艺术美毕竟是一种相当讲究而又精致的传统民族文化形式，表现出的成熟和技巧，具有浓厚的日本文化传统的底蕴，显示出深湛的古典文学功底。
>
> 【彼の文学作品には精華と糟粕が共存しており、異なる時代、異なる国の多くの読者に受け入れられたのは、芸術的な美である。その芸術的な美は一種の精緻で凝った伝統民族文化で、成熟と技術を表現し、また日本の伝統文化に関する造詣の深さ、古典文学についての知識の豊富さを示している。】[397]

以上の評価から、三島文学における「精華」を探り始めるという李の研究姿勢上の

394　李徳純「日本当代三作家」、『外国文学研究』1980年第2期(1980年)66-71頁。また、1980年代における李徳純が三島由紀夫への評価について、尾崎秀樹、李徳純「关于战后日本文学的对话《节译》——从中国的观点出发」(原文の出所は日本雑誌『世界』1986年8月号)董防訳、『世界文学』1997年第2期(1997年)202頁も参照した。

395　李徳純「三岛由纪夫论」、『国外文学』1999年第3期(1999年)114頁。また、李徳純が2003年に発表した「抱残守缺的“武士道”说教——三岛由纪夫论之二」、『中国社会科学院研究生院学报』2003年第5期(2003年)96頁においても類似した評価を下した。

396　李徳純「唯美而畸恋的梦幻世界——三岛由纪夫论之一」、『中国社会科学院研究生院学报』2002年第6期(2002年)69-70頁。

397　李徳純「三岛由纪夫论」、『国外文学』1999年第3期(1999年)114-115頁。

変化が見られる。しかし、基本的には、李は『憂国』などの三島作品から見られる「畸形的な軍国主義」[398]、すなわち「糟粕」を批判するという従来的な立場を2010年以降になっても崩していない。アイトル[399]によると、天皇賛美論、武士道の美化、思想的な右傾化、ナショナリズムなど、多数の要素が互いに絡み合っている三島作品を巡って、政治と制度の相違により、中日間の食い違いが顕著であり、中国の学者のほうは価値観、道徳、イデオロギーなど、非文学的、あるいは文学にとって周辺的な問題にこだわりすぎる傾向が強い。

中国における三島研究が政治意識の面からの文学分析から離れて、客観的で独立した文学研究へと変化しつつある一方、「反中」、「反共」、「軍国主義」への批判という政治的原則になお従っている点は中国の学術界における普遍的認識であり、総体的傾向である。三島を「軍国主義」と結び付けて考えるのは、文革における三島への評価とはつながりがあるという可能性が考えられる。

4.2.2　『憂国』の訳本から見る文革期の三島文学

4.2.2.1　翻訳作品の「出版説明」

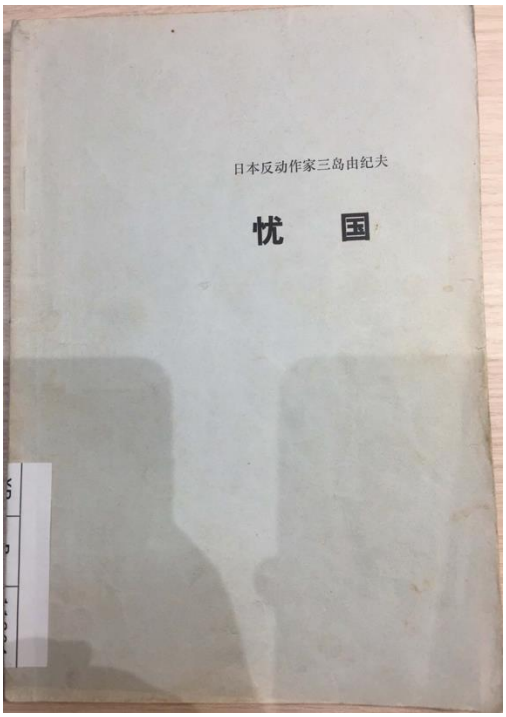
『憂国』は、三島の自己評価で「三島の良いところ悪いところすべて凝縮したエキスのような小説」[400]である。文革期に見られた１回目の「三島が盛んに翻訳された時期」において、1971年11月に三島を代表する作品が人民文学出版社から出版された。『憂国』（訳者不明）のみならず、同時代に翻訳された『豊饒の海』４部作（訳者不明）において、訳本の原作者が、たんに「三島由紀夫」ではなく、以下のように「日本の反動作家　三島由紀夫」と呼称された。一方、訳者名と原文の出典は記載されていなかった。

398　李徳純「三岛由纪夫：疲惫生活里的英雄梦想――残酷青春物语」、『中日关系史研究』2014年第3期（2014年8月）86頁を参考にした。

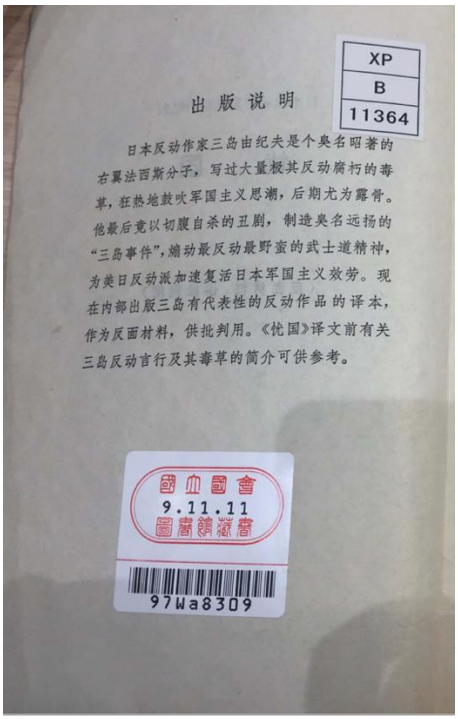
399　テレングト・アイトル「アジアにおける三島文学：自決後40周年によせて」、『北海学園大学人文論集』第45号（2010年3月）69頁。

400　三島由紀夫「解説」、三島由紀夫『花ざかりの森・憂国――自選短編集――』（新潮文庫、1997年6月）285頁。

『憂国』の表紙



訳本の「出版说明」



さらに、全ての５冊の訳本に、以下の同じ「出版说明」がつけられた。

日本反动作家三岛由纪夫是个臭名昭著的右翼法西斯分子，写过大量极其反动腐朽的毒草，狂热地鼓吹军国主义思潮，后期尤为露骨。他最后竟以切腹自杀的丑剧，制造臭名远扬的“三岛事件”，煽动最反动最野蛮的武士道精神，为美日反动派加速复活日本军国主义效劳。现在内部出版三岛有代表性的反动作品的译本，作为反面教材，供批判用。《忧国》译文前有关三岛反动言行及其毒草的简介可供参考。

【日本の反動作家の三島由紀夫は悪名高い右翼ファシストであり、大量の極めて反動的な腐り果てた毒草を書いており、熱狂的に軍国主義の思潮を鼓吹し、後期は殊に露骨である。彼は最後に切腹自殺の茶番劇を演じ、悪名を馳せた「三島事件」を起こし、最も反動的で最も野蛮な武士道精神を扇動し、米日反動派が日本軍国主義の復活を急ぐために力を尽くしている。このたび、三島の代表的な反動作品の訳本を内部的に出版し、反面教材として、批判の

用に供する。『憂国』の訳文の前に三島の反動言論およびその毒草に関する資料を紹介し、参考に供する。】[401]

「出版说明」は、三島由紀夫が「右翼ファシスト」の「反動作家」で、その文学が「毒草」のような「反動作品」であると明記し、また「武士道精神」と「日本軍国主義の復活」を批判した。「出版说明」に言及した「三島の反動言論およびその毒草に関する資料」というのは、前述した「反动作家、右翼法西斯分子三岛由纪夫——其人其作品及其思想简介【反動作家、右翼ファシスト分子の三島由紀夫——その人、その作品及びその思想に関する資料】」(略称「三島研究資料」)である。この評論は最初、1970年12月に刊行された『参考资料文艺专辑』の第60期に載った[402]。『参考资料』[403]は1955年3月に新華社で創刊された情報紙であり、内部的に発行されたものである。主に世界各地の重要な政治ならびに経済関係の新聞、各国の中国の大事件への反応などの内容を編集したものであり、毛沢東などの中央指導部に重視された。流通範囲も中央指導部、局長クラスの幹部、軍隊の師団長、および中央の対外機関に限られており、公開されていないため、民衆がその内容を知ることは極めて少ない。『参考资料』シリーズに属す『文艺专辑』は「四人組」の江青個人の文学研究のために刊行された[404]。文革期における三島への評価は、「三島研究資料」という最も「権威ある文献」[405]により、すでにその性質が定められたと考えられる。

---

401 「出版说明」、日本反動作家　三島由紀夫『忧国』(人民文学出版社、1971年11月)。

402 「三島研究資料」という評論の出所について、『参考消息』であるという説もある。『参考消息』の読者層は『参考资料』よりかなり広い。胡備、李欣「三岛由纪夫在中国的接受与研究」、『河北工程大学学报』(社会科学版)第26巻第4期(2009年12月)106-108頁、汪芸「三岛由纪夫研究在中国的发展历程」、『文学教育』2009年第4期(2009年4月)143-145頁などを参照した。

403 『参考资料』について、衛広益「毛泽东与大小“参考”」、毛沢東生平和思想研討会組織委員会編『毛泽东百周年纪念：毛泽东生平和思想研讨会论文集』(中冊)(中央文献出版社、1994年10月)324-342頁、黄正楷「1950年代中共新華社《内部参考》的功能與轉變」(国立政治大学修士学位論文、2006年)を参考にした。

404 葉渭渠「学术腐败风漂洋过海——读《从三岛由纪夫的国际会说起》随感」、『日本新華僑報』2006年1月号(2006年1月)を参照した。

405 唐月梅「自序」、唐月梅『三岛由纪夫传』(新世界出版社、2003年10月)を参照した。

1971年11月に人民文学出版社から出版された『憂国』は合計５９頁であるが、その中で「三島研究資料」が１９頁の紙幅を占めている。「三島研究資料」は題名の通りに、「その人、その作品及びその思想」という３つの部分で構成された。

三島「その人」は「高級反動官僚の家系」と「醜悪な経歴」の２章からなる。明治期から三代にわたる官僚の家系である平岡家に生まれた三島が当時、上流家庭の子女のみに入学が許された学習院初等科から、中、高等科を経て東京帝国大学を卒業した後に、高等文官試験に合格したが、大蔵省をわずか９ヵ月で辞めて作家に転身したと、作家として独立する前の三島を、比較的、客観的に紹介した。

三島「その作品」は、「三島作品の数量は甚だ多く、前期はポルノが多数である」、「60年代以降、三島作品に武士道とポルノの黒い路線が一貫している」、「三島文学は日本軍国主義の復活の一側面を表している」の３章によって組み立てられた。文学の「黒い路線」[406]は、毛沢東の文学方針と対立する、すなわち封建主義・資本主義・修正主義的で、反党、反社会主義と見なされた文学路線を指す。文革期において、三島の作品は、作者の意図や願望とは別のかたちで受容が始まった[407]。また「三島研究資料」の中では、「1950年代において、多数の三島作品は病的な心理とポルノ描写から出発し、戦後日本の頽廃的で、腐朽した社会生活を反映している」と書かれ、三島作品における「ポルノ的な要素」が特に強調される傾向がある。

三島「その思想」に関する内容において、「三島は海外へ７回渡航し、今冬から来春にかけて台湾に行く予定であった」と書かれ、また「三島の政治的主張は、天皇制を復活させ、武士道を再建し、侵略戦争を再び発動しようとすることである」と書かれている。「台湾に行く予定であった」という１章の中では、「台湾」という場所に軍事的性質を与える傾向が見られる。「創作の題材を探すため」、第二次世界大戦後の国共内戦で、中台の軍事対立の最前線である「金門の前線に行ってみたい」と述べた三島に対して、編集者は彼の台湾との、蒋介石率いる国民党軍とのつながりをある程度暗示した。また、1974年2月2日『人民日报』の社説「日本一小撮反华反共势力又

406　李城外『追憶の文化大革命』（上巻：咸寧五七幹部学校の文化人）萩野脩二、山田多佳子訳（ボイジャー、2014年6月）20頁を参照した。

407　久保田裕子「翻訳者・三島由紀夫と村上春樹の文化戦略」、『日本文学』（特集：近現代文学における〈交通〉）第57巻第11号（2008年11月）36–43頁を参照した。

在蠢动　“青岚会”叫嚷同蒋帮加紧“合作”破坏日中友好关系」[408]の中では、蒋軍との連携を行った「青嵐会」が中日友好関係の破壊に拍車をかけていると論じられ、批判の的となった。この社説によると、「青嵐会」は割腹自殺した軍国主義分子三島由紀夫をもちあげ、三島の「考え方と血が通い合って」おり、また三島の「精神を受け継げ」と呼び掛けたとされる[409]。「反中反共分子」の三島と深い関係を持つことにより、「青嵐会」に悪い影響が出ている点が示唆された。

4.2.2.2　訳文のテクスト

『憂国』は訳者名が記載されないまま「政治資料」として出版されたが、前述したように、訳本の実際の翻訳者は卞立強である。また、2005年10月14日の『文汇读书周报』に掲載された葉渭渠へのインタビュー[410]から、1972年に葉らが「中央文革領導小組」から命令を受け、「批判用」の三島小説の翻訳に着手したことがわかる。

三島小説の翻訳者は当時中国における日本文学研究者の第一人者たちが担当しており、その訳本の質もかなり高い。『憂国』の訳文では、下記の誤訳以外、他にはほぼ見られない。

原作	訳文
新婚旅行は非常時だというので遠慮をした。(229頁)	因为是非常时期，蜜月旅行从简了。 【新婚旅行は非常時だというので簡略にした。】(21頁)
教育勅語の「夫婦相和シ」の訓え(230頁)	《教育敕语》中“夫唱妇随”的训导 【教育勅語の「夫唱婦随」の訓え】(24頁)

408　「日本一小撮反华反共势力又在蠢动　“青岚会”叫嚷同蒋帮加紧“合作”破坏日中友好关系」、1974年2月2日『人民日报』。

409　三島由紀夫と「青嵐会」の関係について、渡辺恒雄「『青嵐会』を論ず」、『文芸春秋』第52巻第8号(1974年7月)92-103頁を参照した。

410　「让学者回归学者学术回归学术——访日本文学专家叶渭渠先生」、2005年10月14日『文汇读书周报』。

また、『憂国』においては、以下の意訳も存在している。例えば、「手も慄えず」は「手も胸も慄えず」に訳され、「大義と神威に、(中略)道徳に守られた」は「神威に守られ、大義と(中略)道徳を遵守する」に訳され、「異臭」は「血腥さ」に訳された。

原作	訳文
手も慄えず、ものごとはいつもよりきびきびと小気味よく運んだ。(237頁)	但她手不抖，心不跳，干起活来反而比平常更加爽快利落。 【手も胸も慄えず、ものごとはいつもよりきびきびと小気味よく運んだ。】(32頁)
余人の知らぬ二人の正当な快楽が、大義と神威に、一分の隙もない完全な道徳に守られたの(237頁)	他们俩的正当的快乐是别人无法体会的，是受到神威的庇护的，是遵守了大义和完璧无缺的道德的 【余人の知らぬ二人の正当な快楽が、神威に守られ、大義と一分の隙もない完全な道徳を遵守したの】(32-33頁)
すでに異臭が鼻を突いた。(254頁)	就有一股血腥味扑进鼻子。 【すでに血腥さが鼻を突いた。】(51頁)

『憂国』の訳文に見られるこれらの誤訳、意訳により、訳文と原文とは意味的には確かに相違があるが、文革当時の読者が作品の主旨を理解するには支障がないと考えられる。また、テクストの構成の面を見ると、改行、句読点などはほぼ原作と一致していると言える。原文テクストへの忠実性においては、均衡が維持されていると考えられる。

前記の通り、『憂国』は訳本として翻訳の質がかなり高いといえる。誤訳が少ない上に、翻訳者が、次のように、訳文の中で原作にふさわしい文言文と白話文を併用し、原文テクストにある「夫君に殉じて自刃を遂げたり」、「公けの行為」、「千の鐘を一度に鳴らす」を「殉夫自刎」、「舍己为公」、「万钟齐鸣」など、短めで簡明な中

国語の成語や慣用句と置き換え、三島特有の詩的な修辞および唯美的な作風を反映させたと考えられる。

原作	訳文
麗子夫人も亦夫君に殉じて自刃を遂げたり。(228頁)	夫人丽子亦殉夫自刎。(21頁)
華燭の典を挙げしより半歳に充たざりき。(228頁)	举花烛之典，尚不足半载焉。(22頁)
その思想のどんな砕片(232頁)	思想的任何一点鳞片(27頁)
今から自分が着手するのは、(中略)軍人としての公けの行為である。(248頁)	自己马上就要开始的行为，是一个军人舍己为公的行为。(44頁)
苦痛が千の鐘を一度に鳴らすかのように、彼の存在を押しゆるがした(251頁)	痛苦就象万钟齐鸣似地摇撼着他的存在(48頁)

三島作品の「ポルノ的な要素」は『憂国』のテクストにおいても注目された。前記した通り、禁欲主義が要求された文革期に、翻訳作品における性的描写や「ポルノ的な段落及び字句」の存在は許されなかったが、翻訳者は三島作品における「削除すべきポルノ的な要素」をすべて意図的に残した。『憂国』の「ポルノ的な要素」については、三島本人が「もちろん読者の立場からは、何ら問題性などに斟酌せず、物語のみを娯しめばよいわけであるが、(現に或る銀座のバアのマダムは『憂国』を全く春本として読み、一番眠れなかったと告白した)」[411]と論じたことがある。しかし、『憂国』の翻訳者が「ポルノ的な要素」を残しておいたその意図は、「春本」としての読み方を提示するためではなく、日本の戦後に顕著になってきた頽廃的様相を示唆するためであると考えられる。

4.2.3　まとめ

411　三島由紀夫「解説」、三島由紀夫『花ざかりの森・憂国――自選短編集――』(新潮文庫、1997年6月)284頁。

文革期の三島への評価においては、1970年の頃、すなわち文革の最中に掲載された「三島研究資料」が指導的役割を果たした。三島に対して、人物が「日本の反動作家」、「右翼ファシスト」であり、その作品が「武士道」、「ポルノ」、「軍国主義」、「天皇制」などの要素に満ちているという政治的な評価を下した。1990年代に入ってから、中国で学術上の「脱イデオロギー化」が進んでおり、学術が学術として復活し、文学研究の研究対象と方法論が多様化に向かっている。三島とその作品、その思想に対して、中国の研究者も一斉に批判するという偏った状況から離れ、三島を「多層的に、立体的に」[412]再検討しようとするという姿勢が見られる。

しかし、中国の学界における三島評価の動向から、三島研究が文学性のみを重要視し、独立した学術分野として成立したとは考えにくい。長期にわたって形成されたイデオロギー上の差異を基調とする中国の日本近代文学の研究方法に、徹底的な転換をもたらすにはまだ長い過程が必要だと考えられる。中国の学術界の三島由紀夫とその文学に対する評価には、文化大革命時代の影響が残っているということは否定できないであろう。

第3節　三島由紀夫文学の翻訳②――『豊饒の海』４部作

前述した通り、中国の日本の文学作品の翻訳活動において、１回目の「三島が盛んに翻訳された時期」は1970年代初期、すなわち文革期に訪れた。文革期において、最も多く翻訳された日本の作家として、『憂国』以外、翻訳されたもう１つの三島由紀夫の作品は、『春の雪』、『奔馬』、『暁の寺』、『天人五衰』の全４巻から成る『豊饒の海』（訳者不明）である。

本節においては、『豊饒の海』４部作の翻訳テクストに焦点を当て、三島由紀夫の大作の１つである『豊饒の海』がどのように翻訳されたか、どのような翻訳手法が使われたかを分析する。

412　唐月梅『怪异鬼才三岛由纪夫传』（作家出版社、1994年12月）367頁。

4.3.1　あらすじ

4.3.1.1　第1巻『春の雪』

『春の雪』[413]は大正時代の貴族社会を舞台にし、侯爵家の御曹司・松枝清顕と伯爵家の令嬢・綾倉聡子との悲劇的な恋を描いた物語である。幼い頃から嫡子の清顕は武家の父により公家の綾倉家に預けられる。清顕は「繊細な心」(5頁)の持ち主に育つ。１８歳の清顕は、美貌で、優雅な幼馴染の聡子に子供扱いされ、自尊心を傷つけられる。自分の縁談話に対する清顕の冷たい態度に失望し、聡子は洞院宮治典王殿下と婚約する。同級生で、「もつとも親しい友だち」(3頁)の本多繁邦などの協力を得て、自分の聡子への恋に目覚めた清顕は、聡子との密会を続ける。聡子は妊娠してしまう。２人の関係が両家に知れ渡り、皇族に事実を隠すため、聡子は堕胎をさせられる。聡子は奈良の月修寺で出家することを決意する。清顕は聡子との再会を果たそうと奈良まで行くが、遂げることができない。清顕は聡子と会うために、春の雪の中で待ち続け、肺炎になる。最後に、清顕は本多の手を固く握り締めながら、「今、夢を見てゐた。又、會ふぜ。きつと會ふ。瀧の下で」(368頁)と言い、自分の書いた「夢日記」を本多に渡し、２日のちに、２０歳の若さで死ぬ。

4.3.1.2　第2巻『奔馬』

『奔馬』[414]では、清顕が死んでから１８年が過ぎており、本多も３８歳になっている。裁判所で判事を務めている本多は、剣道の試合で「人生について、まだ何も知らない人間の顔」(26頁)をしている１８歳の少年・飯沼勲と出会う。勲は清顕付きの書生・飯沼茂之の息子である。本多は、偶然に滝の下で勲と再会し、勲の脇腹に、清顕と同じように、３つの黒子があることを発見する。本多は清顕の遺言を思い出し、この子が清顕の生まれ変わりであると確信する。勲は財界と政界の腐敗に怒り、２０人の少年を集め、「純粋な結社」を結成する。また、彼は愛読している『神風連史話』

413　原作について、三島由紀夫『春の雪』(『豐饒の海』第1巻)(新潮社、1969年1月)を参照した。

414　原作について、三島由紀夫『奔馬』(『豐饒の海』第2巻)(新潮社、1969年2月)を参照した。

を、本多や陸軍の堀中尉、洞院宮治典王殿下などに配る。本多は勲に忠告するが、勲は「神風連の純粋」(192頁)の精神をもって日本を浄化しようと決意する。軍部の協力が得られないため、「純粋な結社」は要人の刺殺を計画する。しかし、実行前に勲は密告により逮捕されてしまう。本多は勲を救うため、判事を辞任し、弁護士となる。本多の弁護により、勲と仲間は釈放される。勲は、恋人・鬼頭槇子が自分の計画を茂之に知らせ、茂之が警察へ密告したことや、また茂之の主宰する右翼塾「靖献塾」も財界の黒幕・蔵原武介との関わりがあったことを知り、失望する。勲は蔵原の別荘に侵入して彼を殺害し、逃げる。最後は夜の海の崖で切腹自殺を遂げる。

4.3.1.3　第3巻『暁の寺』

『暁の寺』[415]は三島が４７歳となった本多の視点から描いた作品である。本多は弁護士の仕事でタイに滞在しており、清顕の紹介で知り合った、日本に留学に来たタイの王子たちに会いたいと思う。その時、幼い月光姫・ジン・ジャンと出会う。姫は自分が日本人の生まれ変わりであると主張し、日本に帰りたいと騒ぐ。本多は姫に謁見した時、彼女が清顕と勲の記憶を有していることを発見する。しかし、水遊びのとき、本多は姫の脇腹には、清顕と勲が持っている３つの黒子を見つけられない。それから本多はインドへ旅行し、姫と別れ、日本へ帰国する。およそ１０年後、１８歳の姫は前世の記憶がすでに消えているが、日本へ留学する。５８歳の本多も弁護士の仕事で莫大な富を築いて別荘を建てる。隣人・久松慶子が友人となる。美しく成長した姫と再会し、本多は恋に落ちる。本多は「覗き」の趣味を持ち、夜の公園や自分の別荘で人の情事を覗き見する。ある日、本多は設えた覗き穴から別荘の部屋に泊まった姫と慶子との結ばれた同性愛行為を覗き、姫の乳房の下に３つの黒子があることを知る。その後、別荘で火事が発生する。タイに帰国した姫は２０歳の時にコブラに噛まれて死ぬ。

4.3.1.4　第4巻『天人五衰』

415　原作について、三島由紀夫『暁の寺』(『豐饒の海』第3巻)(新潮社、1970年7月)を参照した。

『天人五衰』[416]の物語は、妻に先立たれた７６歳の本多と慶子との旅行から始まる。２人は立ち寄った帝国信号通信所で働く１６歳の少年・安永透と偶然に出会う。本多は透の体に３つの黒子を見たため、清顕の生まれ変わりだと信じ、彼を養子にすることに決める。本多は熱心に透を教育する。２０歳になると、透は東大に入り、今まで隠した本性を発揮し、養父の本多を虐待し始める。公園で久々に覗き見した本多が警察に逮捕され、「覗き屋」として報道される。透は本多家の実際的な支配者となり、自分を美女と思い込んでいる発狂した絹江を別荘に住まわせる。慶子は透に輪廻転生と「夢日記」のことを告げる。自尊心の高い透は「夢日記」を読んで、傷つけられ、服毒自殺を図り、失明してしまう。それから、透の性格も一変し、家から出ることもなく、沈黙し続ける。２１歳の透は絹江と結婚し、妊娠させる。その時、本多に膵臓の腫瘍が発見され、最後に出家した清顕の恋人・聡子と会おうとし、月修寺を訪ねる。しかし、聡子は清顕のことを覚えていないと言う。記憶もなければ何もないところへ、自分は来てしまったと本多は思う。

4.3.2　翻訳作品『豊饒的海』

4.3.2.1　訳本について

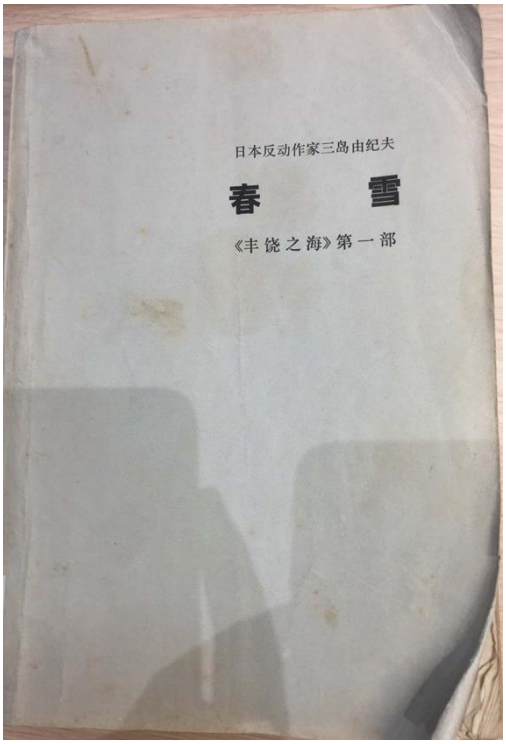
本節の検討対象である『豊饒の海』は1970年代の初頭、すなわち文革の最中に翻訳された。年代の古い順から並べると、『豊饒の海』の第4巻『天人五衰』は1971年12月に、第3巻『暁の寺』は1972年8月に、第2巻『奔馬』は1973年5月に、第1巻『春の雪』は1973年12月に、人民文学出版社から出版された。前述したように、『憂国』と『豊饒の海』４部作の中で、原文の出典は記載されていなかった。文革期に単行本として翻訳、出版された日本文学に対して、訳者はほぼその訳本において、原典を明示した[417]。しかし、『豊饒の海』の訳本の発行年月から考えると、原作について、文革期の翻訳者は、1969年1月、1969年2月、1970年7月、1971年2月に新潮社より出版された『春の雪』、『奔馬』、『暁の寺』、『天人五衰』をもとにしたという可能性が高い。

416　原作について、三島由紀夫『天人五衰』(『豐饒の海』第4巻)(新潮社、1971年2月)を参照した。

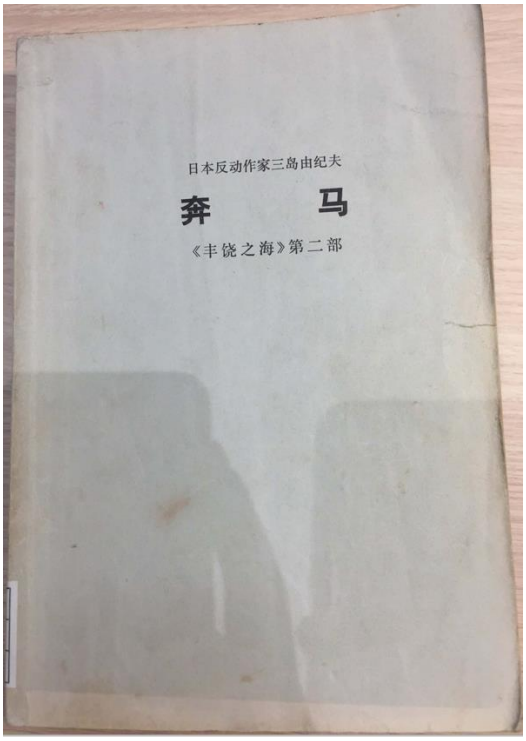
417　『憂国』と『豊饒の海』4部作のほかに、『文鏡秘府論』においても原作の出典は記載されていなかった。

文革期に出版された『豊饒の海』４部作の表紙は、以下のように極めて類似しており、前述した「黄皮書」である。

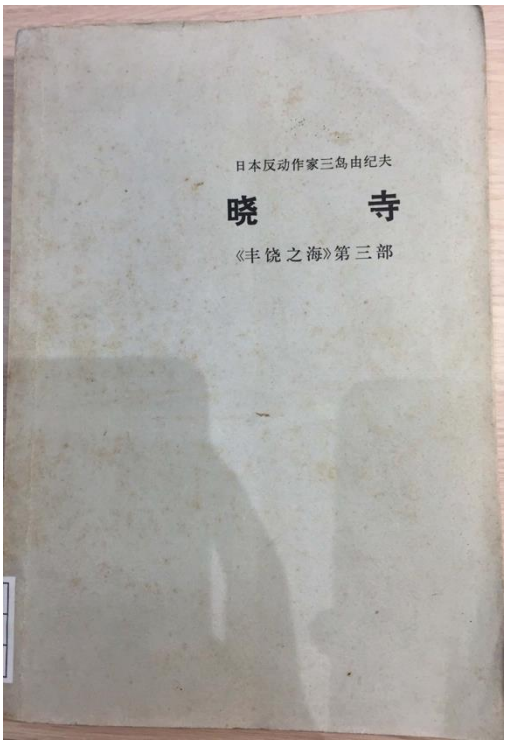
第1巻『春の雪』



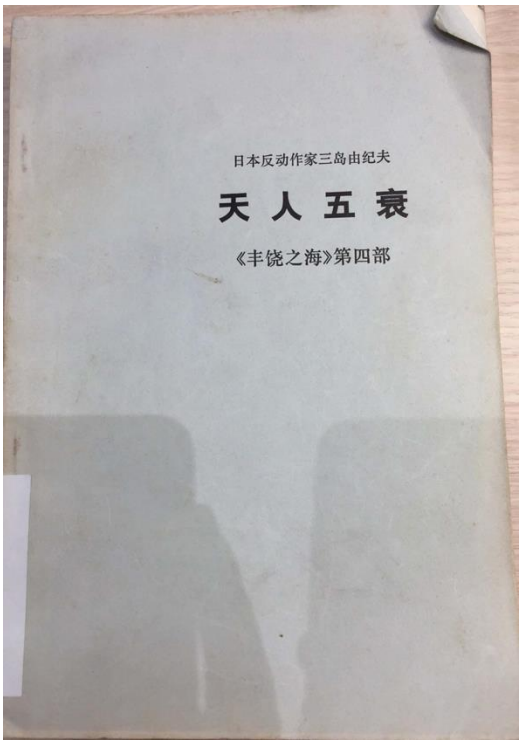
第2巻『奔馬』



第3巻『暁の寺』



第4巻『天人五衰』



文革が終わってから、三島作品の翻訳は一時的に停止になった。1986年12月に出版された唐月梅訳『春の雪』[418]は文革後最初の三島翻訳作品である。その後、『豊饒の海』４部作[419]は1995年に作家出版社[420]から、2001年に北京燕山出版社[421]から、2010、

418　三島由紀夫『春雪』唐月梅訳(中国文聯出版社、1986年12月)。

419　『豊饒の海』全巻以外、前述した唐月梅が訳した『春雪』を除いては、三島由紀夫『春雪・天人五衰』文潔若、李芒、文静訳(中国友誼出版公司、1990年12月)、三島由紀夫『春雪』唐月梅訳(中国文聯出版社、1999年9月)、三島由紀夫『春雪』唐月梅訳(北京出版社、2002年)、三島由紀夫『春雪』、『三島由紀夫精品集』唐月梅訳(復旦大学出版社、2008年5月)、三島由紀夫『三岛由纪夫精品典藏集 春雪』唐月梅訳(作家出版社、2021年3月)なども出版された。

420　三島由紀夫『春雪』唐月梅訳(作家出版社、1995年6月)、三島由紀夫『奔马』許金龍訳(作家出版社、1995年8月)、三島由紀夫『暁寺』劉光宇、徐秉潔訳(作家出版社、1995年10月)、三島由紀夫『天人五衰』林少華訳(作家出版社、1995年5月)。

421　三島由紀夫『丰饶的海』許金龍等訳(北京燕山出版社、2001年1月)。

2011年[422]と2014年[423]に上海訳文出版社から、2014、2015年に重慶出版社[424]から、2015年に九州出版社[425]と人民文学出版社[426]から出版されており、三島文学の中で特に注目された作品であると考えられる。作品の発行所と発行年が違っているとはいえ、同じ訳者により翻訳されるという傾向が見られる。例えば、現時点まで出版された、合計１２種の『春の雪』の訳本には、唐月梅により翻訳された作品が７種を占めている。

4.3.2.2 「三島研究資料」における『豊饒の海』への評価

前述した「三島研究資料」において、以下のように『豊饒の海』に言及されている。作品の構成、『天人五衰』の原稿の提出という歴史的な出来事、第2巻『奔馬』にある割腹の描写などの叙述は、ある程度、客観的であると言える。

> 三岛的最后一部长篇小说叫《丰饶之海》，被吹捧成“三岛文学的最高杰作”，共四卷，前三卷《春雪》、《奔马》和《晓寺》已分别于一九六五、六七、六八年出笼，第四卷《天人五衰》的“最终回”原稿在他切腹自杀的当天

422 三島由紀夫『春雪』唐月梅訳(上海訳文出版社、2010年8月)、三島由紀夫『奔马』許金龍訳(上海訳文出版社、2010年12月)、三島由紀夫『晓寺』竺家栄訳(上海訳文出版社、2010年12月)、三島由紀夫『天人五衰』林少華訳(上海訳文出版社、2011年4月)。

423 三島由紀夫『春雪』唐月梅訳(上海訳文出版社、2014年4月)、三島由紀夫『奔马』許金龍訳(上海訳文出版社、2014年4月)、三島由紀夫『晓寺』竺家栄訳(上海訳文出版社、2014年4月)、三島由紀夫『天人五衰』林少華訳(上海訳文出版社、2014年4月)。

424 三島由紀夫『春雪』文潔若、李芒訳(重慶出版社、2014年3月)、三島由紀夫『奔马』張林訳(重慶出版社、2015年5月)、三島由紀夫『晓寺』劉光宇、徐秉潔訳(重慶出版社、2015年6月)、三島由紀夫『天人五衰』文潔若訳(重慶出版社、2014年8月)。

425 三島由紀夫『春雪』唐月梅訳(九州出版社、2015年3月)、三島由紀夫『奔马』許金龍訳(九州出版社、2015年3月)、三島由紀夫『晓寺』竺家栄訳(九州出版社、2015年3月)、三島由紀夫『天人五衰』林少華訳(九州出版社、2015年3月)。

426 三島由紀夫『春雪』陳徳文訳(人民文学出版社、2015年10月)、三島由紀夫『奔马』陳徳文訳(人民文学出版社、2015年10月)、三島由紀夫『晓寺』陳徳文訳(人民文学出版社、2015年10月)、三島由紀夫『天人五衰』陳徳文訳(人民文学出版社、2015年10月)。

上午交付出版社。三岛多次宣称，这部《丰饶之海》是他的“毕生事业”。

【三島の最後の長篇小説は『豊饒の海』であり、「三島文学の最高傑作」と褒めそやされており、全４巻で、前３巻『春の雪』、『奔馬』と『暁の寺』はそれぞれ1965、67、68年に世に現われ、第4巻『天人五衰』の最終回の原稿は、彼が割腹自殺を遂げた当日の午前に出版社に渡したものである。三島は、この『豊饒の海』は彼の「ライフワーク」だと何度も公言した。】[427]

三岛还叫嚷：“保卫日本就是保卫以天皇为中心的武士道文化的传统”。他从一九六六年以来“总感到‘遥远的灵魂’在向我召唤：起来保卫日本的优美文化和历史！”并且歇斯底里地嘶喊：切腹自杀是“死的美学的极点”。在他的作品《忧国》、《奔马》和《椿说弓张月》等小说、影片和戏曲中，都有切腹的描写。

【三島はまた、「日本を守るとは、天皇を中心とする武士道文化の伝統を守ることなんだぞ」[428]と大声で喚いた。彼は1966年から「日本の美しい文化、歴史を守れと『遠い塊』が私に叫んでいると感じている」[429]。また「割腹自殺は『死の美学の終点』だ」とヒステリックに騒ぎ立てた。彼の作品『憂国』、『奔馬』と『椿説弓張月』などの小説、映画と戯曲の中に、すべて切腹の描写がある。】[430]

4.3.2.3　訳文のテクスト

本節において、『豊饒の海』４巻の翻訳テクストを、第4巻『天人五衰』、第3巻『暁の寺』、第2巻『奔馬』、第1巻『春の雪』という文革期に出版された順に分析する。

427　「反动作家、右翼法西斯分子三岛由纪夫——其人其作品及其思想简介」、日本反動作家　三島由紀夫『忧国』訳者不明（人民文学出版社、1971年11月）5頁。

428　その翻訳は、山崎正夫『三島由紀夫における男色と天皇制』（グラフィック社、1971年8月）268頁を参照した。

429　その翻訳は、安藤武『三島由紀夫「日録」』（未知谷、1996年4月）49頁を参照した。

430　「反动作家、右翼法西斯分子三岛由纪夫——其人其作品及其思想简介」、日本反動作家　三島由紀夫『忧国』訳者不明（人民文学出版社、1971年11月）13頁。

①第4巻『天人五衰』

『豊饒の海』の他の３巻と比べて、第4巻『天人五衰』の訳文は特徴的である。

まず、『豊饒の海』４巻の訳文において、最も多く削除されたところは、『天人五衰』の冒頭の部分である。原作の第1章、第2章と第3章の前半は、全て省略された。第1章と第3章の前半では、海と入港する船を中心として、帝国信号通信所で働く主人公の安永透の仕事場が描写された。第2章では、妻の梨枝と死に別れた本多繁邦はよく一人で旅に出たりして、透の通信所の周辺に行くことがあることを読者に示した。原作において、第1章、第2章と第3章の前半は、第10章にある本多と透の出会いの下敷きとして使われた。背景描写なしに、物語がいきなり展開することに対して、訳文の読者はやや戸惑いを感じるだろうと思われる。

また、『天人五衰』の訳文では、翻訳者が省略のみならず、意訳、直訳などの翻訳手法を１つの文において混同して使っている傾向がよく見られる。例えば、透が夜の通信所で海を眺める場面は以下のように翻訳された。

原作	訳文
	外界的视线逐渐变坏，伊豆半岛的灯光也看不见了。但是安永透却想，这样总比星月争辉的晚上好些。
ますます視界は悪くなつて、伊豆半島の灯も見えなくなつた。それでも晃々たる月夜よりはいい、と透は睡氣の澱む頭で考へてゐた。（28頁）	【ますます外部の視線は悪くなつて、伊豆半島の灯も見えなくなつた。しかし、それでも星と月の光り輝いた夜よりはいい、と透は考へてゐた。】（15頁）

「ますます視界は悪くなつて」は、「ますます外部の視線は悪くなつて」に直訳された。中国語において、「視線は悪くなる」は言葉遣いとして間違っていないが、やや不自然であると考えられる。また、「晃々たる月夜」の部分は意訳であると考えられ、「睡氣の澱む頭で」は削除された。この一文は透という登場人物の孤独にかかわ

る心理描写であり、物語の展開に影響を与えていることはほぼないため、訳文の読者の原作に対する理解には支障が生じていない。しかし、以下の訳文は読者の誤解を招くことにつながると思われる。

原作	訳文
	两个老人，就这样维持着彼此的通病，不希望任何第三者插入其间。既然彼此都不愿放弃这点老毛病，因此找个失意的对象倒是很明智。庆子在本多面前，倒跟一个女人有些不同，她是决不玩弄什么年轻花样的。
老いは、かうして、二人にとつて、第三者に知られたくない共通の病氣のやうなものだつたが、誰も自分の病氣について語るといふ愉しみを捨てられない以上、恰好な相手を見つけるのが賢明であつた。世間一般の男女の仲とは多少ちがつてゐたので、慶子も本多の前では決して若ぶつたり技巧を弄したりする必要がなかつた。（37頁）	【二人の老人にとつて、かうしてお互いの病氣を維持して、二人の間に第三者の誰にも介入されたくなかつた。誰もこの病氣を捨てられない以上、恰好な相手を見つけるのが賢明であつた。世間一般の女とは多少ちがつてゐたので、慶子も本多の前では決して若ぶつたり技巧を弄したりしなかつた。】（23頁）
	当退热的早晨，本多在无尽的感激之余，这样告诉庆子说：“像你这样伟大的母性爱，子女们该多么喜欢你。” “这两件事可不相同啊，”庆子装个生气的样子说，“我只对朋友这样亲切，对子女总是冷淡的，要使他们爱我，只有这样。要是我有个女儿得了这样的高烧，我就压制着内心的忧虑，放下病人出去玩自己的，像一般男女那样结婚共处，保证白头偕老的做法，我死也不干。多少近似男性的女人，找

个贫血女孩同居的，像那种家庭，感情与湿气一起长芽，两个人就吃那种芽过活，像蜘蛛一样在网中抱着睡觉。像男性那个女的，当然是谋生者了，两张女人的面颊凑在一块在筹划她们的税金……。我可不是生活在那种童话中的女人。”

熱も下つた朝、この上もない感謝を照れくささにあらはして、本多はこんなことを言つて慶子をからかつた。

「いやはや、このやさしさと母性愛では、どんな女の子もあなたに夢中になるのがわかるね」

「あれとこれとを一緒になさらないでよ」と上機嫌の慶子は怒りを装うて言つた。「親切なのは友だちにだけ。女の子にはいつも冷淡にしてやらなくてはならないのよ、愛されるためには。私、いちばん好きな娘がこんな風な熱で寝てゐたら、心配な氣持を押し隠して、病人をほつたらかしてどこかへ遊びに出かけてやるわ。世間のさういふ女たちのやうに、男女の結婚をまねて同棲して、老後の保證にするやうな關係を作ることは、死んでもするまいと思つて來たわ。男のやうな女が、氣味のわるいほど忠實で大人しい貧血質の若い女と、一緒に住んでゐる化物屋敷は澤山あるわ。さういふ家には、濕氣と共に感情の茸が生えて、二人はそれを喰べて生き、部屋ぢゆうにやさしさの蜘蛛の巣を張りめぐらして、

【熱も下つた朝、この上もない感謝をあらはして、本多はこんなことを慶子に告げた。

「いやはや、この偉大なる母性愛では、子供たちがどれだけあなたを好きになるかがわかるね」

「あれとこれとを一緒になさらないでよ」と慶子は怒りを装うて言つた。「親切なのは友だちにだけ。子供にはいつも冷淡にしてやらなくてはならないのよ、愛されるためには。私の娘がこんな風な熱で寝てゐたら、心配な氣持を押し隠して、病人をほつたらかしてどこかへ遊びに出かけてやるわ。一般の男女のやうに結婚して、一緒に暮らし、夫婦が共に白髪になるまで添い遂げると保証するといふやうな關係を作ることは、死んでもするまいと思つて來たわ。男のやうな女が、貧血質の女と、一緒に住んでゐることは澤山あるわ。さういふ家には、濕氣と共に感情の茸が生えて、二人はそれを喰べて生き、部屋ぢゆうに蜘蛛のやうに巣の中で抱き合つて眠るのよ。さうして男のような女は決つて働らき者で、

その中で抱き合つて眠るのよ。さうして男のような女は決つて働らき者で、二人の女は頬をすり寄せて税金の計算をする。……私はそんなお伽噺の中に住める女ぢやないわ」（39頁）	二人の女は頬をすり寄せて税金の計算をする。……私はそんなお伽噺の中に住める女ぢやないわ」】（24-25頁）
今少なくとも二人は孤獨ではなかつた。（61頁）	至少目前这两人都是孤独的。 【今少なくとも二人は孤獨ではあつた。】（46頁）

以上の３つの箇所は、本多と慶子の関係について、訳本の読者に誤った印象を持たれかねないと考えられる。まず、第1段落の訳文において、「老いは、かうして、二人にとつて、第三者に知られたくない共通の病氣のやうなものだつた」が「二人の老人にとつて、かうしてお互いの病氣を維持して、二人の間に第三者の誰にも介入されたくなかつた」に訳された。まず、「老い」に対しては、語り手が以下のようにかいつまんで解説した。

> 老いは正しく精神と肉體の雙方の病氣だつたが、老い自體が不治の病だといふことは、人間存在自體が不治の病だといふに等しく、しかもそれは何ら存在論的な哲學的な病ではなくて、われわれの肉體そのものが病であり、潜在的な死なのであつた。（241-242頁）

原文にある「老い」は、題名と呼応しており、『天人五衰』における最も重要なテーマだと言える。しかし、「二人の老人」の翻訳により、老い衰える「精神と肉体」への恐れという一般化した問題が特定した２人の問題にとどまってしまっている。さらに、原文において「第三者に知られたくない共通の病氣」、「世間一般の男女の仲とは多少ちがつてゐた」とあるのが、訳文では「お互いの病氣を維持して、二人の間に第三者の誰にも介入されたくなかつた」、「世間一般の女とは多少ちがつてゐた」と訳された。原文のほうは本多と慶子の関係が恋人関係または肉体関係という「世間

一般」の異性関係ではないことを暗示し、さらに２人の関係を維持しているのは「老い」という病気であると指摘した。しかし、訳文においては、慶子は本多に対して、「世間一般の女とは多少ちがつて」いる、すなわち「特別な女」であるという立場に置かれており、２人は単なる友人同士ではなく、その間に「第三者の誰にも介入されたく」いほど緊密なつながりがあると見られる。また、本多が看病してくれた慶子へのお礼として、原文にある「このやさしさと母性愛では、どんな女の子もあなたに夢中になるのがわかるね」が「この偉大なる母性愛では、子供たちがどれだけあなたを好きになるかがわかるね」に訳された。原作にある「母性愛」は、本多の話によると、その相手は「女の子」、すなわち慶子の同性愛の恋人であると容易に読み取れる。ところが、訳文の中では「母性愛」における愛の対象が「子供たち」になっていることにより、慶子は「母親」と位置付けられ、原文にある慶子の同性愛者という意味合いがその誤訳により非常に薄くなると考えられる。前記したように、文革期において、『豊饒の海』の第4巻『天人五衰』は他の３巻より早く翻訳された。前３巻の物語を把握していない『天人五衰』の読者は、慶子が同性愛者であることに気づかず、本多と慶子の緊密な関係から、２人の「老後まことに仲のよい友達」(36頁)の関係をロマンチックな男女関係に勘違いしてしまう可能性もある。

前述したように、『蟹工船』などの翻訳作品における男女関係への言及、性に関わる描写などは、禁欲主義を唱える文革当時の中国社会に受け入れられなかったため、訳者による段落の省略や削除が行われた。さらに、その中で、ソ連のスターリン体制下の同性愛迫害政策も文革期の中国に継承され、同性愛行為が退廃的な悪しきブルジョア文化の遺風であるとして排斥の対象になっており、「鶏奸罪【鶏姦罪】」、「流氓罪【ごろつき罪】」などの同性愛者を対象にした刑罰が制定された[431]。同性愛行為はただ「公序良俗」に反するだけではなく、大量の同性愛者が迫害を受けている。文革期における男女恋愛や性的描写の政治イデオロギー的な回避は、性を政治化した表現だと考えられる。現在の中国の文学や映画における性や同性愛行為への言及の敏感さからも文化大革命の禁欲主義の影響が見られる[432]。そのため、以上の原作と訳文の

431　安田峰俊『性と欲望の中国』(文藝春秋、2020年5月)50頁。

432　文化大革命期にける過剰なまでの性の抑圧により、文革を生きた作家の多くは、作品の中で文革を性と結びつけている。例えば、厳歌苓は『白蛇』で同性愛をテーマ

ずれは、『天人五衰』の訳者が慶子の同性愛者という立場に触れたくなかったという可能性がある。

しかし、『天人五衰』の第12章にある「人とちがつた性的傾向を持つてゐる」(83頁)に関する描写と、第27章にある慶子が「同性愛の老婆」(238頁)であることを明示した内容は訳者によりそのまま維持されている。前後の訳文に翻訳ストラテジーが統一されておらず、そこには矛盾さが感じられるが、『天人五衰』の訳本において、登場人物の「安永透」を指示する人称代名詞として、第1章から第12章までは「安永透」と翻訳され、第13章の半ばから「永透」になり、さらに第24章の「本多透の手記」(156頁)が「本多永透的手札【本多永透の手記】」(143頁)に訳されたことから、訳者名は記載されていなかったが、複数の訳者が作品を訳したのが見られる。そのため、『天人五衰』前半、すなわち本多と慶子の関係に関わる部分の翻訳を担当している訳者は、『天人五衰』の全編の物語と、第4巻『天人五衰』の訳文より後に出版された第3巻の『暁の寺』にある姫と慶子との同性愛行為という物語の筋を十分には把握していないという可能性もありうる。さらに、普遍的に異性愛を正常としている当時の中国の社会の「常識」に乗っかり、訳文を自分流の理解によって「合理的」に改変しているようにも見受けられる。また、『豊饒の海』の訳文にある「同性愛」という「削除すべきポルノ的な要素」に対して、訳者が削除、省略をせず、意図的に残した理由は、前述した『憂国』の翻訳テクストと同様、日本の退廃的な世相を中国の読者に提示するためであると考えられる。

翻訳の質の点から見ると、第1章から第13章までの部分とその後半には、その差は少ない。『天人五衰』の訳文において、誤訳や省略が頻繁に見られる。例えば、原文テクストにある「仕事に熱中してゐるふりをしてゐた」が「仕事に熱中してゐた」に翻訳された。以下のように、訳文にある誤訳のごく一部を、例として挙げる。

にして、権力の横暴を批判し、多様な性的アイデンティティーを強調し、女性解放を唱える。また、王小波は『黄金時代』で性を通して権力関係を表現し、文革への抵抗を訴える。文革期における男女恋愛や性的描写の回避と同じく、文革後の文学作品の中で性的描写を通して、文革への反抗を語るというのも、性を政治化した表現である。程春梅「20世纪中国文学中的贞节观」(山東大学博士学位論文、2012年4月)301-308頁、余思嘉「严歌苓“文革叙事”的超性别意识」(湖南理工学院修士学位論文、2017年6月)23-25頁などを参照した。

原作	訳文
途中耐へかねて起き出して、少女の足に觸つてゐた本多のことを、慶子は暗に諷して言つた。(41頁)	半夜里，庆子曾听见少女轻手轻脚地爬起来的声音，所以这样明讽暗刺地告诉本多。 【昨日夜中に、少女がこつそりと起き出した音が聞こへてゐたため、慶子は本多に暗に諷して言つた。】(27頁)
少年はなほも仕事に熱中してゐるふりをしてゐた。(72頁)	少年仍然热心于工作中。 【少年はなほも仕事に熱中してゐた。】(55-56頁)
透の心にたえず疼くやうになつた或る衝動も亦、絹江の存在に安らぎを覺えてゐる。(中略)絹江こそ、その狂氣によつて、決して透は傷つけることのできない世界に住んでゐるのを、透はよく知つてゐたからである。(140-141頁)	永透心中不断产生令人发疼的冲动，这是由江娟的存在而产生的，(中略)永透也知道，江娟的疯会伤害到自己，江娟必须生存在那样的世界中。 【永透の心にたえず疼くやうになった或る衝動も亦、江娟の存在から生まれた。(中略)江娟の狂氣は、透は自分を傷つけるため、江娟は必ずあのやうな世界に住まなければならないことを、透もよく知つてゐたからである。】(127-128頁)
(透の)忌はしい若さが、そこに白い紫陽花のやうに咲いてゐると本多は思つた。(145頁)	(永透的)那种充满光泽的青春，就像一朵白色的紫阳花开在那里。 【(永透の)艶に満ちた若さが、そこに白い紫陽花のやうに咲いてゐる。】(132頁)
透をぞつとさせた。(196頁)	这使永透安心了。 【永透を安心させた。】(182頁)

また、「毛沢東思想」や「毛沢東理論」は神聖視されており、論じることすら、毛への不敬罪に問われる危険があるという極めて敏感な文革期において、不敬な内容を忌避しようとするため、翻訳作品において、「毛沢東思想」などに関わる内容は削除対象となる。例えば、1975年6月に人民文学出版社から出版された小松左京『日本沈没』の訳文には、「チェスよりずっと複雑でおもしろいぞ。何しろ敵の駒をとったら、今度はそれを味方の駒として使えるんだからな。毛沢東やボー・ザップのゲリラ理論みたいだ。駒組もいろいろおもしろい型があって……」[433]における「毛沢東やボー・ザップのゲリラ理論みたいだ」という一文[434]が削除された。しかし、『天人五衰』の訳文には、以下のように原作に存在していない毛に関係する要素が見られる。

原作	訳文
	百子终于开始苦恼了，星星之火，也可以燎原。
やつと百子の苦悩がはじまつた。一本の煙草の吸殻から山火事が始まるやうに。（184頁）	【やつと百子の苦悩がはじまつた。小さな火花も広野を焼きつくす[435]。】（169頁）

透の婚約者・百子は透と汀の関係に苛まれ、透と自分の婚約が破綻となることを想像する。「一本の煙草の吸殻から山火事が始まるやうに」、百子の悩み苦しみも深まっていくと描かれた。しかし、訳者は原作の比喩を「小さな火花も広野を焼きつくす」に翻訳した。1930年に発表された「小さな火花も広野を焼きつくす」という表現は、中国共産党の立脚点が都市から農村へと移行するという計画を打ち出した、毛沢東の最も著名な文章の１つだと言える。現在も熟語として「小さい力から強大な勢力に発

433　小松左京『日本沈没』（下）（光文社、1973年3月）23頁。

434　小松左京『日本沉没』李徳純訳（人民文学出版社、1975年6月）177頁。

435　その翻訳は、毛沢東「小さな火花も広野を焼き尽くす」（《星星之火、可以燎原》、執筆時間：1930年1月5日）、中国共産党中央委員会毛沢東選集出版委員会編『毛沢東選集』（第1巻）（外文出版社、1968年）163頁を参照した。

展する」と肯定的に捉えられている。その意味から言えば、「小さな火花も広野を焼きつくす」の翻訳はやや不適切であると考えられる。『天人五衰』の訳本は、政治的な目的で出版されたものでありながら、ある程度からいえば、政治的な敏感さには欠けていると考えられる。

原作の『天人五衰』は新潮社から1971年2月に出版され、その訳本はわずか１０ヵ月後の1971年12月に人民文学出版社から出版された。訳文に頻繁に見られる誤訳や省略は、訳者の文学的素養と日本語の能力が欠けていたためでもあり、原作の字数の膨大さと翻訳期間が限られていたためでもあると考えられる。

②第3巻『暁の寺』

第4巻『天人五衰』の訳文と比べて、第3巻『暁の寺』における翻訳の質は改善されたと言える。意訳、省略、誤訳の部分はかなり減少した。

以下、第4巻『天人五衰』における省略、誤訳などを例として挙げてみる。

原作	訳文
晝間見た羽衣の松の影響であらう、夢は天神に關はつてゐた。(28頁)	「羽衣の松の」の削除(15頁)
ソムブレロをかぶつたままの慶子(68頁)	「ソムブレロをかぶつたままの」の削除(52頁)
(慶子は丸薬の三粒を)水割りのスコッチで嚥み下した。(85頁)	(庆子把三粒药丸)用冷水服了下去。 【(慶子は丸薬の三粒を)ひやしで嚥み下した。】(69頁)
いつか圖書館の美術全集で見たフォンテエヌブロオ派の天井畫風な、氣取つた吝嗇な青空。(95頁)	「フォンテエヌブロオ派の」の削除(80頁)
ルネッサンスはすばらしいですね。(123頁)	「ルネッサンス」は日本語の発音によりそのまま中国語の「魯涅桑司」(109頁)に訳されている。

本多先生のほんとの氣持はわからないが、先生は多分君を、英才教育のモルモットにしてゐるんだらうな。(129頁)	本多先生的本意我虽然不太清楚，但是我想他是希望把你施以英才教育。 【本多先生のほんとの氣持はわからないが、先生は多分君に、英才教育をしてゐるんだらうな。】(116頁)
この春の入學祝に父に買はせたスポーツ・カアのムスタング(205頁)	「ムスタング」の削除(191頁)
燦然とした桃山風の客間の、ルイ十五世様式の椅子に招ぜられる(226頁)	一间圆型的会客室里，请他坐在一张十五世纪的椅子上。 【円型の客間で、十五世紀の椅子に招ぜられる。】(211頁)
強々しいバロックの銀の大燭臺の向うで(229頁)	「バロックの」の削除(214頁)

『天人五衰』において、翻訳者はおそらく専門語彙の背景知識の欠如により、あるいは限られた翻訳の時間により、「羽衣の松」、「桃山風」などの固有名詞、その中で特に「ソムブレロ」、「フォンテエヌブロオ派」、「モルモット」、「ムスタング」、「ルイ十五世」、「バロック」などの外来語を省略する傾向が見られる。しかし、この点は『暁の寺』における用例から見ると、翻訳はよりよい方向へ変わっていったと考えられる。例えば、以下のように、『天人五衰』で誤訳された「ルネサンス」、「バロック」、「ルイ十五世」は、『暁の寺』の翻訳テクストにおいてすべて正しく翻訳された。

原作	訳文
ルネサンス風の庭(50頁)	文艺复兴样式的庭院 【ルネサンス風の庭】(51頁)
(宮殿は)ネオ・バロック様式(94頁)	(宮殿是)新变态式 【(宮殿は)新変態式】(104頁)

	路易十五式的椅子
ルイ十五世式の椅子(96頁)	【ルイ十五世式の椅子】(105頁)

しかし、『暁の寺』には以下の誤訳や増訳なども存在している。

> 五井物産の手配でホテルには極上の部屋が用意され、車も亦最上の車が本多を待つてゐたので、シーク族の運轉手の恭しい態度にいたるまで、ほかのイギリス人の觀光客の反感をそそる種子ならぬものはなかつた。朝戸出の前の食堂でも、本多はこのただ一人の東洋人の客に對する、押し黙つたイギリス人たちの無言の敵意を感じた。それははつきりした表徴をとつてさへ現はれた。本多のテーブルへまづベーコン・エッグを運んだ給仕を、隣りのテーブルに夫人と坐つてゐる權高な退役軍人らしい美髯の老人が、呼び寄せて鋭く短かい言葉で叱つた。以後、本多のテーブルへ來る皿は最後の番になつた。(76頁)

> すなはち昭和二十年五月二十四日と二十五日の二晩連續して、延五百機のＢ２９が山の手の各所を燒いた。まだその匂ひがくすぶり、眞晝の光りに阿鼻叫喚の名殘が漂つてゐるやうな氣がする。(133頁)

上記の最初の引用部の「ほかのイギリス人の觀光客の反感をそそる種子ならぬものはなかつた」という箇所と「本多は(中略)押し黙つたイギリス人たちの無言の敵意を感じた」という箇所において、２回出ている「イギリス人」は、翻訳テクストにおいて、すべて「美国人【アメリカ人】」(82頁)に翻訳された。２つ目の引用部の「延五百機のＢ２９が山の手の各所を燒いた」という箇所は、「美国出动了五百架次B-29轰炸机【アメリカが延五百機のＢ－２９爆撃機を出動させた】」(147頁)に翻訳された。訳者が無意識のうちに犯した誤訳であるとは考え難い。前記したように、建国されて以来、中国側では、アメリカを一貫して意識形態の対立国として見なしたという時代背景から見れば、訳文にはある程度アメリカへの批判というニュアンスも含まれている。

③第2巻『奔馬』

第2巻『奔馬』は誤訳がほぼ見られず、『豊饒の海』４部作において最も完成度の高い訳本だと考えられる。訳者は三島の作風を意識しながら、中国の読者の親しんだ言語表現で翻訳した。また、『奔馬』の訳者は訳注にも力を注いでいる。それに比べて、『天人五衰』には以下の１つの訳注しかない。

原作	訳文
	两人走出“鲁那”（译注：原系法国印象派画家名——Pierre August Renoir 1841-1919——以画丰满的少女著称，日本茶室多爱用它作店名）。在附近的中国馆子吃了一碗汤面。
二人は間もなくルノアールを出、近所で中華そばを喰べた（134頁）	【二人はルノアール（訳注：ルノアールはもともとはフランスの印象派の画家の名前——Pierre August Renoir 1841-1919——豊満な少女の裸体を描いたことで有名である。日本の喫茶店はルノアールを店名として好んで用いる）を出、近所の中華料理屋でそばを喰べた。】（121頁）

「ルノアール」に対して、「豊満の少女の裸体を描いたことで有名」な画家という注解が客観的であるとは言えない。前に述べたように、禁欲主義的性道徳に基づいた文革期において、文学作品における性に関わる描写は当時の中国社会に忌避されていた。しかし、『天人五衰』の中では、「豊満な少女の裸体」と意図的に結び付けられた「ルノアール」の訳注は、中国の「通俗常識」的道徳と対立する日本社会の性的観念、すなわち社会風俗を害する性的観念への訳者の批判に繋がっていると考えられる。

『奔馬』の訳注は４部作で最も多い。『暁の寺』の訳注は６つで、『春の雪』のは８つで、『奔馬』のは１１５つである。『奔馬』の訳文にある訳注は、ほぼ日本の元号、歴史上の人物と出来事、芸術形式、宗教、地理などの固有名詞に関する説明であり、内容的に極めて簡潔明瞭で、洗練された言葉で書かれている。例えば、原文テクストにある「バロックまがひの切妻を載せた荘重な扉があつた」(341頁)の訳文において、「バロック」は「巴罗克是欧洲十七、十八世纪建筑上的一种风格【バロックは１７、１８世紀のヨーロッパの建築の様式の１つである】」(396頁)という明快な訳注がつけられた。

④第1巻『春の雪』

第4巻『天人五衰』の訳文と同様に、『春の雪』の前半に省略、削除、意訳がよく見られる。その角度から見れば、第3巻『暁の寺』と第2巻『奔馬』と比べ、第1巻『春の雪』は良質な翻訳であるとは考えにくい。例えば、主人公の清顕の学校生活と本多との関係を描写した内容は、以下のように翻訳された。

原作	訳文
	清显在这样的环境里长到十八岁，他渐渐发现，自己被环境所孤立，变成了另一个世界里的人了。 其实孤立他的，不仅只是家庭，在学校里也是这样。在他读书的学习院，越来越加强培养学生以乃木将军那种殉死精神的传统教育。清显厌恶学校。 说到朋友，只有同班的本多繁邦同他比较要好。当然，想和清显交友的人很多，但他并不喜欢同辈的粗野的年轻人，本多那种娴静、温和、理智的性格，却打动了他的心。

かうして十八歳になつた清顯が、だんだん自分の環境から孤立してゆく思ひにとらはれたのは當然だらう。

孤立してゆくのは、家庭からばかりではない。學習院が院長乃木將軍のあのやうな殉死を、もつとも崇高な事件として學生の頭に植ゑつけ、將軍がもし病ひに死んでゐたら、それほど誇張した形であらはれなかつたらう教育の傳承を、ますます強く押しつけてきたことから、武張つたことのきらひな清顯は、學校に漲つてゐる素朴で剛健な氣風のゆゑに學校を嫌つた。

友だちと云つては、同級生の本多繁邦だけと親しく附合つた。もちろん清顯と友だちになりたがる人は多かつたけれども、彼は同年の野卑な若さを好まず、院歌を高唱してうつとりしたりする粗雑な感傷を避け、その年齢にしてはめづらしい本多の、もの靜かな、穩和な、理智的な性格にだけ心を惹かれた。(12-13頁)

【清顯はこのやうな環境で十八歳になつた。自分が環境から孤立してゆくことで、もう一つの世界の人になつた。

孤立してゆくのは、家庭からばかりではなく、学校でも同じだつた。彼が通つた學習院で、乃木將軍のあのやうな殉死精神と言ふ傳統的な教育を學生の頭にますます強く植ゑつけた。清顯は、學校を嫌つた。

友だちと云つては、同級生の本多繁邦だけと親しく附合つた。もちろん清顯と友だちになりたがる人は多かつたけれども、彼は同年の野卑な若さを好まず、本多の、もの靜かな、穩和な、理智的な性格にだけ心を惹かれた。】(11頁)

訳者は「武張つたことのきらひな清顯は、學校に漲つてゐる素朴で剛健な氣風のゆゑに學校を嫌つた」を「清顯は、學校を嫌つた」に翻訳したように、「武張つたことのきらひ」など修飾機能を果たした語彙や、「學校に漲つてゐる素朴で剛健な氣風のゆゑに」など理由を表した内容を削除し、原作の一部を省略したり短縮したりする傾向が見られる。省略、意訳などの翻訳手法により、修辞に富んだ文体で築かれた三島の原作は破壊されており、訳文において文学性の劣化が見られる。

しかし、翻訳の質の点から見ると、『春の雪』の後半のほうは忠実に原作を翻訳し

たと考えられる。例えば、同じ清顕の学校生活を描写した内容が以下のように訳された。

原作	訳文
	运动场那边，不时传来练习橄榄球的呼叫声。那种发自年轻人喉咙里的“理想主义者”的声音，清显听了就觉得恶心。粗暴的友情，新兴的人道主义，无止境的洒脱和诙谐。对罗丹的天才或塞尚的完美作品所作那种无言的礼赞……这些，只能算是与古剑道的嘶喊相应对的“新型体育”罢了。他们的喉咙不时都是充血的，带着桐叶般的嫩绿与清香，戴顶见不到“唯我独尊”的鸭舌帽。
運動場のはうでは、ラグビーの練習の喚聲がまだひびいてゐた。あの若い咽喉から放たれる理想主義的な叫び声が清顯はきらいだつた。粗暴な友情、新らしい人間主義、とめどもない洒落や地口、ロダンの天才やセザンヌの完璧に對するあくことない禮讃、……それはただ、古い劍道の叫び聲に對應する、新らしいスポーツの叫び聲にすぎなかつた。かれらの咽喉はいつも充血して、若さには青桐の葉の匂ひがして、唯我獨尊の見えない烏帽子をたかだかとかぶつてゐた。(163頁)	【運動場のはうでは、ラグビーの練習の喚聲がまだひびいてゐた。あの若者の咽喉から放たれる「理想主義者」の叫び声を聞いて、清顯は気分が悪くなつてきた。粗暴な友情、新らしい人間主義、とめどもない洒落や地口、ロダンの天才やセザンヌの完璧な作品に對する無言の禮讃……それはただ、古い劍道の叫び聲に對應する、新らしいスポーツの叫び聲にすぎなかつた。かれらの咽喉はいつも充血して、青桐のやうな薄緑と清香を帶びて、唯我獨尊の見えないハンチングをたかだかとかぶつてゐた。】(158-159頁)

訳文において、「若い咽喉」が「若者の咽喉」に、「きらいだつた」が「気分が悪くなつてきた」に、「セザンヌの完璧」が「セザンヌの完璧な作品」に、「若さには青桐の葉の匂ひがして」が「青桐のやうな薄緑と清香を帯びて」に訳された。訳者は中国の読者が慣れている言語表現を意識し、原文を意訳したと考えられる。訳本の前半と比べ、訳文の質がかなり改善されたという傾向が見られる。それにより、１つの作品が複数の訳者に翻訳されたと推測できる。

また、以下の清顕と聡子が結ばれた場面など、翻訳者は『春の雪』における「削除すべきポルノ的な要素」をすべて意図的に訳文に残している。性的描写の削除を実施しない理由は、『天人五衰』の翻訳テクストにある「ルノアール」の注釈と同じである。

> 誰も見てゐない筈なのに、海に千々に亂れる月影は百萬の目のやうだつた。聰子は空にかかる雲を眺め、その雲の端に懸つて危ふくまたたいてゐる星を眺めた。清顯の小さな固い乳首が、自分の乳首に觸れて、なぶり合つて、つひには自分の乳首を、乳房の豐溢の中へ押しつぶすのを聰子は感じてゐた。それには唇の觸れ合いよりももつと愛しい、何か自分が養つてゐる小動物の戯れの觸れ合ひのやうな、意識の一歩退いた甘さがあつた。肉體の外れ、肉體の端で起つてゐるその思ひもかけない親交の感覺は、目を閉ぢてゐる聰子に、雲の外れにかかつてゐる星のきらめきを思ひ出させた。(233-234頁)

その点について、他の３巻も同じである。『天人五衰』の原文テクストにある「自瀆者の手」(73頁)、「性慾から出がちなこと」(157頁)、「心中といふ觀念の性的な芳醇さが心をよぎり」(171頁)、「童貞喰い」(173頁)、「自分が性的達人の意の儘にされる」(173頁)、「つねはなかでも一等愚かで、一等乳房が大きかつた」(201頁)など、『暁の寺』の原文テクストにある「朱色の柱にありとあらゆる性交の體位を黒檀の浮彫であらはした愛の寺院」(63頁)、「千の交接體位をあがめるネパールの愛染の寺」(67頁)などもそのまま翻訳された。訳者は三島作品の「ポルノ的な要素」に注目して、批判している傾向が見られる。

4.3.3　まとめ

本節は『豊饒の海』４部作(訳者不明)を考察の対象とし、作品の出版時期、「出版説明」や評論、翻訳テクストにおける具体例などをめぐって分析してきた。

『憂国』の翻訳者は、当時の中国における日本文学研究者の第一人者たちが担当しているため、翻訳の水準はかなり高く、訳文には誤訳がほぼ見られない。しかし、文革期において『憂国』に続いて出版された三島作品である『豊饒の海』の第4巻『天人五衰』は、『憂国』と比べると、翻訳の質においてかなりの差が存在していると言える。『天人五衰』の訳文には、訳者は省略、増訳、意訳などの翻訳手法を頻繁に使った。限られた翻訳時間、訳者の能力の限界などにより、良質な翻訳の確保が難しいと言える。しかし、第3巻『暁の寺』、第2巻『奔馬』に至って翻訳の質が改善した。また、第1巻『春の雪』の訳文において、前半のほうは省略や意訳により原作の文学性がある程度損なわれていると言えるが、後半のほうは誤訳や翻訳の欠落が少ないため、読者の作品の主旨を理解するのに全体的に差し障りがないと考えられる。

また、訳文における具体的な翻訳ストラテジーを論じると、原作にある「敵意を感じた」「イギリス人」を「アメリカ人」に改変し、「Ｂ２９が山の手の各所を焼いた」を「アメリカが(中略)Ｂ-２９爆撃機を出動させた」に増訳したことなどから、訳者が「米帝国主義」への批判を中国の読者に意識させようとしていることが分かる。また、訳者は「ルノアール」に対して、裸体を描いた画家であることを強調するような注を付けたことにより、三島作品の「ポルノ的な要素」を批判していると思われる。

第4節　有吉佐和子文学の翻訳――『恍惚の人』

有吉佐和子『恍惚の人』[436]は、1972年6月に新潮社から出版され、その翌年映画化された。1970年代において、日本は高度経済成長期の真っ只中にあり、平均寿命が毎年伸びており、高齢化社会を迎えた時期に書かれた作品であるため、認知症と老人介護の問題をテーマにした『恍惚の人』はすぐベストセラーになり、「恍惚の人」という言い回しも大流行し[437]、大きな社会的反響を呼んだ。

436　有吉佐和子『恍惚の人』(新潮社、1972年6月)。

437　吉田知子「『老い』の問題を予見――有吉佐和子『恍惚の人』」、『新潮』第85巻第12

1975年4月、すなわち文革期において、『恍惚の人』[438]は人民文学出版社から出版された。文革が終わってから３年後の1979年に、『恍惚の人』（以下、全て「1979年版」と略称する）[439]は人民文学出版社から再版された。文革期において、『恍惚の人』がなぜ翻訳対象として選択されたのか。1972年度ベストセラーになったことが１つの原因となるが、本節で扱う、高齢者問題とその介護を描いた『恍惚の人』は、先ほど述べた文化大革命期の外国文学の翻訳対象の選択基準において、「資本主義国家の深刻な社会、政治、経済問題を反映する作品」と合致すると考えられる。本節では、文革期の訳本と1979年版の訳本と、原作『恍惚の人』との比較検討を通して、有吉佐和子その作家と『恍惚の人』その作品が文革期においてどのように解読されているかを解明する。

4.4.1　原作『恍惚の人』

4.4.1.1　あらすじ

『恍惚の人』は、主に舅の茂造を介護している立花家の嫁の昭子の苦労話をめぐる物語である。物語は、ある雪の降る日、昭子の姑の急死から始まる。「婆さんは、いつまで寝てる気ですかなあ」（26頁）と言いながら、長年連れ添った妻を失った８４歳の茂造は呆けてしまう。茂造は息子夫婦の信利と昭子、子供の敏と同居し始める。茂造は認知症が進行しており、実の息子と娘の京子さえ忘れてしまい、昭子と敏しか覚えていない。さらに食事の量を制限することができず、食べると際限なく食べたり、突然家から飛び出して何時間も歩いたりするようになる。

昭子は、２０年前から藤枝法律事務所で邦文タイプライターのタイピストの担当から、電話の取次ぎ、来客時のお茶出し、掃除万端の雑用まですべて取り仕切る。呆けてしまい、自分に甘えてくる舅を見て、昭子は、新婚当初「明治の男」（6頁）である「舅から折りにつけ職業婦人などという古い言葉で嫌やみを言われ続けてきたことを、ほろ苦く思い出した」（6頁）。昭子は法律事務所での仕事もあるので、立花家の隣に住む門谷家のお婆ちゃんに頼んで、茂造を敬老会館に連れていってもらう。お婆ちゃん

号（1988年12月）192-193頁などを参照した。

438　有吉佐和子『恍惚的人』秀豊、渭慧訳（人民文学出版社、1975年4月）。

439　有吉佐和子『恍惚的人』秀豊、渭慧訳（人民文学出版社、1979年6月）。

は離れで茂造の世話をするうちに、茂造に「老いらくの恋」(126頁)をする。しかし、ある日、「愛は終わった」(145頁)。そのため、昭子は毎朝茂造の敬老会館への送りを担当し、大学受験準備中の敏は学校の帰りに茂造の迎えを担当することになる。夫の信利は商社に勤め、多忙を極める一方、自分の父親を見て、「僕の人生の延長線上に親父が立ちふさがって、お前もやがてこうなるんだぞと威嚇しているんだぜ。こうやって親父を身近に眺めていると僕の躰からまるで蟇の油が浸み出るような気がする。やりきれない、実にやりきれない」(93-94頁)と思い、介護や家事には一切関わらない。

その後、茂造の老化現象は著しくなり、何もかも忘れてしまい、「モシモシ」しか言えなくて、夜が何回も目が覚めたり、失禁したり、さらに人格欠損の状態に入って、便を畳などに塗りつけたりするようになる。そのとき、大学生夫婦の山岸とエミが、昼間茂造の面倒を見る条件で立花家の離れを借りる。止むを得ず仕事を休んで茂造を見守る昭子は、心身ともに限界に達する。茂造のことを見ながら、「パパも、ママも、こんなになるまで長生きしないでね」(187頁)という敏の言葉も常に信利夫婦の頭にこびりつく。

ある日の夜、昭子が友達と電話している間に、茂造が風呂場のお湯の中で溺れ、急性肺炎を起す。４日後、茂造が奇跡的に回復する。昭子は「本当に救われていた。昭子の心の中にわだかまっていた過失という文字が、茂造が一日、二日と生き伸びるごとに薄れかかっていたのが、完全に拭い取られた」(267-266頁)。肺炎事件を乗り越え、「誰でもない、それは私がやれることだ」(268頁)と思い、昭子は心の中では「今までは茂造の存在が迷惑で迷惑でたまらなかったけれど、よし今日からは茂造を生かせるだけ生かしてやろう」(268頁)と堅い決意を固める。

最後に、茂造は体調が急に悪化して、自宅で臨終を迎える。昭子は冷静で率先して近所へ知らせに行って、茂造の遺体の湯灌を行う。通夜が終わって、敏は「ママ、もうちょっと生かしといてもよかったね」(312頁)と言う。昭子は息子の話を聞いて、「自分の頭の中がまるで真空のようになって(中略)涙が目から噴きこぼれ(中略)いつまでもそうして坐っていた」(312頁)。

4.4.1.2　原作について

1970年に、高齢化率が７％に達したことにより、日本は高齢化社会[440]に突入した。それと共に、介護問題が顕在化し、本格的に「家庭内の問題」から「家庭外の問題」、すなわち「社会問題」へと移行し始めた。急速に進行した高齢化現象に対して、当時まだ整っていなかった日本の社会福祉が指摘されるようになった[441]。それを背景として、有吉佐和子は1972年に『恍惚の人』[442]を発表した。当時、４１歳の有吉は作品の発表について、以下のように述べている。

> 数年前から私は自分の肉体と精神に飴色に芽吹き始めた老化に気づき、同時に作家としてこれは最後まで直視しようと決意していた。外国へ出かけると老人の施設を隈なく見学し、現代にあって老いて生きるのは自殺するより遙かに苦痛のことであると悟った。科学の進歩は人間の寿命を延ばしたが、

440　国際連合の指標では、６５歳以上の高齢者（老年）人口が総人口の７％を超えた社会を「高齢化（Aging）社会」、１４％を超えた社会を「高齢（Aged）社会」と定義した。大里仁士、古川正紀『21世紀社会の安定化条件』（九州大学出版会、2001年4月）113頁。

441　1970年代の日本における高齢者とその介護に関わる社会福祉問題について、大里仁士、古川正紀『21世紀社会の安定化条件』（九州大学出版会、2001年4月）80頁、中村律子「高齢者福祉制度の離陸期：1950年から1970年における老人の制度化過程の議論を中心に」、『現代福祉研究』第6巻（2006年1月）103-131頁、今川晃、牛山久仁彦、村上順『分権時代の地方自治』（三省堂、2007年8月）115頁、藤崎宏子「介護保険制度と介護の『社会化』『再家族化』」、『福祉社会学研究』第6巻（2009年6月）41-57頁、藤崎宏子「ケア政策が前提とする家族モデル　1970年代以降の子育て・高齢者介護」、『社会学評論』第64巻第4号（2013年）604-624頁などを参照した。

442　『恍惚の人』に関する先行研究について、朱金和「浅谈日本小说《恍惚的人》」、『复旦学报』（社会科学版）1979年第2期（1979年3月）110-111頁、助川徳是「『恍惚の人』有吉佐和子」、『国文学解釈と鑑賞』第54巻第4期（1989年4月）118-122頁、上野千鶴子「『恍惚の人』と『黄落』のあいだ」、『小説トリッパー』1998年春季号（1998年3月）34-45頁、大町公「〈ボケ〉る前に：佐江衆一『黄落』の提起したもの」、『奈良大学紀要』第28号（2000年3月）19-36頁、楊珍珍「养老问题中的社会责任与个人救赎——《恍惚的人》论」、『科学发展・协同创新・共筑梦想——天津市社会科学界第十届学术年会优秀论文集』（下）（天津出版社、2014年）1093-1098頁などを参照した。

それによって派生した事態は深刻である。[443]

自分の「芽吹き始めた老化」を感じた、不惑の４０歳を過ぎたばかりの有吉佐和子は、作家という立場から、「老い」と「それによって派生した事態」に対して深刻な疑問を投げかけ、探求した。「外国へ出かけると老人の施設を隈なく見学し」た有吉は、作品の中で、茂造が入居資格なしの日本の施設についての詳しい説明を通して、着々と自分に近づいてきた介護という問題を目の前にして、昭子は助けを求める当てがないという窮屈を描き、日本の高齢者介護政策におけるさまざまな不備を指摘した。『恍惚の人』において、老人介護を社会問題としてどのように位置づけるべきか、関連した社会福祉制度をどのように見直すべきかなど高齢化社会が抱える様々な問題が提起された。

『恍惚の人』においては、主に介護の主役を担った昭子をめぐって描かれている。姑が急死してから、介護の重圧はほぼ昭子にかかっている。その相手は「気難し」く、「姑の過保護から、少年のときの我儘を年をとっても持ち続けてきた」(5頁)舅である。信利と結婚してから、昭子は茂造と互いに敵対感を抱いているが、茂造の老化現象が深刻になるに伴って、舅に対する嫌悪感は和らぐ。昭子の目から見れば、「子供に返った」(113頁)茂造の身には、敏の幼児時代が時々投影されている。さらに、茂造の介護、すなわち「老い」そのものを通して、昭子自身も成長する。物語の最初において、姑の突然の死に対して、昭子は「心準備が何もなかった」(27頁)。しかし、作品の結末で、昭子も自分の友達で兄嫁の光子と同じく、老人介護、また死そのものについて、「経験者」(28頁)になる。「死というものは人を動転させる」(27頁)ように、昭子も「老い」、「死」から辛さ、苦しみ、喜び、平静、切なさなど様々な心境を体験している。

作品の中で、昭子と舅の関係のみならず、核家族における昭子、信利と敏という３人の関係についてもきめ細かく描写された(88頁)。まず、昭子と信利の関係について、茂造の介護問題は信利にも、昭子にも降りかかるが、以下の段落から見れば、作品の中で家事も含めて昭子により深くかかわっていることは明らかである。

443　有吉佐和子『恍惚の人』(新潮社、1972年6月)表紙。

信利はきっとこう言いたいのだ。君がこの老人を置きざりにして勤めに出ることはないだろう。女らしく妻らしく家庭に帰るべき時が来たんじゃないのか――と。(94頁)

この家では昔の主婦の仕事の一つだった弁当作りの手間ははぶけていた。(106-107頁)

男というのは家庭内の煩わしいことは避けて通ろうとする傾向があるのではないだろうか。(123頁)

姑が死んだときだって面倒なことは全部、私がやったのだ。信利は、ぽかんと坐っていただけだ。老いた父親を夜の夜中に抱えて庭へ出る妻に、この人は一度でも済まないと思ったことがあるだろうか。(123頁)

共稼ぎしている女は、家に帰っても仕事の延長のようにすぐ台所にかかるべきである。(126頁)

ここで、当時の「男」と「女」の問題も見られる。昭子が共稼ぎしているが、「家庭に帰」って、老人介護から、「弁当作り」、「台所」まで、すべての「煩わしいこと」、「面倒なこと」にかからなければならない。1970年の女性が「現代の女」(74頁)と説明されつつ、結局、「昔の主婦」という身分束縛から脱却することができず、家事、舅の介護など家庭内のことを「義務」として引き受ける。昭子の目の前に設けられる障害物は、夫の信利である。信利が昭子の仕事に対しては、「女は無能だから、お茶汲みとタイプライターぐらいが分相応で、職場からの社会参加などはまるでなかったとでもきめつけるのか」という態度を取る。昭子が「昔の主婦」から脱胎できない最も大きな理由は、「牢固として抜き難い封建色がある」「信利の属する世代の男性が持っている女性観」(94-95頁)にある。共稼ぎしている昭子が「明治の男」である舅から受けなければならないのは、「職業婦人などという古い言葉で嫌やみ」であれば、夫からのは職場で働く者同士の共感、一体感ではなく、自分の仕事に対する上から目線の「寛容と忍耐」である。信利は、女性の役割を家庭内に限定しており、女性

を働くことにより家庭経済を負担する、すなわち社会的存在として認めていない。信利は自分の惨めな(107頁)親父にならないと思いながら、「明治の男」(6頁)の思想をある程度引き継いでいると言える。戦後、男女同権平等をめぐる法律が制定されてから、女権拡張運動は「精彩を失ってい」(95頁)くことになる。有吉佐和子の描いた『恍惚の人』は、男性的視点からの封建的な女性観への反抗の表れとしても捉えられる。

そして、信利夫婦と茂造、信利夫婦と敏の関係についてである。茂造の日増しに深刻になっていく老化現象を目にする信利夫婦は、茂造の姿が未来の「自分自身の映像」(52頁)で、人生の「延長線上」(101頁、107頁、112頁、123頁)にいると常に思い出す。茂造を見ながら、信利と昭子は「老いるということの窮極は、(中略)死よりも昏く、深い絶望に似ている」(52頁)と思い込んでいる。しかし、物語の後半において、「人生の延長線上」の代わりとして、「パパも、ママも、こんなになるまで長生きしないでね」(187頁)が頻繁に述べられている。それにより、信利夫婦の身分は、現在の「介護者」から未来の「要介護者」までの転換が行われる。『恍惚の人』の前半はほぼ暗くて、登場人物もその感情の起伏が激しく、「老い」そのものに対する恐怖が中心に描かれている。物語の最後で、立花家はついに介護生活に慣れ始め、平静な生活に戻るとともに、茂造の死が訪れる。茂造の死により、信利と昭子も正式に「老い」というライフサイクルに入ると考えられる。最後の場面の中で、昭子も、読者も、敏の言葉「ママ、もうちょっと生かしといてもよかったね」(312頁)を通して、「老い」という現実から微かな光が垣間みえてくる。昭子の涙には、自分の手で世話を焼いた舅の死に対する切なさ、老いへの不安、息子の慰めなどさまざまな感情が絡まっている。

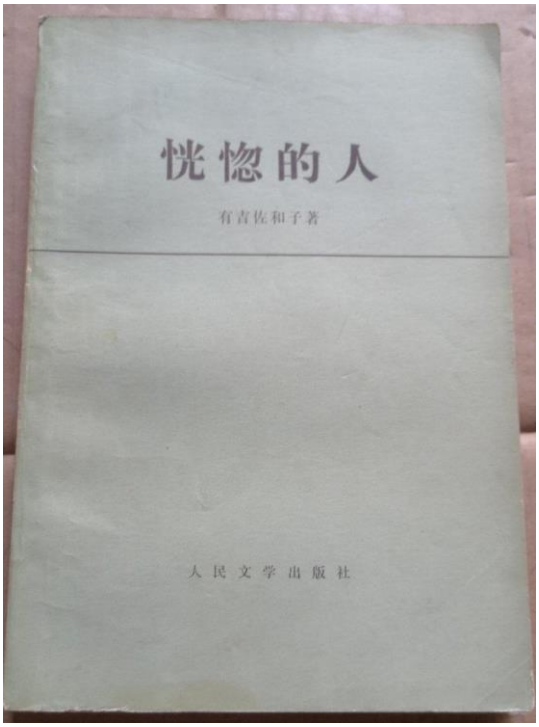
4.4.2　翻訳作品『恍惚の人』

4.4.2.1　訳本の「出版说明」

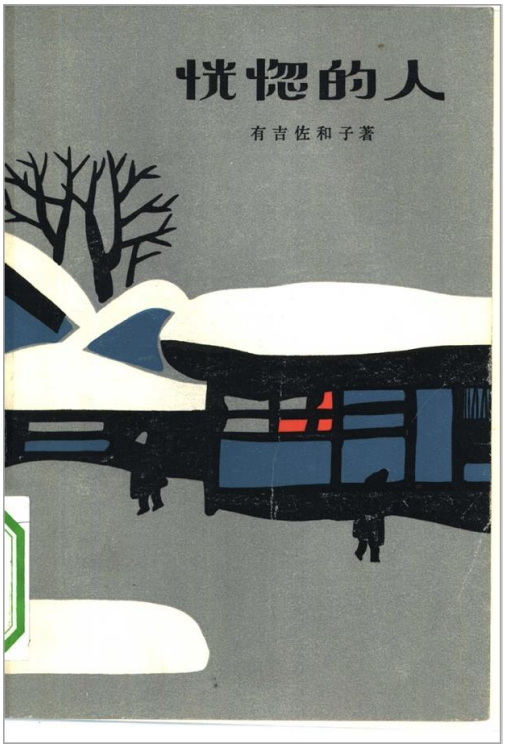
有吉佐和子『恍惚の人』は、1975年4月に人民文学出版社より「内部翻訳」として出版された。翻訳者の作者と作品に対する評価は、訳本の「出版说明」から見られる。また、先述したように、『恍惚の人』は1979年に人民文学出版社より再版された。文革期の訳本と1979年版の訳本の相違について、「出版说明」と表紙を除いては、訳者名の記載、テクストの翻訳、訳文の注釈はすべて同じである。

まず、文革版と1979年版の表紙は、以下のように違っている。

文革版(1975年版)



1979年版



文革版の『恍惚の人』は、前述した、1960年代から文革の終焉まで内部的に出版された「黄皮書」に属す。文革版にひきかえ、1979年版の表紙は、物語の冒頭に即し、雪の積もった町の景色を絵にしたカラー版である。文化大革命の目印の１つと見做される「黄皮書」をカラー版の表紙に変更したことにより、文革のイメージを覆し、文学作品から政治的色彩を除くという1979年版の編集者の意図が窺える。

上記と同じ理由で、1979年版の翻訳者は文革版に基づき1978年12月に「出版説明」も改めて書き直した。本節において、２つの「出版説明」の異なったところに対する分析により、1975年版の文革的要素を解明することを試みる。

まず、以下は作者の「有吉佐和子」に関する説明である。

文革版(1975年版)

有吉佐和子(1931年生)是日本知名的资产阶级女作家，东京女子大学英文系毕业，1956年开始发表作品(後略)。

【有吉佐和子(1931年生まれ)は日本の有名なブルジョア女性作家である。東京女子大学英文学科卒業。1956年から作品を発表し始め(後略)。】

1979年版

有吉佐和子(1931年生)是日本当代知名女作家，1952年东京大学英文系毕业，曾在大同出版社任职，参加过同人杂志《白痴群》和《新思潮》。1956年，有吉佐和子以她的小说《地歌》获“新人奖”，显示了她的创作才华，从而登上文坛，开始了作家的生涯。

【有吉佐和子(1931年生まれ)は日本当代の有名な女性作家である。1952年、東京大学英文学科卒業。大同出版社に就職したことがある。同人誌『白痴群』、『新思潮』に参加。1956年、有吉佐和子は小説『地唄』で「新人賞」を受賞し、創作の才能を示し、それにより文壇に登場し、作家の生涯を始める。】

1979年版の「出版说明」の中では、事実上の誤りがいくつか存在している[444]。「東京女子大学」を「東京大学」、「新人賞候補」を「『新人賞』を受賞」と訳者は間違っている。そして、調べたところ、「大同出版社に就職したことがある」に相当する経歴は確認できなかった。訳者は、有吉と、有吉が自身の出身地である紀州を舞台にして書いた小説『紀ノ川』の女性主人公、すなわち大学を卒業して出版社に就職した紀本家の孫である華子を混同した可能性がある。文革版より、1979年版のほうが有吉佐和子の作家としての前期の経歴について詳しく解説している。また、文革版において有吉佐和子の説明は「日本の有名なブルジョア女性作家」であり、1979年版において、その説明は「日本当代の有名な女性作家」に変わった。前述した表紙の変更の理由と同じで、「ブルジョア」という文革的要素を取り除く傾向が見られる。

次は、有吉佐和子と中国との関わりについてである。

444　有吉佐和子の年譜について、『筑摩現代文学大系』63「芝木好子・有吉佐和子集」(筑摩書房、1984年11月)432-439頁を参照した。

文革版(1975年版)

她对我国友好，曾多次访问我国。

【彼女は我が国に対して友好的で、何度も我が国を訪問したことがある。】

1979年版

有吉佐和子对中国人民怀有友好的感情，曾多次访问我国，进行友好文化活动和搜集创作材料，对中日文化交流作出了积极的贡献。她的作品《墨》、《孟姜女考》，以及一些散文、随笔，都歌颂了中日两国人民的传统友谊。

【有吉佐和子は中国人民に対して友好的感情を抱いており、友好的文化活動を行い、創作のための材料を探しに、何度も我が国を訪問し、中日の文化交流に積極的な貢献を果たした。彼女の作品『墨』、『孟姜女考』、また散文、随筆はすべて中日両国人民の伝統的友誼を謳歌している。】

両方の「出版说明」が、有吉佐和子が中国に対して友好的で、何回も訪問したことを述べている。1961年以降、有吉佐和子は、1961年、1962年、1965年、文革最中の1974年、1978年と５回にわたって中国を訪問し[445]、中国と縁が深い日本作家の一人だと言える。1961年、1962年、1965年、すなわち中日国交回復前の時期に、有吉は中国作家協会などの招きによって中国に出かけた。３回の中国への旅で、毛沢東、周恩来、当時の政府の対日交渉の責任者を務め、中日友好協会の会長であった廖承志、中国人民対外文化協会秘書長の孫平化などが有吉と会見した。その中で、殊に３回目の訪中活動において、北京に半年滞在し、中国の天主教に関する調査を行った。３回の訪問

445　有吉佐和子の５回訪中について、唐月梅「忆佐和子」(代序)、有吉佐和子『暖流』唐月梅訳、薛強編(春風文芸出版社、1986年6月)1-8頁、池田大作「我以“人”的名义写作――忆有吉佐和子女士」(原載『聖教新聞』2001年5月15日)卞立強訳、『作家』2003年第8期(2003年8月)3-4頁、王向遠「当代日本作家的中国纪行」、『燕赵学术』2007年春之巻(2007年7月)199-201頁、楊暁輝「“越境”的场所――从《有吉佐和子的中国报告》看中国生态问题的文学思考――」、『潘阳湖学刊』2014年第1期(2014年)92-96頁、王岩「有吉佐和子眼中七十年代的中国农村――以《中国报告》为中心」(西安外国語大学修士学位論文、2016年)8-11頁などを参照した。

を通じて、有吉は老舎、郭沫若、夏衍、氷心[446]などの作家や中国の日本文学研究者たちと知り合い、親交を深めた。次いで1974年、国交正常化２周年という節目に、有吉は中日間の正式通航の初運航に招かれ、２週間中国に滞在する予定であったが、最終的に僅か４日間で日本に戻った。最後の訪中は文革後の1978年である。有吉は、農村の公害問題を研究テーマとして１ヵ月にわたって中国の人民公社を見て回り、帰国後、その調査報告として『有吉佐和子の中国レポート』[447]を完成した。５回の旅に基づいて、有吉は伝統文芸など中国の要素を題材とする『墨』、『青い壺』などの作品を著した。中国において、有吉の他の作品[448]も数多く翻訳された。

1984年8月30日に、５３歳の有吉佐和子は急性心不全のため死去した。４日後の『人民日报』に、「日女作家有吉佐和子去世」[449]と題としたニュースが「国際速報」のコーナーに掲載された。有吉の５回の訪中で親交を深めた中国の日本文学研究者たちも追悼文[450]を書いて、有吉に哀悼の意を表わし、彼女の逝去を惜しんだ。追悼文の中で

446　氷心「火树银花里的回忆」、1984年5月2日『人民日报』。

447　有吉佐和子『有吉佐和子の中国レポート』（新潮社、1979年3月）。

448　今の時点で、中国で翻訳された有吉佐和子の作品について、『恍惚的人』は、本論文で扱うとする文革版と1979年版以外、『恍惚的人』李煒訳（南海出版会社、2011年7月）もある。『海暗』は、『暖流』唐月梅訳、薛強編（春風文芸出版社、1986年6月）、『暗流』梅韜訳（中国文聯出版会社、1984年11月）がある。『非色』は、『非色』李徳純訳（上海訳文出版社、1984年6月）、『战争新娘 一个吧女的人生自述』南敬銘、郭東昉訳（遠方出版社、1998年3月）がある。『華岡青洲の妻』は、『嫉情人生』応冀、戴郁芬訳（四川文芸出版社、1996年3月）がある。その他、『地唄』、『赤猪子物語』、『人形浄瑠璃』、『もなかの皮』、『祈祷』、『三婆』、『黒衣』『墨』、『なま酔い』、『青い壺』なども翻訳された。

449　「日女作家有吉佐和子去世」、1984年9月3日『人民日报』。

450　胡挈青、舒乙「有吉佐和子，你走得太早」、1984年10月9日『人民日报』；蘇波「日本著名女作家有吉佐和子逝世」、『世界文学』1984年第5期（1984年10月）308頁；林林「人去文采在――悼有吉佐和子女士」、1984年11月9日『人民日报』；莫邦偉「日本文艺界哀悼有吉佐和子突然逝世」、『译林』1984年第4期（1984年12月）261頁；李徳純「不知疲倦的探索者 悼念有吉佐和子」、『读书』1985年第3期（1985年）123-126頁；範作申「日本名作家有吉佐和子逝世」、『外国文学研究』1985年第1期（1985年1月）146-147頁；李徳純「苦涩中的深沉美――纪念有吉佐和子逝世七周年」、1990年12月5日『人民日报』などがある。

は、有吉と中国、中国の研究者と結んだ友情、中日の文化交流への貢献について言及された。

唐月梅「忆佐和子」[451]などによると、文革期に『恍惚の人』を訳した翻訳者の中の１人である葉渭渠も、1960年代に有吉と知り合った。文革版の「出版说明」の中では、有吉について「日本の有名なブルジョア女性作家」でありながら、「我が国に対して友好的」であると述べられており、読者にやや違和感を感じさせると言える。小林多喜二、西野辰吉などのプロレタリア作家を除いては、外国作家、特にブルジョア作家に対して、翻訳者が好意的な態度を示すことは、文革期の翻訳作品の中で極めて稀である。有吉に対して、文革版にある矛盾している評価をもたらすのは、有吉の親中国の態度という要素も含まれているのではないか。『恍惚の人』が翻訳対象として選ばれた理由が、高齢者問題にあるのか、作家その人に対する評価にあるのかについては検討の余地がある。

以下は、有吉の作品に関する紹介である。

文革版(1975年版)

代表作有长篇小说《不是为了肤色》、《暖流》、《华冈青洲之妻》等。

【代表作は長編小説『非色』、『海暗』、『華岡青洲の妻』など。】

1979年版

女作家早期的许多中短篇小说，从《地歌》到《木偶净琉璃》、《黑衣》和《墨》等(中略)除了现代题材的小说以外，(中略)如《助左卫门四代记》、《华冈青州之妻》和自传体小说《香华》等。有吉佐和子的长篇小说，有几部触及重大的社会问题，如(中略)《不是由于肤色》、《波多黎各日记》，(中略)《暖流》，(中略)《综合污染》。

【女性作家の早期の作品には、『地唄』から『人形浄瑠璃』、『黒衣』、

451　唐月梅「忆佐和子」(代序)、有吉佐和子『暖流』唐月梅訳、薛強編(春風文芸出版社、1986年6月)2頁。その他、葉渭渠『扶桑掇琐』(湖北教育出版社、2002年5月)135-137頁、孟昭毅、李載道編『中国翻译文学史』(北京大学出版社、2005年7月)524-536頁なども参考にした。

『墨』など(中略)現代題材の小説以外、(中略)例えば、『助左衛門四代記』、『華岡青洲の妻』と自叙伝小説『香華』など。有吉佐和子の長編小説の何冊は、重大な社会問題に触れている。例えば、(中略)『非色』、『ぷえるとりこ日記』、(中略)『海暗』、(中略)『複合汚染』。】

1979年版においては、日本の伝統芸能の世界を舞台にした作品から、歴史や紀州から題材を取った作品、人種差別問題と軍事基地を扱った作品、公害問題を掘り下げた作品まで、種類別と時間順に並べられている。1979年版と比べ、文革版は全面的であると言えない。また、『非色』、『海暗』という２つの作品は意図的に選択されたと考えられる。『非色』は、終戦後、黒人と結婚し、渡米した笑子の視点から、彼女がアメリカの貧民街で遭遇した人種差別と偏見問題に深く切り込んだ。黒人問題を「階級闘争」と見なし、「社会体制の問題」として把握するという点が、先述した黒人闘争に関わる毛沢東思想と合致している。また、文革版の「出版说明」の中では、「軍事、戦争の面から、反帝国主義、反修正主義を唱える作品」という文革期の翻訳対象の選択基準に即して、離島における米軍射爆場の設置に触れている『海暗』に言及した。

次に、作品に対する評価を見てみる。

文革版(1975年版)

《恍惚的人》是有吉佐和子以日本老人晚年的生活遭遇为题材的新作，1972年6月出版，风行一时，并改编成电影上映。

作者在这部作品里，以一个中等职员的家庭为背景，描写老年人长期患病，得不到适当照顾，给家庭和社会带来不少麻烦，来说明日本老人问题的普遍性和严重性。同时，作者还从侧面勾划出了资产阶级的晦暗的生死观、小资产阶级的思想的极度空虚和苦无出路的绝望情绪。小说反映出日本这个所谓“经济大国”、“福利国家”，在表面繁荣的背后，隐藏着种种严重的社会问题。但这些问题是资本主义制度本身所产生的社会矛盾，在腐朽和没落的资本主义社会里是根本不能解决的。

为了帮助我国读者了解日本的社会现状，我们把这本书翻译出来，供内部研究参考。书中自然主义的描写较多，翻译时作了一些删节。

【『恍惚の人』は有吉佐和子が日本における老人の晩年の生活境遇を題材にした新作である。1972年6月に出版され、一時期よく読まれ、映画化された。

作者はこの作品において、普通の会社員の家族を背景に、病気を長期にわたって患う高齢者が、適切な介護を受けられず、家族や社会に多大な迷惑をかけるさまを描写し、その描写を通して、日本における老人問題の普遍性と深刻さを説明した。同時に、作者は、ブルジョア階級の暗い死生観、小ブルジョワ階級の思想における極度の虚無感と出口を見出せない絶望感を間接的に描いている。この小説は、いわゆる「経済大国」、「福祉大国」である日本の、表面的な繁栄の背後に種々の深刻な社会問題が潜んでいることを表した。しかし、これらの問題は資本主義制度そのものにより生じた社会矛盾であり、腐朽し、没落した資本主義社会において解決不可能である。

我が国の読者が日本の社会現状を理解するため、私たちはこの作品を翻訳し、内部の研究参考に供する。作品の中には自然主義的描写が多いので、翻訳するとき、若干の削除を行った。】

1979年版

《恍惚的人》是有吉佐和子的一部以老人的遭遇为题材的小说，1972年出版，风行一时，并曾改编为电影上映。作者在这部作品里，以一个小康之家为背景，描写了一个长期患病的老人，得不到适当的照顾，精神恍惚，给家庭和社会带来不少麻烦，以此揭示老人问题的社会性。同时，这部作品也从侧面勾划了人们的空虚的思想、苦闷的情绪，以及晦暗的人生观，还展现了日本的社会风俗和生活习惯。小说文笔流畅，描写细腻，形象生动，在技巧上也有特色。

【『恍惚の人』は有吉佐和子が老人の境遇を題材にした小説である。1972年に出版され、一時期よく読まれ、映画化された。作者はこの作品において、小康家庭〔暮らし向きがある程度裕福な家〕を背景に、病気を長期にわたって患う高齢者が、適切な介護を受けられず、精神も恍惚となり、家族や社会に多大な迷惑をかけるさまを描写し、その描写を通して、老人問題の社会性を明らかにした。それと同時に、この作品は、人々の虚無的思想、苦悩する心と暗い人生観を間接的に描き、さらに日本の社会風俗と生活習慣を表した。

小説は文体が流暢で、描写が細かく、生き生きとしている。技術上においても特色を備えている。】

まず、文革版において、『恍惚の人』は「日本における老人問題の普遍性と深刻さ」を表したのに対して、1979年版は「日本における」という地域的な範囲を削除し、高齢者問題について、国境を超えて全世界の人々が考えられなければならないものであると評価した。そして、1979年版は、文革版にある「ブルジョア階級」の「暗晦な生死観」と「小ブルジョワ階級」の「虚無感」「絶望感」を、「人々の虚無的思想、苦悩する心と暗い人生観」であると概括した。作品を紹介する際に、文革版の「ブルジョア階級」と「小ブルジョワ階級」は、前記した作家に関する紹介にある「日本の有名なブルジョア女性作家」と呼応しており、記述が引き締まっていると思われる。しかし、文革版の「出版説明」は読者の目を高齢化とその介護、作者有吉の女性観など深刻な問題から目をそらさせ、日本の「腐朽し、没落した資本主義社会」への批判に注目させようとしている[452]と考えられる。また、文革版と比べて、1979年版の「出版説明」の中では、「小説は文体が流暢で、描写が細かく、生き生きとしている。技術上においても特色を備えている」と作品の文学性にも触れている。

4.4.2.2　訳文のテクスト

文化大革命期に出版された『恍惚の人』において、訳者名は「秀豊・渭慧」と記載されており、「集体署名」である。「秀豊・渭慧」は翻訳家の名前の一字を寄せ集めたもので、文革期に、『日本のシナリオ「砂の器」、「望郷」』や『油断！』などを

452　当時の文革期の高齢化率について、公式には統計がないが、1964年は３．６％であり、1982年は４．９％である。1966年から1976年までは、およそ４％だと推定されている。「出版説明」の中で、高齢化問題が資本主義社会への批判より軽視されている理由が、当時の中国がこの問題にまだ直面していないことにあったのかは今後の課題としたい。王桂新、戴二彪「中国における少子高齢化の実態，発生要因と対策」、『ワーキングペーパー』2015年第7期(2015年3月)1-22頁、金光洙「中国の高齢化の要因と経済的影響」、『現代社会文化研究』第62巻(2016年3月)181-196頁を参照した。

翻訳した葉渭渠、高慧勤であると考えられる。「秀豊」[453]については、なお不明であるが、葉、高と同じく、当時の中国における日本文学研究者の第一人者であるという可能性が高い。

まず、「出版说明」の中では、「作品の中には自然主義的描写が多いので、翻訳するとき、若干の削除を行った」と述べられている。文革期において、「自然主義」は以下のように定義された。

> 文艺创作中的一种有害倾向。它着重描写现实生活的个别现象和琐碎细节，追求事物的外在真实，忽视对生活现象的分析、概括和社会现实的本质方面，甚至歪曲生活。(中略)第二次世界大战之后，自然主义已成为现代资产阶级文艺的普遍特征之一。在名目繁多的“主义”里，有大量的自然主义的描写，什么官能刺激，什么两性生活，什么人体美，资产阶级御用文人企图通过这类平庸琐碎、低级庸俗、消极颓废的人物、事件和思想来掩盖资本主义世界尖锐激烈的阶级斗争，转移工人阶级和劳动群众的视线，瓦解人民群众的革命斗志。
>
> 【文芸創作における一種の有害な傾向である。自然主義は重点的に現実生活の個別的現象と瑣末な細部を描写し、物事の外在的真実を追求し、生活現象に対する分析、概括と社会現実の本質を無視し、さらに生活を歪曲する。(中略)第二次世界大戦後、自然主義は現代ブルジョア階級文芸の普遍的特徴の一つになる。名目がやたらに多い「主義」の中で、官能の刺激や、男女の

453 「秀豊」の「秀」は「劉秀芝」で、「豊」は周豊一である可能性がある。当時の中国における日本文学研究者の第一人者として、1970年代から『竹取物語』、『伊勢物語』、『落窪物語』、『草枕』など日本の文学作品の翻訳に取り組んだ豊子愷であるという可能性をまったく排除してしまうことはできないが、豊子愷は文化大革命で迫害され、1975年に『恍惚的人』が出版されてわずか数ヵ月後死去し、さらに1970年代から、人民文学出版社の所在地である北京と遠く離れた上海に在住していたため、周豊一より可能性が低いと考えられる。それについて、坂元昌樹、田中雄次、西槇偉、福澤清『漱石文学の水脈』(思文閣、2010年10月)143頁、豊一吟『我的父亲丰子恺』(人民文学出版社、2013年9月)277-278頁、大野公賀「文化大革命期の中国知識人――豊子愷の思想と作品について――」、『東洋法学』第63巻第2号(2020年1月)334-309頁などを参照した。「秀豊」について、今後の課題としたい。

営みや、人体美など、数多くの自然主義の描写が見られる。ブルジョア階級の御用文人はこの種の凡庸で些細な、下品で低俗な、消極的で退廃的な人物、事件と思想を通して、資本主義世界における厳しく激しい階級闘争を覆い隠し、労働者階級の注意をそらし、民衆の革命闘志を瓦解させる。】[454]

上記の定義から見ると、文革期において、自然主義の文学は、物事の本質に触れることがでないものであり、表面的な描写によって「労働者階級」の「革命闘志」を惑わす、「階級的観点を失った」[455]ものと捉えられた。「出版说明」の中で言及された「自然主義的描写」は主に「官能の刺激や、両性生活や、人体美など」、すなわち性的描写や男女の営みや人間の肉体美の描写を指す。『恍惚の人』の翻訳テクストの中では、以下の引用の露骨な性的描写と、「オチンチン」(131頁)、「あそこ」(234頁)、「四人の子供を産んだ大きな尻」(235頁)、「睾丸の皺」(244頁)、「若者のそれ」(256頁)、「二十年も力萎えたままであったろう彼の性器」(257頁)、「皺だらけの性器」(262頁)、「余計なもの」(271頁)、「そこにあるもの」、「肛門」(309頁)などそれを連想させる表現は、すべて削除された。

その夜、この夫婦は久しぶりで肌を合わせた。昭子は夫の躰が離れると、もの哀しさを押えきれなくなって言った。(107頁)

セックスの方はどうせ駄目でしょう。(141、143頁)

離れの一間は開けっ放して、中で若夫婦は半裸の姿でもつれあっている。(284頁)

組みあっていた二人の躰が離れ、ビキニで最小限の部位を掩ったエミが立上ってきた。(285頁)

454　「自然主义」、四川師範学院中文系文芸理論教研組編『文艺名词解释』(出版社不明、1973年3月)237-238頁。

455　福島正夫『中国の文化大革命』(御茶の水書房、1966年)189頁。

また、訳文の後半で、「夜尿」、「あの水音」(123頁)、「小便」(134頁)、「放尿」、「勢いのいい水の音」、「小用の音」(256頁)、「排泄」、「排便」、「糞まみれ」(262頁)など「排泄」という行為と「排泄物」についての直接的な表現と関係する内容も削除された。殊に「自分の排泄物を食べたり、躰になすりつけたり、あるいは幼児が泥遊びをするように、丸めたり投げたり壁に塗ったりする」、「老耄の極に起きる人格欠損」(298頁)に関する段落は全て消された。

しかし、作品の第7章における「小便」、「ションベン」(108頁)、「音」、「排泄」(109頁)、「尿意」(112頁)などの内容は訳者によりそのまま維持されている。複数の訳者により翻訳された『恍惚の人』の訳文から見れば、「排泄」のような「問題のある」描写に対して、どの部分を削除すべきか、その判断基準がどこにあるかなど、各作品における極めて具体的な翻訳ストラテジーが統一されていなかったと考えられる。

訳文の注釈について、同じ傾向が見られる。どの訳註をつけるかは異なる翻訳者によりそれぞれ違っている。例えば、訳文の前半において、「一斤」(1頁)、「六尺」(4頁)、「一升」(33頁)、「一合」(81頁)など、尺貫法における重さ、長さ、体積などの単位に対する注釈が多い。また、訳文は複数の訳者によって翻訳されたので、類似した注釈も見られる。例えば、「明治の男」(6頁)に対して、「日本明治时代(1868-1912)男尊女卑的封建思想很浓厚【日本の明治時代(1868-1912)男尊女卑の封建思想が濃厚である】」(4頁)という注釈がつけられており、その後に再び出現した「明治」(148頁)に対して、「日本明治天皇的年号(1867(ママ)-1912年)【日本明治天皇の元号(1867-1912年)】」(147頁)と説明された。その他の注釈は、主に「かまぼこ」(11頁)、「稲荷鮨」(33頁)、「赤飯」(72頁)、「昆布巻」(121頁)、「蒸し鰈」(274頁)など日本の伝統食品、「波花節」(116頁)、「花笠音頭」(117頁)、「奥の細道」(153頁)、「迦陵頻伽」(292頁)、「御詠歌唄」(294頁)と「大岡越前守」(128頁)、「大杉栄」(130頁)、「豊臣秀吉(282頁)」など固有名詞と人物名に関わるものである。

また、『恍惚の人』において、意図的な削除ではなく、以下のような単純な翻訳の欠落も存在している。例えば、「そればかりでなく結婚してから十年ぐらいというものは」という一文において、「結婚してから十年ぐらいというものは」の翻訳が欠落した。

原作	訳文
そればかりでなく結婚してから十年ぐらいというものは、昭子の買ってきた饅頭に当ったの、昭子の煮た魚が悪かったの、やれ昭子の届けた干物で消化不良になったのと言われ続け(9頁)	不仅这样，他总唠叨什么吃了昭子买来的豆馅包子中了毒啦，吃了昭子烧的鱼闹了肚子啦，又什么吃了昭子送来的干鱼虾消化不良啦，等等。 【結婚してから十年ぐらいというものは】の翻訳の欠落(8頁)
「小刀ですよ、奥さん、魔除けですから」(中略) 「僕の切り出しどうかなあ。鞘があるよ」(29頁)	“是小刀子，太太，是辟邪用的。”(中略) “我那把宽刃小刀怎么样？” 【鞘があるよ】の翻訳の欠落(28頁)
布団は二組敷きっ放しになっている。昭子はこういうだらしのない眺めは我慢がならず、すぐ自分の掛布団だけは畳んだが、今は茂造を探すのが先だ。(159頁)	只见被褥乱七八糟地摊放着。她赶紧去寻找茂造。 【昭子はこういうだらしのない眺めは我慢がならず、すぐ自分の掛布団だけは畳んだが、】の翻訳の欠落(159頁)
鳩麦のおかゆ(171頁)	薏米 【のおかゆ】の翻訳の欠落(172頁)
事務員は事務所に駆けこんで、電話のダイヤルを廻し、救急車を呼んでいる。もう昭子の存在は忘れたように、次は老人の家族	办事员跑进办公室去拨电话喊急救车，但语调一点也不显出惊慌。 【もう昭子の存在は忘れたように、次は老人の家族に連絡をとり、手短かに事態を告げ、すぐ来るように言ったが、口調には少

に連絡をとり、手短かに事態を告げ、すぐ来るように言ったが、口調には少しも浮わずったとことがなかった。(172頁)	しも浮わずったとことがなかった。】の翻訳の欠落(173頁)
「兇暴性がないなら老人でなくても自宅療養でしょうって言うのよ。つまり精薄なみに思われるわけかしら」 「うん」 昭子にとって新しい知識の数々を、信利は少しも驚かずに聞いている。途中で昭子は不審になった。 「あなた変ねえ、知ってたの」 「うん」(236頁)	“又说只要不是行凶的，纵使不是老人也要在自己家里疗养。也就是说常见的白痴吧。” “唔。” 【昭子にとって新しい知識の数々を、信利は少しも驚かずに聞いている。途中で昭子は不審になった。 「あなた変ねえ、知ってたの」 「うん」】の翻訳の欠落(240頁)
信利も敏も日曜の朝でなかなか起きてこない。(258頁)	今天是星期天，起不来床。 【信利も敏も】の翻訳の欠落(263頁)

そして、次のように、「ロック・ミュージック」を「ゴーゴー・ミュージック」、「変なこと」を「だらしないこと」などとする誤訳も見られる。しかし、訳本にあるこれらの翻訳の欠落や誤訳は、読者の作品に対する理解を妨げないと考えられる。

原作	訳文
	茂造端端正正坐在屋角，这时，瞪大眼睛一个劲瞧着探头看他的京子，然后说： “你是哪一个？”

部屋の片隅で、端然として正座していた茂造は、覗きこむようにしている京子の顔をこのときまじまじと眺めてから、言った。 「あなたは、どなたでしたかな」(44頁)	【部屋の片隅で、端然として正座していた茂造は、覗きこむようにしている京子の顔をこのときまじまじと眺めてから、言った。 「きみは、だれかな」】(44頁)
「手拭はどうでしょう」 「柄のあるのはどうもねえ」(29頁)	“汗巾怎么样？” “就有点带花纹的……” 【「手拭はどうでしょう」 「あの柄がすこしあるの……」】(28頁)
それは眠たげな経文の調子に酔っているかとも見え、あるいは面白そうな表情を仄見せているようにも思われ、少なくとも五十余年連れそった妻を失った悲しみに沈んでいる男とは見えなかった。(34頁)	看着他象沉醉于催人欲睡的念经声里，又觉得他好似表现出风雅的样子，起码看不出是为失去一位一起生活过五十多年的伴侣而感伤。 【それは眠たげな経文の調子に酔っているかとも見え、あるいは雅びやかな表情を仄見せているようにも思われ、少なくとも五十余年連れそった妻を失った悲しみに沈んでいる男とは見えなかった。】(33頁)
ロック・ミュージック(119頁)	摇摆舞音乐 【ゴーゴー・ミュージック】(119頁)
殊に茂造のような老人のいる家では、家族がじっと家にいるという状態は必要だった。(110頁)	尤其是对于有象茂造这样一个老人的家庭，一家子可以老老实实地呆在家里了。 【殊に茂造のような老人のいる家では、家族がじっと家にいることができる。】(109頁)
茂造が変なことばかり言う婆さんだと訴えてきた理由も分るような気がした。(125-	昭子觉得，茂造曾讲过这个老婆子净讲些不三不四的话，也不无道理。(125頁) 【茂造がだらしないことばかり言う婆さんだと訴えてきた理由も分るような気がし

126頁）	た。】（125-126頁）

そして、訳者は翻訳テクストの中で以下のように意訳などの手法を使用したと考えられる。例えば、「夫は雪国育ちで」は「夫は北方で育って」に、「私も主人や主人の親類の手前」は「私も主人や主人の親類の間に挟まれて」に訳されたが、文意としては、中国の読者に違和感を感じさせていないと思われる。

原作	訳文
夫は雪国育ちで、おまけに蟹が好物なので、今夜の彼の機嫌のよさが目に浮ぶ。（3-4頁）	丈夫是在北方长大的，最爱吃螃蟹，眼前就浮现出了他今晚那兴高采烈的样子来。 【夫は北方で育って、おまけに蟹が好物なので、今夜の彼の機嫌のよさが目に浮ぶ。】（1-2頁）
子供部屋は敏の自治圏なので昭子はほとんど覗いて見ることもない。（8頁）	孩子的房间，是他的独立王国，昭子是不闻不问的。 【子供部屋は敏の自治圏なので昭子は一切関与しない。】（6頁）
「ねえママ、やっぱりママの作るのは一味違うね。お母さんの味です、へ、へ、コマーシャル」（10頁）	“妈妈，还是您做出来的味道与众不同，啊，这是妈妈的味道。嘿，嘿！商品广告的播音节目到此结束。” 【「ねえママ、やっぱりママの作るのは一味違うね。お母さんの味です、へ、へ、コマーシャルの放送番組はここまで。」】（8頁）
嫂さんにはすまないすまないって思ってたんだけど、私も主人や主人の親類の手前ね	总觉得对不起嫂子，可我们那儿是乡下呀，我呢，又夹在丈夫和丈夫的亲戚中间，无能为力啊。 【嫂さんにはすまないすまないって思ってたんだけど、うちらは田舎でしょう。私も

え、田舎でしょう？(44頁)	主人や主人の親類の間に挟まれて、何事もできないよ。】(43頁)
昭子は特別心根の優しい女というわけではないのだが、京子が現われてからすっかり得な役廻りになってしまっていた。(61頁)	昭子虽然还说不上是一个心地柔和的女人，但是自从京子来了以后，她却忽然身价百倍。 【昭子は特別心根の優しい女というわけではないのだが、京子が現われてからすっかり一躍有名になってしまっていた。】(60頁)
「お爺ちゃんみたいに泣きたいくらいですよ」(中略)「嫌やな言い方しないでよ。おなか空いてるんなら、すぐ御飯にしたげます(78頁)	“我饿得都想象爷爷那样哭了呢。”(中略)“别讲那挑皮话。要是饿了，就马上让你吃。” 【「お爺ちゃんみたいに泣きたいくらいですよ」(中略)「しゃれ言わないでよ。おなか空いてるんなら、すぐ御飯にしたげます」(77頁)
年寄りばかり集ったところが、ああ壮観とは思わなかった(115頁)	老年人聚合在一起，真没想到会那样可观啊 【年寄りばかり集ったところが、見る価値があるとは思わなかった】(115頁)
食事の好みを訊かれて、やっと人間らしいコミュニケイションを交すきっかけを掴んだのだろうか。(119頁)	一被问到想吃什么，他好象才找到了人们交流共同思想的机会。 【食事の好みを訊かれて、やっと人間が共同思想を交すきっかけを掴んだのだろうか。】(119頁)

また、翻訳テクストの中で、文革的表現も次のように見られる。例えば、「経営者」が「資本家」に、「マイカー族」が「自家用車を所持する階級」に、「昔の男」が「旧人物」に訳された。先述したように、小林多喜二作品の翻訳テクストにおいて、翻訳者は「文革言語」の多用を通して、意図的に階級間の対立感情を掻き立てていた

と考えられる。文意から見れば、『恍惚の人』の訳文において、その文革的表現は訳者がおよそ１０年間「文革言語」に深く浸染された結果としての「選択」だったと考えられる。

原作	訳文
本来なら休みの筈だと若い社員たちが思う一方で、古手の社員は習慣として土曜日に休むことが不安なのである。経営者も態度をはっきりしていないので土曜の午後は残業いっても用がすめばさっさと挨拶なしで帰っていいという不文律を作ってしまった。(16-17頁)	年轻的职员认为这本来应该休息的，而老职员对星期六工休，则不太习惯。由于资方态度暧昧，所以无形中形成没有明文规定的惯例：星期六下午，说是上班，其实办完事，也不打个招呼，大伙就赶紧回家了。 「経営者」が「资方【資本家】」に訳された。(15-16頁)
彼は国産の小型車に乗り込み、(中略)「お坊さんがマイカー族だなんて思わなかったわ」(37頁)	和尚坐上了国产小轿车，(中略)“真没想到和尚还是个有车阶级呢。” 「マイカー族」が「有车阶级【自家用車を所持する階級】」に訳された。(36頁)
うちのお父さんほどじゃないけど、やっぱり昔の男だったから手間のかかる人だったのに、死なれてみると良い思い出だけが残るみたい。(55頁)	公公虽然还不至于像父亲那个样子，可究竟还是个旧人物，挺难伺候的。一旦死去，似乎只能留下个美好的回忆。 「昔の男」が「旧人物【旧人物】」に訳された。(54頁)

4.4.3　まとめ

本節では、『恍惚の人』を研究対象とし、文革期の訳本、1979年の再版と有吉佐和子の原作との比較検討を行った上で、文革期の翻訳ストラテジーについて考察した。

文革期において、『恍惚の人』がなぜ翻訳者の注目を集めたのか。翻訳対象として選択された理由は、原作にある高齢者の介護問題とそれがもたらした人々の「虚無感」、「絶望感」を通して、「資本主義国家の深刻な社会、政治、経済問題を表す」ところにあったと考えられる。また、作品の文学性というより、作者本人の中国、中国の人々との「友好的」な関係と関連していると考えられる。1979年の再版においては、表紙の変更と「出版说明」の書き換えが行われており、それにより文革のイメージを覆し、文学作品から政治的色彩を除くという意図が窺える。

翻訳テクストにおいて、性的描写、人の性器に関する内容、排泄行為など、翻訳者に「ブルジョア階級文芸の普遍的特徴」の１つである「自然主義」と見做された描写はすべて削除された。しかし、削除した部分と訳註の付け方から見れば、作品における具体的な翻訳ストラテジーはそれぞれの翻訳者によって決められたと考えられる。テクストにおける削除により、翻訳作品の読者にとって原作の本質を全面的に把握することは難しくなっているが、全体的に見れば、訳本の質はかなり高く、整合性の取れた翻訳だと思われる。

第5節　翻訳から見た日本の農業問題――木村琴美『穂波のゆくえ』、山田洋次・宮崎晃『故郷』など

文化大革命期において、日本の農業問題に関する翻訳作品としては、山内久・桂明子・熊井啓『朝やけの詩』(薛毅訳)[456]、新藤兼人『わが道』(上海外国語学院日語教研組訳、安可校)と作品に関わる評論、上鋼三厂・梁賛魯「新藤兼人的道路和苏修叛徒的

456　山内久・桂明子・熊井啓『朝霞之诗』薛毅訳、『摘译』1974年第2期(1974年2月)140-156頁。

险恶用心――评苏修对日本电影《我的道路》的吹捧」[457]、木村琴美『穂波のゆくえ』（上海外国語学院日語教研組訳）[458]、山田洋次・宮崎晃『故郷』（石宇訳）[459]などがある。文革期に翻訳された数少ない日本の文学作品の中で、大きな比重を占めている。

本節では、文化大革命期において、なぜ日本の「農業問題」を表現する日本の文学作品が注目されたか、また編集者によりどのように解読されているかについて、当時の中国の農業政策と結び付けつつ、翻訳作品の「出版説明」、「前言」、「编者按」などに着眼し、翻訳作品への検討を通して解明する。

4.5.1　文革期における中国の農業政策

4.5.1.1　「農業は大寨に学べ」運動

文革期における外国文学の翻訳活動は政府のメッセージを宣伝する完全に政治上の目的を持つ行為だという見方が通説となっている。日本の農業問題に関する作品の翻訳活動は、1960、1970年代における中国の農業政策と大きく関わっていると考える。

「農業は大寨に学べ」運動は1960年代から農業政策の代名詞である。建国以降、中国の農村において、旧地主、富農も含めて農民の協同化が進み、農業生産の「合作社」[460]を経て、1958年以降人民公社[461]の出現と設立運動の盛り上がりによる農業の集団化

457　上鋼三厂・梁賛魯「新藤兼人的道路和苏修叛徒的险恶用心――评苏修对日本电影《我的道路》的吹捧」、『摘译』1976年第2期（1976年2月）88-90頁。

458　木村琴美『金色稲浪今何在』上海外国語学院日語教研組訳、『摘译』1976年第8期（1976年8月）62-148頁。

459　山田洋次・宮崎晃『故乡』、山田洋次など『故乡――日本的五个电影剧本』石宇訳（上海人民出版社、1974年6月）1-44頁。

460　「合作社」は、農村の協同組合を指す。

461　「人民公社」は、中国において、1958年から編成された大規模な農業集団化のための組織であり、同時に行政や社会的機能など多面性を合わせもった新しい社会組織である。毛沢東は1958年に訪れた河南省の集団農場の名称「人民公社」を用いた。同年の「農村の人民公社設立に関する決議」以降、農村においては従来の農村の合作社の合併が進められた。農業、工業、商業、教育、軍事などあらゆる機能が統合され、生産組織と行政組織とが一本化された「政社合一」の人民公社が誕生した。人民公社が実質的には機能しなくなったのは、鄧小平が1978年に進めた改革開放政策以降のことである。長谷川啓之監修、上原秀樹等編『現代アジア事典』（文眞堂、

が見られた[462]。中国政府は、農村の人民公社をはじめ、集団所有制と社会主義の達成により、次第に全民所有制と共産主義へ移行するということを目指していた[463]。1960年代から流行った「農業は大寨に学べ」運動は、中国の農村集団化の一環と見做される。「農業は大寨に学べ」運動の中心人物と思われる陳永貴は、山西の大寨村を率い、「三不要」、「三不少」方針[464]を貫いて、自力で1963年8月の豪雨と洪水から水害を防止した。1964年2月10日『人民日报』において、陳永貴と大寨に関する記事[465]は続けざまに掲載された。6月の中央工作会議において、毛沢東は「大寨の自力更生精神」[466]について論じ、その後、正式に「農業は大寨に学べ、工業は大慶に学べ、全国は人民解放軍に学べ」[467]というスローガンを提出した。1964年12月に、北京で開かれた第３回全国人民代表大会で、周恩来は「政府工作報告」[468]の中で、「現代農業、現代工業、現代国防、現代科学技術」を実現する「４つの現代化」を提出して、さらに「農業を基礎」とし、「大寨精神」を学ぶという方針を確定した。それにより、「農業は大寨に学べ」は全国に伝えられた。

文革期に入って、大寨運動は引き続き勃興しつつあった。「農業は大寨に学べ」も

2009年7月）548頁。

462　福島正夫『中国の文化大革命』（御茶の水書房、1966年）8-14頁。

463　外務省アジア局中国課『中共農村人民公社：最近における動態の分析』（外務省アジア局中国課、1964年）12頁、小林弘二『20世紀の農民革命と共産主義運動：中国における農業集団化政策の生成と瓦解』（勁草書房、1997年11月）391頁を参照した。

464　「三不要」とは食糧、金銭、物資支援を国家に要求しない、「三不少」とは余剰食糧供出、社員口糧、次年度生産投資を減らさない。竹内実編『転形期の中国』（京都大学人文科学研究所、1988年）185頁を参照した。

465　「用革命精神建设山区的好榜样」、「大寨之路」、「学大寨志 长大寨风 走大寨路 山西和京郊广大干部社员添干劲挖潜力努力改变生产面貌」、1964年2月10日『人民日报』。

466　安藤正士、太田勝洪、辻康吾『文化大革命と現代中国』（岩波書店、1986年7月）207頁、劉書楷、郭思敏編『中共党史辨疑』（中央文献出版社、2006年8月）1000頁などを参照した。

467　「農業は大寨に学べ」の翻訳について、小島朋之『現代中国の政治：その理論と実践』（慶応義塾大学出版会、1999年7月）135頁などを参照した。

468　「在第三届全国人民代表大会第一次会议上 周恩来总理作政府工作报告」、1964年12月31日『人民日报』。

専門用語、文革言葉[469]の１つになっている。それと同時に、1968年12月、文革期の初期段階に「知识青年到农村去，接受贫下中农的再教育【知識人青年は農村へ行き、貧農下層中農の再教育を受けよ】」[470]と毛沢東の指示が発せられた。すなわち、農村に下放し、農業の生産労働に参加することにより、文革の政治意識を高める「上山下郷」運動である。知識人階級の労働改造、思想教育を図る「五・七幹部学校」[471]もその産物の１つである。『人民日报』において、都会に戻らず、農村に根を下ろそうとする女性の知識人青年を主人公とする記事がしばしば掲載された[472]。その中で「農村で所帯を構える」[473]ことも呼びかけられた。

しかし、農村における文革思想の深化に伴い、「政治化」を引き起こした「農業は大寨に学べ」運動も次第に単純な農業政策から、階級闘争へと展開していた[474]。1966年から1969年まで、文革の極左政策から影響を受け、1969年から1970年まで、不合理な農業生産構造と不適正な農業資源配分により、この段階における農業総産出額が一定の幅で上下していた[475]。農業の発展が一定の程度停滞し、国家経済構造の均衡を失

469　大公報社人民手冊編集委員会編『人民手册』1964(大公報社、1964年10月)78-87頁、紅代会南京大学委員会編『读报手册』(紅代会南京大学委員会、1969年4月)374頁、武漢師範学院《学習手冊》編写小組編写『学习手册』(出版社不明、1972年10月)81-83頁、中山大学外語系編『农业常用词语』(漢英対照)(中山大学外語系、出版年月不明)2頁など。

470　「毛主席语录」、1968年12月22日『人民日报』。その翻訳は、高橋勇治、重沢俊郎『中国社会主義の問題点』(日中出版、1977年5月)231頁などを参照した。

471　鄒振環『20世纪上海翻译出版与文化变迁』(広西教育出版社、2000年12月)319-348頁。

472　黄巍「“文革”时期女性形象政治化研究」(首都師範大学博士学位論文、2012年5月)46-55頁、韓啓瀾「跨越性别分界：“文革”时期的铁姑娘形象和知青」、王政、陳雁『百年中国女权思潮研究』(復旦大学出版社、2005年7月)245-258頁などを参照した。

473　「响应毛主席伟大号召，到农村安家落户」、「贫下中农一封来信――记本溪市十三中易莉莉到农村落户」、1968年12月22日『人民日报』などを参照した。

474　蔡鋒「中国における農村土地制度の変遷の原因とその成果に関する歴史的研究　建国期から改革開放期までを中心として」(関西大学博士学位論文、2015年9月)88頁。

475　吳亦俠、劉成果編『中国发展全书』(農業巻)(国家行政学院出版社、1997年12月)67-68頁。

ったという局面から脱出するために、1971年から文革の終わりまで、周恩来、鄧小平[476]らは、「左」、すなわち「農業集団化」、「社会主義化」への偏向を是正し、農業政策を調整しようとした。1971年から1973年、「左」寄りの誤りを正す過程で、長期間深く農村に根を張ってしまった左傾の方針から影響を受け、いくつかの曲折を経ていたが、1970年代初頭、世界的な範囲で出現した食糧危機に面して、大幅な国家農業支援資金の増加、農業の機械化の推進などの政策により、1973年の農業総産出額は1970年より１０％以上増えた。1975年8月18日、鄧小平は「工業の発展に関するいくつかの意見」[477]において、「工業は農業を基礎とし、農業に奉仕する思想を確立し」、「工業は農業を支援し、農業現代化を促進することは工業の重大な任務」[478]だと明言した。さらに、「工業は農業を支援し、農業もかえって工業を支援し、これは工農連盟の問題である」と述べて、農業と工業との相互依存関係を再び強調したと言える。

1973年から、農業総産出額の増加と伴い、「大寨に学べ」というスローガンは再び公式に提起された[479]。農業で実績を上げてきた農業派[480]の１人で、毛の思想を継承した[481]と言える華国鋒、大寨運動の中心人物の陳永貴などが、1973年8月の中共第１０回全国代表大会[482]で中央政治局委員に選出された。「農業は大寨に学べ」積極派[483]を代

476　1970年代の中国における農業政策について、現代アジア社会思想研究会編『毛沢東思想と中国の社会主義：中共革命の再検討』(現代アジア出版会、1967年4月)95頁、呉亦俠、劉成果編『中国发展全书』(農業巻)(国家行政学院出版社、1997年12月)61-75頁、小島朋之『現代中国の政治：その理論と実践』(慶応義塾大学出版会、1999年7月)135-142頁、陶艶梅「新中国初期三十年农业发展」(西北農林科技大学博士学位論文、2011年5月)109-122頁などを参照した。

477　鄧小平「关于发展工业的几点意见」、鄧小平『邓小平文选』(第2卷)中共中央文献編輯委員会編(人民出版社、1983年7月)28-31頁。

478　その翻訳について、唐木圀和『中国経済近代化と体制改革』(慶應義塾大学商学会、2007年10月)34頁を参照した。

479　「大寨之路就是斗争之路――狠批林彪贩卖孔老二“中庸之道”的反动谬论」、1974年3月17日『人民日报』など。

480　浜勝彦『中国：鄧小平の近代化戦略』(アジア経済研究所、1995年3月)24頁。

481　武国友『交锋与转折』(解放軍文芸出版社、1999年1月)51-57頁。

482　中共中央組織部、中共中央党史研究室、中央档案館『中国共产党组织史资料』(第6卷“文化大革命”时期(1966.5-1976.10))(中共党史出版社、2000年)21頁。

483　浜勝彦『中国：鄧小平の近代化戦略』(アジア経済研究所、1995年3月)25頁。

表する２人が推進したことにより、「農業は大寨に学べ」運動の第１回全国大会が1975年10月に開催された。大寨運動が再び勃興するにつれて、農業問題が改めて人々に注目されることになった。しかし、文化大革命の終焉に伴い、大寨運動に関する評価[484]も文革期の「社会主義農業の旗手」から「誤った左傾思想、左傾政策のモデル」へと変化した。最終的に、「農業は大寨に学べ」は中国共産党内部の権力闘争の道具として利用されたと考えられる。

4.5.1.2　農業問題に関わる作品の翻訳について

1966年から1976年まで、先述した日本の農業問題に関わる文学作品について、山田洋次・宮崎晃『故郷』と山内久・桂明子・熊井啓『朝やけの詩』は1974年に、新藤兼人『わが道』とそれに関する評論は1976年に、木村琴美『穂波のゆくえ』は1976年に翻訳された。

1960年代半ばから後半まで、すなわち文革期の初頭において、盛んになった大寨運動がもたらした農業問題への関心の高まりは、外国文学の翻訳作品には及んでいなかった。文化大革命が始まったばかりの1966年頃の出版事業は停滞状態になってしまったからである。そのため、外国文学の翻訳と研究活動の全面的な停滞期と言える1966年から1971年まで、資本主義国家の農業問題を反映する作品はほぼ翻訳されなかった。1971年、出版活動の活発化につれ、翻訳活動も新しい始まりを迎えた。しかし、前述したように、1970年代初頭における農業の全国経済に占める地位は工業と比べ、低下しつつあった。さらに、周、鄧は農業改革を提唱したが、1960年代から長期間の左傾方針により、農業政策も混沌状況に陥っていた。

農業問題が再び国民の視野に戻ったのは、農業総産出額の増加、「大寨に学べ」への再言及、農業派の台頭が見られる1973年からだと考えられる。それにより、本節で扱う山内久・桂明子・熊井啓『朝やけの詩』や新藤兼人『わが道』など、日本の農業問題をテーマとした文学作品も1974年から出版されるようになった。新藤兼人『わが道』は、日本アルプスの大自然を背景にし、日本全土に侵蝕する大企業の波が平和な信濃高原の開拓村に押し寄せてき、開拓村で牧場を作ろうとする作蔵一家が、深刻な

484　小林弘二『20世紀の農民革命と共産主義運動：中国における農業集団化政策の生成と瓦解』（勁草書房、1997年11月）504-513頁。

自然破壊を引き起こした観光開発計画に反対し、次第に破滅していくさまを描いた。『朝やけの詩』に対して、編集者は前言の中で、「剧本通过开拓村的农民作藏及其一家的遭遇，反映了在资本主义社会的畸形发展下，日本的农业和自然资源正在不断地遭到破坏【このシナリオは開拓村の農民作蔵とその一家の遭遇を通し、資本主義社会の不均衡な発展において、日本の農業と自然資源が絶えず破壊されつつある】」ことを描いている[485]と指摘した。

また、鄧による農業集団化の是正などが見られる1975年も、農業問題をめぐる転換期のうちで重要な屈折点の１つであったと思われる。1970年代初頭の成り行きとは異なり、中国の農業が相対的に一時的な安定期に入っていたことと共に、外国の農業問題への関心も高まりつつあった。翌年の1976年には、本節の主題の１つとする『穂波のゆくえ』を含め、日本の農業問題に関する作品がいくつか翻訳された。

4.5.2　日本の農業問題をめぐる翻訳作品

4.5.2.1　木村寿美『穂波のゆくえ』

①あらすじ

本節の検討対象である木村寿美の著した中編小説『穂波のゆくえ』[486]は、1975年6月号と7月号の『新日本文学』に掲載された。『穂波のゆくえ』は「落花」、「不況」、「帰郷」、「告発」、「別れ」、「秋風」、「上棟」、「離農」、「軍歌」と「崩潰」という１０節からなっている。

物語はある出稼ぎ青年の死から始まる。この青年は能重誠一で、戦死した能重軍次と戦争未亡人のおマスの唯一の子供として、昭和２０年に山形県の山奥にある集落で生まれる。昭和４１年の冬、減反政策の国策の影響で、故郷が過疎の暗い影におびえ始めたため、２１歳の能重は開田借金返済のために大工職として千葉や東京に出稼ぎに行く。３年後、一人前の大工として、能重が初めて建てた部屋は美津子の部屋であ

485　山内久・桂明子・熊井啓『朝霞之诗』薛毅訳、『摘译』1974年第2期(1974年2月)140頁。

486　木村寿美『穂波のゆくえ』、『新日本文学』1975年6月号(1975年6月)11-36頁、1975年7月号(1975年7月)10-37頁。

る。それを機に美津子、保雅一家と知り合うようになる。昭和４６年、能重は生き抜くために今までのように冬期だけの出稼ぎではなく、都会に生活の基礎を築く以外に道はないと決心を固めて町や村落を後にし、おマスとともに東京に出る。東京のゴミゴミとした下町で暮すという屈辱を抱かせたくないように、能重は故郷にいる恋人の加寿美とも離れる。母と２人で東京での暗く湿った陽の射さぬ４畳半のアパートに住む能重にとって、国の農業政策が変化してまた故郷に戻ることは、その時の唯一の願望である。

それまでずっと農婦として働き続けたおマスは、東京で病院の付添い婦や掃除婦など馴れない仕事に追われる。その後、おマスは東京の生活に慣れずに、過労のため、盲目になる。２人は東京での生活に行き詰っており、おマスは死ぬならば、山形へ帰って死にたいと叫び続ける。能重とおマスは昭和４９年に郷里へ帰る。しかし、「能重誠一の田も隣家の田ももはや、開田前の雑木林に近い姿になっている」(6月号、28頁)。「三年振りに見る故郷は能重の想像をはるかに超える荒野と化し、飲料水の確保すらむつかしい、惨憺たる空家ばかりの部落になっていた」(7月号、30頁)。その年の冬に、心の糧であり都会の生活の支えであった故郷の崩壊や母の眼疾により、総ての希望や願望を剥奪された能重は自殺する。能重の死の記事を見て、美津子一家は悲しみに陥る。

②能重誠一の自殺

能重誠一はなぜ自殺するのか。上京後の能重の変化は美津子の目から描かれている。昭和４３年頃、都会に出稼ぎしたばかりの能重に対して、美津子の第一印象は、「血色の良い童顔が笑顔で一杯になる」(7月号、15頁)、「清潔で逞しく、若々しかった」(6月号、18頁)とあるように、生活に対する純粋な熱意や情熱を持っている青年であったが、８年後の昭和４９年、美津子が能重と最後に会う時、「能重はかわった、単に痩せこけて垢じみた外観だけではない」(6月号、17頁)と強く思う。美津子が空身ではないかと疑う程、「低く重く呪わし気な声で、まるで地底から這い上がってきて美津子の体に絡まってくるような不気味さ」(6月号、15頁)である。能重の寂し気な顔は血の気が薄く、「おどおどとして落着きを失った瞳は怯えたように伏せ」(6月号、15頁)て、気忙しく瞬くようになる。

勤めていた工務店の倒産、母の眼疾から受けた精神的打撃は大きいが、能重は故郷でなんとか生きることができるだろうと一縷の望みを捨てきれない。しかし、おマスと２人で山形へ帰った能重の目に入ったのは、かつて「春には麦の稲波が麦雨に濡れて波打ち、秋には黄金の稲波が秋嫁の鎌を待って首を垂れていた」(6月号、25頁)故郷の田畑が、現在は「稲波も、麦秋も、ひばりのさえずりも、畦道でむれ遊ぶ子等の歓声も消えうせて、農夫もまばらな枯草の茂る田園の向うに、誘致工場がずらりと並んでいる」(6月号、25頁)景色である。さらに、「外灯の消えた暗い村里にはまるで狐火のように、ぼつんぼつんと灯火が雨戸の隙間からもれている」(6月号、26頁)。孤独に灯る灯火を見ている能重誠一は、自分の永遠の家である故郷から拒絶されたという気がする。「暗い谷底から乏しい光を求めている」(6月号、26頁)能重は、心の底にある唯一の「光」も消えていったという絶望感に襲われる。

> 故郷など忘れよう。土を握り、土を育ち、土に育まれて土と共に、土を耕す若い仲間と共に農民であろう。農村で生きようと懸命に努力した日々を忘れよう。おれはもう都会の吹き溜めの一介の塵芥に過ぎないのだ――能重は故郷を忘れ果て、都会の吹き溜めをうつろく飢えた野良犬に成り果てることによって農民としての積怒をはらそうとした。(7月号、30頁)

総ての希望や願望を剥奪された能重は、自己が「都会の吹き溜めの一介の塵芥に過ぎない」と感じ取る。おマスの通っている病院の屋上に登り、眼下の人や車の流れを見詰めながら、かつての故郷の山や水路や黄金の稲波を思い出し、その記憶に残る稲波に覆いかぶさるという幻覚に陥り、屋上から一気に飛び降りる。

③戦後における日本の農業国策

「百万の宝石にも勝ちる宝物であった」(7月号、34頁)田地を、能重誠一とおマスの手から奪い、彼らの一生を大きく左右しているのは、昭和４０年代における日本の国策であると原作から読み取ることが可能である。

第二次世界大戦後、食糧難は深刻を極め、餓死者が相次ぎ出現する。食糧増産という時代的要請のもとに、政府が開田政策を進行する。「農村に産れて、農業一本で生

計をたてていくだけの農地を持たないことは致命的」(6月号、26頁)で、「強い者、金のあるものだけが生きのびていく」(6月号、13頁)世の中であるため、「農地が欲しい。田が欲しい」(7月号、14頁)という能重誠一の切望がかなったかのように、昭和４０年初頭に日本の農村に開田ブームが押し寄せる。さらに、農業における機械の導入など「農業近代化」の政策によって生産技術の向上が叶い、食糧の自給が実現できるようになる。

しかし、開田ブームの影響で、昭和４３年に米の生産過剰が表面化し、「余剰米」が発生する。「为了便于进口美国剩余粮食，并给工业提供廉价劳动力，日本政府曾采取减少耕作面积的政策【アメリカの余った食料を輸入し、しかも工業に労働力を提供するため、耕作面積を減少する】」[487]減反政策が日本政府により採られる。生産調整を余儀なくされる農村の環境は大きく変化していく。雪国の山形においても、人々は想像を絶する積雪と過疎と過疎のもたらす不便さの中で、生活と闘っている。能重も開田借金返済のため、国の農業政策が変化したら再び故郷に戻りたいとの願望を抱きながら、上京する。

しかし、そこで能重を待つのは昭和４８年からの石油危機、日本列島改造論による物価高の社会問題化とインフレーションの発生という大混乱である。昭和４０年代の末期、農工一体推進など農業の破綻を救おうとする政府の政策は一切役に立たず、「物価はどんどん(毎年二十%位)、上昇するのに」(6月号、20頁)、米価は何年間も据え置かれた。それにより、心の糧である故郷に戻りたいという能重の願いがかなうことは難しくなる。

能重は自分の生まれが「昭和二十年という年の日本の運命をそのまま背負って」(7月号、27頁)いると言う。「兵隊にいくか監獄にぶちこまれるかその二つの生き方しかなかった。どちらを選んだにしても命の保証はない。国民は皆天皇の赤子にすぎなかった」(7月号、25頁)という父の軍次が体験した戦争の時代においても、農村に向けて頒布された開田政策とわずか数年後の減反政策を体験した誠一の時代においても、自分たちはただ「国策に沿うように生かされている豚にすぎない」(6月号、32頁)と能重は認識する。原作には、国家政策により生活に対するあらゆる選択肢が奪われる農民

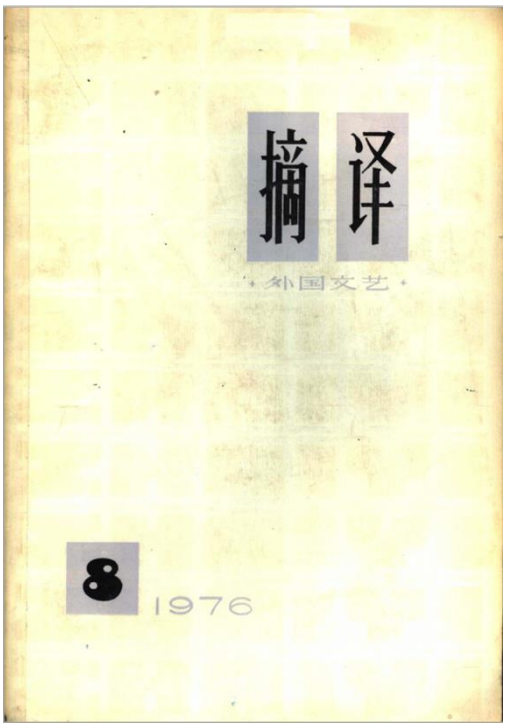
487　「编者按」、木村琴美『金色稲浪今何在』上海外国語学院日語教研組訳、『摘译』1976年第8期(1976年8月)62頁。

への同情が見られる。

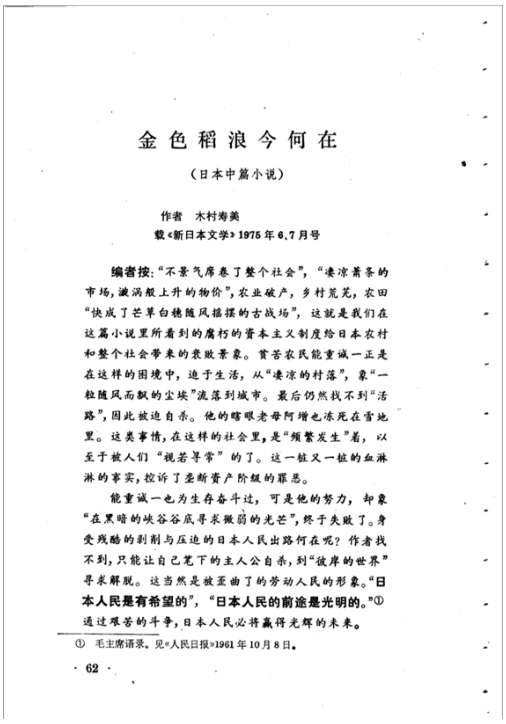
④訳本の「编者按」について

木村琴美『穂波のゆくえ』は、以下のように『摘译』1976年第8期に掲載された。

『摘译』1976年第8期の表紙



『穂波のゆくえ』の「编者按」



金色稻浪今何在

（日本中篇小说）

作者　木村寿美

载《新日本文学》1975年6、7月号

编者按："不景气席卷了整个社会"，"凄凉萧条的市场，漩涡般上升的物价"，农业破产，乡村荒芜，农田"快成了芒草白穗随风摇摆的古战场"，这就是我们在这篇小说里所看到的腐朽的资本主义制度给日本农村和整个社会带来的衰败景象。贫苦农民能重诚一正是在这样的困境中，迫于生活，从"凄凉的村落"，象"一粒随风而飘的尘埃"流落到城市。最后仍然找不到"活路"，因此被迫自杀。他的瞎眼老母阿增也冻死在雪地里。这类事情，在这样的社会里，是"频繁发生"着，以至于被人们"视若寻常"的了。这一桩又一桩的血淋淋的事实，控诉了垄断资产阶级的罪恶。

能重诚一也为生存奋斗过，可是他的努力，却象"在黑暗的峡谷谷底寻求微弱的光芒"，终于失败了。身受残酷的剥削与压迫的日本人民出路何在呢？作者找不到，只能让自己笔下的主人公自杀，到"彼岸的世界"寻求解脱。这当然是被歪曲了的劳动人民的形象。"**日本人民是有希望的**"，"**日本人民的前途是光明的**。"①通过艰苦的斗争，日本人民必将赢得光辉的未来。

① 毛主席语录。见《人民日报》1961年10月8日。

· 62 ·

編集者が『穂波のゆくえ』から見られる日本の農業問題をどのように読み取っているかについて、訳文の冒頭の「编者按」から窺うことが可能であろう。

> 编者按："不景气席卷了整个社会"，"凄凉萧条的市场，漩涡般上升的物价"，农业破产，乡村荒芜，农田"快成了芒草白穗般随风摇摆的古战场"，这就是我们在这篇小说里所看到的腐朽的资本主义制度给日本农村和整个社会带来的衰败景象。贫苦农民能重诚一正是在这样的困境中，迫于生活，从"凄凉的村落"，象"一粒随风而飘的尘埃"流落到城市。最后仍然找不到"活

路”，因此被迫自杀。他的瞎眼老母阿增也冻死在雪地里。这类事情，在这样的社会里，是“频繁发生”着，以至于被人们“视若寻常”的了。这一桩又一桩的血淋淋的事实，控诉了垄断资产阶级的罪恶。

能重诚一也为生存奋斗过，可是他的努力，却象“在黑暗的峡谷谷底寻求微弱的光芒”，终于失败了。身受残酷的剥削与压迫的日本人民出路何在呢？作者找不到，只能让自己笔下的主人公自杀，到“彼岸的世界”寻求解脱。这当然是被歪曲了的劳动人民的形象。“日本人民是有希望的”，“日本人民的前途是光明的。”通过艰苦的斗争，日本人民必将赢得光辉的未来。

【编者按：「不況は巷を荒れ狂い」、「寒々とした不況、物価高の渦巻く」、農業の破産、農村の荒涼、田がまるで「枯れススキの白い穂がなびく古戦場」のようになる。これは私たちがこの小説に見る腐敗した資本主義制度が日本の農村や社会全体にもたらした荒廃状況である。貧苦の農民である能重誠一はこうした奈落の底で、生活に迫られ、「寒々とした部落」から出て「吹き溜めの一介の塵芥」のように都会を放浪する。最終的には、「生きる道」が見つからず、止むを得ず自殺した。彼の盲目となった老母のおマスも雪の中で凍え死んでいる。こういった事は、このような社会で「多くな」り、人々に「別に大した事件ではない」とみなされる。この一つ一つの厳然たる事実が、日本独占ブルジョア階級の罪を訴えている。

能重誠一も生存するために闘ったが、彼の努力は「暗い谷底から乏しい光を求めているよう」で、最終的には失敗した。日本人民の進むべき道はどこにあるのか。原作者には見つけられず、自分が作り出した主人公を自殺させ、「あの世」で解脱を求めさせるしかない。これは無論歪められた労働人民の形象である。「日本人民にはまだ希望があ」り、「日本人民の前途は明るいのだ」。刻苦奮闘を通して、日本人民は必ず輝いた未来を手に入れる。】(62頁)

「编者按」の中で、編集者は昭和４０年代の日本社会において「不況」、「物価」の高さ、「農業の破産」、「農村の荒涼」という「一つ一つの厳然たる事実」が相次ぎ出現すると述べ、このような「日本の農村や社会全体」の「荒廃状況」は全て「腐敗した資本主義制度」の産物であると指摘する。「编者按」の後半で、編集者は「腐

敗した資本主義制度」、「独占ブルジョア階級」、「日本軍国主義」のような類似した文革的な用語を頻繁に用いた。さらに、「编者按」において日本が正確な路線を選択すれば、「日本人民是有希望的【日本人民にはまだ希望がある】」、「日本人民的前途是光明的【日本人民の前途が明るいのだ】」[488]という毛沢東の語録も引用された。また、文革期に翻訳された『日本沈没』の訳本に載った評論「伟大的日本人民永远沉没不了！——评反动小说《日本沉没》」（著者不明）[489]においても、「日本人民的前途是光明的【日本人民の前途が明るいのだ】」という言葉が見られる。文革期の翻訳作品の編集者は、出版説明、前言や評論などの中で、毛沢東の語録という「正しい」とみなされる思想に同調する傾向が見られる。

「编者按」の前半では「農業の破産、農村の荒涼」、「日本の農村や社会全体にもたらした衰廃状況」などが論じられ、「貧苦の農民」は「止むを得ず自殺した」とされた。文革期の編集者による作品への評価は、戦後、日本の国策として推進された開田政策と数年後の減反政策が農村の過疎化をもたらし、作品の主人公の能重誠一をはじめとする農民はやむを得ず故郷を離れて出稼ぎ労働者となり、最終的に自殺の境遇に押しつけられるという原作の主題に合致している。「人口減少による過疎化」、「出稼ぎ労働者のメンタルヘルス」など、「编者按」にある日本の深刻化する農業問題に関する評価は比較的客観的であると思われる。

⑤訳文のテクスト

『摘译』1976年第8期に掲載された木村琴美『穂波のゆくえ』の翻訳者には「上海外国語学院日語教研組訳」と記されており、すなわち複数の訳者により翻訳された。訳文の訳註、誤訳、意訳と増訳の３つの方面から検討する。

訳文に翻訳者はいくつかの注釈を加えた。例えば、「畳」（6月号、14頁）とは、「一条席子大约长六尺，宽三尺【１畳は約長さ６尺、幅３尺】」（69頁）であり、「炬燵」（6月号、17頁）とは、「上面盖着被子的取暖用炉子【上に布団をかけて暖を取るこん

488　「接见正在我国访问的许多日本朋友并同他们亲切谈话 毛主席说：日本人民斗争的前途是光明的」、1961年10月8日『人民日报』。

489　著者不明「伟大的日本人民永远沉没不了！——评反动小说《日本沉没》」、小松左京『日本沉没』李徳純訳（人民文学出版社、1975年6月）1-8頁。

ろ】」(73頁)であり、「五色の布と青竹の弓」(7月号、18頁)には、「上梁仪式的装饰【上棟式の飾りである】」(118頁)などの訳註が見られる。翻訳者は、「畳」、「炬燵」など伝統的な日本文化に関わる言葉にあまり馴染みがない中国の読者のために注をつけた。

翻訳者が訳文の注釈に意図的に特別な意味づけをしたところも見られる。例を挙げると、原文テクストにある「『君は、若いんだなァ。軍歌を知らないのだから。こうしてると、神風特攻隊になって散っていったやつらの笑顔が浮んでくるよ』保雅はそういってメガネをとると、両手で眼をおさえた』」(7月号、24頁)という一文で、深酔いした保雅が軍歌を知らない能重に対して、神風特攻隊のことに言及し、気分が落ち込む場面が描かれている。「神風特攻隊」は、保雅の考えでは、戦争に出征しておらず、国民としての義務に応えていない自己とは正反対の存在である。原文テクストの作者は「神風特攻隊」を通して、戦後、生き残った者としての重圧に耐えかねる保雅という登場人物を読者に提示した。しかし、その原作のニュアンスは翻訳者の解釈により、一変する。「神風特攻隊」に対して、訳者は「空军敢死队，第二次大战末期，日本军国主义为了最后挣扎，驱使日本青少年充当空军敢死队【空軍の決死隊であり、第二次世界大戦の末期において、日本軍国主義はもがきあえいで生きながらえようとするため、日本の青少年を空軍の決死隊に務めさせる】」(128頁)という注釈を加え、「神風特攻隊」を「日本軍国主義」と結びつける。気の毒に思わせる登場人物の造形を目指すという原作者の狙いとの間に、意図のずれが存在している。

また、原文テクストにある「一人息子である軍次は肩身が狭かった」(6月号、24頁)という一文の注釈は、「日本军国主义思想，以战死为荣，当时军次因为是独生子没能为天皇送死而感到羞愧【日本軍国主義の思想で、戦死を名誉とする。当時一人っ子であった軍次は、天皇のために死ぬことができず、恥ずかしく思った】」(85頁)のである。編集者は、「天皇のために死ぬ」ことを「日本軍国主義の思想」として否定的に捉えた。しかし、全体的に言えば、翻訳者の訳注は、ある程度客観的な史実に基づいていると言える。

『穂波のゆくえ』の翻訳テクストにおいて、誤訳が以下のように見られる。

原作	訳文

——故郷にさえ帰れば——という安心感が能重誠一を心やさしい、明るい青年にしていた(6月号、19頁)	“只要回到故乡就好啦！”这一乐观的心情是能重成了温顺而开朗的青年。 【——故郷にさえ帰れば——という楽観的な気持ちが能重を心やさしい、明るい青年にしていた】(78頁)
長い年月することのなかった作業であったが能重の手は確かに稲刈りのコツを覚えていた。(7月号、11頁)	虽然七年没有干过这活，但能重的手还牢牢地记得割稻的窍门。 【７年することのなかった作業であったが能重の手は確かに稲刈りのコツを覚えていた】(107頁)

上記の訳文において、「安心感」が「楽観的な気持ち」に、「長い年月」が「７年」にされた誤訳が見られる。翻訳テクストにあるこれらの誤訳・翻訳の欠落により、訳文と原文とは意味的には相違があるが、その数は極めて少ない。

以下のように、意訳や増訳という翻訳手法も使われている。

原作	訳文
十二月になる(6月号、11頁)	到寒冬腊月 【寒さが最もきびしい時節になる】(63頁)
美津子は(中略)能重の死が恨みのようにこみ上げて(6月号、12頁)	美津子(中略)不由地又嘀咕起能重的死。 【美津子は(中略)思わず知らず能重の死に呟いて】(64頁)
日銭稼ぎだよ。不安じゃないかねェ(6月号、12頁)	就是做一天算一天。这样，生活不是没有保障了吗 【日銭稼ぎだよ。それでは、生活には保障がないじゃないかねェ】(65頁)
ジュース(6月号、12頁)	桔子汁 【オレンジジュース】(66頁)

例えば、翻訳者は「十二月」を「寒さが最もきびしい時節」に、「能重の死が恨みのようにこみ上げて」を「思わず知らず能重の死に呟いて」に、「不安じゃないかねェ」を「生活には保障がないじゃないかねェ」に、「ジュース」を「オレンジジュース」に翻訳した。『砂の器』においても、「ジュース」[490]は同じく「桔子水【オレンジジュース】」[491]に増訳された。「オレンジジュース」の増訳は、方言や当時の人々のジュースに対する固有の印象から派生したものだという可能性もある。

また、テクスト形式の構成から言うと、改行の違い、句読点などが一致していないところもある。しかし、上述した意訳を含めて、翻訳テクストを前後の文脈を踏まえて読むと、意味的には、原文とほぼ差がないと思われる。『穂波のゆくえ』の翻訳テクストは、複数の訳者による訳文であるが、訳文には全体的な統一感があると思われる。

4.5.2.2 『故郷』

①あらすじ

山田洋次、宮崎晃による映画のシナリオ『故郷』[492]は、『キネマ旬報』1972年11月下旬号に掲載された。

瀬戸内海の広島県倉橋島で、石崎精一、民子夫妻は「可成りの老朽船」(94頁)である「天佑丸」で石の運搬をして生計を立てる。民子は、丙種機関士の免状を持ち、船の機関長として仕事をしている。精一の故郷である大向部落は倉橋島の南端にあり、「このあたりはまだ海の水も澄んでいて」、「何百年かけて先祖代々造り続けて来た段々畑がつらなり」、精一の父の仙造や「祖父達が石を切りだしていた採石場の跡」(95頁)がある。「寿命を終えている筈のこの船」(96頁)を修理するには、石崎夫婦は

490 橋本忍、山田洋次『砂の器』、『シナリオ＝Scenario』31(1)(318)(1975年1月)112頁。

491 橋本忍、山田洋次『沙器』訳者不明、橋本忍、山田洋次、広沢栄、熊井啓『日本电影剧本《沙器》《望乡》』訳者不明(人民文学出版社、1976年3月)23頁。

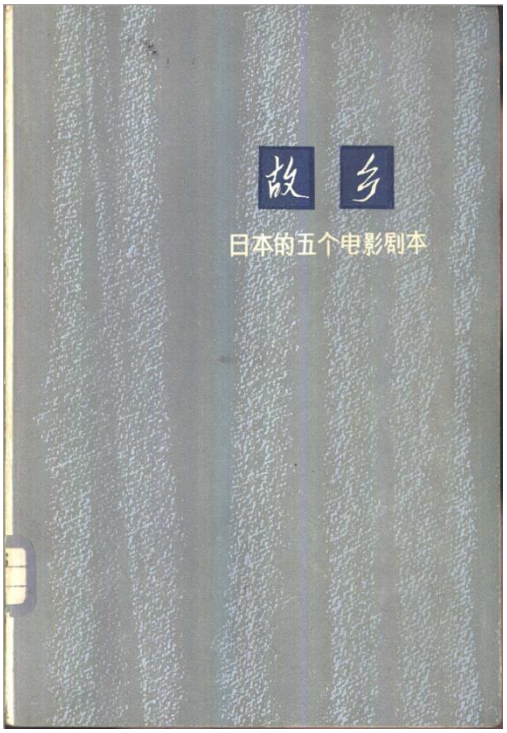
492 山田洋次、宮崎晃『故郷』、『キネマ旬報』1972年11月下旬号(第591期、1972年11月)94-106頁。

大金を払わなければならない。村の船長達が集まった寄合いでの話題は「大型船の就航、大資本の採石業への進出からくる今後の石材運搬の見通しなど」(97頁)に終始する。精一夫婦は老朽船で海に出た日、嵐に遭遇し、危険を乗り越えたが、家族に心配をかける。その後、船の修理費に追い詰められた精一と民子は仕方なく、民子の弟の健次、精一の姉の和枝、同じ部落で小さな商売をしている友人の松下の意見に従い、最終的に石船の仕事を諦めて尾道の造船所に就職することを決意する。故郷を離れた日に、大勢の倉橋島の住民が見送りに来る。「もはや二度と住むことも無いであろうこの島の景色を、そしていつかは懐しさをこめて思い出すであろう故郷の風景」(106頁)を、精一と民子は涙で頬を濡らしながらいつまでも見つめ続ける。

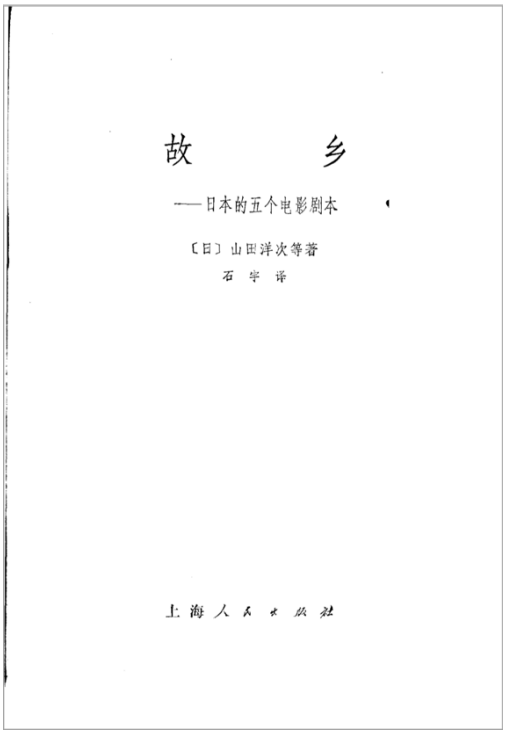
②訳本の「出版説明」について

山田洋次等『故郷――日本のシナリオ５篇』(石宇訳)は1974年に上海人民出版社から出版された。

訳本の表紙



訳本の中表紙


故　乡

——日本的五个电影剧本

〔日〕山田洋次等著

石宇译

上海人民出版社

作品の題名として選ばれた『故郷』について、訳者は「出版说明」の中では、以下のように述べている。

> 《故乡》通过广岛农村里的一家人被迫离乡，另谋生计的故事，从一个侧面勾画了日本农村濒于崩溃的惨景。从这里我们可以看到，日本的所谓“经济奇迹”是以牺牲农业为代价的，其基础十分薄弱，发展是畸形的。特别是近几年来，日本又推行所谓“新综合农业政策”，大搞“工业化”、“都市化”，大规模地剥夺农村的土地和水源，更使农业遭受严重破坏，大批农民倾家荡产，流离失所，过着极其悲惨的生活。
>
> 【『故郷』は広島の農村の一家族が故郷を追い出され、別に暮らしを立てるという物語を通して、一側面から日本の農村が崩壊に瀕する惨憺たる情景を描き出す。ここから見て取れるのは、日本のいわゆる「経済の奇跡」は農業の犠牲を代価としており、その基礎は極めて脆弱であり、その発展は奇形的であるということである。特に近年来、日本はまたいわゆる「新しい総合農業政策」を推し進め、「工業化」、「都市化」を大いに行い、農村の土地と水源をごっそり奪い、さらに農業は壊滅的な状態にされ、大勢の農民は家産を傾け、落ちつく先もなくなり、極めて悲惨な生活をしている。】(1頁)

「出版说明」の中で、日本は「経済の奇跡」を実現するために、「農業の犠牲を代価と」した「新しい総合農業政策」を推進し、大規模な「工業化」、「都市化」を行い、それにより「日本の農村が崩壊に瀕している」と述べている。訳者の指摘した「工業化」について、原作においても以下のように頻繁に言及されており、極めて問題視されたと考えられる。

> 話題はどうしても大型船の就航、大資本の採石業への進出からくる今後の石材運搬の見通しなどについての憶測に終始するのだ。(97頁)

> 「結局大きいものには勝てんのじゃ、そう思わんか、精一さん」と自分の一生への悔みをまじえながら語ってくれたのである。(97頁)

あげな大きな船が大資本をバックに出て来たんじゃ兄さんとこの木造船なんかひとたまりもなあでよ、何ちゅうても大資本に勝てんのじゃ、そう時代じゃけえ(98頁)

これからは二十トン以下のこまい船じゃはァもうやっていけんがの、大きい物には勝てんけのう(101頁)

精一「民子大きなもんちゃあ何かいの」
民子「え？」
精一「皆言うじゃろが、時代の流れじゃとか大きい物には勝てんとか、そやけどそりゃ何の事かいの、大きいもんちゃ何を指すんかいの……なんでわしらは大きい物に勝てんのかいの……なんでわしは……なんでわしはこの石船の仕事をわしとお前で……わしの好きな海でこの仕事をやっていけんのかいの」(106頁)

原作において、上記のように「大きい物には勝てん」ということが繰り返し述べられている。作品の主人公の精一、民子夫婦も「先祖代々住みついた、あんなきれいな村」(103頁)との決別を悲しみ、惜しみつつ、離れなければならなくなる。しかし、原作において、以下の場面も描かれた。

この巨大な工場の中に意外な程働いている人間の少ない事であり(102頁)

そうじゃみんな手でやったんじゃ、今どきは石を切るのはドリル、運ぶのはブル、船は機械船、何もかも機械になってしもうて楽なもんじゃ(105頁)

すなわち、原作の中で、工業の「近代化」は一方的に社会にマイナスの影響を与えるわけではなく、肯定面も見られ、誰でも「時代の流」(98頁、103頁、106頁)を利用することができる点も示唆された。

「出版説明」の中では、訳者の着目したのは「日本の農村が崩壊に瀕する惨憺たる情景」である。しかし、農村の崩壊への言及は、原作の中で以下のように極めてわず

かしか見られていない。

> 結婚以来もう七年、いや八年余りも通いつめた畑だが、最近は畑仕事をやる人も少なくなって来て近くには荒たままの畑も多い。(96頁)

「出版说明」において言及された「新しい総合農業政策」とは、前述したように1960年代の開田ブームの影響により表面化した米の生産過剰問題を解決し、また農工一体を推進するため、日本政府により採られた耕作面積を減少する減反政策である。訳者は主に日本の農業政策がもたらした経済発展における工業と農業との地位不均衡を中心として論じている。『故郷』が翻訳された1974年は、中国においてちょうど産業調整に対して再検討を行う時点だったと考えられる。しかし、1970年代初頭における毛の唱えた「農業を基盤とし、工業を導き手とする」[493]政策にしても、1975年に鄧の提出した「工業は農業を基礎とし、農業に奉仕する思想を確立」する政策にしても、「農業を基礎とする」という点では一致していると言える。『故郷』の「出版说明」に、日本の農業軽視の政策への反論が見られる。

また、翻訳と原作において、「故郷を追い出され、別に暮らしを立てる」人への同情は類似している。しかし、基本的には、その悲劇を産み出したのは、原作によると資本の工業への進出という「時代の流」であるが、訳本の「出版说明」によると、農村過疎問題に対する誤った政策であり、すなわち日本政府の不作為なのである。作品に対する解釈をめぐって、原作と「出版说明」との間に、ギャップが生じている。その差異の理由は、翻訳者が日本の産業構造への批判に偏向することにあると考えられる。

③訳文のテクスト

『故郷』の訳文において、以下の誤訳、翻訳の欠落が存在している。

原作	訳文

493　「新年献词」、1973年1月1日『人民日报』。

芸予諸島(94頁)	艺豫群岛 【芸豫諸島】(3頁)
精一は外部甲板にゴザを敷いて息子の剛と昼飯だ。 単調なエンジンの音。 時折船べりにとんで来て羽を休めるかもめや蝶。(95頁)	精一把席子铺在外面的甲板上，和他的儿子阿刚一起吃中饭。 不时地有海鸥和蝴蝶飞到船舷上休息。 【単調なエンジンの音。】の翻訳の欠落(5頁)
人の好い笑顔をたやさない松下さんは、村の人達にはなかなか人気があるらしい。(95頁)	经常面带笑容的松下先生，好像在村里很受欢迎。 【人の好い】の翻訳の欠落(7頁)
瀬戸内海を見晴らせる縁側に坐って、仙造は一日の中何時間かは海を眺めて暮らしているのである。(96頁)	仙造坐在走廊里眺望濑户内海的景色，他每天就以看海度日。 【瀬戸内海を見晴らせる縁側に坐って、仙造は毎日海を眺めて暮らしているのである。】(10頁)
マイクロバス(97頁)	汽车 【バス】(12頁)
原爆ドームを左手に見ながら(98頁)	在左首出现原子弹纪念馆时 【原爆ドームを左首に見ながら】(14頁)
まだ若妻の色気をただよわした妻の保子(98頁)	年轻的妻子保子面带稚气 【まだ若妻のあどけなさをただよわした妻の保子】(14頁)

精一、(中略)たくましい裸の背中を向けて、上り框に疲れ果てたように腰を下ろし、溜息と共に声を出す。(100頁)	精一(中略)，他把健壮的后背向着大家，疲倦不堪地一下子坐在门内的台阶上，一边叹息一边嘀咕着。 【裸の】の削除(22頁)
狭い船室にいっぱいに射し込んだオレンジ色の朝日の光。(104頁)	狭窄的船舱里射进朝阳的金黄色光辉。 【狭い船室にいっぱいに射し込んだ黄金色の朝日の光。】(35頁)

上記の翻訳テクストにおいて、「芸豫諸島」、「一日の中何時間か」、「オレンジ色」と「左首」などの誤記、誤植と、「単調なエンジンの音。」、「人の好い」などの翻訳の欠落が見られる。そして、原文テクストにある「マイクロバス」(97頁)の翻訳である「バス」(12頁)には、「マイクロ」の翻訳の欠落が見られる。しかし、原文テクストにおいて、その後に再び出現した「バス」の翻訳について、「マイクロバス」(97頁)は「小型公共汽车【マイクロバス】」(13頁)に、「大型バス」(97頁)は「大型公共汽车【大型バス】」(13頁)に正しく訳された。訳者が細部を見過ごし、不注意な間違いをしたと考えられる。

また、原文テクストにある「若妻の色気」の「色気」は「あどけなさ」に訳されており、その上「たくましい裸の背中を向けて」における「裸の」の削除は、前述の通り、文化大革命の時期に、文学作品における「ポルノ的な要素」は、当時の中国社会に避けられていたためであると考えられる。

また、翻訳テクストにおいて、以下のように意訳の翻訳手法も使われた。

原作	訳文
	民子：今天船要修理一下，所以我去做些地里的活。 老太太：是吗，你可真行啊！ 民子：哪里！您说的好。

民子「はい、今日はあちこち直しとりますけえ、私は畑仕事」 老婆「そうかの、せえが出るのあんたも」 民子「はい」(96頁)	【民子「はい、今日はあちこち直しとりますけえ、私は畑仕事」 老婆「そうかの、せえが出るのあんたも」 民子「いやいや！どういたしまして」】(8頁)
陽焼けした若い先生の笛に合わせ、元気一杯に動き廻っている。(96頁)	被太阳晒黑的年轻老师吹着哨子，同学们精神焕发，跟着哨子声一齐动作。 【陽焼けした若い先生は笛を吹いて、学生たちは元気一杯に笛の音に合わせて動き廻っている。】(9-10頁)

そして、翻訳テクストにおいて、次の訳注もつけられた。

原作	訳文
管弦祭(105頁)	管弦祭① ① 是一种祭神仪式，即在一定的日子里，把神舆供奉在船里，在海面上吹奏着管弦乐，祭供神灵。——译者(下同) 【管弦祭① ① 一種の祭事であり、すなわち決まった日に、船の中に神輿を供え、海の上で管弦を吹き、神を祭ることである。——訳者(以下同じ)】(28 頁)

訳者は、「陽焼けした若い先生の笛に合わせ、元気一杯に動き廻っている」という主語が省かれる一文に主語を補った。また、褒められた時の返事としての「はい」を「いやいや！どういたしまして」に意訳した。そして「管弦祭」など原文の専門用語に対して、翻訳者は精確な訳注を施した。翻訳テクストにおいて、訳者による意訳、訳注などは、読者の理解を助けると考えられる。

4.5.3　まとめ

文革期において、日本の農業問題に関する文学作品は主に1974年以降翻訳された。日本など資本主義国家の農業問題を反映する作品への関心の高まりは、1970年代の中国自身の農業政策と繋がりがあるという可能性が考えられる。1960年代からの「農業は大寨に学べ」、「上山下郷」など一連の左傾的農業集団化の運動により、農業にかかわる問題が著しく深刻化していた。1970年代初頭において、農業生産の停滞を改善するため、農業の推進方向が改めて検討され、農業政策の転換期と模索期に入ってきた。1973年から、農業集団化の政策の是正や産業構造調整の推進により、農業総産出額の増加など、文革の初期と比べて、中国の農業の状況は一時的に改善した。

農業に活況をもたらした背景をもとに、日本の農業問題を主題とした文学作品も翻訳されるようになった。日本の国策による農村の過疎化を反映する『穂波のゆくえ』に対しては、比較的、客観的な評価が与えられた。工業化の波に追われ、故郷を離れる人々を描写した原作の『故郷』については、農業の破綻を反映する作品として翻訳している。

『穂波のゆくえ』と『故郷』の訳文において、一部の誤訳、翻訳の欠落、意訳は存在しているが、文革期に出版された他の作品と比べて、訳文における大幅な削除などが見られない。また、翻訳者は『穂波のゆくえ』の翻訳テクストの訳註において、「日本軍国主義」を意図的に強調しており、原作者の狙いとの間に意味的なずれが見られる。

第6節　石油危機に関わる翻訳――堺屋太一『油断！』など

毛沢東の提起した「農業は大寨に学べ、工業は大慶に学べ」というスローガンにおいて、工業の学ぶべき対象は「大慶」油田である。文革期において、翻訳活動の編集者も日本の石油問題に目を向けていた。日本の石油問題を反映する作品としては、堺

屋太一『油断！』(渭文・慧梅訳)[494]が1976年8月に人民文学出版社より出版された。また、山内久・桂明子・熊井啓『朝やけの詩』、八住利雄『ノストラダムスの大予言』(安可訳)[495]の訳文の「前言」、結城昌治『不良少年』(薛毅訳)の翻訳の梗概において、公害問題に対する言及が見られる。さらに、産業発展の副作用として、文革期の日本文学の翻訳において、編集者も繰り返し公害問題を取り上げた。

本節では、『油断！』の原作と翻訳の「前言」と、テクストの分析を行うことにより、文革期の翻訳作品に見られる日本の石油危機が、編集者や翻訳者によりどのように解釈されているかを考察する。

4.6.1　文革期における中国の石油政策

4.6.1.1　「工業は大慶に学べ」運動

文革期において、上述した中国農業の紆余曲折した発展過程と比べ、緑の革命[496]を目指した「現代農業」および「現代工業」の推進には不可欠な存在として、一時期を除き、石油産業の発展は比較的に順調に進んでいた。「農業は大寨に学べ、工業は大慶に学べ」というスローガンが述べたように、建国以降、「大寨」は農業のモデルであり、「大慶」は工業の模範であった。

先に述べたように、1949年に中華人民共和国は、ソ米という２つの対立する陣営から、徹底的に親ソ路線を取り、「向ソ一辺倒」の方針を打ち出した。中国が建国されて以来、石油製品の大半は「洋油」、すなわち輸入石油製品に頼っていた[497]。中国は1959年という時点で石油の生産量自給率が４０．６％[498]だったが、ソ連の技術的な援

494　堺屋太一『油断』渭文、慧梅訳(人民文学出版社、1976年8月)。

495　脚本：八住利雄、監督：舛田利雄『诺斯德拉达缪斯的大预言』安可訳、『摘译』1975年第2期(1975年2月)130-196頁。

496　呂新雨、王紹光、黄万盛など「70年代中国」、『开放时代』2013年第1期(2013年)71-72頁。

497　神原達「中国石油産業、歴史的経緯と将来展望」、神原達編『中国の石油産業』(アジア経済研究所、1991年3月)3-4頁。

498　呂新雨、王紹光、黄万盛など「70年代中国」、『开放时代』2013年第1期(2013年)72頁。

助と指導のもとに、黒竜江省にある大慶油田[499]が同年9月に発見された。しかし、1960年代に入り、中国とソ連との関係悪化に伴い、石油産業を含め、各種援助が停止された。それと同時に、ソ連援助による油田開発から「独立自主」、「自力更生」政策[500]へと方向転換を余儀なくされた。1960年に、油田の探査と開発を目的とした「石油会戦」[501]が、大慶をはじめ、中国全土で行われ、大量の資金と技術者が投入された。1949年の原油生産量はわずか１２万トンであったが、中国の石油産業はこの時期から急速に発展した。特に1963年に、大慶油田は全年度の生産量が６４８万トンに達し、全国の原油生産量の６６％を占めるまで伸びた。1963年12月26日『人民日报』において、「从国外进口“洋油”的时代即将一去不返 我国石油产品基本自给【わが国が必要とする石油製品はほぼ自給できるようになり、輸入した『洋油』に依存して暮らした時代は過去のものになろう】」[502]という記事が掲載された。それにより、「農業は大寨に学べ」とともに、「工業は大慶に学べ」というスローガンが『人民日报』[503]など

499　大慶油田の開発事情について、松澤明「中国の石油事情」、『石油技術協会誌』第51巻第4号(1986年7月)298-312頁、神原達「中国石油産業、歴史的経緯と将来展望」、神原達編『中国の石油産業』(アジア経済研究所、1991年3月)3-16頁、豫・宛人「中国石油科技五十年纪实(1949～1999)』続、『石油科技论坛』1999年第6期(1999年12月)66-85頁、謝治国「新中国能源政策研――对新中国能源政策发展过程的考察分析」(中国科学技術大学博士学位論文、2006年5月)62-84頁などを参照した。

500　南和志「中国石油外交与中美缓和」、李放春、夏亜峰等「中国社会主义和改革道路的新思考」、『开放时代』2017年第1期(2017年)38-41頁などを参照した。

501　謝治国「新中国能源政策研――对新中国能源政策发展过程的考察分析」(中国科学技術大学博士学位論文、2006年5月)48頁。

502　「从国外进口“洋油”的时代即将一去不返 我国石油产品基本自给」、1963年12月26日『人民日报』。その翻訳について、『中国月報』第63-64号(外務省アジア局中国課、1964年)146頁を参照した。

503　「崇高的榜样」、1964年4月20日『人民日报』;「永不卷刃的尖刀――记大庆油田一二〇二钻井队」、1964年4月25日『人民日报』;「在岗位上――大庆油田李天照采油井组纪事」、1964年5月6日『人民日报』;「在革命化的道路上――大庆油田工人座谈会记录」、1964年5月21日『人民日报』;「他们是怎样看、怎样做思想政治工作的？――大庆油田基层政治工作人员座谈会记录」、1964年6月1日『人民日报』など。大公報社人民手冊編輯委員会編『人民手册』1964(大公報社、1964年10月)61-78頁、林小波「“四清”运动研究」(中共中央党校博士学位論文、2004年5月)70-71頁、陽勇「毛

において繰り返し言及されており、「大慶精神」[504]は、「鉄人精神」、「プロレタリア階級の革命精神」として掲げられた。「鉄人精神」の「鉄人」は、鉄のように強い意志を持つ人という意味で、文革期に特に石油採掘者の模範労働者である「王進喜」のことを指す。1960年代において、掘削隊の隊長としての王進喜は、過酷な環境で労働者たちを率いて、大慶油田の開発に成功した[505]。文革期における「刻苦創業」という提唱のもとに、王の「刻苦奮闘、無私献身」の「鉄人精神」が再び称賛された[506]。前述した「農業は大寨に学べ」運動の陳永貴とともに、王進喜が「徹底的な自力更生の精神」と「革命的な階級的自覚にもとづく主観的能動性」を発揮する代表人物と見做された[507]。油井の噴出を抑えるため、王進喜が泥水に飛び込んだことも新聞や雑誌の中で「労働模範」として頻繁に言及された[508]。また、1960年からの膨大な人力と物資の投入をめぐる石油政策をもたらしたのは、無論石油需要の拡大もその一因であるが、政治的意義からいえば、対立関係にあったソ連への反抗、さらに建国当初における自身の「向ソ一辺倒」政策への反抗でもあると考えられる。

また、「工業は大慶に学べ」運動は「農業は大寨に学べ」運動と同様、中国の社会主義化の政策の一環と考えられる。文革期に入って、石油政策も基本的に1960年代の政策基調を保持したものと思われる。大慶油田の原油生産量は、1970年という時点で２１１８万トンに達し、増産傾向を続けてきて、正式に産油国となった[509]。その中で、特に1972年のニクソン訪中と中日国交正常化を背景に、中国政府は、アメリカ、ドイツ、フランス、日本などの国から、４３億ドルの技術設備を導入する「四三方案」[510]

泽东与新中国钢铁工业研究」（湘潭大学博士学位論文、2014年11月）130-132頁などを参照した。

504　「大庆精神 大庆人」、1964年4月20日『人民日报』。

505　神原達『中国の石油産業』（幸書房、1985年4月）5-6頁、神原達『中国の石油と天然ガス』（アジア経済研究所、2003年1月）18-19頁を参照した。

506　小島朋之『脱社会主義への中国』（芦書房、1992年11月）41頁。

507　小嶋正己『中国社会主義企業の展開』（千倉書房、1993年5月）136頁。

508　高山陽子「中国における労働模範の身体表象に関する一考察」、『国際関係紀要』第30巻第1・2合併号（2021年）400-401頁。

509　孫学民「“文化大革命”期间的经济建设――（1966～1976）」、『黑龙江史志』2011年第2期（2011年1月）26-27頁。

510　肖翔「中国工业化中的政府作用研究（1949-2010）」（中共中央党校博士学位論文、

を採択した。その中では、化成肥料や化学繊維の生産技術に重点を置いている。アメリカも中ソ関係の悪化を利用して、積極的に石油技術を提供し、中国から石油の輸入を希望した。さらに、技術の導入と製品の輸出により、中国は石油を外交手段とし、「石油外交」[511]を展開した。1973年に勃発した中東戦争による石油危機と緊張状態が高まっていたソ米冷戦下で、軍備物資として石油の確保は重要であった。北ベトナム、北朝鮮への石油輸出は、米帝国主義に対する抵抗でもあり、共産主義国家同盟でのソ連の影響力を削減させる道具でもあった。日本への石油輸出により、外貨蓄積を果たした一方、中国はソ連の外資での石油開発に対して牽制をしようとした。この時期において、大慶油田の連年増産及び外交上の成果により、「工業は大慶に学べ」はプロレタリア階級の革命路線で、毛沢東思想の１つとして確立された[512]。しかし、文革後の1981年12月18日に、1960年以来の長かった大慶運動は、正式に頒布された「工業は大慶に学べに関する問題の報告」[513]によって事実上の終止符を打った。この大慶問題を総括した報告書の中では、「洋油時代を終わらせた」という大慶精神と大慶経験は認められていたが、大寨運動と同様、「大慶のあらゆる経験はほぼ階級闘争、路線闘争に関わっていた」とも述べられている。当時の指導者であった鄧小平は大慶の経済的意義を肯定していたが、文革時代の政治的大衆運動、特に毛沢東思想と切り離しようとする姿勢が見られた[514]。

4.6.1.2　1950年代からの石油文学

2012年6月)60-73頁。

511　姜長青『20世纪70年代末、80年代初中国经济调整研究』(中共中央党校、2006年5月)15-16頁、南和志「中国石油外交与中美缓和」、李放春、夏亜峰等「中国社会主义和改革道路的新思考」、『开放时代』2017年第1期(2017年)38-41頁などを参照した。

512　武漢師範学院《学習手冊》編写小組編写『学习手册』(出版社不明、1972年10月)80-81頁。

513　「中共中央转发国家经委党组《关于工业学大庆问题的报告》的通知」、中共大慶市委党史研究室編『中国共产党大庆历史大事记述』(黒竜江人民出版社、2003年10月)384頁。

514　郭東峰「中共政治动员研究――以“工业学大庆”为例」(華東師範大学修士学位論文、2010年5月)33頁を参照した。

建国以降の「大慶精神」に呼応して、石油文学という概念も石油政策の展開の中で生み出された。石油文学については明確な定義づけはない。「２０世紀５０、６０年代[515]に新しく興った文学の一種で、農村の題材、革命歴史の題材ほど重要ではないが、当時の文学創作の中核的なテーマで」[516]あり、「石油特色があれば、石油意識があれば、石油文学である」[517]という説がある。それに基づいて、本節で扱う翻訳作品『油断！』も石油文学の１つと言えるだろう。石油文学の特徴を論じると、「石油、石油労働者の生活、石油工業の発展などを題材にして書かれた作品で、その表現様式は詩歌、小説、映画[518]、歌曲[519]、戯曲と多岐にわたり、その文学的特徴は『豪放と気迫』、『通俗と鮮明』にまとめられる」[520]ものである。さらに、王進喜の「鉄人精神」を宣

515　本論文では詳しく論じないが、北宋時代の学者沈括の書いた詩「延州诗」（出典『梦溪笔谈』）にある「化尽素衣冬未老，石烟多似洛阳尘」などに踏まえて、紀元前から1949年までは石油文学の懐胎期であるという説もみられる。王貴「略谈石油文学的内容及特点」、『文艺评论』1985年第4期（1985年8月）19頁、范豫魯「论中国石油文学的演变」、『西安石油大学学报』（社会科学版）第25巻第2期（2016年4月）91-96頁を参照した。

516　管興平「漫议“石油文学”」、『长江大学学报』（社会科学版）第32巻第2期（2009年4月）40-42頁。

517　武斌『石油文学初论』（石油大学出版社、1991年1月）2頁。

518　馬修論「影像呈现与重构：新中国纪实影片研究（1949-1976）」（上海大学博士学位論文、2013年9月）を参照した。

519　武菲「符号化政治与社会运动：“文化大革命”时期的歌曲研究」（中共中央党校修士学位論文、2014年6月）53-78頁、劉世虎「当代歌曲与社会历史发展关系研究（1949-1989）」（東北師範大学博士学位論文、2016年6月）63-64頁を参照した。

520　石油文学の定義について、王貴「略谈石油文学的内容及特点」、『文艺评论』1985年第4期（1985年8月）19-22頁、武斌『石油文学初论』（石油大学出版社、1991年1月）1-13頁、何世龍「中国石油文学研究30年」、『长江大学学报』（社会科学版）第32巻第3期（2009年6月）24-27頁、張瑶、候敏、孫文静、趙悦、唐暁恬「大数据下的石油文学」、『神州印象』2019年第5期（2019年5月）48-50頁などを参照した。また、文学作品において石油に関する意識がある限り、石油文学であるという論説も、范豫魯「论中国石油文学的演变」、『西安石油大学学报』（社会科学版）第25巻第2期（2016年4月）91頁などからも見られる。

伝する「鉄人文学」[521]、玉門油田に関わる「玉門石油文学」[522]、「大慶精神」をめぐる「大慶文学」[523]も石油文学から派生した。

農業をテーマとした作品と同様、石油文学も２０世紀後半における中国の社会主義建設事業に従属したものだと考えられる。石油文学は石油詩[524]から生まれた。1952年に玉門油田に勤務した詩人李季は『玉门诗抄』などの詩集を発表し、最初の「石油詩人」として注目された。石油関係労働者全体と英雄模範の人間像についての描写を通し、「刻苦奮闘」、「人定勝天」[525]を唱えて、石油開発事業を礼賛するというのが石油詩の特徴だと言える。文革期に入って、文学作品に対する干渉はエスカレートしていった。この時期において、石油文学は主にプロレタリア階級に属した油田「鉄人」のソ連修正主義、米帝国主義などとの戦い[526]を中心的に描写した。日本の石油問題を反映する作品『油断！』の翻訳も人民文学出版社から出版された。

1980年代初頭に大慶運動は実質的な終焉を迎えたが、石油政策の変更に伴い、石油文学に新たな創作方向への転換がもたらされた。鄧小平の打ち出した改革開放政策を背景とし、「改革」を題材にした作品[527]が主流となった。さらに、1950年から文革期の終結までの石油文学には個人を軽視するという傾向が見られるが、1980年代以降の

521　許俊徳「浅谈铁人文学的产生和发展」、『大庆社会科学』2012年第3期(2012年6月)150-153頁などを参照した。

522　朱建宏「石油精神永放光芒――再论玉门石油精神与石油文学」、『新西部』2020年2月下旬号(2020年2月)43-45頁を参照した。

523　彭放編『黑龙江文学通史』第3巻(北方文芸出版社、2002年12月)132-137頁、380-389頁、車暁彦、劉昭「论大庆石油文学创作的总体特征」、『学术交流』2011年第11期(2011年11月)149-151頁、張大海、馬新宇「大庆石油文学的创作风格」、『大庆社会科学』2012年第3期(2012年6月)146-149頁などを参照した。

524　邱嵐編『中国当代文学』(遼寧教育出版社、1986年6月)192-198頁、周思源、黄悦、宋長宏編『20世纪中国文学史纲』(北京語言大学出版社、2003年7月)389-395頁。

525　「人定勝天」とは、人は必ず天に打ち勝つことである。馬修論「影像呈现与重构：新中国纪实影片研究(1949-1976)」(上海大学博士学位論文、2013年9月)30-68頁を参照した。

526　范豫魯「论中国石油文学的演变」、『西安石油大学学报』(社会科学版)第25巻第2期(2016年4月)93頁を参照した。

527　王貴「略谈石油文学的内容及特点」、『文艺评论』1985年第4期(1985年8月)19-22頁を参照した。

石油文学は、作家の自意識の高まりにより、「人道主義」、「主体性」[528]を唱え、個人や自然と個人との関係を中心的に描き出した。しかし、基本的には、今の中国の学術界で、1950年代からの石油文学に対して、歴史研究の面ではその記録的作用[529]は認められているが、文学の面では左翼的色彩のある作品であるという評価が一般的である。

4.6.2　日本の石油問題をめぐる翻訳作品――『油断！』

4.6.2.1　原作について

①あらすじ

本節で扱う『油断！』の原作[530]は1975年に日本経済新聞社より出版された。「油断」という言葉について、作者の堺屋太一は以下の古代インドの書「ラーマーヤナ」を引用して説明した。

> 過ぎたる自信と傲慢の故に
> 持てる油を失い
> その首を断たれた者があった
> 古の賢人は
> これを油断と呼んで
> 後の世の戒めとした(4頁)

すなわち、「油断」は字義通り「油が断たれると、命が断たれる」ことを指す。『油断！』は、中東戦争を契機に始まった石油危機を背景として、石油供給の中断により、日本の経済社会が壊滅する様子を描いた小説である。1973年の石油危機を背景とし、「日本の石油需要の九九・七%までを輸入に頼っている」(19頁)ので、石油を

528　張宇寧「论1980年代大庆石油文学与人道主义文艺观」、『学术交流』2012年第5期(2012年5月)179-181頁などを参照した。

529　管興平「漫议“石油文学”」、『长江大学学报』(社会科学版)第32巻第2期(2009年4月)42頁。

530　堺屋太一『油断 !』(日本経済新聞社、1975年7月)。

備蓄するため、通商産業省エネルギー庁の石油第一課で課長補佐を務める小宮幸治と、上司の寺木鉄太郎らは海底油槽の建設を唱える。しかし、その後「重油流出事故」、「公害問題」などが発生し、海底油槽の安全性に疑問が生じる。市民の反対運動により、政府が主張した海底油槽の建設は挫折する。小宮、寺木とエネルギー庁長官の黒沢修二らは「石油が入って来なくなったら、日本はどうなる」(15頁)という問題を検討するため、「石油輸入大幅現象時の影響とその対策に関する調査」(22頁)を行う。コンピューターで予測した結果として、石油の輸入が途絶えた「二百日間に、三百万人の生命と、全国民財産の七割が失われる」(79頁)。その翌日、中東で戦争が勃発する。中東の政情不安に伴い、内閣は石油消費の削減の実施を決定する。しかし、それと同時に、買い占め騒動が起こり、灯油不足で凍死者の出現、ガス事故の発生が度々見られ、さらに「米騒動」、「大暴動」が発生する。日本は「油減調査」で予測したように、次第に破滅していく。

②「警世の書」と「予測小説」

小説の第１稿は、1973年の秋に書き上げることができたが、本物の石油危機が発生したので、「当時の日本社会をおおっていた不安を助長することを恐れた」[531]ため、作品の出版は一時見合わせた。２年を経た1975年において、なぜ『油断！』を再び書き上げた理由として、作者本人は「一時的な石油危機は消え去ったが」、「我が国のエネルギー供給構造は全く変わっていないし、石油が政治的にも地域的にも著しく偏在した資源であることも変わりない」ため、「石油・エネルギー問題に対する世間の関心を、もう一度喚起する必要がある、と考えたからだ」(260頁)と説明した。すなわち、「警世の書」だと思われる。

そして、『油断！』の創作について、堺屋は以下のように述べている。

> 数年前、いくつかの分野の研究者有志が集まって、日本の将来を考える気ままな会合を持ったことがある。その調査対象の一つ(中略)、つまり本書でいう「油減調査」だ。(中略)この小説は、通常のフィクションとは多少異な

531　堺屋太一「あとがき」、堺屋太一『油断！』(日本経済新聞社、1975年7月)260頁。

る性格を持つ、と思う。ここに登場する人物はもちろん、架空のものであり、特定のモデルはない。だが、ここに示されている客観データは入手し得る限り正確なものを使用した。(中略)事件をことさらに深刻化させ、被害を大きく表現することはしなかった。実際に、石油輸入減少が生じれば、これ以下の被害になることもあるが、それ以上になることも十分にある、ということである。その意味で、この小説は“空想”であるよりは“予測”である、といいたい。(259-261頁)

すなわち、堺屋によると、『油断！』は同時代に出版され、同じく日本の国難を予想して、取り上げている小松左京『日本沈没』のようなSF小説ではなく、「予測小説」である。「予測小説」について、堺屋は「最もありそうな状況、そこで『起こり得る事件や人間模様』を挿入する」[532]と説明した。『油断！』は政府機関の調査による「客観データ」を踏まえて書かれているが、事実ではなく、作品の登場人物、油減による被害程度などは「架空のもの」であるが、まったくの「空想」ではない。SF小説との間の境界線が不明瞭な上に、予測期間がない限り、予測が正しかったかどうかを検証できないため、予測小説の「予測」という言葉にはある意味の曖昧さが含まれる。さらに、1973年に実際に発生した石油危機は、1975年に出版された『油断！』に一種の真実味を付け加えたと言える。

4.6.2.2　翻訳について

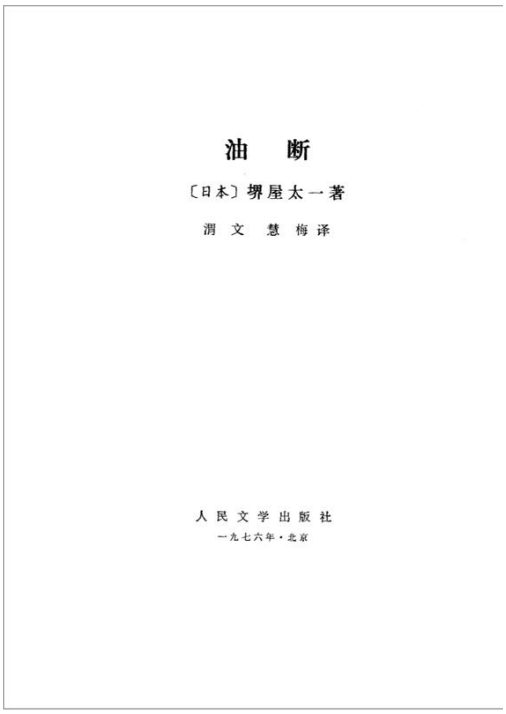
①訳本の「前言」について

堺屋太一『油断』は、以下のように、1976年8月に人民文学出版社から翻訳、出版された。

532　堺屋太一『明日を読む』(朝日新聞社、1997年12月)297頁。堺屋太一「ベストセラー近未来予測小説『平成三十年』執筆から10年　厭な予測がかなり当たっている」、『週刊朝日』第113巻第35号(2008年7月)112-116頁も参照した。

訳本の表紙

訳本の中表紙・訳者名の記載



作品において、訳者名は「渭文・慧梅」と記載されており、「集体署名」である。その４文字は当時の中国における日本文学研究者の第一人者であった「葉渭渠・文潔若・高慧勤・唐月梅」という４人の翻訳家の名前の一字を寄せ集めたものである[533]。また、『油断』の「前言」[534]の著者は「大港油田井下作業指揮部工人理論組」と記された。前述した通り、文革期における外国文学の翻訳活動と評論活動は、知識人階級のみならず、各労働者階級、すなわち「工農兵」の参加を重視するという傾向が見られた。

まず、「前言」の著者は、石油危機をもたらした中東戦争に対して、以下のように述べた。

533　馬慧嬌「『文革』時期における日本文学翻訳に関する一考察――単行本のテキスト対照を中心に」、『饕餮』第21号(2013年9月)25-49頁を参照した。

534　大港油田井下作業指揮部工人理論組「前言」、堺屋太一『油断』渭文、慧梅訳(人民文学出版社、1976年8月)1-6頁。

一九七三年年底，一场严重的经济危机，席卷了整个资本主义世界，也冲击着日本列岛。在危机前夕，又爆发了中东十月战争，阿拉伯人民拿起“石油武器”进行反帝反霸斗争。

【1973年末、深刻な経済危機が、資本主義世界全体を席巻し、日本列島にも衝撃を与えた。危機直前、中東十月戦争も勃発した。アラブ人民は「石油武器」を取って反帝反覇闘争を行った。】(1頁)

作者(中略)把日本发生经济危机的原因单纯归结到“能源问题”，特别是“石油危机”问题上，归结到阿拉伯人民和日本劳动人民身上。这显然也是十分荒谬的。(中略)阿拉伯人民拿起“石油武器”进行反帝反霸斗争后，国际垄断资本之间争夺石油的斗争越演越烈，苏修国家垄断资本乘机兴风作浪，从中捞了一大把。

【作者は(中略)日本で経済危機の発生した原因を「エネルギー問題」に単純に帰結させ、特に「石油危機」に関わる問題をアラブ人民と日本労働人民の身に原因があるとする。これも明らかにでたらめ窮まりない。(中略)アラブ人民は「石油武器」を取って反帝反覇闘争を行った後で、国際独占資本の間に、石油争奪戦はますます激化した。ソ修の国家独占資本は機に乗じて波風を立て、その中から巨額の金を巻き上げた。】(3-4頁)

著者は「石油」を「武器」として、「中東十月戦争」を「反帝反覇闘争」として意味付けた。1970年代初頭、「中東問題」は「ソ修社会帝国主義と米帝国主義、２つの超大国はパキスタン、アラブという２つの重要な戦略地域と豊富な石油資源を争奪するための戦争であ」り、「中東地域の石油輸出」は「帝国主義独占資本の残酷な搾取と略奪」[535]であると批判された。1973年に中東十月戦争が発生して以来、『人民日报』などの機関紙は戦況の推移に深い関心を寄せた[536]。さらに、「中東戦争」に対する中

535 「中东问题」や「联合国安理会关于中东问题的“决议”」等、著者不明『国际知识』(湖北人民出版社、1972年4月)122-130頁、「“石油输出国组织”」や「帝国主义对中东石油的掠夺」等、武漢師範学院《学習手冊》編写小組編写『学习手册』(出版社不明、1972年10月)767-773頁などを参照した。

536 「以色列向埃及和叙利亚发动新的侵略进攻 埃及叙利亚武装部队奋起反击取得战

国公式の評価の中で、「中東石油に依存するイギリス、フランス、西ドイツ、日本、イタリアなどの国」、「中東石油の略奪を通して超過利潤を貪る米帝国主義」、「資本支援、技術支援を名目にして中東石油を横領するソ修正主義」[537]への批判が度々見られる。原作にある「中東の政情不安」に対して、「前言」の著者による「アラブ人民がイスラエル・ユダヤ復古主義の侵略に反対する戦争であり、帝国主義の中東侵略政策の産物である」[538]という解釈は、政府公式の評価と合致していると考えられる。

そして、『油断』の「前言」において、日本の産業構造と石油政策に対して以下のように言及された。

> 日本垄断资本长期以来，强制推行资本主义的“经济高速发展”政策，在国际上依附美国，疯狂掠夺外国资源，包括中东石油；在国内以残酷剥削工人和牺性农业为基础，大力发展多消费型的工业结构，通过多进口廉价资源和能源，多出口工业制品，来加强国际竞争能力，攫取更大的国际市场和垄断利润。(中略)由于日本垄断资本推行“经济高速发展”的政策，形成了资源、能源多消费型工业结构，所以资源、能源的消费不断扩大，而垄断资本为了获得最大利润，又从不注意开发本国资源和能源，结果使日本的资源、能源自给率急剧下降，进口资源、能源量迅速增加。以石油为例，日本的石油对外依赖程度高达99.7%，其中80%依赖中东。
>
> 【日本の独占資本は長い間にわたって、強制的に資本主義の「経済高速度発展」政策を推進しており、国際的にはアメリカに依存し、中東の石油を含

果」、1973年10月8日『人民日报』;「埃叙部队继续英勇抗击以色列侵略 埃军在运河东岸向前推进 叙军在戈兰高地多次击退敌人」、1973年10月9日『人民日报』;「超级大国对以色列的“援助”」、1973年10月10日『人民日报』;「各国舆论谴责美苏策划停火阴谋破坏阿拉伯解放斗争 阿拉伯人民决心摆脱超级大国独立自主斗争到底」、「苏美加紧争霸中东竞相增强军事实力」、1973年10月31日『人民日报』などがある。

537 天津南開大学政治経済学系世界経済教研室編『战后帝国主义经济几个问题』(天津人民出版社、1975年3月)119-129頁、144-152頁などを参照した。

538 「中东人民为捍卫石油资源和主权而斗争」、著者不明『国际知识资料』第3輯(山東人民出版社、1974年5月)278-280頁、「何英副外长会见阿拉伯国家驻华使节和巴勒斯坦解放组织驻京办事处主任」、1973年10月21日『人民日报』などを参照した。

め、気違いじみた略奪を行った。国内的には労働者に対する残酷な搾取と農業の犠牲を基礎として、多消費型の工業構造を強力に発展させており、安価な資源とエネルギーを多く輸入し、工業製品を多く輸出することを通して、国際競争力を強化し、さらに大きな国際市場と独占的利潤を掠め取る。（中略）日本の独占資本は「経済高速度発展」政策を推進して、資源とエネルギー多消費型の工業構造を形成するがゆえに、資源とエネルギーに関わる消費も絶えず拡大してきた。しかし、独占資本は最大限の利潤を獲得するために、自国の資源とエネルギーの開発には気付かなかった。その結果、日本の資源とエネルギーの自給率を急激に低下させて、輸入資源と輸入エネルギーを迅速に増加させた。石油を例に、日本の石油対外依存度は９９．７％に達し、その中の８０％は中東に依存している。】（3-4頁）

上記の内容から見ると、まず『故郷』の「出版说明」と同じく、『油断』の「前言」の著者は農業を軽視する日本の産業構造を批判した。次に、著者は「独占資本は最大限の利潤を獲得するために、自国の資源とエネルギーの開発には気付かなかった」、「日本の資源とエネルギーの自給率を急激に低下させ」たと述べ、日本の資源開発の不足による石油対外依存度の高さをも攻撃した。その批判の裏には、自国の農工業の均衡的発展、そして石油輸出国としての自負があった。すなわち、農業と工業の両方が全面的に発展した上に、1960年における大慶油田の開発に伴って、石油の自給が可能となり、さらに1973年に石油の輸出も行われることになったという自国の政策上の優位性を暗示した。農業政策と比べ、石油に関わる政策によって比較的実質的な成果をもたらしたため、『故郷』の「出版说明」と『穂波のゆくえ』の「编者按」から日本の農業政策に対する批判が見られるとするならば、『油断！』の「前言」からは忠告的な要素が見られるだろう。著者からすれば、自国が優位な立場にあるため、一種の高圧的態度が生まれたという可能性が考えられる。また、前述したように、文革期において、「王進喜」の「徹底的な自力更生」の「鉄人精神」が称賛された。当時、中ソ関係の冷却化につれ、国際的孤立化が深まってきた中国は、「自力」という言葉をより一層重要視していたと考えられる。日本の海外依存の石油政策を描いた小説に対する批判的な態度と、前述した、工業における大慶、農業における大寨など、新中国の社会主義建設の中で唱えられた「自力更生」の戦略とは、つながりがあるように

見受けられる。

また、原作の出版目的について、著者は下記のように論述した。

> 小说出版后十天，在首相官邸召开的第五次综合能源对策内阁会议上，科学技术厅长官佐佐木曾说：“正如《油断》一书所描写的那样，能源危机是很重要的问题。这次会议应该加以充分讨论。”通产大臣河本敏夫说：“如果发生这种情况，后果非常严重。必须认真考虑如何保证稳定供应石油问题，以便逐一消除产生危机的萌芽。”(中略)日本《产经新闻》还报道说：“亲自经历了石油危机的国民，感到这部小说描写得非常真实。”我们清楚地看到，这部小说出版的目的，很明显就是为日本政府制定分散石油来源政策和帮助通产省重新出石油储备法案制造舆论的。
>
> 【出版されて１０日後、首相官邸で開かれた第５回総合エネルギー対策推進閣僚会議で、科学技術庁長官の佐々木は「まさに『油断！』という作品の描写したように、エネルギー危機は極めて重要な問題である。今回の会議で充分検討すべきだ」と言った。通商産業大臣の河本敏夫は「もしこの種の状況が発生したら、深刻な結果をもたらす。危機の芽生えを一つ一つ解消するため、如何に石油の安定的供給を確保するかという問題を真剣に考慮しなければならない」と言った。(中略)日本の『産経新聞』によれば、「石油危機をみずから経験した国民は、この小説は事実に即して書かれていると感じる」。明らかに、この小説の出版目的は、日本政府が石油の供給源を分散する政策を制定するために、通産省が改めて石油備蓄法を提出するために世論を作っているところにある、とはっきり見えてくる。】(5頁)

原作者によると、『油断！』は石油危機に遭遇するという事を仮定して、緊急事態への注意を喚起するため、すなわち「警鐘の書」として出版された。それに対して、訳本の「前言」の中で、日本通商産業省の官僚と「産経新聞」の『油断！』に対する肯定的な評価が引用され、作品の出版は日本政府が新しい石油備蓄法を提出するための世論作りに関係していると論じられている。前述したように、『油断！』は「予測小説」と見做され、作品の現実性が強調された。そして、原作において、石油危機の発生原因を追及した「新しい東京裁判」で、「実際に石油備蓄を阻んだのは何か」

(232頁)という質問に対して、通商産業省エネルギー庁の石油第一課課長の寺木は「資金問題、金利負担の問題など経済問題も重要な原因であった」が、「最大の原因は、一部地域住民とそれを支援する団体等のために、石油基地の建設が阻止されたこと」(233頁)だと答える。そこから読み取れるのは、元通産省官僚であった堺屋が公害反対運動が理屈に合わないと評価したことである。訳本の「前言」における作品の出版目的に関わる論説は比較的、客観的であると考えられる。

②訳文のテクスト

『油断！』の翻訳テクストにおいて、以下の誤訳、誤表記、翻訳の欠落、訳注における間違いなどが見られる。

原作	訳文
このため役所内での評判は必ずしも芳しくなかったが、彼自身はそれを気にかける風さえない。(9頁)	所以在宫厅内，名声并不佳，而他本人却满不在手。 「満不在乎【それを気にかける風さえない】」の「乎」を「手」とする誤表記(6頁)
濃紺のスーツに包まれた彼女(14頁)	身穿藏青色连衣裙的寿佐美 【濃紺のワンピースに包まれた彼女】(12頁)
ハイヤー(16頁、17頁)	小轿车 【小型自動車】(14頁、16頁)
コンピュータの投入算出用端末機器(28頁)	电子计算机的输入设备 【算出】の翻訳の欠落(28頁)
	“我提出的对马尔科夫过程在社会现象范围的演绎理论和对各个社会所产生的结局的理论，分别获得了美国伊利诺斯理工大学学位

	和大阪市立大学学位。”
「マルコフ過程の社会現象分野への演繹理論でイリノイ工科大学から、社会群におけるカタストロフィー理論で大阪市立大学から、学位をもらいました」(31頁)	【「マルコフ過程の社会現象分野への演繹理論と、各社会の生み出す結末に対する理論で、でイリノイ工科大学と大阪市立大学から、学位をもらいました」】(32頁)
本村は愉快ではなかった。自慢たらしい話ぶりや、妙になれなれしい言葉遣いが気に障った。(40頁)	本村的心情很不舒畅。与座波毫不客气地夸夸其谈，使他格外反感。 【妙になれなれしい言葉遣い】の翻訳の欠落(42頁)
＜とんだ００７だ＞ 本村は苦笑しながら、扉をくぐった。(43頁)	本村心里嘀咕：这不是进了冒牌的《零零七》①的境地了吗？他强作笑容，钻进了那扇小门。 ① 日本的一部描写间谍的电影片名。 【本村は「偽物の『００７』①の境地に入ったのではないか」と心の中でつぶやいた。本村は苦笑しながら、扉をくぐった。 ① スパイを題材にした日本映画。】(44-45頁)
早指し将棋に負けた北畑は、本村を自分のデスクへ連れて行って、スクラップ·ブックを開いた。(57頁)	马马虎虎把棋下输了的北畑，领着本村走到自己的写字台前，翻开了剪报本。 【いい加減に将棋に負けた北畑は、本村を自分のデスクへ連れて行って、スクラップ·ブックを開いた。】(62頁)
しかも、繊維、雑貨、鉄鋼、家電など、慢性不況·設備過剰産業の輸出が伸びたの	而且，本来是处于慢性萧条状态、开工不足的工业，出口量增加了，因此，几乎给全部工业都带来了景气。 【繊維、雑貨、鉄鋼、家電など、】の翻訳の欠落(68頁)

で、ほとんど全産業に好況が及んでいた。（63頁）	
助手席に腰を降した時、かすかな香水の香りと女の体臭が、小宮の鼻を軽く刺激した。（80頁）	小宫在司机旁边的座位上坐下来的时候，一股淡淡的香水气味微微地刺激了他的鼻子。【と女の体臭】の削除（88頁）

「満不在乎」の「乎」を「手」とする単純な誤植も見られる。「算出」、「妙になれなれしい言葉遣い」、「繊維、雑貨、鉄鋼、家電など」など翻訳の欠落や、「スーツ」が「ワンピース」に、「ハイヤー」が「小型自動車」、「社会群におけるカタストロフィー理論」が「各社会の生み出す結末に対する理論」に、「早指し将棋に負けた」が「いい加減に将棋に負けた」にされた誤訳なども見られる。

『油断！』の原文テクストにある「かすかな香水の香りと女の体臭が、小宮の鼻を軽く刺激した」は「かすかな香水の香りが、小宮の鼻を軽く刺激した」に翻訳されており、「女の体臭」の部分が翻訳の削除対象となった。先ほど述べたように、1973年10月に人民文学出版社より出版された小林多喜二『蟹工船』（葉渭渠訳）において、原文テクストにある「妻のムッとくる膚の臭い」（64頁）は「妻のムッとくる膚の香り」（66頁）に翻訳された。翻訳者は「臭い」より、中国の読者の表現習慣を意識し、比較的により積極的な意味で使われる「香り」を意図的に選択し、『油断！』の原文テクストにある「女の体臭」も同じ理由で削除されたと考えられる。

また、原文テクストにある「００７」に対して、翻訳者は「スパイを題材にした日本映画」の訳注を付けているが、イギリス映画を日本映画にするという注釈の間違いが見られる。『油断！』の翻訳テクストにおいて、以下の訳註もある。

原作	訳文
	目前日本进口的石油约百分之八十一①来自中东地区 ① 原文如此，数字前后不一。

これは現在、日本の輸入石油の、約八一%が中東アジア地区からもので(29頁)	【これは現在、日本の輸入石油の、約八一%①が中東アジア地区からもので ① 原文はその通りだ。数字は前後不揃いである。】(29頁)
“アッラーの神の与えたまいし財宝”(38頁)	“真主慈惠之宝财”① ① 见《可兰经》第十五部第十七《以色列篇》。 【“アッラーの神の与えたまいし財宝”① ① 『コーラン』第15章第17節『イスラエル編』を参照。】(38頁)
昭和十六年(130頁)	昭和十六年① ① 1941年 【昭和十六年① ① 1941年】(145頁)
「まるで国家総動員法だなあ」(105頁)	“简直成了‘国家总动员法’①啦。” ① 日本军国主义为了推行侵略战争于1938年公布的反动法律，目的在于控制全国人力物力，1945年废除。 【「まるで国家総動員法①だなあ」 ① 日本の軍国主義者が侵略戦争を推進するために1938年に公表した反動的な法律である。全国の人力や物力を支配することを目的とし、1945年に廃止された。】(117頁)
	农业组合① ① 农业协同组合的简称，一种半官方性质的农业合作组织。农业资本家通过它来控制农村的借贷，收购农产品等，对农民进行剥削和压迫。

農業組合（127頁）	【農業組合① ① 農業協同組合の略称で、半官半民の農業合作組織である。農業資本家はそれを通じて、農村の貸借を支配し、農産物を買付けて、農民を圧迫、搾取する。】（142 頁）
隣組制度（132頁）	街坊组制度① ① 原文作“邻组制度”。第二次世界大战期间，日本军国主义者强迫日本人民成立叫“邻组”的一种居民组织，以加强法西斯统治。1947 年废除。 【隣組制度① ① 原文において「隣組制度」である。第二次世界大戦において、日本の軍国主義者はファシスト統治を強化するために、日本人民に「隣組」という住民組織を作らせた。1947 年に廃止された。】（149 頁）
大東亜共栄圏（265頁）	‘大东亚共荣圈’① ① 第二次世界大战期间，日本军国主义者为了推行奴役亚洲人民的罪恶侵略政策而编造的说法。战犯松冈洋右 1940 年在其臭名昭著的声明中第一次使用此词。 【「大東亜共栄圏」① ① 第二次世界大戦において、日本の軍国主義者がアジアの人民を奴隷とする罪の深い侵略政策を推し進めるために作り出した言葉である。戦犯の松岡洋右が 1940 年にあの悪名高い声明におい

てこの言葉を初めて使った。】(235頁)

『油断！』の翻訳テクストの訳註において、「“アッラーの神の与えたまいし財宝”」や「昭和十六年」など、固有名詞に対する比較的客観的な解釈が見られる。また、「国家総動員法」、「農業組合」、「隣組制度」、「大東亜共栄圏」などに対して、翻訳者が訳註の中で「軍国主義者」、「侵略戦争」、「反動的」、「農業資本家」、「圧迫、搾取」、「ファシスト統治」を多用し、反帝国主義、反軍国主義を唱える傾向が強い。そして、原文テクストにある「これは現在、日本の輸入石油の、約八一%が中東アジア地区からもので」の「八一%」は、「原文はその通りだ。数字は前後不揃いである」という注釈がつけられている。「数字は前後不揃い」の「数字」は、日本の輸入石油の中東依存度を指している。原文テクストの中で、その数字は「八割」(18頁)、「八割以上」(25頁)から「八一%」まで見られる。原文に出現する「八割」などは概数として理解してもいいが、「八一%」という数字に、「前後不揃いである」と訳註により解釈を加えたのは、訳者が原文テクストを極めて注意深く読んでおり、作品に出てくる数字などを慎重に確認し、突き詰めて考究した結果だと考えられる。

また、翻訳テクストにおいて、翻訳者は、原文にある英語の略語を、以下のように漏れなく短縮されていない中国の正式名称に変えている。例えば、「CTS」が「石油備蓄基地」に、「グリーン車」が「一等車」に、「DD原油」が「政府直販原油」に、「NATO」が「北大西洋条約機構」に、「GNP」が「国民総生産」に、「LPガス」が「簡易ガス」に、「EC(欧州共同体)」が「欧州共同体」に翻訳された。当時の中国の読者が慣れていない専門用語に対し、読者にその認識の差異に違和感を感じさせないように、訳者が通俗的な言葉を選択したと考えられる。さらに、『油断！』は複数の訳者により翻訳されたが、原文テクストの前後に何回も出てくる「ITV」(28頁、75頁、78頁)がすべて「工業用テレビ」に翻訳されたように、翻訳テクストがある程度統一されており、整合性の取れた作品だと考えられる。

原作	訳文

ボロニアハム（15頁）	意大利波罗涅火腿 【イタリアボロニアハム】（13頁）
CTS（19頁）	原油储藏基地 【石油備蓄基地】（19頁）
グリーン車（24頁）	头等车厢 【一等車】（24頁）
ITV（28頁、75頁、78頁）	工业电视 【工業用テレビ】（28頁、82頁、85頁）
メジャー（国際石油資本）（32頁）	国际石油资本。 【国際石油資本】（33頁）
政府直販原油（DD原油）（32頁）	政府直接出售石油 【政府直販原油】（33頁）
DD原油（64頁、69頁）	政府直接出售的原油 【政府直販原油】（69頁、75頁）
石油輸出国機構（OPEC）（33頁）	石油输出国组织 【石油輸出国機構】（33頁）
NATO（39頁）	北大西洋公约组织 【北大西洋条約機構】（40頁）
パレスチナ解放戦線PLO（46頁）	巴基斯坦解放阵线 【パレスチナ解放戦線】（48頁）
GNP（75頁、76頁、77頁、79頁）	国民生产总值 【国民総生産】（83頁、84頁、85頁、86頁、87頁）

LPガス(161頁)	简易煤气 【簡易ガス】(182頁)
EC(欧州共同体)(174頁)	欧洲共同体 【欧州共同体】(196頁)

翻訳テクストにおいて、「文革言語」も散見する。訳文にある「文革言語」を、以下のように例として挙げる。訳者が「SF小説」の「SF」を「科学幻想」に翻訳したのは、文革期の語彙選択の傾向にも沿ったと考えられる。原文テクストにある「言葉よりも銃で」の「銃」は、「枪杆子【鉄砲】」に訳された。1927年8月7日に「八七会議」で提出された「枪杆子里面出政权【鉄砲から政権が生まれる】」[539]という毛沢東思想から由来する[540]と考えられる。「枪杆子【鉄砲】」の対義語は「笔杆子【筆】」である。文革期において、「枪杆子，笔杆子，夺取政权靠这两杆子，巩固政权也靠这两杆子【鉄砲と筆、政権を奪うには、この二つの棒に頼る。政権を強固にするのも、この二つの棒に頼る】」[541]と頻繁に論じられており、すなわち、政権を奪うには、「武装闘争」と「世論誘導」を結びつけるべきだということが唱えられた。文革前後で「枪杆子【鉄砲】」[542]と「笔杆子【筆】」[543]が文学作品や評論などにおいて常用されていた。その他、前述したように、小林多喜二の作品『不在地主』と『蟹工船』の原作テクストにある「謀叛」と

539　その翻訳について、川添登、犬丸義一『中国の文化大革命：その根源と矛盾』(青木書店、1968年1月)156-157頁を参照した。

540　安徽師範大学歴史系《社会発展史》編写組『社会发展史』(安徽人民出版社、1976年4月)118頁。

541　「用革命的舆论粉碎反革命的舆论」、1969年5月27日『人民日报』。

542　駐沪空軍　衛東鷹「整个世界只有用枪杆子才可能改造——斥反“火药味”论」、湖南師範学院中文系編『把文艺战线的大革命进行到底』第1辑(出版社不明、1970年8月)233-243頁などがある。

543　農民　劉勇「我拿起了笔杆子」、華中師範学院中文系編『建设共产主义文学』第1辑(華中師範学院、1958年11月)204-110頁、上海市出版革命組編『充分发挥笔杆子的战斗作用』(新華書店、1970年7月)、陳永貴「握紧锄把子 管好笔杆子——肃清中国赫鲁晓夫反革命修正主义新闻路线的流毒」、湖南師範学院中文系編『把文艺战线的大革命进行到底』第1辑(出版社不明、1970年8月)369-376頁などがある。

「叛逆」が、翻訳テクストにおいて「造反」に翻訳されたように、『油断！』の原文の「反乱」も同じく「造反」という「文革言語」に翻訳された。

原作	訳文
SF小説(28頁)	科学幻想小说 【科学幻想小説】(28頁)
ある民族主義組織の指導者は“テーブルよりも戦場で、言葉よりも銃で”と、徹底抗戦を叫び続けていた。(144頁)	某民族主义组织领导人坚持主张抗战到底，说什么：“与其坐在谈判桌上，不如上战场；与其说空话，不如拿枪杆子。” 【ある民族主義組織の指導者は“テーブルよりも戦場で、言葉よりも鉄砲[544]で”と、徹底抗戦を叫び続けていた。】(162頁)
だが、この解決は、地元民の実力行使に対する屈服、という印象を与えずにはおかなかった。そしてそれが、より広範な「反乱」を呼ぶことになった。(220頁)	可是，这种解决方法，不能不给人们这样一种印象，即政府屈服于当地居民的实力。这就招致人们更加广泛地“造反”了。 【だが、この解決は、地元民の実力行使に対する屈服、という印象を与えずにはおかなかった。そしてそれが、より広範な「造反」を呼ぶことになった。】(248頁)

また、『油断！』の翻訳テクストにおいて、翻訳者が以下の中国に関わる部分を意訳したところも見られる。まず、原文の中の「うわさ」は、中国語の「谣传【デマ】」に翻訳された。言葉の意味から見れば、真実であるか否か判断できない「うわさ」の代わりに、虚偽の情報を表す「谣传【デマ】」を使うことにより、原文テクストの「うわさ」という言葉から生じる中国のネガティブなイメージを取り払うという翻訳者の意図が見られる。次に、原文テクストにある「とくにこの度の石油危機によって、日本

544　その翻訳は、毛沢東『文化大革命を語る』竹内実編訳(現代評論社、1974年12月)287頁を参照した。

人民が直面している窮状に対して、中国は深い同情をもって絶大な好意を示され……」は、「特に中国は、この度の石油危機によって、日本人民が直面している窮状に対して、深い同情をもって絶大な好意を示され……」に翻訳された。翻訳者は主語の「中国」を文頭に持っていくことによって、意味的には差がないものの、原文と比べて、訳文から日本の石油危機に対する「中国」の善意を強調していることが感じられる。

原作	訳文
また中国の潜水艦が紅海またはアラビア湾に入った、といううわさも流れた。（101頁）	还遥传中国潜艇进入红海或阿拉伯湾。 【また中国の潜水艦が紅海またはアラビア湾に入った、というデマも流れた。】（111頁）
「とくにこの度の石油危機によって、日本人民が直面している窮状に対して、中国は深い同情をもって絶大な好意を示され……」（205頁）	“特别是中国，对日本人民由于这次石油危机而面临的困境，深表同情。表示了极大的好意……” 【特に中国は、この度の石油危機によって、日本人民が直面している窮状に対して、深い同情をもって絶大な好意を示され……】（232頁）

また、以下のように簡潔で十分に練られた訳文も見られる。『油断！』の翻訳テクストにおいて、翻訳者は下記のように原文テクストを「短视政治」、「日后另议」、「图表并茂」、「名大才疏」、「囤积居奇」など中国語の成語や慣用句に翻訳した。また、訳者は原文テクストにある「強いが貧乏だ、と思われるほど嫌われることはない。金持ちだが弱いと思われるほど危険なことはない」を「讨厌莫过于强而穷，危险莫过于富而弱」に翻訳し、修辞的技巧の対句を適切に用いた。

原作	訳文
戦後三十年、日本の政治行政は、当面の身	战后三十年，日本的政治机关，向来只顾眼

近な問題のみを重要視する「身の回り政治」に終始してきた。(13頁)	前利益，搞“短视政治”。(11頁)
西松部長と寺木課長との議論は、結局「後日再検討」というお役所式の結論で終わったが、その時すでに、約束の七時を1時間も過ぎていたのだ。(14頁)	西松部长和寺木处长之间的争论，最后以“日后另议”这种官样文章宣告结束。这时，已经过了七点钟的幽会时间一个小时了。(12頁)
半紙二枚に、寺木の特徴ある細い文字が、いくつかの表とグラフとともに、びっしりと並んでいた。(18頁)	在两张纸上，密密麻麻地写着寺木特有的细长的笔迹，好几处图表并茂。(17頁)
学歴だけは立派で無能な「エリート」のなれの果てだろう、と小宮は想像した。(22頁)	小宫心想，这恐怕就是名大才疏的“尖子”的落魄下场吧。(21頁)
マイヤーは、ここで“強いが貧乏だ、と思われるほど嫌われることはない。金持ちだが弱いと思われるほど危険なことはない”という、アラブの諺を紹介し(45頁)	“麦亚”说到这儿，就介绍了一句阿拉伯谚语：“讨厌莫过于强而穷，危险莫过于富而弱。”(47頁)
政府としては、買い占め、売り惜しみを断固として抑えていく。(91頁)	从政府来说嘛，对于囤积居奇的行为，就要坚决予以取缔。(99頁)

4.6.3　公害問題に言及する作品

文革期に出版された外国文学の中で、日本の環境を主題とする作品は翻訳されていなかったが、翻訳作品の「出版説明」、「前言」、「编者按」などにおいて、公害問題に対する言及が度々見られる。

上記の通り、『朝やけの詩』の前言に「日本の農業と自然資源が絶えず破壊されつつある」という表現が見られる。さらに、『摘译』1974年第4期により掲載された、「青少年のメンタルヘルス」をテーマとする『不良少年』の前言において、編集者は「小说(中略)还触及了当前日本的一些社会问题，如(中略)公害等等【小説は(中略)公

害問題など現下の日本におけるいくつかの社会問題にも触れている】」[545]と述べている。『摘译』1975年第2期に掲載された八住利雄『ノストラダムスの大予言』をめぐる評論、聞闖欽「是谁走到尽头了？——评《诺斯德拉达缪斯的大预言》」の中では、「いくつかの資本主義国家で、公害が日一日と深刻になっているのは、腐朽没落した資本主義社会制度から生じたのである」[546]と論じられている。

1970年から、『人民日报』において、日本[547]を含め、資本主義国家の公害問題、汚染問題に関する記事が繰り返し掲載された。1972年2月22日『人民日报』において、「工業生産で生じる廃液、廃ガス、廃棄物を解決しがたいため、日本は世界で『公害』が最も深刻な国の１つとなった」[548]とあり、さらに1972年3月28日『人民日报』において、「『公害』は資本主義の不治の病である」[549]と論じられている。資本主義国家において、1960、1970年代はちょうど経済的に高速度発展の時期であり、特に工業生産の発展時期[550]である。それにより、環境の破壊を余儀なくされていた。中国もこの時

545　結城昌治『不良少年』薛毅訳、『摘译』1974年第4期(1974年4月)183頁。

546　聞闖欽「是谁走到尽头了？——评《诺斯德拉达缪斯的大预言》」、『摘译』1975年第2期(1975年2月)127頁。

547　日本の公害問題に関わる記事には、「“公害”祸及日本富士山」、1972年3月28日『人民日报』;「日本各地万余渔民集会和示威反对公害」、1973年6月26日『人民日报』;「强烈抗议垄断资本污染海水损害渔业生产 日本千叶和熊本两县渔民进行斗争」、1973年8月13日『人民日报』;「日本茨城县渔民示威反对污染湖水」、1973年8月27日『人民日报』;「日本公害日益严重 各地群众多次示威抗议垄断企业制造公害危害人民」、1973年12月28日『人民日报』などが見られる。

548　「垄断资本和反动政府加速军国主义化和追逐高额利润的恶果 日本“公害”严重难于解决 各地兴起保护自然资源、争取生存权利、反对垄断资本残害人民的斗争」、1972年2月22日『人民日报』。「日本“公害”问题严重」、吉林師範大学政治教育系編『政治经济学』(参考材料 上)(吉林師範大学政治教育系、1973年8月)228-230頁を参照した。

549　「“公害”是资本主义的不治之症」、1972年3月28日『人民日报』。「日本“公害”严重难以解决」、著者不明『国际知识』(湖北人民出版社、1972年4月)102-105頁、「日本“公害”严重难以解决」、人民出版社編『国际知识』第4輯(人民出版社、1972年8月)100-102頁などを参照した。

550　魏婷「1970年代中国共产党对国外环境污染问题的认识——以《人民日报》报道为例」(武漢大学修士学位論文、2017年5月)14-21頁を参照した。

期において、工業の推進や農業の現代などにより、環境意識が高まるとともに、外国への公害問題にも目を向けていた。しかし、翻訳作品の前言での公害への言及は、日本の農業政策と工業政策への批判のうちの一要素だと考えられる。

4.6.4　まとめ

本節は、『油断！』などの日本の文学作品を研究対象として、1960年代と1970年代の中国の石油政策に着目した上で、文革期において日本の石油危機、公害問題に関わる作品がどのように翻訳、解釈されているかについて考察した。

前節で述べた農業発展と比べ、「工業は大慶に学べ」運動の推進により、1960年から文革の終結までの石油産業の発展は比較的に順調に進んでいた。それと伴い、石油文学も登場した。日本の石油問題に関する作品において、油減の被害を予測する『油断！』は文革期に翻訳された。訳本の「前言」は中国の石油政策の優位性を暗示すると考えられる。さらに、『油断！』の海外依存の石油政策への批判には、社会主義建設の中で唱えられた「自力更生」の戦略とは、つながりがあるように見受けられる。また、翻訳作品の「前言」や評論などにおいて、日本の公害問題に対する言及がよく見られる。公害の深刻さを強調することにより、日本の農業と工業政策を批判する傾向がある。

第7節　科学幻想小説における終末論への批判——小松左京『日本沈没』、八住利雄『ノストラダムスの大予言』

1974年4月に、下記の「日本宣扬世界末日来临的小说畅销」をテーマにした日本の「文艺动态」を紹介する記事が『摘译』に掲載された。

> 小松左京著的《日本沉没》，占一九七三年日本畅销书的首位。这是一部描写一九七×年地壳变动而日本列岛沉没的科学幻想小说。此书出版前后适逢日本浅间山火山爆发、北海道发生地震，同时由于公害问题、自然环境遭到破

坏、能源危机等，世界末日论很是流行。因此这本书以出版立即就成了畅销书。一九七四年《日本沉没》降为第二位。五岛勉著的《诺斯特拉达姆的大预言》成为第一位畅销书。诺斯特拉达姆是十六世纪的一个法国医生。他预言人类的未来，说什么“一九九九年七月将从空中降下一个恐怖的大王”，即二十几年后，人类的末日即将来临。这两本宣扬世界末日来临的小说均能成为最畅销的书，说明资本主义社会的腐朽没落，已处于日薄西山的境地。

【小松左京の著した『日本沈没』が、一九七三年の年間ベストセラー一位となった。これは一九七×年、地殻変動による日本列島の沈没を描写した科学幻想小説である。この書物の出版前後、折しも浅間山が噴火し、北海道で地震が発生、それと同時に公害問題、自然環境破壊、エネルギー危機などにより、終末論がかなり流行っていた。そのため、この作品が出版されると、瞬く間にベストセラーとなった。一九七四年『日本沈没』が二位に順位を落とし、五島勉の著した『ノストラダムスの大予言』が年間ベストセラー一位となった。ノストラダムスは十六世紀のフランスの医師で、彼は人類の未来を予言し、「一九九九の年、七月／空から恐怖の大王が降って来る」、すなわち二十数年後、人類の終末が訪れると言った。世界の終わりの訪れを宣伝する小説が、ベストセラーになりうるということは、資本主義社会が腐敗、没落し、瀕死の境地に陥ったことを意味している。】[551]

翌年2月、八住利雄『ノストラダムスの大予言』（安可訳）[552]が『摘译』1975年第2期に掲載され、４ヵ月後、小松左京『日本沈没』（李徳純訳）[553]も単行本として人民文学出版社に出版された。文革期において、ほぼすべての外国文学は政治イデオロギーによって翻訳活動の編集者に選択された。文革の始まった1966年から、終結の1976年の１０年間に翻訳された、現代日本文学の作品の数はあまり多くはないが、その中でも、

551 「日本宣扬世界末日来临的小说畅销」、『摘译』1974年第4期（1974年4月）188頁。

552 脚本：八住利雄、監督：舛田利雄『诺斯德拉达缪斯的大预言』安可訳、『摘译』1975年第2期（1975年2月）130-209頁。原作について、脚本：八住利雄『ノストラダムスの大予言』、『キネマ旬報』1974年8月上旬号（1974年8月）50-75頁を参照した。

553 小松左京『日本沉没』李徳純訳（人民文学出版社、1975年6月）。原作について、小松左京『日本沈没』（上）、『日本沈没』（下）（光文社、1973年3月）を参照した。

『日本沈没』、『ノストラダムスの大予言』などのSF作品が何ゆえ翻訳対象として注目されたのかは、1970年代前半、日本社会で話題を呼んだベストセラーであることも重要な一因であるが、「科学幻想作品」として、２つの作品が中央政府の注目を集めたという現象も、またその一因だと言える。本節は、『日本沈没』、『ノストラダムスの大予言』という２作を取り上げ、「科学幻想作品」と作品における終末論の思想を検討し、原作と翻訳の「出版说明」と、テクストの分析を行うことにより、文革期における具体的な翻訳ストラテジーを考察する。

4.7.1　中国における科学幻想小説

4.7.1.1　中国における「Science Fiction」の発展

２０世紀初頭から、中国の文壇において西洋の思想と文学を翻訳、紹介する時代が始まり、その中で、西欧の科学に関わる作品も翻訳されるようになった。中国で最初に翻訳されたSF小説は、1900年に世文社が出版したヴェルヌ『八十日間世界一周』(Jules Verne, *Le Tour du monde en quatre-vingts jours*, 1872)(逸儒翻訳・秀玉筆録)[554]である。３年後の、ヴェルヌ『月世界旅行』(Jules Verne, *De la Terre à la Lune*, 1865)[555]も魯迅により訳された。魯迅は、冒頭の「弁言」において「科学小説」[556]という言葉を用いた。魯迅、梁啓超、老舎などの作品により、英語圏では「Science Story」、「Scientific Novel」、「Scientific Fantasia」、「Scientific Romance」などと呼ばれた小説群[557]の訳語として、「科学小説」は一旦定着した[558]。「Science

554　ジュール・ヴェルヌ『八十日环游记』逸儒翻訳、秀玉筆録(世文社、1900年)。作品名の翻訳について、ジュール・ヴェルヌ『八十日間世界一周』田辺貞之助訳(東京創元社、1976年3月)を参考にした。

555　ジュール・ヴェルヌ『月界旅行』魯迅訳(進化社、1903年)。作品名の翻訳について、ジュール・ヴェルヌ『月世界旅行』高山宏訳(ちくま文庫、1999年8月)を参考にした。

556　原文は以下の通り。「导中国人群以行进，必自科学小说始。」、魯迅「弁言」、ジュール・ヴェルヌ『月界旅行』魯迅訳(進化社、1903年)。

557　張治「晚清科学小说刍议――对文艺作品及其思想背景与知识视野的考察」、『科学文化评论』第6巻第5期(2009年)69–96頁を参考にした。

558　王雪明、劉奕「中国百年科幻小说译介：回顾与展望」、『中国翻译』2015年第6期

Fiction」が世界の文壇に登場したのは1926年で、雑誌編集者のガーンズバックが、世界初のSF専門誌『アメージング・ストーリーズ』を創刊し、小説における「科学性」を強調するため、ヴェルヌやウェルズなどの科学的な「Romance」や「Novel」を典型として「Science Fiction」という用語を打ち出し、１つの文学のジャンルに発展させていた[559]。

「科学小説」という呼称は「Science Fiction」の訳語として、1900年代から『アメージング・ストーリーズ』の創刊以降も引き続き使われていた。「科学幻想小説」へと正式に変更されたのは、中華人民共和国が成立した頃のことである。「科学幻想小説」が最初に使われたのは、1949年8月から少年向けの教育雑誌『开明少年』[560]に連載されたソ連の小説、B・薩巴林「科学幻想小说：工程师的失踪」(B・Саларин, *Исчезновение Инженера Бобоа*, 1949)(符其珣訳)[561]である。先述したように、1949年、毛沢東が打ち出した「向ソ一辺倒」の方針に従い、ソ連の文学理論が受容され始めた。ロシア語における「SF小説」の訳名から影響を受け[562]、「科学幻想小説」が次第に広まって認められるようになり、1949年以前の「科学小説」の代わりとして使用された。「Science Fiction」の訳語に関して頻りに議論されている[563]が、現在では、

(2015年)28-33頁を参考にした。

559　上原かおり「近現代中国におけるSFおよび科学普及読物の研究：1930年代の『科学小説』『科学小品文』を中心に」(首都大学東京博士学位論文、2017年11月)。

560　『开明少年』は1945年7月16日に重慶で葉聖陶が主編となって創刊された雑誌である。1946年4月から出版活動の拠点が重慶から上海に移したが、1951年12月の76期をもって発行停止へと追いこまれた。青少年向けの読み物として内容が平易である。刊行物の名称に「読者諸君は開明なる少年になれ」という編集者たちの青少年に対する希望が含まれる。周佳栄『開明書店與五四新文化』(中華書局(香港)出版有限公司、2009年4月)84-85頁を参照した。

561　B・薩巴林「科学幻想小说：工程师的失踪」符其珣訳、『开明少年』1949年第49期-第53期(1949年)。

562　「Science Fiction」の訳語として、中国成立以降に用いられた「科学幻想小説」はロシア語に由来すると一般的に認識されている。葉永烈「论科学幻想小说」、黄伊編『论科学幻想小说』(科学普及出版社、1981年5月)49頁、万革非「《中国科幻小说史》导言」、『云梦学刊』1993年第4期(1993年12月)52-55頁などを参照した。

563　中国の学術界では、「科学幻想小説」の訳語により「Science Fiction」の小説としての範囲が限られているため、「Science Fiction」を「科学小説」に翻訳すべきである

「科学幻想小説」を略称した「科幻小説」が用いられている。

２０世紀初頭、SF小説が中国に導入された当初から、大衆の科学知識を高めることを目的として書かれた啓蒙書の「科学小説」と、通俗的で娯楽性に重きを置いている「科学小説」に分けられた[564]。しかし、1910年代末、中国国内では内憂外患が迫り、国家は滅亡の危機に瀕するという際、知識人階級は五四運動において科学を救国の手段とし、科学大衆化運動を呼びかけ、それにより、単純に「娯楽」を目的とした「科学小説」は次第に少なくなった。1949年中国の建国以降、国家の現代化と科学技術の現代化が求められ、中国で最初の科学技術中長期計画となる「科学技術発展遠景計画綱要(1956年～1967年)」が策定され[565]、1950年代の半ばから、中央政府の「科学への進軍」という呼びかけを元に、中国の科学事業は重要な発展を遂げた。科学技術の進展に即応し、科学研究者の養成を確保するため、科学普及の教育が必要とされた。それに伴い、科学幻想小説における啓蒙思想が、以前より一層意識され、「娯楽性」に重きを置いている作品もほぼ跡を絶つに至った[566]。文革期の中国における科学幻想小説も、その流れで知識啓蒙という方向性が決定づけられたと言える。

4.7.1.2　「科学幻想小説」とは

「科学幻想小説」は以下のように定義されていた。

という見方が存在している。新中国が成立した以降、「科学小説」に戻すと最初に提案したのは汪志である。汪志「科学小说的时代精神――看科教电影的启示」、汪志『论科学小说』(中国広播電視出版社、1989年12月)64-65頁、葉永烈「科学幻想小说的特点」、葉永烈『论科学文艺』(科学普及出版社、1980年6月)92-94頁、黄禄善「是“科幻小说”，还是“科学小说”？」、『上海科技翻译』2003年第4期(2003年)42-44頁、郭建中「关于SCIENCE FICTION的翻译问题」、『上海科技翻译』2004年第2期(2004年)52頁を参考にした。

564　王徳威『被压抑的现代性：晚清小说新论』(北京大学出版社、2005年5月)292頁を参考にした。

565　国立研究開発法人科学技術振興機構　中国総合研究・さくらサイエンスセンター編集『中国の科学技術の政策変遷と発展経緯』(2019年)7-8頁。

566　銭暁宇『现代中国大文学史论』(第3巻 幻想文化与当代中国的文学形象)李怡主編(羊城晚報出版社、2016年5月)17-18頁、詹玲「启蒙视野下的中国科幻小说发展流变」、『学术月刊』2019年第4期(2019年7月)128-138頁を参考にした。

1960年に出版された中華書局辞海編輯所修訂『辞海试行本』によると、科学幻想小説は、「描述科学上最新成就和人类利用这些成就可能創造的某些奇迹的小說【科学上の最新成果と、人類がこちらの成果を利用して創造した何かの奇跡を描写した小説】」であり、優れた科学幻想小説は、「把科学和文艺很好地結合起来，能帮助青少年讀者智力的发展，培养他们对科学和文学的兴趣和爱好【科学と文芸を巧みに結合し、青少年の知能向上に役立ち、彼らの科学と文学に対する趣味を育てることができる】」[567]。

文革期において、科学幻想小説に対する認識は、1973年3月に出版された、四川師範学院中文系文芸理論教研組編『文艺名词解释』に伺うことができる。「科学幻想小説」は「依据科学上的某些新发现、新成就以及在这基础上可能达到的预见，用幻想方式描述人类利用这些发现以完成某种奇迹的小说【科学上の新発見と新成果、およびその基礎の上に、達成可能な予見に基づき、人類が科学的発見を利用し、ある種の奇跡を起こすことについて、幻想の手法で描写した小説】」であり、「プロレタリア科学幻想小説」は、「能很好地把科学和艺术结合起来，把知识教育和政治教育结合起来。它用辩证唯物主义和历史唯物主义的世界观教育青少年读者，培养他们对科学和文学的爱好，使他们在德育、智育两方面都得到发展【科学と文芸を巧みに結合し、知識教育と政治教育を巧みに結合することができる。弁証法的唯物論と史的唯物論の世界観を用いて、青少年の読者を教育し、彼らの科学と文学に対する趣味を育て、徳育と知育という二つの面で発展させる】」[568]と意義づけられていた。

2015年に出版された、夏征農・陳至立主編『大辞海』では、科学幻想小説は「小说类别之一。用幻想的形式，表现人类在未来世界的物质精神文化生活和科学技术远景，其内容交织着科学事实和预见、想象。通常讲“科学”、“幻想”和“小说”视为其三要素。是随着近代科学技术的蓬勃发展而产生的一种文学样式【小説のカテゴリに属する。幻想の形式を用いて、未来世界における人類の物質上、精神上の文化生活、および科学技術の未来像を表現する。その内容に、科学事実と予見、想像が入り交じっており、一般的に「科学」、「幻想」、「小説」、その三要素とみなす。近代科学技術

567　中華書局辞海編輯所修訂『辞海试行本』(第10分冊　文学・語言文学)(中華書局辞海編輯所、1961年10月)11頁。

568　「科学幻想小说」、四川師範学院中文系文芸理論教研組編『文艺名词解释』(出版社不明、1973年3月)296頁。

がすさまじい勢いで発展するにつれ生まれた文学の一種である】」[569]と説明された。

4.7.1.3　文革期における科学幻想小説に関する定義

文革期における科学幻想小説に関する定義は、1960年の『辞海』の内容を踏襲しながらも、「必要」となった新たなものを加えた傾向が見られる。『文艺名词解释』の中では、科学幻想小説は「科学がもたらした奇跡」を描写する小説であるという概念を受け継いでいた。科学に対する解釈について、両者の間に大きな違いはなく、空想的な科学より、「科学上の新成果」と、それに基づいた「予見」、即ち、開発された革新的な既存の科学技術と、開発見込みのある潜在的な科学技術に注目した。この両者を比べ、2015年の『大辞海』は、科学幻想小説の内容に「科学事実と予見、想像が入り交じっている」と述べ、科学幻想小説に科学上の現実性以外に、それを越える想像性も求めていると示唆した。

また、文革期の科学幻想小説における「幻想」の部分は「奇跡」に相当した。そこにある「奇跡」は空想的な科学がもたらした不思議な現象ではなく、「人類がこちらの発見を利用して完成した」ものを指す。「幻想」は人間の力によって作り上げられた「奇跡」であり、「奇跡」という言葉から積極的な結果が暗示された。その一方で、2015年の『大辞海』は、科学幻想小説の終わり方に対して、明確な褒貶の色彩を持つべきであると言える。

1960年の『辞海』と『文艺名词解释』が想定している、科学幻想小説の読者層は、「青少年」であり、前述の通り、1949年以降の科学幻想小説は、娯楽作品より、大衆の科学知識を啓蒙するための手段として受容されていた。しかし、文革期の科学幻想小説は、清末の科学小説観の伝統を引き継ぎながら、対象読者の範囲を「民衆」から「青少年」へと縮小した。科学幻想小説が青少年の教育という面に重きを置き、「爱科学、学科学、向往科学【科学を好きになり、科学を学び、科学に憧れる】」[570]ため

569　夏征農、陳至立主編『大辞海』(第17巻 中国文学巻)(上海辞書出版社、2015年12月)25-26頁。

570　編者「编后记」、中国青年出版社編『科学幻想小说选』(中国青年出版社、1980年6月)407頁。

の作品として、児童文学の支流の１つになった[571]。しかし、文革が終結すると、科幻小説が科学普及の教育という枠から切り離され、文学の分野で再検討されるようになった。1978年に北京で開かれた「全国科学大会」において、鄧小平はマルクスの「科学技術は生産力である」を用いスローガンとして打ち出し、さらに、1979年に「科教興国」を中国の基本国策とした[572]。その背景を元に、中国の文壇において、科学幻想小説の翻訳と創作活動が日増しに活況を呈し、正式的な文学ジャンルへ発展していた[573]。それにより、科学幻想小説の読者層が青少年から拡大していた。

優れた科学幻想小説の判断基準について、1960年の『辞海』と1973年の『文艺名词解释』の間で差異も生じていると考えられる。文革期において、優れた科学幻想小説は、即ちプロレタリア科学幻想小説であるという図式を機械的に当てはめるという傾向が見られる。科学幻想小説の創作は、イデオロギーの影響を受け、単なる「知識教育」を目的としただけではなく、「政治教育」と「徳育」の必要性が強調され、さらにマルクス・レーニン主義的手法も提示された。その判断基準により、認められた科学幻想小説の幅は、実際極めて限られている。文革期における、外国の科学教育映画は「帝国主义和社会帝国主义的科教片，是散布唯心主义世界观、宣传资产阶级物质文明、对殖民地半殖民地人民进行奴化教育的反动工具【帝国主義と社会帝国主義の唯心主義の世界観を振りまき、ブルジョア階級の物質文明を宣伝し、植民地と半植民地の人民に対し奴隷化教育を行うための反動手段】」[574]と見做されており、ヴェルヌの作品なども「糟粕」、「毒草」として批判された[575]。それにより、通俗科学の普及活動

571　王泉根「论外国儿童文学对中国现代儿童文学的影响」、『浙江师范学院学报』1983年第3期(1983年)37-46頁、李雯「中西科幻小说界定之比较」、『成都教育学院学报』2002年第8期(2002年8月)8-10頁を参考にした。

572　万革非「《中国科幻小说史》导言」、『云梦学刊』1993年第4期(1993年12月)52-55頁、楊華麗「“科学小说”：不容忽略的历史存在」、『绵阳师范学院学报』第36第6期(2017年6月)20-24頁を参照した。

573　邱江揮「试论中国科幻小说的发展」、『安徽大学学报』(哲学社会科学版)1982年第2期(1982年)81-86頁。

574　「科学教育影片」、四川師範学院中文系文芸理論教研組編『文艺名词解释』(四川師範学院中文系文芸理論教研組、1973年3月)325-326頁。

575　公盾「为儒勒・凡尔纳的科学幻想小说恢复名誉」、『出版工作』1979年第3期(1979年3

もほぼ停滞した[576]。また、科学技術の重要性を語った科幻小説の裏側では、科学発展に極めて重要な役割を担う科学者、すなわち知識分子と工農兵との対立が浮上していた[577]。文革期において、科学幻想小説は、科学普及の機能を要求されながら、「知識分子」の資本主義的レッテルが貼られ、批判されるという矛盾を内包していたと考えられる。

4.7.2　『日本沈没』と映画シナリオ『ノストラダムスの大予言』

4.7.2.1　あらすじ

小松左京の著した『日本沈没』の原作は、1973年に光文社より出版され、同年に映画化され、興行収入の新記録を立てた。さらに1974年、第２７回日本推理作家協会賞と第５回星雲賞日本長編部門を受賞し、４００万冊のベストセラーとなり、社会的現象になった。そして、『日本沈没』に続く第２弾として、東宝映画の製作した『ノストラダムスの大予言』の公開と共に、そのシナリオが『キネマ旬報』1974年8月上旬号に掲載された。

まず、『日本沈没』の物語について簡単に紹介する。地球物理学者である田所博士は、地震の観測データから日本列島の地殻における異変に気づき、深海調査艇の操艇者である小野寺らと共に海底調査に向かう。彼らが小笠原諸島沖の海溝で、奇妙な亀裂と乱泥流を発見し、近いうち大規模な地殻変動により、日本列島全てが海底に沈没するという結論に達する。最初は信じなかった政府も極秘に地球物理観測と、日本人を海外へ脱出させる「D計画」を進め、避難民を海外に受け入れてもらえるよう要請を開始するが、事態の異変が田所の予想を上回る早さで進み、各地で「日本沈没」の前兆だった巨大地震や火山噴火が連発し、人々は恐怖の中で必死に生き残ろうとする。実際には変動が始まり、「日本列島が沈没する」という事実が、半信半疑であった国

月）34-37頁、亢泰「世界科幻小说大会」、『读书』1980年第3期（1980年2月）130-131頁、盧敦基「可读的科幻小说」、『读书』1983年第6期（1983年4月）57頁。

406　宋永毅主編『文革五十年：毛澤東遺產和當代中國』（上巻）（明鏡出版社、2016年12月）74頁を参考にした。

577　王峰「科幻小说何须在意“文学性”」、『探索与争鸣』2016年第9期（2016年9月）124-127頁を参考にした。

際社会に受け入れられはじめ、日本国民を救援する手が差しのべられるようになる。一方、敢えて国内に留まり、日本列島と運命を共にする道を選択する者もいる。度重なる火山噴火や地震の末、日本列島は東西に引き裂かれながら海中に没し、完全に消滅し、日本人は世界中に散らばり「流浪の民」となる。

次は『ノストラダムスの大予言』の梗概である。西山環境研究所の所長である西山良玄は、警察の圧力を受けながら、公害調査を行い続け、ノストラダムスの予言を思い出す。良玄も娘のまり子とその婚約者の明に対し、「人間が安心して子供を産める状態じゃない」と心配する。その後、奇型児や変異した原住民、異常気象の出現など、奇怪な現象が日本各地に起こる。世界各地の穀倉地帯は洪水、異常高温と旱魃から農作物は枯れ果て、食料をめぐって大暴動が発生する。人々は逃げる場もなく、街の中はシンナーを吸い、麻薬をあおり、世を儚む若者で充満する。その頃、良玄の妻伸枝も公害が原因で死亡する。その一方、まり子は明との間に子供を授かる。「第十巻の七十二……一九九九の年、七月／空から恐怖の大王が降って来る……」(74頁)とノストラダムスが「諸世紀」の中で描いた予言のように、最終的には火山、原子力発電所、工場群などが爆発し、都市の建物が崩壊し、人々を埋めてゆく。世界各地からミサイルが発射され、核戦争が起こり、東京も廃墟と化す。人間の生存自体が壊滅の急坂から転がり落ちることを制止しなければならないという良玄の国会での熱弁を聞いて、首相は国民に対して、現実を正しく認識し、物質文明の欲望に終止符を打つべきであり、勇気を出して「人間生存のための新しき闘いに出発」(75頁)することを決断し演説する。

4.7.2.2　1970年代前半の日本における終末論の流行

『日本沈没』がベストセラーとなった理由について、井上ひさしは「円の変動相場制への移行」、「石油危機」が高度成長の終わりを告げており、「水銀、PCB(ポリ塩化ビフェニール)汚染魚」が「人間がつくりだした物質が、食物連鎖という自然の回路を巡って、結局人体に蓄積される」ことを人々に教えた[578]と述べている。『ノストラダムスの大予言』に対して、田窪勇人は、日本におけるノストラダムス受容史を1999

578　井上ひさし「ベストセラーの戦後史-30-小松左京『日本沈没』」、『文芸春秋』第73巻第6号(1995年5月)362-367頁。

年の時点までに出版された関連書数の変化から前期、第１期、第２期、第３期の４つの期間に分類し、前期のノストラダムス関連書では学術的要素が濃いものが存在しているが、ノストラダムス研究の主流と認められ、さらに社会現象となったのは、やはり五島勉の一九九九年人類滅亡説であると指摘した。また五島が『大予言』を執筆していた当時の社会の背景について、1970年代におけるオイルショックや中東戦争などは日本人にパニックを引き起こし、社会不安の原因となったため、当時の公害問題やオカルト・超能力ブームも流行に拍車をかけた[579]と説明した。

『日本沈没』の結末と、『ノストラダムスの大予言』の結末は類似している。両書では人々の「救いの可能性」に対し、「勇気」という曖昧な言葉しか使われていなかった。読者に具体的な対策を提示しておらず、「文明批判」という道具を用い、人類滅亡の「救済なき終末論」を一方的に訴え続けている。『日本沈没』の終末論の影響は無視できない。

鳥羽耕史[580]によると、1973年11月に祥伝社より出版された五島勉の著作『ノストラダムスの大予言――迫りくる1999年7の月人類滅亡の日』[581]が１００万部のベストセラーを記録しており、『日本沈没』も一種の終末論として受容された面がある。高度成長期の終わりが文化の停滞を意味していないということの背景[582]には、1973年6月から、筑摩書房より『終末から』というタイトルの雑誌が創刊されたということがあった。また、キリスト教の国ではない日本において、終末論がブームになったのは、マスコミの影響も大きいと思われる。『日本沈没』、『ノストラダムスの大予言』の映画がきっかけとなり、テレビ番組、新聞雑誌も終末論という話題を取り上げ始め、「恐怖」

579　田窪勇人「日本におけるノストラダムス受容史」、『ユリイカ』（特集　終末論）1999年2月号（1999年2月）143-153頁。

580　鳥羽耕史「小松左京『日本沈没』とその波紋：高度成長の終焉から『J回帰』まで」、『日本文学』（特集　《成長》の中の戦後日本文学再検討）第59巻第11号（2010年）14-26頁。

581　五島勉『ノストラダムスの大予言――迫りくる1999年7の月人類滅亡の日』（祥伝社、1973年11月）。

582　鳥羽耕史「小松左京『日本沈没』とその波紋：高度成長の終焉から『J回帰』まで」、『日本文学』（特集　《成長》の中の戦後日本文学再検討）第59巻第11号（2010年）14-26頁。

を娯楽にするという傾向が見られた[583]。1970年代から1999年に至るまで、1999年終末論は何度かブームが起こったが、1999という年を乗り越えて、又それからちょうど２０年過ぎた今となっては、その終末思想のブームはほぼ終焉してしまったと言える。

4.7.2.3　文革期における終末論への批判

前述のように、1949年に打ち出された「向ソ一辺倒」のスローガンをもとに、中央政府は、ソ連の文学理論を中国に植え付けた。O・胡捷「论苏联科学幻想读物」（作家名原文不明、作品名原文不明、王汶訳）[584]という評論によると、1950年代のソ連において、共産主義の建設を目的とし、科学の手段で社会問題の解決、生活改善、生産力向上、エネルギー開発、すなわち「新的發現、發明和勘察【新たな発明、発見、開発】」[585]を描写した科学幻想小説が提唱された。「未来」という科学幻想小説に欠かせない要素に対し、1976年以前の中国の科幻小説観も、ソ連の楽観主義的な色彩が強い思想[586]を継承し、科学による理想社会の実現を志向していた。中央政府の「頽廃、怠惰、終末論および滅亡の歌」[587]への批判の背後には、「社会主義の方向に沿って前進する

583　村崎百郎「終末論という“電波”」、『ユリイカ』（特集　終末論）1999年2月号（1999年2月）154-159頁を参考にした。

584　O・胡捷「论苏联科学幻想读物」王汶訳、O・胡捷等『论苏联科学幻想读物』（中国青年出版社、1956年6月）1-34頁。

585　O・胡捷「论苏联科学幻想读物」王汶訳、O・胡捷等『论苏联科学幻想读物』（中国青年出版社、1956年6月）17頁。

586　1960年代には入ってから、ソ連の科学幻想小説はある程度イデオロギーの束縛から脱却し、資本主義をいちずに批判しなくなり、欧米の科幻小説の創作手法を参考にした。それにより、ソ連の科学幻想小説も伝統的な楽観主義の性質から抜け出し、公害問題を主題とする警世の著作なども出版され、多様化の傾向が見られる。しかし、1950年代後半から、中国とソ連との関係が前期の「向ソ一辺倒」から冷却期へと変化しているため、ソ連の科幻小説観の転換が中国に影響を与えていなかったと思われる。常言「苏联的科学幻想小说」、『外国文学研究』1981年第1期（1981年）137-138頁、王雪明、劉奕「中国百年科幻小说译介：回顾与展望」、『中国翻译』2015年第6期（2015年）28-33頁を参考にした。

587　「日本出版访华诗集《火红的海》」、『摘译』1974年第2期（1974年2月）155頁。

と、素晴らしい未来が実現できる」[588]という意味も含まれていた。この流れに沿って、当然の帰結として、悲劇で終わる科学幻想小説は、一種の「杞人の憂え」に過ぎず、批判の的となった。

映画『ノストラダムスの大予言』の原作は、先に述べた五島勉の著書であり、フランスの占星学者であり、医者であるノストラダムスの著した『予言集』[589]を主題として取り上げたものである。『予言集』は、1555年に全１２巻が出版され、各巻百篇ずつの四行詩が収められており、ノストラダムスもこの占星術に基づく長大な予言詩集により名声を博した。『予言集』を取り上げた目的について、五島は「あなたにこれから読んでいただくのは、この『諸世紀』を中心とする彼の予言群の紹介と追求だ。ほかにもいくつか、関連する事項をあつかうかもしれないが、主テーマはあくまでノストラダムス予言に絞って、ごいっしょに考えていきたい」[590]と説明した。

しかし、ノストラダムの『予言集』は、詩の内容が極めて抽象的で曖昧なため、様々な解釈が可能である[591]。実際のところ、五島の著作は、ノストラダムスの予言詩を読者に紹介するというより、創作に近いものであると考えられる。五島は「彼のこれらの予言が、ほんとうにそうなるかどうかは、私にはわからない。しかし、いままでのところ、その内容は完璧と言っていいほど的中している」[592]とノストラダムスの

588　武田雅哉、林久之『中国科学幻想文学史』（下巻）李重民訳（浙江大学出版社、2017年9月）56頁。

589　ノストラダムスの予言詩の題名に関して、五島勉は『ノストラダムスの大予言――迫りくる1999年7の月人類滅亡の日』（祥伝社、1973年11月）14頁で「題名をLes Siecleという。『諸世紀』という意味だが、古語では『百の集合』という意味にもなる」と述べている。日本において「諸世紀」という題名は五島の著作により定着し、辞書や事典などまで広く用いられているが、現在では誤訳であると指摘された。高田勇、伊藤進編訳『ノストラダムス予言集』（岩波書店、1999年）を参照した。

590　五島勉『ノストラダムスの大予言――迫りくる1999年7の月人類滅亡の日』（祥伝社、1973年11月）15頁。

591　志水一夫『大予言の嘘――占いからノストラダムスまでその手口と内幕』（データハウス、1997年11月）を参考にした。

592　五島勉『ノストラダムスの大予言――迫りくる1999年7の月人類滅亡の日』（祥伝社、1973年11月）16頁。

予言詩が、いかに正確であるかを暗示した。これを前提として、ノストラダムスの詩をある程度歪曲して、実証的な資料ではなく、自分の解釈に都合の良い資料、及び世界史における出来事を利用し、予言を的中させるため、様々な憶測を加え創作を行うということは、科学的且つ客観的とは言えない[593]。五島は確かに作品において、地球の滅亡を汚染魚、車社会の鉛毒、地球冷却化などの公害問題に結びつけることを試みたが、人々の「救いの可能性」に対して、具体的な対策を提示しておらず、「文明批判」という道具を用い、人類滅亡の終末思想を一方的に訴え続けてきた。空想主義の限界を超えないと見なされた『日本沈没』、『ノストラダムスの大予言』などの作品は、文革期における既存の科学技術の実用性を強調した科幻小説観の視点から、その現実的妥当性が問われた。

終末論に関する議論が盛んに行われるということは、社会が不安定だと見なされる[594]。1960年代に入って、先進諸国の飛躍的な経済成長に伴い、人口過多、大気汚染、エネルギー危機など、世界中の人々が直面しなければならない問題となっていた。科学幻想小説も「終末論」という道具を用い、誇張表現の手法で未来への憂慮を示す。小説は、人々が先の見えない不確定な未来に苦悶し、退廃的な精神状態を、暴力問題、麻薬問題へと具現化することにより、不安定な社会の様相を呈す。終末論を受容する過程において、文学作品に現れた社会変動が、現実世界でも引き継がれていく傾向が見られる。中央政府は、科学幻想小説における、終末論の思想という道具を用いて、資本主義社会の「堕落」を中国の読者に示唆した。

593　五島勉の『ノストラダムスの大予言』研究に対して、「はっきりしているのは、第一に五島はノストラダムスの紹介者でもなければ、予言の研究家でもなく、そうしたものを手掛かりとして現代と未来をながめようとする、一種の文明批判を試みているということなのだ」と高く評価する、許光俊などの研究者もあるが、その評価は確かに五島勉の研究した『ノストラダムスの大予言』に言い当てているのかについて、再検討の余地があると考えられる。許光俊「五島勉、『ノストラダムスの大予言』への道」、許光俊編著『99年の滅亡を夢見て』(青弓社、1999年7月)145頁。

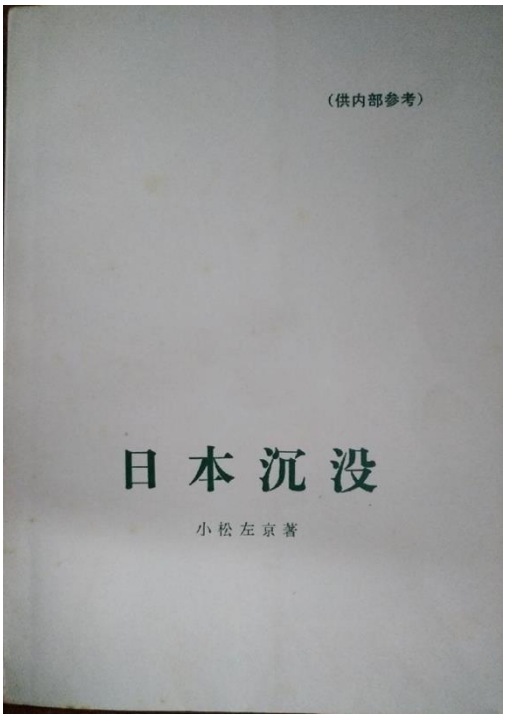
594　著者不明「科幻小说的不良倾向」、『文艺理论研究』1983年第4期(1983年)69頁、杜継文「科学与预言」、『中国宗教』1999年第1期(1999年)10-11頁、張治「晚清科学小说刍议——对文艺作品及其思想背景与知识视野的考察」、『科学文化评论』第6巻第5期(2009年)69-96頁、田俊武「“冷战”影响下的西方文学及其宗教意识」、『西安外国语大学学报』第18巻第3期(2010年9月)50-53頁を参考にした。

4.7.3　翻訳作品『日本沈没』と『諾斯德拉達謬斯的大預言』

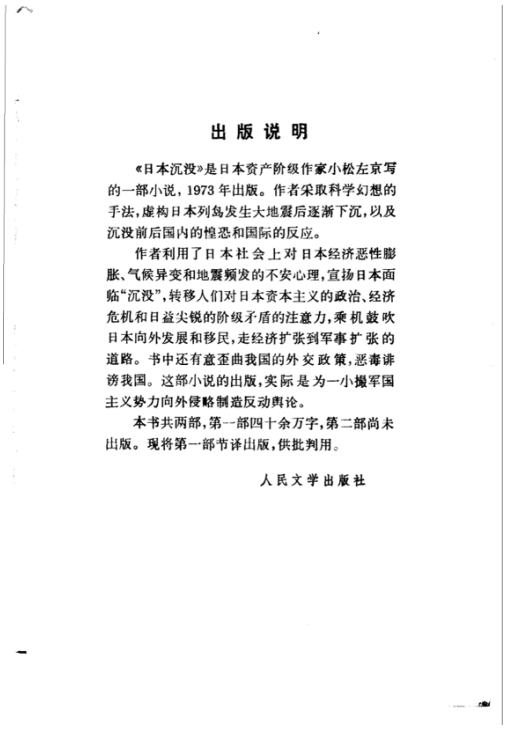
4.7.3.1　訳本の「出版说明」

先述したように、SF映画が人々の目に留まるきっかけとして、『日本沈没』が1973年年末に上映され、２年後の1975年6月に、原作の小説が、中国の人民文学出版社より単行本として出版された。同年、八住利雄『ノストラダムスの大予言』も『摘译』1975年第2期に掲載された。

『日本沈没』の表紙



『日本沈没』の「出版说明」



出版说明

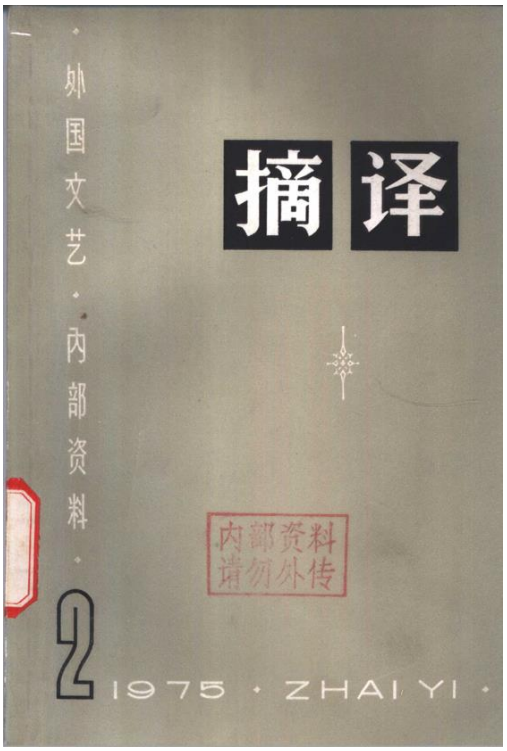
《日本沉没》是日本资产阶级作家小松左京写的一部小说，1973年出版。作者采取科学幻想的手法，虚构日本列岛发生大地震后逐渐下沉，以及沉没前后国内的惶恐和国际的反应。

作者利用了日本社会上对日本经济恶性膨胀、气候异变和地震频发的不安心理，宣扬日本面临“沉没”，转移人们对日本资本主义的政治、经济危机和日益尖锐的阶级矛盾的注意力，乘机鼓吹日本向外发展和移民，走经济扩张到军事扩张的道路。书中还有意歪曲我国的外交政策，恶毒诽谤我国。这部小说的出版，实际是为一小撮军国主义势力向外侵略制造反动舆论。

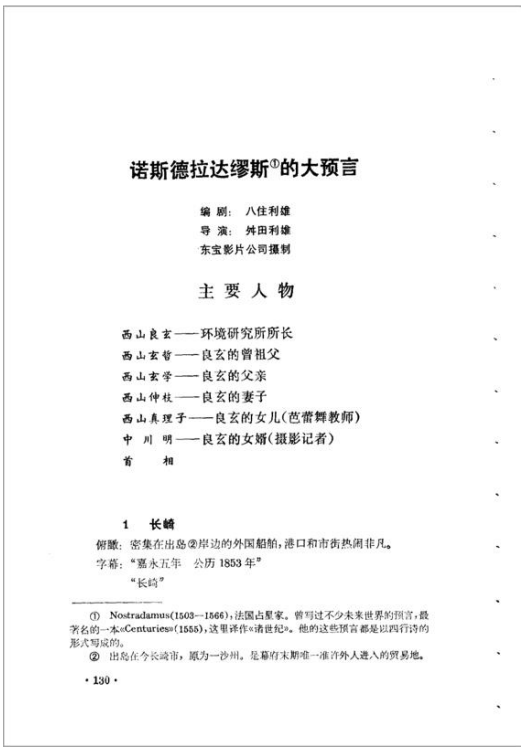
本书共两部，第一部四十余万字，第二部尚未出版。现将第一部节译出版，供批判用。

人民文学出版社

『摘译』1975年第2期の表紙



『ノストラダムスの大予言』の本文



诺斯德拉达缪斯①的大预言

编 剧： 八住利雄
导 演： 舛田利雄
东宝影片公司摄制

主 要 人 物

西山良玄——环境研究所所长
西山玄哲——良玄的曾祖父
西山玄学——良玄的父亲
西山仲枝——良玄的妻子
西山真理子——良玄的女儿(芭蕾舞教师)
中 川 明——良玄的女婿(摄影记者)
首 相

1 长崎

俯瞰：密集在出岛②岸边的外国船舶，港口和市街热闹非凡。
字幕："嘉永五年 公历 1853 年"
"长崎"

① Nostradamus(1503—1566)，法国占星家。曾写过不少未来世界的预言，最著名的一本《Centuries》(1555)，这里译作《诸世纪》。他的这些预言都是以四行诗的形式写成的。
② 出岛在今长崎市，原为一沙洲。是幕府末期唯一准许外人进入的贸易地。

· 130 ·

『日本沈没』が翻訳対象として選ばれた理由について、編集者は「出版说明」の中で、次のように述べている。

> 《日本沉没》是日本资产阶级作家小松左京写的一部小说，一九七三年出版。著者采取科学幻想的手法，虚构日本列岛发生大地震后逐渐下沉，以及沉没前后国内的惶恐和国际的反应。著者利用了日本社会上对日本经济恶性膨胀、气候变异和地震频发的不安心理，宣扬日本面临“沉没”，转移人们对日本资本主义的政治、经济危机和日益尖锐的阶级矛盾的注意力，乘机鼓吹日本向外发展和移民，走经济扩张到军事扩张道路。书中还有意歪曲我国的外交政策，恶意诽谤我国。这部小说的出版，实际是为一小撮军国主义势力向外侵略制造反动舆论。本书共两部，第一部四十余万字，第二部尚未出版。现将第一部节译出版，供批评用。
>
> 【『日本沈没』は日本ブルジョア作家の小松左京が書いた小説であり、一

九七三年に出版された。作者は科学幻想という手法を採用し、大地震が発生し、沈降しつつある日本列島と、沈没前後における国内の恐慌と国際の反応を想像によって作り上げている。小松は日本社会における日本経済の悪性インフレ、気候異変と地震頻発に対する不安心理を利用し、日本が「沈没」に瀕することを宣揚し、日本の資本主義の政治、経済危機と日増しに激化していく階級矛盾に対する人々の注意をそらし、機に乗じて日本の対外発展と移民、また経済拡張から軍事拡張への道を歩くべきだと鼓吹している。著書の中で我が国の外交政策を意図的に歪曲し、我が国をあくどく誹謗している。この小説は、実際には一握りの軍国主義勢力が対外侵略のため、世論を作るため、出版された。本書は、合計二部であり、第一部は四〇余万字で、第二部はまだ出版されていない。ここに、第一部を抄訳して出版し、批判の用に供する。】[595]

上記の「出版说明」から見ると、『日本沈没』の編集者は、読者の注意を「公害問題」そのものからそらし、「政治、経済危機と日増しに激化していく階級矛盾」と、「軍国主義勢力」、すなわち「日本の資本主義」制度に対する批判へと向けさせようとしたと考えられる。

また、編集者が、シナリオ『ノストラダムスの大予言』をどのように読み取っているのかについて、以下の聞闖欽「是谁走到尽头了？——评《诺斯德拉达缪斯的大预言》」という評論から窺うことが可能であろう。

公害有没有？当然是有的。但是说人类和地球就会因此而毁灭，那就荒谬绝伦了。(中略)在一些发达的资本主义国家里，公害之所以日趋严重，是腐朽

595　人民文学出版社「出版说明」、小松左京『日本沉没』李徳純訳(人民文学出版社、1975年6月)1頁。また、文革期に出版された小松左京『日本沉没』の訳文において、著者不明「伟大的日本人民永远沉没不了！——评反动小说《日本沉没》」(1-8頁)という評論も掲載され、さらに村上幸一「世界末日思想和军国主义——评小松左京《日本沉没》」(原載『長周新聞』1973年8月8日、344-353頁)も訳文の後に付録として添えられた。内容的には極めて類似しているため、本論文では詳述しない。

没落的资本主义社会制度造成的。(中略)但是，广大的人民群众最终会解决这个问题的。这解决的办法不是逃跑，也不是要倒退到原始社会的生活方式，而是靠革命。以革命的手段推翻资本主义制度，打碎套在人民群众脖子上的枷锁，公害问题便可以解决了。这就是毛主席所说的，“现在的世界，依靠共产主义做救星”。(中略)既然如此，“大预言”的作者为什么要声嘶力竭宣传这种错误的观点呢？这反映了当前资本主义世界深刻的经济危机。人类社会在发展，地球也依然在转动，但是资本主义制度确实已经走到了不可逃避的尽头了。它面临一系列不可解决的问题。(中略)用公害掩盖当今世界面临的主要矛盾，把资本主义的末日说成全人类的末日，这就是挣扎的表现。

【公害はあるか。あるのは当然だ。しかし、人類と地球がそのために滅亡すると言うならば、それはでたらめ極まる。(中略)いくつかの発達した資本主義国家において、ますます深刻になっていく公害を引き起こすのは、腐敗し、没落した資本主義の社会制度である。(中略)しかし、広範な大衆は最終的にこの問題を解決する。この解決方法は逃げることでもなく、原始社会における生活方法に戻ることでもなく、革命である。革命という手段で資本主義制度を覆し、人民大衆に科せられた枷を打ち砕くことにより、公害問題は解決できる。まさに毛主席の仰言った通り、「現在の世界は、共産主義という救い主に頼る」。(中略)とすると、「大予言」の作者は、なぜ力を尽くしてこのような誤った観点を宣伝するのか。これは目前の資本主義世界における深刻な経済危機を反映している。人類社会は発展していく。地球も依然として動いている。しかし、資本主義制度は確実に逃げられず行き詰まったのである。この制度は、一連の解決不可能な問題に直面している。(中略)今日の世界が面している主要な矛盾を覆い隠すため公害問題を利用し、資本主義の終わりを全人類の終末に言い換えることこそが、あがきの表現である。】(126-128頁)[596]

『日本沈没』と『ノストラダムスの大予言』が翻訳対象として選ばれた理由は、主

596　聞闖欽「是谁走到尽头了？——评《诺斯德拉达缪斯的大预言》」、『摘译』1975年第2期(1975年2月)126-128頁。

に中国の読者に資本主義国家の「軍国主義」思想と「深刻な社会、政治、経済問題」を紹介するところにあると示唆された。

一見すると、『ノストラダムスの大予言』の翻訳者が「公害問題」の発生を資本主義制度と一方的に強引に結びつけていることは確かに現在の読者に違和感を覚えさせる。しかし、原作の中には資本主義制度下の消費問題に関する内容も含まれている。例えば、『ノストラダムスの大予言』において、環境問題を話題とする国際会議がスイスのジュネーブで行われたというシーンが存在する。会議中、A国代表が世界の食料問題に影響を与えたのは、寒暖の異変、旱魃や豪雨洪水などの世界的気候の異常現象のみならず、「アフリカ、アジアの開発途上国の人口の爆発的急増」(67頁)も食糧危機に拍車をかけていると発言する。それに対して、黒人の代表は「それは先進大国のエゴイズムだ」(67頁)と猛烈に異議を唱え、先進国の人々が食べる家畜が穀物を餌としているが、同じ量の穀物をそのまま食べて摂取できる栄養価は家畜より何倍も高いため、先進大国の食生活における贅沢さを指摘する。良玄もノストラダムスの予言詩「人類は莫大な消費ののち、さらに莫大な消費に向かう」(66頁)を借りながら、日本人があらゆる消費の欲望を抑えるべく、「ヒエ、アワを食っても生きて行けるために体質改善させ」(67頁)ることは必要であると黒人代表と同じ意見を述べる。資本主義の「莫大な消費」を悪とみなした点は、もとより原作にも含まれているだろう。この点も『日本沈没』の「出版说明」と『ノストラダムスの大予言』に関わる評論という両者の最大の違いだと言える。

また、評論「是谁走到尽头了？——评《诺斯德拉达缪斯的大预言》」の中で、毛沢東の言葉「现在的世界，依靠共产主义做救星【現在の世界は、共産党という救い主に頼る】」(127頁)と、マルクスの言葉「资本不光靠剥削劳动来生活。象显贵的野蛮的奴隶主一样，资本也要他的奴隶们陪葬，即在危机时期要使大批的工人死亡【資本は労働搾取をして生きるのみならず、高貴で野蛮な奴隷主と同様、資本も彼の奴隷たちを連れて、自分と一緒に墓に引き摺り込むのである。すなわち、危機時期において多くの労働者を死亡させる】」(129頁)が引用された。マルクス『賃労働と資本』から引用した一文は、『摘译』1975年第8期に掲載された評論、達明・賀焰「两个剪影——评美国剧本《二号街的囚徒》、日本短篇小说《小虫的土葬》」[597]にも見られる。前記した通

597　達明、賀焰「两个剪影——评美国剧本《二号街的囚徒》、日本短篇小说《小虫的土

り、毛沢東やマルクスの語録、発言を引用することにより、文章の正当性を証明するという手段も、中国の文革期における１つの翻訳ストラテジーであると考えられる。

4.4.3.2　訳文のテクスト

文革期の外国文学の翻訳テクストには、意訳、省略、抄訳、増訳、削除などの翻訳方法がよく見られる。『ノストラダムスの大予言』のテクストは全訳されており、『日本沈没』のテクストは抄訳の翻訳方法が用いられた。本節では、２つの作品の、原作と訳本とのテクスト上の対照を行う。

①性的、恋愛的な描写

まず、『ノストラダムスの大予言』の翻訳テクストを全体的に見れば、訳文が原文に忠実であると言えるが、削除という翻訳手法が下記のように使われた。

原作	訳文
	31　同上景，渔港的防波堤上(夜) (中略)明慢慢地把真理子的脸拉过来，吻着那微微张开着的嘴唇——(中略) 33　渔船的甲板上 明和真理子躺在层层重叠的渔网上面。 在苍白的月光下，这一对黑色的剪影显得特别美丽。
31　同・漁港の防波堤——夜—— (中略)明はゆっくりとまり子の顔を引き寄せて、僅かに開いた唇に唇を重ねる——。 どちらからともなく激しく抱きしめて、狂わしいような強い抱擁が続く。(中	「どちらからともなく激しく抱きしめて、狂わしいような強い抱擁が続く。」は削除された。

葬》」、『摘译』1975年第8期(1975年12月)86-87頁。

略） 33　漁船の甲板 　積み重ねた漁網の上で、明とまり子、二ツの裸体がもつれている。 　蒼白な月光の中で浮び上がるシルエットは、自然の中で営む人間の儀式であって壮重な美しさである。（63頁）	「二ツの裸体がもつれている」は「横たわっている」に翻訳された。 「自然の中で営む人間の儀式であって」は削除された。（149-151頁）

翻訳テクストにおいて、「どちらからともなく激しく抱きしめて、狂わしいような強い抱擁が続く」と「自然の中で営む人間の儀式であって」は削除されており、かつ「二ツの裸体がもつれている」は「横たわっている」に訳された。翻訳者が以上の性的描写を意図的に省略する理由は、文学作品におけるポルノ的な要素が当時の中国社会に避けられていたためだということが一目瞭然である。

しかし、このまり子と明が結ばれるシーン、及びその結果としてまり子の体が子供を孕んだことは、『ノストラダムスの大予言』において意味深いと言える。まず、公害問題により生まれる子供に悪い影響を及ぼすことに関する内容は、原作においてかなりの紙幅を割いて描かれている。「食物、薬、水、空気、あらゆる汚染の複合的結果」（63頁）として、「マスクをかけて学校へ通ってる」（59頁）子供たち、栄養失調で「痩せて腹だけ異常に膨らんだ子供たち」（60頁）、北九州の奇型児、「或る一ツの能力が異常に発達した」が、「数日後に死んでいる」（66頁）福島県の子供たちが現れる。それを目の前にした良玄は、娘のまり子とその恋人の明に対して、以下のように警告する。

良玄「そうかなァ……愛し合う者同士が結ばれる……極めて自然な事だと思うがね」（中略）

良玄「（真剣な顔になる）子供を作ることはよく考えるんだよ（中略）……人間が安心して子供を生める状態じゃないだろう？」

まり子「だって……？」

明「いつ安心して生める時が来るんです」

良玄「分からん、が、それは来るんじゃなくて、我々人間がその時を作るん

だ」(61頁)

公害問題、さらに地球の滅亡に直面して、『ノストラダムスの大予言』の提出した解決方法は「現実を正しく認識し、物質文明の欲望に終止符を打」ち、「人間生存のための新しき闘いに出発」(75頁)することである。その未来に対して、まり子の母である伸枝は「どんな時代になっても、女は新しい生命を生んで、立派に育て上げてゆくのが務めだ」(71頁)と語る。この文脈から、「生むのか？」(74頁)という明の質問に対して、まり子は父の警告を放っておいて、頷きながら「私の意志で」(74頁)と答える。しかし、訳文の省略により、２人が結ばれるシーンが、翻訳作品の読者に伝わっていないため、作品の重要なテーマの１つである「子供」という要素が無視されている。

この点について、『日本沈没』の訳文も同じである。原作にある「彼女のわきをすりぬける時、汗くさい髪のにおいと、猛烈な腋臭のにおいがした」(上、6頁)、「――まるで、ぶくぶくふとって、汗だらけの、腋臭女の裸にだきすくめられるみたいだ。その気持ちわるくべたつく、熱っぽい抱擁に、思わず口が歪む。たちまち汗が吹き出してくる」(上、67頁)も全て削除された。さらに、翻訳テクストにおいて、性的な描写だけでなく、小野寺の恋人である玲子は、訳文に最初に登場してから、その後、姿を現した場面[598]がすべて削られた。

②科学知識と被災状況に関する描写

「性的、恋愛的な描写」を除いて、『日本沈没』の訳文において、他の段落及び章節の削除も多い。内容に基づくと、その省略内容は、潜水艦での観測作業、地殻変動などの「地理科学知識」、地震、津波、それがもたらした「被災状況」などに大別できる[599]と考えられる。前述したように、翻訳テクストの削除原因について、文革期の翻訳活動において、原作の字数の膨大さや、限定された提出期間などに関わっている。

598　具体的に、削除された原文テクストは、『日本沈没』上冊の74-78頁、81-84頁、86-87頁と、下冊の110-115頁、125-127頁である。

599　馬慧嬌「『文革』期における日本文学翻訳に関する一考察――単行本のテクスト対照を中心に」、『饕餮』第21号(2013年9月)25-49頁を参照した。

また、翻訳者は、読者側の「背景知識」の欠如や中日間の文化差[600]を考えた上で、原文テクストの省略を１つの翻訳ストラテジーとして用いるという可能性も見られる。上記のように、文革期において、通俗科学の普及活動が、ほぼ停滞していた。当時の社会背景から考えると、『日本沈没』の中で描写された「マントル対流異常」、「海底断層」、「寒冷前線」、「大陸移動」など、当時の中国人読者の認知能力を超えていると推測できる。『日本沈没』の場合、訳者の独自判断により、読み手の理解できぬ科学的な専門用語が頻繁に出現すると、読者がその認識との差異を感じ、スムーズに読めないという可能性があり、削除や省略などの翻訳手法を使用したと考えられる。

また、『ノストラダムスの大予言』の原文テクストにおいて、以下の誤訳や翻訳の欠落が見られる。

原作	訳文
ジベレリンが穀物、野菜、果物に対する成長促進の効果は認められている。(58頁)	基勃兰灵对谷物、蔬菜和瓜果是有促进生长的效果，这是公认的事实。 「ジベレリン」が【基勃兰灵】(中国語の発音は「ji bo lan ling」)に翻訳された。(134頁)
その声は激しいロックのサウンドにかき消されて――(71頁)	说话声渐渐消失―― 【激しいロックのサウンドに】の削除(179頁)

『ノストラダムスの大予言』の原文テクストにある「ジベレリン」は、日本語の発音により、そのまま中国語の発音「ji bo lan ling」で漢字の「基勃兰灵」[601]に訳された。

600　藤濤文子『翻訳行為と異文化間コミュニケーション：機能主義的翻訳理論の諸相』(松籟社、2007年12月)95-113頁を参照した。

601　訳本の翻訳者は「ジベレリン」を中国語の「基勃兰灵」に訳した。発音は日本語とほぼ同じである。文革後、「激勃素、吉贝素」などが、「ジベレリン」の中国語の翻訳として定着した。国家教育研究院『生命科学名词』(元照出版、2016年11月)64頁を参照した。

文革期に外国との交流も制限されており、専門用語を翻訳するための、科学の参考資料が少ないことから、翻訳者が翻訳のミスをしたと推測できる。そのため、『日本沈没』などの翻訳作品のテクストにおいて行われた大幅な削除や省略は、訳者本人の関連する背景知識の欠如により生じるものだということも考えられる。また、原文テクストにある「その声は激しいロックのサウンドにかき消されて――」の「激しいロックのサウンド」は、翻訳テクストにおいて削除された。文革期において、音楽活動もほぼ文学事業と同じく、人々の聞ける音楽と読める文学作品は制限されていた。その背景の下で、中国においてロック音楽が「新潮音楽」として1980年代に入ってから一般に広く行き渡っていった[602]。翻訳者は、読者になるべく違和感を与えないため、当時の中国にまだ入っていなかった、音楽などの新しい外国文化に関わる原文テクストを削除することを選択したと考えられる。

③中国の外交政策に関する内容

訳本の「出版说明」によると、『日本沈没』の作者は、「我が国の外交政策を意図的に歪曲し、我が国をあくどく誹謗している」。原文テクストにおいて、中国の外交政策と関わる内容は、以下のように見られる。

> 「日本の国内情勢の変化は、極東の情勢に大きく影響してくるからな。(中略)中国は当然、東南アジア方面に何か手をうってくるだろう。ソ連は、今国内で手がいっぱいだが……われわれとしても、本当に知りたいのは、日本の後退に対して、中国がどう出てくるか、だ。(中略)もし、弱みにつけこんだ露骨な“巻きかえし”が起これば、それはそれで、日本の社会を硬化させ、新しい反発をひき起こすにちがいない。」(下、21-22頁)

> 「大陸中国は――あまり期待できないでしょうな。八億の人口をかかえているのだから……。それに、両国民の歴史的な交渉と、その未来を考えると……」(下、56頁)

602　賀紹俊『共和国60年文化发展』(中国大百科全書出版社、2009年9月)71頁。

「ソ連、朝鮮民主主義人民共和国、中国……」と委員の一人がつぶやいた。「こんな、日本に一番近い地域の国に……思うように退避できないのは皮肉だな」（下、135頁）

「国連特別委の、理想主義的な熱意のこもった会議が精力的につづけられる背後で、国際ニュースの表面に出ない、世界の「舞台裏」で、ドライで非情な「力」の動きがあわただしくはじまっていた。――ワシントン、モスクワ、北京、パリ、ロンドン……各国首相の、元首公邸間に張りめぐらされた緊急直通電話のベルが何度か鳴り、回線の中を、さまざまの国語と、その同時通訳の音声が流れた。」（下、152頁）

国際支援を求めようとする時、原文テクストにおいて、中国のほうは「あまり期待できない」、中国には「思うように退避できない」と描かれている。原作において、中国が人道主義的思想に欠けていると示唆されており、積極的に評価されていない。しかし、上記のように、1970年代前半、ソ連と米国、両国の関係が緊張緩和から対立状態へと目まぐるしく変化する世界情勢において、中国は、ソ米に対する相対的な地位および国際的影響力を高めるため、「第二世界」、「第三世界」との国家関係改善に努める外交方針を打ち出した。諸国との友好往来と、協力提携の緊密化を図っていた中国政府から見れば、『日本沈没』における描写は「我が国」に対する中傷であり、「我が国」の新たな国家イメージ構築に悪い影響を及ぼしたと想像できる。

そのほか、先ほど述べたように、原文テクストにある「チェスよりずっと複雑でおもしろいぞ。何しろ敵の駒をとったら、今度はそれを味方の駒として使えるんだからな。毛沢東やボー・ザップのゲリラ理論みたいだ。駒組もいろいろおもしろい型があって……」（下、23頁）に対して、翻訳テクストにおいて「毛沢東やボー・ザップのゲリラ理論みたいだ」（177頁）が削除された。毛沢東とその理論への不敬を忌避するため、毛に言及した内容が削られたと考えられる。

原文テクストへの忠実性という面から見れば、『日本沈没』の訳文における削除部分は、同時期に出版された他の作品より圧倒的に多く、結果として、翻訳版の読者が把握できる情報は、原作の読者と比べ減少し、原作の物語の完成度、登場人物の造形も損なわれているという事実を認めなければならない。

4.7.4　まとめ

本節では、『日本沈没』、『ノストラダムスの大予言』という２つの日本の文学作品を検討対象とし、科学幻想作品の定義と作品における終末論の思想に着目した上で、文革期の翻訳ストラテジーについて考察した。

まず、文革期の科学幻想作品は、知識啓蒙という清末の科学小説観を受け継ぎ、「科学がもたらした奇跡」と説明された。この時期に提唱されたのは、楽観主義と科学の現実性を理想とする科幻小説であるため、終末論を主題とした『日本沈没』、『ノストラダムスの大予言』は批判の対象となった。

また、『日本沈没』の訳文においては、大幅に行われた省略や削除が見られる。原文テクストに対して、翻訳者の実施した省略や削除は主に「性的、恋愛的な描写」と「科学知識と被災状況に関する描写」に分けられている。それにより、翻訳の読者にとって、原作の本質を把握することは難しくなったと考えられる。一方、原作にある中国の外交政策への「誹謗」に関わる内容は全訳されており、さらに翻訳作品の「出版说明」においても強調され、否定的に捉えられた。

第8節　翻訳作品の概要――結城昌治『不良少年』

1970年12月号から1971年5月号まで『中央公論』に連載された中編小説、結城昌治『不良少年』[603]は、『摘译』1974年第4期において、梗概の形式で翻訳された[604]。

フランスの文学理論家のジェラール・ジュネットは『パランプセスト：第二次の文学』(和泉涼一訳)において、「粗筋、摘要、要約、梗概、縮約」といった文学作品の「凝縮」に対して、「どんな縮小も、決して単純な縮小ではないのだから、透明で、無意味で」あり、「どんなふうに要約するか言ってくれれば、君がどんな風に解釈し

603　結城昌治『不良少年』、『中央公論』1970年12月号(1970年12月)382-400頁、1971年1月号(1971年1月)370-393頁、1971年3月号(1971年3月)320-343頁、1971年4月号(1971年4月)354-377頁、1971年5月号(1971年5月)338-361頁。

604　結城昌治『不良少年』薛毅訳、『摘译』1974年第4期(1974年4月)183-187頁。

ているかが分かるのだ」[605]と述べている。文革期に翻訳された『不良少年』の梗概において、翻訳者が原文テクストを意図的に再解釈、再組織化することにより、それに伴う政治イデオロギーは必ず顕在化すると考えられる。本節では、結城昌治『不良少年』の原作と訳文の梗概を取り上げ、訳者がどのように原作を要約するか、原作のどの部分に重きを置くかに注目し、分析を行う。

4.8.1　原作『不良少年』

4.8.1.1　あらすじ

直木賞作家の結城昌治の著した中編小説『不良少年』は、『中央公論』1970年12月号～1971年5月号に掲載され、1980年に同名のタイトルで映画化された。『不良少年』において、「少年」と「調査官」という２つの登場人物の視点が交錯し合うことに従って物語が進行する。

澄川隆という少年は天神会の幹部である大竹の拳銃を盗み出す。隆は、豊かではないが、貧しくもない、ごく普通の家庭で一人っ子として生まれる。１７歳のとき、自己の将来に対して疑問を抱きながら、シンナーを常用し、学校をサボり、何度も家出を繰返し、ある強姦事件に巻き込まれる。しかし、この事件に関わるもう２人の少年の小杉、神原と違って、澄川は被害者のマサミに指一本触れていない。この強姦事件において犯されたマサミにも落度があるため、調査官は３人には少年院へ送るほどの非行性はないと判断して、彼らのために保護観察の審判を得るように努力する。

しかしながら、少年は釈放されてから一度も高校へ行かなかったため、高校側では自然退学とみなす。その後、少年はスナックで知合ったやくざの百井に誘われ、ボーイとして新宿にあるスターパレスというナイトクラブに勤め始めるようになる。スターパレスは暴力団の天神会が資金源にしている店の１つで、その支配人は大竹である。組織には加わらないかと誘われるが、少年は返事をしないまま、姿を消す。そして３日後、少年が支配人の金庫から拳銃を盗み、また警邏中の巡査を射殺したことが発見される。警察と天神会は少年の行方を追い続ける。

605　ジェラール・ジュネット『パランプセスト：第二次の文学』和泉涼一訳（水声社、1995年8月）426頁。

この事件を聞いた調査官は、少年には多少好意を持ち、さらにあのとき３人とも少年院へ送っておけば、今度の事件が起こらなかっただろうという責任を感じ、「あの少年の犯行ではない」[606]ことを祈り、事件をはっきりさせるため、あちこちを巡り廻る。調査官が神原、大竹、マサミ、少年の母親、少年を担当していた高校教師、少年たちの息抜きの場所である「スナック・らくだ」のマスターらを訪れるが、誰も少年の行方に心当たりがない。

新宿の街を彷徨い続ける少年は、栄子と再会する。栄子に出会うのは少年がスターパレスにいる時のことである。栄子は父の借金を返すために、天神会のスターパレスで働いている。栄子の一生は父と母のために縛られている。少年が栄子と２人で星を見にプラネタリウムへ行き、海を見に平和島へ行く。少年の心が癒される。栄子の生活が追いつめられるように、少年も追いつめられる。少年は警察に捕まるくらいなら、死ぬほかないと思いつつ、「彼女を助けられるなら、そして彼女といっしょなら、おれも生きてゆける」(1971年5月号、344頁)。２人は一緒に逃げようと決意し、再会を約して別れる。

当日、栄子との待ち合せの前に、少年は佐々田事務所に寄る。逃亡するための金が必要なのである。また栄子のため、「正義のため」(1971年5月号、348頁)、天神会と関係ある高金貸で、栄子の父親の会社を潰そうとする１人でもある佐々田から金を取り戻すつもりである。佐々田を殺す気は無いが、急に非常ベルが鳴り響き、少年が冷静を失い、佐々田を拳銃で撃ってしまう。佐々田事務所が警官に包囲され、少年は逃げる機会を失い、最終的には自殺する。栄子は少年の死を見て、拳銃で自分のこめかみに当て、引金を引く。

4.8.1.2　「非行少年」とは

作品の最初から、１６歳の少女の嬰児遺棄事件、シンナー急性中毒による少女の死亡事件、少年の強姦事件が相次ぎ発生する。昭和４０年代において、これらの少年は「非行少年」[607]と説明された。彼らの特徴は、作品における少年たちの信望を集めて

606　結城昌治『不良少年』＜連載第一回＞、『中央公論』1970年12月号(1970年12月)395頁。

607　「非行少年」とは、『少年法』(1948年7月15日法律第168号)により定められる。家庭

いる、新宿にある「スナック・らくだ」のマスターと調査官との対話から伺うことができる。

> 「彼らは互いに無関心です。政治にも社会にも無関心のように見える。ここは殺伐な喧嘩沙汰もない代わりに、ロマンチックな恋愛も生れない。ここはそういう店です。そういう店だから彼らがやってくる」（1971年1月号、386頁）

> 「この店にくる少年たちの多くは、別段家庭に不満があるわけではない。社会に対して、特にすねるような理由もないらしい。贅沢と言えば贅沢な話だが、唯一彼らに共通しているのは、将来に何の希望も抱いていないということでしょう。彼らは希望を実現しないうちから、たとえば、職業についても結婚についても、希望の対象そのものに幻滅している。幻滅することを、大人たちの世界から教えられてしまっている。（中略）希望がなくても、将来はかならずやってきますからね。彼らがそれを拒否することは出来ないし、逃げることも出来ない」。（1971年5月号、339-340頁）

また、調査官の目から見ると、非行少年がそのまま街に出ても普通の少年少女と変わらないし、澄川などにしても同様である。少年たちの非行性は、戦時中の不良少年が有している凶暴性、危険性というより、「誰にも迷惑をかけていない、（中略）自分

裁判所の審判に付すべき「非行のある少年」をさす。２０歳未満の者（性別は不問）をいい、講学上、「罪を犯した」犯罪少年、「１４歳に満たないで刑罰法令に触れる行為をした」触法少年および「虞犯事由があって、その性格又は環境に照して、将来、罪を犯し、又は刑罰法令に触れる行為をする虞のある」虞犯少年に区別される。広い意味では、盛り場をはいかいする等警察の補導対象となる行為を行ういわゆる不良行為少年をも含めて「非行少年」ということもある。これらの非行少年の健全な育成を目指して、警察、検察庁、家庭裁判所、少年鑑別所、少年院、少年刑務所、地方更生保護委員会、保護観察所等の多くの機関が、それぞれの段階に応じた処理、処遇を行う。その定義については、『少年法』（1948年法律第168号）、内閣府編『青少年白書：青少年問題の現状と対策』（平成14年版）（2002年）131-144頁などを参照した。

ひとりで、ひっそりとシンナーを嗅いでいる」(1970年12月号、390頁)シンナー・ボーイである澄川のように隠微なものにあるという傾向が見られる。その傾向に伴い、少年の非行が一般化し、さらに現代の風俗現象の一部になるため、彼らの間に非行の区分をつけることは難しくなる。

作品の主人公の澄川は、「温和な常識人で、他人を押しのけても出世したいというような覇気はない」(1970年12月号、391頁)父親と「そんな夫に飽き足らないのか、生活の夢を少年に託していた」(1970年12月号、391-392頁)母親に甘やかされて育てられる。教育熱心な母親は少年に家庭教師をつけたり、春休みや夏休みには予備校へ通わせたりして、子供に対する期待が大きいが、その期待が少年を勉強嫌いにさせる。さらに、「学校に魅力が欠け(中略)、受験準備のためにすべて犠牲にされている。生徒たちはそれが不満で、といって、家へ帰っても勉強しなければ置去りにされてしまうという不安に陥って」(1971年4月号、370頁)いる。家庭及び学校からひたすら受験勉強を強いられ、その無目的な虚しさや苦痛から逃れるために、少年はシンナーを吸い始め、孤独に微かな安らぎを与える。

4.8.1.3 「不良少年」とは

将来に幻滅する澄川、神原などの当時の日本の少年との間に、調査官は手を伸ばして届かないほどの「無限の距離」(1971年1月号、377頁)を感じ取り、その距離を縮めようとするため、自分の過去を喋らずにいられなかった。非行少年たちは、調査官自身の以下のような「不良少年[608]と呼ばれていた過去を思い出させた」(1971年1月号、

608 「不良少年」という名称は、1900年に『感化法』が制定されて一般化とされている。『感化法』の中では、「８歳以上１６歳未満で適当な親権等を行うものがなく遊蕩・乞食等を行う」のは「不良少年」であると記している。『感化法』によって、不良少年、犯罪少年、親による懲罰として懲戒場に入れられる少年などの処遇機関として感化院が設置された。現在の時点では、「不良少年」という言葉をそのまま規定している法律は存在していないが、「少年警察活動規則」(2002年国家公安委員会規則第20号)において、「不良行為少年は、非行少年には該当しないが、飲酒、喫煙、深夜はいかいその他自己又は他人の徳性を害する行為をしている少年をいう」と規定されている。「不良少年」に関する内容は、「少年警察活動規則」(2002年国家公安委員会規則第20号)(2002年9月)、北場勉「1900年感化法の制定過程に関する社会政

377-378頁)。

> 戦時中のことだ、おれは中学生で、不良少年と呼ばれ、自分でも不良だと思っていた、だが、澄川と同じように、いいこともしないが悪いこともしていなかった、(中略)澄川たちの将来に希望がないというなら、あの頃の少年にだって将来の希望などありはしなかった、将来はかならずやってくるなどという悠長なものではなくて、二十歳までの命だと言われていた、こっちで拒否しなくても、国家の力がおれたちの将来を拒否していた、しかしおれは、二十歳までの青春に自棄になったという憶えはない、軍需工場で働かされながら、毎日のように不良同士の喧嘩をして、殺されそうになったこともあるし、酒を飲み煙草を吸い、花札賭博に熱中した、そして自分で自分を追いつめた。(1971年5月号、340-341頁)

また、調査官は不良時代の自分が軍需工場にある日本刀を盗んだときのことを思い出し、「ほとんど躊躇しなかったようだ、日本刀に手を伸ばし」、「急にどうしても欲しくなり、そいつを持っていると、力が溢れるようで空襲が怖くなかった、無理に意気込んでいただけで、本当は生きているのが不安でたまらな」(1971年5月号、341頁)かった。調査官は自分が不良少年になったのは、「祖国のため、天皇陛下のために、死ねといわれていた時代」(1970年12月号、396頁)に生きていて、死の観念に馴らされ、２０歳代で死ぬことははっきり運命づけられ、将来を考える必要がなかったためであると解釈した。戦時中の不良少年とは違い、国のために死ぬことを強制されていない昭和４０年代の少年たちが「健康なら、まだ五十年は生きられる。六十年生きても不思議じゃない。人生がたっぷり残っている」(1971年1月号、375頁)のに、なぜ非行になったのかが理解できない。

この作品が「非行少年」ではなく、「不良少年」と題された理由は、作者の結城によると、「私自身の過去に由来している」[609]。作者は「十六歳から十八歳にかけて中

治的考察」、『社会福祉学』第56巻第3号(2015年)1-13頁、古川孝順、金子光一『社会福祉発達史キーワード』(有斐閣、2009年5月)4頁などを参照した。

609　結城昌治「ノート」、結城昌治『結城昌治作品集』第6巻(朝日新聞社、1974年1

学生時代の約三年間、私は不良少年と呼ばれていた。それほど悪いことをした憶えはないけれど、(中略)なぜそんなふうにグレていたのか未だに分らない」[610]と告白する。それに対して、大塚雅彦は「結城氏は、作者－調査官－少年という三人の人物をつなげる共通の心理の糸(挫折体験)によって、自分の傷ついた内面を探ることを通して、少年の内面を迫ろうと考えたものの如くである」[611]と述べている。原作者は自身の青春期において、不良になった頃の自己を再確認するため、この作品で連続殺人を犯す少年の内部を探ろうとすることを試みたが、「青春は所詮不確かなものなのだろうか。ついに少年を理解できず、自分を確かめることもできなかった」[612]。作者にしても、作品の登場人物の調査官にしても、周囲の人々から「不良少年」と見なされた経験を有するため、主人公の澄川をはじめとする当時の「非行少年」に対して、一種の同感と同情を示す。しかし、いつの時代になっても、少年の稚い感情は「大人の世界を理解できない」(1971年1月号、372-373頁)。それと同時に、少年の苦痛は、彼ら自身が噛みしめるほかに、大人の「誰が舐めても本当の味は分らない」(1971年2月号、373頁)であろう。

4.8.2　翻訳作品『不良少年』(日本中篇小説・梗概)

4.8.2.1　翻訳作品の「前言」

結城昌治の著した中編小説『不良少年』の訳文の梗概は、以下のように『摘译』1974年第4期に掲載された。青少年のメンタルヘルスを主題とする『不良少年』が『摘译』の翻訳対象として選ばれた理由は、前述の通り、作品の編集者が中国の読者に「資本主義国家の深刻な社会、政治、経済問題」を紹介するところにあると考えられる。

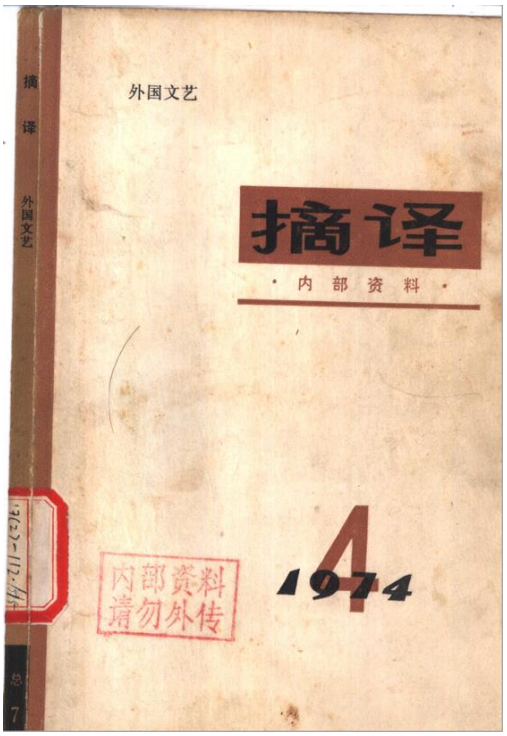
月)343頁。

610　結城昌治「ノート」、結城昌治『結城昌治作品集』第6巻(朝日新聞社、1974年1月)343頁。

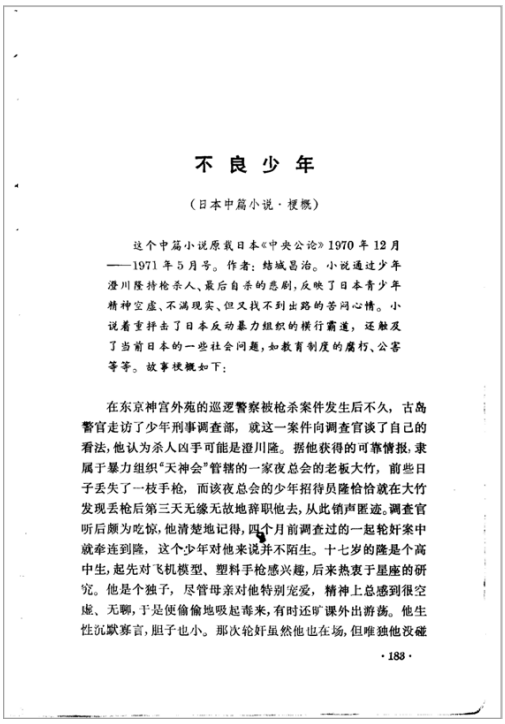
611　大塚雅彦「解説」、結城昌治『不良少年』(中央公論社、1974年10月)232頁。

612　結城昌治「ノート」、結城昌治『結城昌治作品集』第6巻(朝日新聞社、1974年1月)343頁。

『摘译』1974年第4期の表紙



『不良少年』の前言



不 良 少 年

（日本中篇小说·梗概）

这个中篇小说原载日本《中央公论》1970年12月——1971年5月号。作者：结城昌治。小说通过少年澄川隆持枪杀人、最后自杀的悲剧，反映了日本青少年精神空虚、不满现实、但又找不到出路的苦闷心情。小说着重抨击了日本反动暴力组织的横行霸道，还触及了当前日本的一些社会问题，如教育制度的腐朽、公害等等。故事梗概如下：

在东京神宫外苑的巡逻警察被枪杀案件发生后不久，古岛警官走访了少年刑事调查部，就这一案件向调查官谈了自己的看法，他认为杀人凶手可能是澄川隆。据他获得的可靠情报，隶属于暴力组织"天神会"管辖的一家夜总会的老板大竹，前些日子丢失了一枝手枪，而该夜总会的少年招待员隆恰恰就在大竹发现丢枪后第三天无缘无故地辞职他去，从此销声匿迹。调查官听后颇为吃惊，他清楚地记得，四个月前调查过的一起轮奸案中就牵连到隆，这个少年对他来说并不陌生。十七岁的隆是个高中生，起先对飞机模型、塑料手枪感兴趣，后来热衷于星座的研究。他是个独子，尽管母亲对他特别宠爱，精神上总感到很空虚、无聊，于是便偷偷地吸起毒来，有时还旷课外出游荡。他生性沉默寡言，胆子也小。那次轮奸虽然他也在场，但唯独他没碰

·183·

訳本の編集者が『不良少年』をどのように読み取っているかは、以下の前言から窺える。

> 这个中篇小说原载日本《中央公论》1970年12月——1971年5月号。作者：结城昌治。小说通过少年澄川隆持枪杀人、最后自杀的悲剧，反映了日本青少年精神空虚、不满现实、但又找不到出路的苦闷心情。小说着重抨击了日本反动暴力组织的横行霸道，还触及了当前日本的一些社会问题，如教育制度的腐朽、公害等等。
>
> 【この中編小説は日本『中央公論』の1970年12月号～1971年5月号に掲載された。作者：結城昌治。小説は少年の澄川隆が銃で人を殺し、最終的に自殺するという悲劇を通して、日本の青少年が精神的な空虚感にとらわれ、現実に不満を抱くが、出口が見つからないことに苦悶する心情を描いている。小説は日本の反動暴力組織の横暴な振る舞いに焦点を当て、それを批判しており、腐敗した教育制度、公害問題など現下の日本におけるいくつかの社会

問題にも触れている。】[613]

前述した通り、『不良少年』が翻訳対象として選ばれた理由は主に中国の読者に「資本主義国家の深刻な社会、政治、経済問題」を紹介するところにある。しかし、編集者は翻訳の前言において、読者の視線を原作の最大の主題である「青少年のメンタルヘルス」のみならず、ほぼ同じ程度に日本の「暴力組織」、「教育制度」、「公害問題」への批判にも目を向けさせようとしている。

また、社会問題を題材とした小説作品において、フィクションとノンフィクションの間の境界が曖昧になっているのは確かであるが、小説の作者は作品の中で社会現象を目にして問題を提起することを通し、読者に強く思考を促すこと以外、読者に自己の創作、すなわちフィクションとしての物語を全て事実として信じ込ませるということまでは期待していないと考えられる。しかし、『不良少年』の編集者と原作者の間の分岐点は、『不良少年』の編集者が前言を通して、翻訳作品の読者に原作者の想像力によって作り上げられた架空の物語をそのまま実際に日本社会で起きた出来事として、要するに事実として受け入れることを望み、さらに要求しているというところにある。

4.8.2.2　翻訳者のまとめた梗概

1980年5月に中央公論新社より出版された結城昌治『不良少年』の文庫本[614]は合計236頁であるが、翻訳者のまとめた梗概は5頁しかない。翻訳テクストにおいて、翻訳者の行った「略す」という操作は必ず意味上のねじれを伴う[615]。翻訳者が原作のどこに重点を置いて訳したのか、原文テクストのどの部分を意図的に省略したのかなどを分析する。

まず、訳文の梗概において、翻訳者は「反動暴力組織」に関わる内容に焦点を当てている。原作の本来の主題である青少年の心理についての描写とほぼ同じ分量を占め

613　結城昌治『不良少年』薛毅訳、『摘译』1974年第4期(1974年4月)183頁。

614　結城昌治『不良少年』(中央公論新社、1980年5月)。

615　ジェラール・ジュネット『パランプセスト：第二次の文学』和泉涼一訳(水声社、1995年8月)443頁。

ている。天神会のナイトクラブで働くのは、ほぼ借金を返す子である。栄子の父の「会社潰しそのものが天神会の仕事」(1971年1月号、382頁)であるのに、借金を返すために働かなければならない。「天神会の顧問弁護士は、二人とも、もとは検事」(1971年1月号、382頁)であり、「法律なんかインチキで、警察も頼りにならなくて、ほかに助けてやる者がいない」(1971年5月号、347頁)ため、栄子や澄川に対して、天神会を相手するのは無理である。原作テクストから見れば、自身、家庭、学校、社会環境などのいろいろな要素が絡まり合って、少年の自殺に繋がるが、訳文の梗概からは、２人が最終的に自殺した最大の原因について、編集者は意図的に日本の暴力団と結びつける傾向が見られる。原作者が読者に伝えたい意図との間に、そのずれが存在している。

また、原文における物語の展開及び主要な登場人物の造形とは直接関係のない描写がほぼ全訳された内容にも着目したい。

まずは、「海を消され(中略)、すさまじい爆音を叩きつけて、少年たちの頭上をジェット機が通り過ぎた」(1971年4月号、362頁)、「平和島自体が埋立地だが、それがさらに海へ向って、何倍もの広さに膨張していた」(1971年4月号、362頁)、「倉庫が建並び、煙突が灰色の煙を吐出し、(中略)スモッグに汚れた東京の空を嘆き、もし空が澄んでいたら」(1971年4月号、362-363頁)という原文にある大気の汚染、騒音、環境の破壊により生じる日本の公害問題に関する描写が全て翻訳された。『不良少年』の前言の中でも「公害問題」が訳者によって論じられている。しかし、前述したように、文革期の翻訳者の日本の翻訳作品における公害への言及は、日本の農業政策と工業政策を批判するためである。

原文テクストにある「壁いちめんにレコードのジャケットや、等身大のヌード写真、演奏会のポスターなど貼ってあった」(1971年3月号、320頁)も訳文の梗概において翻訳された。文革期に禁欲主義的性道徳に基づいて、当時の中国において社会風俗を害する禁制品と見なされた「ヌード写真」に編集者の関心が寄せられる。翻訳者は青少年を性的に刺激し、犯罪を誘発する日本社会のこの一面を批判的な視点から訳したと考えられる。さらに、「地下広場は人の流れが錯綜していた。その一隅でヘルメットをかぶった学生が、日米安保条約の破棄を要求する署名とカンバに声を嗄らし、またやや離れた所では、やはり学生ふうの男女が北方領土の返還を訴えていた」(1971年4月号、358頁)など、日本の当時のマクロ的な社会風景も全訳された。「日米安保条約

の破棄」と「北方領土の返還」を訴える日本の学生に関わる内容を翻訳することによって、中国自身のソ連、米国との対立を正当化する傾向が強いと言える。

少年と少女の恋物語に関する内容は、原文テクストにおいては、かなりの紙幅を割いて描かれている。少女の栄子の目からすれば、少年は「救いの神」(1971年1月号、381頁)であり、少年が助けなかったら、天神会の「野口にハメられるところだった」(1971年1月号、381頁)。少年は、栄子について、「栄子は違う、ほかの女とはまるっきり違っている、ほかの女が絶対持っていない何かを持っている、それはキラキラ眩しいような、透明で純粋な結晶体だ」(1971年1月号、388頁)と思う。また、少年は自分をギリシャの勇士に例えて、栄子を見捨てることができず、怪獣の手から栄子を助け出すために、飽くまで戦うことを決意を固める。栄子のことを考えながら、「疼くような痛みを感じていた。それは初めて知った痛みだったから、どう名づけていいか分らなかった。愛とか恋とか言ってしまうと、安っぽくなって、痛みが薄れてしまいそうな感情だった」(1971年4月号、374頁)。さらに、少年は「こんな世の中、おれはいつ死んだって構わないし、早く死んだほうがいいと思っていたけど、彼女を助けられるなら、そして彼女といっしょなら、おれも生きてゆける」(1971年5月号、344頁)と感じる。「大切なのは生きることだ」、「大切なのは愛することだ」(1971年5月号、344頁)といった友達の言葉も、栄子の出現とともに初めて少年の頭にこびり付いている。将来に希望がないと感じ取る可憐な少年少女が心に傷を抱えながら、お互いに救いを求める。

しかしながら、この淡い恋物語について、訳文の梗概の中では、ほとんど言及されていない。中国史学者であるフランク・ディケーターは『文化大革命：人民的歴史1962-1976』(Frank Dikötter, *The Cultural Revolution: A People's History 1962-1976*, 2016)(向淑容・堯嘉寧訳)において、「この政権は恋愛関係を軽蔑した。文革期において、夫婦が公に愛を表すことは極めて少ない。愛は退廃的なブルジョア階級情緒と見なされた」[616]と指摘している。文革の頃、性に関わる内容を含めて、男女の恋愛関係は人々の最も忌み嫌われる話題であった[617]と言える。

616　馮客『文化大革命：人民的歴史1962-1976』向淑容、堯嘉寧訳(聯経出版事業会社、2016年12月)422頁。

617　楊健『文化大革命中的地下文学』(朝華出版社、1993年1月)325頁を参照した。

4.8.3　まとめ

結城昌治『不良少年』は、1974年第4期の『摘译』に掲載された。『摘译』の「摘」とは字面通りに「摘む」という意味である。翻訳作品の編集者は作品の主題及び形式を「摘む」だけではなく、作品の一章、一節を、あるいは梗概を「摘んで」翻訳した。原作の梗概である以上は、翻訳版の読者の把握できる情報が原作の読者と比べて減るという点などにおいて否定的な影響が出ていたと考えられる。

翻訳者が『不良少年』を梗概の形式として掲載した理由は、前述したように、原作の字数の膨大さや限定された提出期間などと関連していると推測できる。翻訳者は、『摘译』に掲載された『不良少年』の訳文の梗概において、原作における「青少年のメンタルヘルス」の社会現象を問い直すという主題を完全に損なったとはいえないが、政治的な目的により、原作にある「少年少女の恋」を訳出することを回避し、犯罪問題、風俗営業などに関わる「反動暴力組織」及び「公害問題」の描写に力を注ぎ、日本における社会的不安定な状況を中国の読者に提示するために、翻訳テクストを調整したという色合いが強い。

第5章　文革期における日本文学の翻訳作品に関わる人々

政治的なイデオロギーの目的を果たすために行われた文革期の翻訳活動において、賛助者、翻訳者、読者という三者の関係の中に、ある種の協力が存在していたと考えられる。本章では、翻訳作品を完成させるまでの過程の視点から、賛助者、翻訳者の果たした役割、および読者側の翻訳作品に対する理解について考察する。

第1節　翻訳活動の賛助者

5.1.1　「三結合」の創作方法

文革期の翻訳作業は、極めて高度に組織化された状況の下で行われた。訳者は厳密な行動規範を遵守すると同時に、権力者及び政府機関の監視と管理を受けなければならなかった。文革期において、翻訳作品の翻訳ストラテジーに現れるイデオロギーは、常に翻訳活動の賛助者[618]により決められ、さらに強化された。

賛助者は必ずしも単行本、雑誌を刊行した出版社の編集者などの個人である必要はなく、国家の権力機関、政府の主管部門、刊行物主編、編集部などの団体でも可能である[619]。文革期の翻訳活動において、賛助者の役割は作品の出版を経済面から賛助することにとどまらず、国家の主流のイデオロギーの代表者として、翻訳作品の出版を組織し、管理し、指揮した。

1949年以降、中国の文学翻訳活動における翻訳対象への選択標準が市場から計画へと変化した。文革に入ってから、江青、張春橋、姚文元、王洪文の四人組の支配した

618　翻訳活動の賛助者は、André Lefevereにより「patronage」という概念として提出された。André Lefevere〔ママ〕編『翻译、历史与文化论集』（*《Translation/History/Culture A sourcebook》*、上海外語教育出版社、2004年7月）14–25頁などを参照した。

619　陸秀英「中国当代翻译文学系统中主体间关系的生态分析――以《世界文学》期刊为例」（上海外国語大学博士学位論文、2010年5月）83頁を参照した。

「中央文革小組」が中宣部、文化部、教育部、新華社を接収管理し[620]、翻訳と出版作業に対して統一して主導していた。それと同時に、江青による指示で、「指導者、創作者、群衆が結合して文芸を創作する」という「三結合」[621]の創作方法が実行され、それにより文学活動における賛助者の地位がさらに重視されるようになった。

「领导出思想、群众出生活、作家出技巧【指導者は思想を提供し、大衆は生活を提供し、作家は技巧を提供する】」[622]をスローガンとした「三結合」の方法も文革期の翻訳活動にも引き継がれた。ここにある「指導者」は文革期の翻訳活動における賛助者であり、「思想を提供」するというのは、政治イデオロギーによる翻訳作品の解釈方法を決めることであると考えられる。「三結合」の「大衆」は、前述した毛沢東の文学路線の１つで重要視された「工農兵」であり、「作家」は翻訳者に置き換えて理解することができる。

5.1.2　文革期の「写作組」

翻訳文学誌『摘译』刊行の過程を遡ることによって、文革期の翻訳活動における賛助者の役割を解明することができると考えられる。1971年7月に当時の市委書記である徐景賢が総責任者として、「上海市委写作組」[623]を正式に組織した。1970年代の中国

620　劉杲、石峰主編『中国出版五十年纪事』(新華出版社、1999年12月)105頁。

621　「三結合」は、具体的に指導者が主題を確立し、創作者が作品を完成し、群衆が意見を提出する文学の創作方法である。「三結合」は最初に演劇の創作手法として提出された概念であり、1966年に入ってから、他の文学活動でも使われるようになった。「三結合」の中の創作者は、演劇の創作活動において、脚本家、監督、役者など製作に関わる職務を指す。本論文で言及している創作者は、文革期の翻訳活動において主に編集者および翻訳者を指す。武善增「论“文革文学”话语在1964年的生成」、『江苏社会科学』2011年第4期(2011年)153-157頁を参照した。

622　尹家民「“文化大革命”中的梁效、罗思鼎写作组」、『党史博览』2004年第10期(2004年10月)30頁。

623　「写作組」について、丁東「“写作组”初探」、『东方文化』1999年第2期(1999年)、丁東「剖析“写作组”」、『炎黄世界』2010年第3期(2010年)18-23頁、章剣鋒「“文革”上海写作组的那些事儿」、『南风窗』2010年第8期(2010年4月)92-95頁などを参考にした。

において、「写作組」は政府の公式見解を文章にして公表する機関であり、「发动“文革”的鼓手和号角【「文革」を発動する鼓手とラッパ手】」であり、「写作組」の書いた文章は、常に『红旗』、『朝霞』と『人民日报』、『光明日报』、『解放军报』など中国共産党中央委員会の機関誌と機関紙の非常に目立つ位置、例えば新聞の１面に掲載されており、これらの指導的な文章が毛沢東の「最高指示【最高指示】」[624]の代弁者と認められている。

「写作組」の中で、最も影響力を持ち、広く読まれたのは、「北大清華写作組」と「上海市委写作組」であり、その他、「文化部写作組」、「中央党校写作組」、「北京市委写作組」などもある。「上海市委写作組」は正式なメンバーが４５人で、歴史、哲学、文芸、経済、自然弁証法、秘書などの６つの組に分かれた。また「上海市委写作組」に付属する下部単位には、映画組、魯迅研究組、文芸『摘译』編輯部、自然科学『摘译』編輯部、歴史組などがある[625]。

四人組の１人である王洪文や、「上海市委写作組」の責任者である朱永嘉などの指示の下で、『摘译』は王洪文の秘書の蕭木と文革当時の「上海市委写作組」の文芸組組長である陳冀徳により創刊された[626]。『摘译』など、「写作組」の刊行した雑誌や新聞の編輯部の構成にいて、主に大学や研究機関から、理論水準と創作能力の高い学者、教師、優秀卒業生を引き抜いて編集部に配属させた[627]。四人組の腹心は毎期の『摘译』が刊行される前に、原稿を審査し、また、張春橋、姚文元、王洪文、徐景賢などが代表する政府側の賛助者は毎期の『摘译』の刊行後、訳文および評論に対して意見を提出した[628]。『摘译』の編輯部は上述した賛助者の意見により、場合によって

624　尹家民「“文化大革命”中的梁效、罗思鼎写作组」、『党史博览』2004年第10期(2004年10月)30頁。

625　丁東「“文革”写作组兴衰录」、『文史博览』2005年第19期(2005年10月)7-8頁を参考にした。

626　『摘译』の創刊経由について、鄒振環「“死屋”中的“隐形铁窗”――“文革”后期的《摘译》研究」、王宏志主編『翻译史研究』(2015)(復旦大学出版社、2015年12月)243-262頁を参照した。

627　徐江「《朝霞》双刊与“文革”后期其它刊物的相互关系研究」、『当代文坛』2010年第4期(2010年7月)112-113頁、王知常口述、金光耀、金大陸、李遜取材、諸穎政、李信之整理「我与《学习与批判》等刊物」、『炎黄春秋』2015年第3期(2015年3月)26頁。

628　上海師範大学中文系外国文学教研室「批“洋为帮用”――揭露“四人帮”利用苏联

は翻訳ストラテジーを修正するようになった。文革期においては、翻訳活動の完全な組織化、計画化、統一化が求められていた。以上のように、翻訳作品の編輯部は四人組など政府側の直接指示に沿って行動していたと考えられる。

5.1.3　文革後の歴史清算

文革期に出版された作品に関しては、翻訳活動の計画、翻訳対象の選択、翻訳用語の使用などのストラテジーから、作品の訳者および読者まで、翻訳活動の賛助者である国家の権力機関、政府の主管部門などが決定して、編集部を通じて伝達していた[629]。文革期の文学評論の活動において、権力者の道具として利用され、賛助者と翻訳者に挟まれた編集者もいる一方、これを出世の道とし、自分が賛助者になった編集者もいる[630]。しかし、自律的な個人的選択であったかは別として、文革イデオロギーの代弁者として文学活動を行うことは、必然的に政治的リスクを伴った。

先述の朱永嘉は文革前、復旦大学の明史研究の専門家であるが、1965年に文学作品を学術的な研究から階級闘争、すなわち政治的な領域にまで引き上げ、文化大革命を促したとされる評論、姚文元「评新编历史剧《海瑞罢官》」[631]の作成を手伝った。その後、文革期に入ってから、上海市党委員会常務委員などを担当し、「上海市委写作組」の責任者になった。朱永嘉の支配下で、1970年代の文学批評で重要な地位を占め、影響力が全国に及んでいた雑誌『学习与批判』、『朝霞』、翻訳文学誌『摘译』が刊行された[632]。

しかし、文革後の1981年6月に、中国政府は「建国以来の党の若干の歴史問題に関す

文学搞篡党夺权的罪恶阴谋」、『外国文学研究』1978年第1期(1978年)7-8頁などを参考にした。

629　馬士奎「翻译主体地位的模糊化——析“文革”时期文学翻译中译者的角色」、『临沂师范学院学报』第28巻第5期(2006年10月)140頁を参照した。

630　吳中傑「政治漩涡中的写作班子」(上)、『书城』2014年第2期(2014年2月)20頁。

631　姚文元「评新编历史剧《海瑞罢官》」(原載『文汇报』1965年11月9日)、1965年11月30日『人民日报』。

632　李丹「《朝霞》和《学习与批判》的文学批评刍议」、徐興無、王彬彬主編『文学研究』(第4巻 1)(南京大学出版社、2018年9月)22-29頁。

る決議」（後略「歴史決議」）[633]を通して、プロレタリア文化大革命に対して歴史的決算を試みた。「全党における思想の統一」を目的とした「歴史決議」は、文革運動を発動した毛沢東主席に対し、文革前の功績を認めつつも、文革期の誤りを明確に指摘し、また文革運動に対し、初めて公式に全面否定し、「左傾の誤り」[634]とした。文革後、学術界を含めて、中国の世論は「歴史決議」の採択から影響を受け、政府が政治的必要に基づいて下した文革全面否定論[635]に対し無意識のうちに同調する姿勢が見られた。

「四人組」の失脚、文革の終結、「歴史決議」の公表に従って、朱永嘉も文革の協力者として、罪に問われて、懲役１４年の判決を受けた[636]。文革での経験に対して、「“文革”中写作组的知识分子就像唐代的中书舍人、明清的翰林院学士，替皇帝起草各种诏令，总要揣摸上面的心思。揣摸对了，是上面英明；揣摸错了，是自己倒霉【「文革」の写作組の知識人は、唐代の中書舍人や明清の翰林学士のように、皇帝に代わっていろいろな勅令を起草し、常に上の者の思いを推量していた。正しく推量したら、上様が英明だ。間違えたら、自分の運が悪かったということ】」であり、「我本以为自己是忠心耿耿为党为国家，实际自己前半生的经历就是一场闹剧，也是悲剧【私は党や国に極めて忠実だと思っていたが、実際には自分の人生の前半は茶番劇であり、悲劇でもあった】」[637]と朱永嘉は語った。さらに、中国の伝統的な社会という枠組みの中で、自分が知識人として、「除了为权力机构服务以外，独立谋生的道路并不多【権力機構に仕

633　加々美光行編『現代中国の挫折：文化大革命の省察』（アジア経済研究所、1985年3月）270-289頁、田中仁「中国文化大革命考：菊地昌典氏の所論をめぐって」、『歴史科学』121号（1990年7月）30-37頁、八塚正晃「中国共産党の『歴史決議』をめぐる政治過程（一九七九―一九八一）」、『法學政治學論究：法律・政治・社会』第93巻（2012年6月）167-198頁などを参照した。

634　八塚正晃「中国共産党の『歴史決議』をめぐる政治過程（一九七九―一九八一）」、『法學政治學論究：法律・政治・社会』第93巻（2012年6月）168頁、188頁。

635　中津俊樹「『プロレタリア文化大革命』研究からみる日本人の中国認識――文革終結以後の動向を中心として」、代田智明、谷垣真理子監修、伊藤徳也、岩月純一編『戦後日本の中国研究と中国認識　東大駒場と内外の視点』（風響社、2018年3月）147-168頁。

636　朱学勤「“凌伊”先生」、『南方人物周刊』2007年第26期（2007年）132-133頁を参照した。

637　魏承思「“文革遺老”朱永嘉」、『南方人物周刊』2015年第23期（2015年8月）107頁。

える以外に、独立して生計を立てる手段は多くない】」と述べて、1966年から1976年まで中国に渦巻いていた文革という波の中で、「知识分子仅仅是一颗泥沙【知識人はただ砂に過ぎず】」、「行人事听天命【人事を尽くして天命を待つ】」しかなく、「天命」を変えることは不可能であった[638]と訴えた。文革期の知識人としての無力さが語られる一方、文革期の行為を合理化する傾向も強いと考えられる。文化大革命の時代に政治イデオロギーの宣伝の一翼を担った翻訳活動の賛助者は、革命運動の思想的な指針から、「歴史決議」の公表により、犯罪者にさせられ、文革後に徹底的な清算を受けた。1966年から1976年までという非理性的な文革期において、彼らは時代の加害者でもあり、被害者でもあった。

第2節　翻訳者の境遇と意識

先に述べた「三結合」のスローガンである「作家出技巧【作家は技巧を提供する】」にも、文革期において、公式側は訳者の翻訳力を「使うための道具」として扱っていた傾向が見られる。本節では、文革イデオロギーの宣伝者の役割を担わされた翻訳者の境遇を検討しながら、彼らの翻訳時の個人的意識を推察する。

5.2.1　「知識分子」としての遭遇

文革の初期、毛沢東を支持する「紅衛兵」により、外国語と外国文学に関わる仕事に従事していた知識分子への攻撃や批判が、「知识越多越反动【知識があればあるほど反動する】」という毛沢東教育政策のスローガン[639]の下で、正当化されていた。知識階層は「西洋に媚び」、「修正主義や資本主義の宣伝者」、「反動学術権威」、「右派分子」であるとの烙印や罪名を押し付けられ、地方の農村で肉体労働を行うこ

638　章剣鋒「“文革”上海写作组的那些事儿」、『南风窗』2010年第8期(2010年4月)95頁。

639　韓明謨『20世纪百年学案：社会学卷』(陝西人民教育出版社、2002年5月)275頁を参考にした。

とを通じて、「思想改造」させられた[640]。２０世紀の外国文学の翻訳史において大きな足跡を残した多くの翻訳家、例えばトルストイ全集などのロシア文学を訳した草嬰、フランス文学翻訳家の傅雷、また蘇阿芒、蕭珊、査良錚、豊子愷等が肉体的、精神的に迫害を受けていた[641]。それにより、数多くの翻訳活動が中止へと追い込まれた。紆余曲折した文革期の翻訳活動に伴い、世界の先端を走っていた２０世紀初頭の中国の翻訳研究も、1960年代から全面的な停滞期に入ったこと[642]は、言うまでもない。

前述した通り、1971年から出版活動の活発化が見られ、翻訳作品の数も増えてきた。しかし、基本的には、この時期の翻訳作業も極めて高度に組織化された状況の下で行われた。翻訳対象の選択から翻訳用語の使用まで、訳者は厳密な行動規範を遵守するとともに、権力者や政府機関の監視と管理を受けなければならなかった。多数の翻訳家が自分の好きではない作品、さらに自分の思想に対立する作品を訳し、個人的な自主性が徹底的に抹殺され、完全に政治上の命令に左右される翻訳マシーンに成り果てていたと言える。

鄒振環は『20世纪上海翻译出版与文化变迁』[643]の中で、文革期の翻訳活動において重要な役割を果たした上海人民出版社の状況を取り上げた。翻訳活動の活発化に従い、1971年に中央の委託によって「文革派の四人組に信用され」、政治理念が「正しい」と判断された、およそ２０人の編集者は、上海社会科学院と各大学などから上海図書館に集められ、外国における最新の文学動態の研究に手をつけ、翻訳対象を選択する権力が与えられた。編集者は作品を決めた後、当時「五・七幹部学校」で「労働改造」、「思想教育」された翻訳家を臨時で呼び集め、任務を与えた。その後、「五・七幹部学校」の中に「翻訳連」が正式に成立し、草嬰が責任者に任命された。「翻訳

640　文化大革命期の知識人階級の遭遇について、「破“四旧”狂瀾的掀起」、本書編委会編『中华人民共和国国史全鉴(1949-1995)』第3卷(1960-1966)(団結出版社、1996年4月)3636頁を参考にした。

641　張国俊「权力话语与文革时期的外国文学翻译」、『华南农业大学学报』(社会科学版)2008年第4期(2008年10月)99-103頁を参照した。

642　靳彪、趙秀明「“文革”十年间的中国翻译界」、『天津外国语学院学报』2000年第1期(2000年3月)4-6頁。

643　鄒振環『20世纪上海翻译出版与文化变迁』(広西教育出版社、2000年12月)319-348頁を参照した。

連」は幹校の女性用風呂場を仕事場として翻訳活動を展開した。「３人１組、合計５組」で、１つの作品を幾つかの部分に分けて別々に読んだ後、五組が各自の担当する部分の梗概を話し合うことによって、全体的な物語性を把握した上で、人名と地名などを統一して翻訳に進み、最後に責任者によってまとめられるという翻訳方法が文革期には一般的であった。「辞書もない」、「２０日以内で４０万字の翻訳作品」という任務を完遂しなければならない状況で、数多くの作品が出版された。

5.2.2　翻訳者の署名

文革期に翻訳された日本文学は、ほぼ「集体署名」、「偽名署名」、「署名無し」などの形で署名された。

5.2.2.1　「集体署名」

前記した通り、文革期には、「集体翻訳」が翻訳手段の１つとして数多く行われていた。１つの作品が多くの翻訳者に訳されたため、訳書も「集体署名」の形式で署名された。

例えば、1973年5月に商務印書館より出版された田中角栄『大臣日記』と1975年4月に人民文学出版社より出版された松本清張『日本改造法案――北一輝の死』の訳者は「吉林師範大学日本研究室」と「吉林師大日本研究室文学組」である。1972年に上海人民出版社より出版された戸川猪佐武『田中角栄伝』と馬弓良彦『人間田中角荣』は「復旦大学歴史系・経済研究所・国際政治系・上海中医学院・上海新聞出版系統“五・七”干校翻訳組など」と「復旦大学歴史系・政治系・上海中医学院など」により翻訳された。また、『摘译』の1974年第5期と1974年第6期に掲載された山崎豊子・山田信夫『華麗なる一族』の訳者は「上海師大外語系日語教研組」であり、1976年第2期と1976年第8期に掲載された新藤兼人『わが道』と木村琴美『穂波のゆくえ』の訳者は「上海外国語学院日語教研組」であり、1976年第11期と1976年第12期に掲載された「日本战后三十年的思想文化」（作者不明）[644]の訳者は「上海外国語学院日語専業・上

644　作者不明「日本战后三十年的思想文化」上海外国語学院日語専業、上海師範大学中文系外語文学教研組訳、『摘译』1976年第11期（1976年11月）151-167頁、作者不明

海師範大学中文系外語文学教研組」、1976年第12期に掲載された小松干生「雨中的无人售票车」（作家名原文不明、作品名原文不明）[645]の訳者は「上海師範大学干校日本班」である。これらの「集体署名」は、各翻訳者の隷属する機関、学校、また団体から由来していると考えられる。

第4章で述べたように、1976年8月に人民文学出版社から出版された堺屋太一『油断！』の訳者名は「渭文・慧梅」で、1975年に人民文学出版社から出版された有吉佐和子『恍惚の人』の訳者名は「秀豊・渭慧」であり、４人の翻訳家の名前の一字を寄せ集めた「集体署名」である。また、上述の内容から見れば、文革期における日本文学の翻訳活動は、人民文学出版社、商務印書館、作家出版社の所在する北京、上海人民出版社の所在する上海を中心として、吉林などで行われていたと考えられる。上海人民出版社は翻訳文学誌『摘译』の出版社であり、そして文革期に翻訳された日本の文学作品の単行本は大部分が北京で出版された。しかし、文革期の翻訳作品は、すべて政治的な意識に奉仕するという目的で出版されたものであるため、地域の違いによる翻訳ストラテジーの差異などが翻訳作品において特に際立ってはいなかったと考えられる。

先に述べたように、「集体署名」において、「工農兵」の強調が見られる。また、「集体署名」という署名方法は、「私」を打ち破り「公」を樹立する、すなわち文革期の「破私立公」思想[646]から由来すると思われる。文化大革命の大衆運動が激しくなるにつれて、その「私」と「公」はただの経済領域、政治領域の私有と公有にとどまらず、知識の私有と公有へも転化した。「破私立公」思想がもたらした集合意識の形成[647]によ

「日本战后三十年的思想文化」（続）上海外国語学院日語専業、上海師範大学中文系外語文学教研組訳、『摘译』1976年第12期（1976年12月）126-165頁。

645　小松干生「雨中的无人售票车」上海師範大学干校日本班訳、『摘译』1976年第12期（1976年12月）96-125頁。

646　吉村拓三「文革期における『私』と『公』をめぐって」、『紀要』（愛知大学国際問題研究所）第132号（2008年9月）139-161頁、桑島由美子「現代中国におけるフェミニズムと文化研究――戴錦華を中心として――」、『言語と文化』第34号（愛知大学、2016年1月）75-86頁などを参照した。

647　葛慧芬『文化大革命を生きた紅衛兵世代：その人生、人間形成と社会変動との関係を探る』（明石書店、1999年1月）26-36頁。

り、訳者の個人の名前は次第に「集体署名」により取って代わられてしまった。文革期の翻訳活動において「郡策群力」、すなわち「皆で方策を考え、皆で力を合わせる」ことが求められる傾向が見られた。

5.2.2.2 「偽名署名」

文革期の翻訳作品にある「偽名署名」について、馬士奎は「翻译主体地位的模糊化——析“文革”时期文学翻译中译者的角色」[648]の中で、「斉干」、「陽新」、「迅行」、「斉戈」、「万山紅」、「鐘志誠」、「朝暉」、「鐘衛生」などにまとめた。これらの言葉は、文化大革命とその時代を象徴していると考えられる。例えば、1976年に翻訳された吉田精一の『現代日本文学史』の訳者名「斉干」は「一緒にやる」[649]という意味合いを表した。『摘译』1975年第5期に掲載されたシナリオ、勝山俊介「小林多喜二」[650]は「斉邁、漳泉」により訳された。そこにある「斉邁」も「斉干」と同じ、「一緒に進む」の意味で、集合意識による命名方法だと考えられる。また、前述した劇団はぐるま座『沖縄の朝』の訳者は「陽新」である。「陽はまた昇る」、すなわち「未来に希望が溢れる」ことを読者に想い浮かべさせるため、馬士奎の言及した「朝暉」などとともに訳者名として文革期に使われたと思われる。『摘译』1975年第5期に翻訳された金子総一「少年とハト」[651]の訳者は「宜音」であり、時代にふさわしい「適宜の声」が求められたのだと想像できる。

1974年に上海人民出版社より出版された山田洋次等『故郷——日本のシナリオ５篇』の訳者の「石宇」も偽名であるという可能性がかなり高いと考えられる。「石宇」の署名のある日本の翻訳作品は、『故郷——日本のシナリオ５篇』の以外に、『摘译』1973年第2期に掲載された演劇の戯曲、劇団はぐるま座『春雷』、日本の対外関係を主

---

648 馬士奎「翻译主体地位的模糊化——析“文革”时期文学翻译中译者的角色」、『临沂师范学院学报』第28巻第5期(2006年10月)137頁。

649 馬慧嬌「『文革』時期における日本文学翻訳に関する一考察——単行本のテキスト対照を中心に」、『饕餮』第21号(2013年9月)25-49頁を参照した。

650 勝山俊介「小林多喜二」斉邁、漳泉訳、『摘译』1975年第5期(1975年8月)11-91頁。

651 金子総一「少年和鴿子」宜音訳、『摘译』1975年第5期(1975年8月)92-109頁。

題とする丸山静雄『東南アジアと日本』[652]という２つの作品と、「わが国の国旗」、「天安門広場」などの日本語の単語を紹介する絵本雑誌『看图识字』第2期[653]しか見られない。上記の作品はすべて文革期において上海人民出版社より出版された作品である。その他、「安可」[654]、「修敬」[655]、「文耀」[656]、「容容」[657]、「海宇」[658]など、日本文学の翻訳作品の訳者名も偽名であるという可能性がある。

上述した「写作組」において、偽名で文章を発表するのもよく見られる。「北大清華写作組」は「梁効」などを筆名とし、「上海市委写作組」の中で、哲学組の筆名は「翟青」で、歴史組は「羅思鼎」で、文芸組は「丁学雷」、「方沢生」、「任犢」、「石一歌」で、そのほかに、「宮効聞」、「石侖」、「康立」、「方海」、「史鋒」、「史尚輝」、「方岩梁」などもある[659]。「写作組」の発表した文章に偽名の著者名の記載が散見するという点について、尹家民は「“文化大革命”中的梁效、罗思鼎写作

652　丸山静雄『东南亚与日本』石宇訳(上海人民出版社、1974年5月)。

653　石宇編、賽潔華絵『看图识字』第2期(1976年4月)。

654　前述した『诺斯德拉达缪斯的大预言』(脚本：八住利雄、監督：舛田利雄、安可訳)と『我的道路』(新藤兼人、上海外国語学院日語教研究組訳、安可校)の他に、原作：石川達三、監督：山本薩夫「日全食」(「金環蝕」、1975年)安可訳、『摘译』1976年第7期(1976年7月)110-212頁もある。

655　有馬頼義「钉鞋带」(作品名原文不明)修敬訳、『摘译』1974年第7期(1974年12月)137-167頁。

656　K「妄图以小资产阶级人性论歪曲革命作家的形象——批判胜山俊介著电影剧本《小林多喜二》」文耀訳、『摘译』1975年第5期(1975年8月)3-10頁。

657　濱野博「和子死后」(「和子が死んでから」、1972年)容容訳、『摘译』1975年第5期(1975年8月)110-157頁。

658　B・卡西斯「新藤兼人走自己的道路——资产阶级的习性和艺术家的命运」(作家名原文不明、作品名原文不明)海宇訳、『摘译』1976年第2期(1976年2月)91-97頁。

659　「梁効」の中国語の発音は「liang xiao」であり、「两校【両校】」と同じ、北京大学と清華大学を指す。「羅思鼎」の中国語の発音は「luo si ding」であり、「螺丝钉【螺子釘】)」と同じ、1960年代初頭からの「学雷锋【雷峰に学ぼう】」運動で提唱された「做一颗永不生锈的螺丝钉【永遠に錆びない螺子釘になろう】」という雷峰精神から由来した。「丁学雷」も「雷峰に学ぼう」の意味合いで使われていると想像できる。史義軍「“罗思鼎”和“朝霞”事件」、『炎黄春秋』2006年第2期(2006年2月)25-26頁などを参照した。

组」において、個人で署名したとしても、必ず１人で完成するわけではなく、文章に「操作」の痕跡を残さないようにするためである[660]と指摘した。文革期の翻訳活動も同じであると考えられる。すなわち、「偽名署名」は、文革期の翻訳作品が様々な人によって手がけられたという印象を読者に与えるために採用された方法である。「偽名」の背後に誰が実際に翻訳作業を行うか特定できないため、翻訳作品に記載された訳者名も一種の「記号」と考えられる。

5.2.2.3　「署名無し」

翻訳者の「署名無し」の翻訳作品としては、第4章で分析した、文革期に出版された三島由紀夫作品が見られる。また、1976年に人民文学出版社より出版された橋本忍・山田洋次・広沢栄・熊井啓『日本のシナリオ「砂の器」、「望郷」』と戸川猪佐武『小説吉田学校』(第2部　党人山脈)なども、翻訳者の記載が見られない。『摘译』に掲載された日本文学の翻訳作品では、翻訳者の名はすべて記されているが、日本の文学界の情報や資料を整理、翻訳し、記事の形式で中国の読者に紹介する７篇の日本の「文艺动态」においては、著者名が表記されていなかった。

馬慧嬌は「『文革』時期における日本文学翻訳に関する一考察――単行本のテキスト対照を中心に」[661]の中で、「訳者の署名は訳本との所属関係を体現しており、訳者の地位及び翻訳文学自体の地位を意味している」ため、文革期に生きている「訳者の存在が抹消され、翻訳文学分野で得られるはずの尊重も無視された」と論じている。文革期の翻訳作業において、翻訳の行為主体である訳者の独立性は認められていなかったと考えられる。

文革期の翻訳者の個人意識について、中国作家の陳丹燕の訳者への取材、1998年第4期『书城』に掲載された「“你到底要什么”――白皮书时代的往事」から伺うことができるだろう。

まず、一部の訳者は取材を断ったことについて、陳丹燕は以下のように述べている。

660　尹家民「“文化大革命”中的梁效、罗思鼎写作组」、『党史博览』2004年第10期(2004年10月)30頁。

661　馬慧嬌「『文革』時期における日本文学翻訳に関する一考察――単行本のテキスト対照を中心に」、『饕餮』第21号(2013年9月)25-49頁を参照した。

可他们都拒绝见我，不愿意让我知道他们是谁，也不愿意回忆那一段生活，更不愿意接受一个读者对他们的那些作品的谢意。而且，他们以为当时那也不能算是他们的作品，因为当时的许多白皮书，都是集体翻译的，一个人翻一章，最后有一个人通稿，那不是创作，而是流水线，他们觉得自己有过那一段生活，是耻辱的。

【しかし、彼らは私に会うことも断った。彼らが誰かと私に知らせることも、あの時の生活を思い出すことも、それらの作品に対する１人の読者の感謝の言葉を受け取ることも望まない。さらに、あの時、それも自分の作品とみなすことができないと彼らは考えた。当時の白皮書の多くは、集体翻訳であり、１人が１章を翻訳し、最後に１人が原稿をまとめて、それは創作ではなく、ただの流れ作業であるから。彼らは、自分たちにそのような生活があったことが恥辱だと考えた。】[662]

また、中国におけるロシア文学翻訳の第一人者の草嬰も取材を受けた。当時の翻訳作業に対して、草嬰は次のように答えた。

那是没有价值的东西，我不因为自己翻译了它们而觉得自豪，它们浪费了我的生命，在我不得已的情况下。那些书的出版到底有什么意义有什么价值，轮不到我们来说、来想，你说，这怎么可能让一个搞翻译的人接受？(中略)我们当的是翻译机器，他们要的是我们翻译，而不要我们的思想。这可以说是一种耻辱，完全没有人们想象的那种我们在做自己的翻译专业的愉快心情。现在，我们那些人的确都不那么愿意说起那些事，我家里连那些书都没有留，我不想再看到它们，想起来，心很痛。

【あれは何の価値もないもので、自分が翻訳したことを誇りに思わない。私の人生を無駄にした、私がやむをえざる状況下で。それらの本の出版には何

662　陳丹燕「白皮书时代的往事」(原題「“你到底要什么”——白皮书时代的往事」、原載『书城』1998年第4期5-7頁、1998年)、陳丹燕『上海的风花雪月』(上海文芸出版社、2015年7月)301頁。

か意義があるか、価値があるかについて、私たちが言ったり考えたりする番ではない。言ってごらん、翻訳に携わる人が受け入れられるか。(中略)私たちは翻訳マシンであり、彼らに必要なのは私たちの思想ではなく、わたしたちが翻訳することだ。恥辱とも言える。翻訳という自分たちの本職をやっているような、人々が想像する愉快な気持ちはまったくない。今、わたしたちは確かにあまり言いたくない。あれらの本も家に置いていない。もう見たくない。思い返せば、心が痛む。】[663]

名前を伏せたい訳者であれ、草嬰であれ、文革期の翻訳作業、翻訳作品、さらにその時の自分に対して、思い出すこともしたくない、言うこともしたくない[664]と、その思いが驚くほど一致している。また、文革期の経験も、訳者に翻訳というものへの再考をもたらした。すなわち、「集体翻訳」ではなく、翻訳者の個人的な「思想」の表現である。文革期の経歴に対する、実際に翻訳活動に携わった訳者の比較的肯定的な評価がほぼ見られない。その身体的、精神的な苦痛の深刻さに対して、「干校翻訳組」を経験したことがない、局外者としての「私たちが(中略)想像できない」[665]。陳丹燕が取材したのは、文革終了２０年後の1997年、1998年前後だと考えられる。それからさらに２０年後の今日、時間が経つにつれて、文革期の中で生きてきた翻訳者たちはあの時のことに対して、淡然と語られるのか、それとも笑って済ませられるのか、それとも最後まで心の傷痕として残しておくだろうか。

663　陳丹燕「白皮书时代的往事」(原題「“你到底要什么”——白皮书时代的往事」、原載『书城』1998年第4期5-7頁、1998年)、陳丹燕『上海的风花雪月』(上海文芸出版社、2015年7月)308頁。

664　馬士奎「文革期间的外国文学翻译」、『中国翻訳』第24巻第3期(2003年5月)68-69頁、廖七一「翻译批评话语：1966—1976」、『东方翻译』2018年第3期(2018年6月)9-15頁も参照した。

665　陳丹燕「白皮书时代的往事」(原題「“你到底要什么”——白皮书时代的往事」、原載『书城』1998年第4期5-7頁、1998年)、陳丹燕『上海的风花雪月』(上海文芸出版社、2015年7月)301頁。

5.2.3　翻訳者と「潜在翻訳」

1966年から1976年まで、文化専横主義や高圧政策により翻訳者の個人的な意識や自由が縛られ、政治イデオロギーによって翻訳対象を自由に選択できなかったが、この特殊な年代に自分なりに作品を追求する翻訳者もいた。

先ほど述べたように、文革期の外国文学の翻訳は、「公開翻訳」、「内部翻訳」、「潜在翻訳」という３つの形式に分けられた。「潜在翻訳」は、当時の政治イデオロギーに背馳しているため、発表できなかった訳書である。先ほど述べたように、「潜在翻訳」は文革期の「潜在創作」に由来した。「潜在創作」に対して、陳思和は『中国当代文学史教程』の中で次のように述べている。

> 在“文革”前和“文革”当中，中国大陆的当代文学一直存在着潜在的创作，包括历次政治运动中被剥夺了写作权力的知识分子，仍然在用笔表达内心的理想之歌和感情世界，如五六十年代绿原、曾卓、牛汉、穆旦、唐湜等的诗歌，张中晓的随笔，丰子恺的散文，沈从文和傅雷等人的家书等等，尽管他们的个人遭遇、思想倾向和创作风格并不一样，但仍然保持了一种连贯的知识分子精神。这些创作文本在当时的环境下是不可能发表的，但仍然保留了一个时代弥足珍贵的文学声音。
>
> 【「文革」前も「文革」中も中国大陸の当代文学にはずっと潜在的創作が存在していた。政治運動の中で執筆の権利を奪われた知識分子たちも筆で自らの内なる理想の歌や感情世界を表していた。例えば、1950、60年代の緑原、曾卓、牛漢、穆旦、唐湜たちの詩歌、張中暁の随筆、豊子愷の散文、沈従文、傅雷たちの家書など、彼らの個人的境遇、思想的傾向、創作的態度は異なっても、一貫した知識分子の精神が保たれている。これらの文章は当時の環境下では発表不可能だったが、やはり珍重するに足る文学の声を留めている。】[666]

666　陳思和主編『中国当代文学史教程』(復旦大学出版社、1999年9月)8頁。その翻訳について、岩佐昌暲『文革期の文学』(花書院、2004年03月)9頁を参照した。また、「潜在創作」の対義語は「公然創作」だと思われる。

「潜在創作」は「政治運動の中で執筆の権利を奪われた知識分子たちも筆で自らの内なる理想の歌や感情世界を表していた」作品であり、どんなに時代が変わっても、どんなに政治イデオロギーによって制約されても、文学的な独自性の探求に対する「一貫した知識分子の精神」が見られ、「珍重するに足る文学の声を留めている」という文学的意義を持っている。陳思和の述べたように、「潜在」という言葉は、翻訳者の独立意識に深く結びついていると思われる。1980年に、文革期の「潜在翻訳」である、楼適夷が1976年に翻訳した芥川龍之介『芥川龍之介小説十一篇』が湖南人民出版社より出版された。楼適夷は作品の「书后」において、この翻訳作品と文革について、以下のように述べている。

> 我在一九七六年的四月到六月，翻译了芥川龙之介的十一个短篇，到今天居然能变成一本书而正式出版，那是当初连做梦也没有想到过的(中略)。
>
> 一九七六年是怎样的年头，四月又是什么日子，这是大家都知道的。天快要亮的时候，夜照例是特别黑暗而寒冷的。那是我承蒙“姑念老弱”，特别照顾，从接受“再教育”实在同劳改差不离的干校回家已快三年，这三年就整整念了三年书。本来回到破败的老家，书本大半散失，早已“书空咄咄”，总算马列主义的经典著作没动，我就拚老命地啃起《资本论》来，可怜连笔记也做不好，只会抄摘片段，自以为已经懂了，实际还是半懂不懂。一个弄惯笔墨的人，光念书，不动笔，就好象一天没干活，晚上上床，觉得“虚靡太仓粟”，有点对不起人民的“小米”。有少数跟我划不清界限，有时还来走走的朋友，见我闲着没事，都劝我写些回忆，可是我头上“帽子”，背上“包袱”，家人子孙，全都受累，无碑可立，无悔可忏，我就是一个字也写不出来。鲁迅先生说过，不能创作，那就翻译。翻泽也算我的老行业，可是外文书早已空空，不是被人当作封资修的罪状搬运一空，就连自己家人，也论斤计两，卖给收旧货的到造纸厂做纸浆去了。(中略)想想到底还是对近代文学熟悉一点，从友人黄源兄借到了一本《芥川龙之介集》，读来深有兴趣，便动手译起芥川的短篇来。
>
> (中略)正当天安门广场四五运动之后，我在闭门深居之中，作为自己日常的课程，也可以说作为逃避现实，逃避痛苦的一种手段，便选出了自己所偏爱的篇目，重作冯妇，又理旧业，开始翻译起来。一个动惯笔墨，长期被逼停止，

又见到自己亲笔写出来的稿纸，渐积渐厚，首先已得到了劳动的乐趣。而且说起来芥川不但充实了我那时的日常生活，使我每晚上床，感觉这一天没有白过(中略)。但翻译的目的，倒并不准备将来会有发表出版的日子。

(中略)在这后记中我真要说的，(中略)为了国家現代化的建设，安定团结，最为重要，有些恩怨应该忘却，倒是那十年浩劫，不可不永永牢记，决不听其再来！是为记。

【1976年4月から6月にかけて、芥川龍之介の短編小説を１１篇翻訳したが、今日、本として正式に出版できるとは、夢にも思わなかった(中略)。

1976年がどんな年だったのか、４月がどんな日々だったのか、みんな知っている。いつものごとく、夜が明ける頃は、特に暗い、寒い。「老弱への配慮」にあずかり、特別な世話になり、「再教育」を受ける、実質的に労改[667]とあまり差がない、幹校から帰ってきてもう３年近く経ち、まる３年本を読んできた。荒れ果てた自宅に帰って、本もほぼ散逸し、すでに「書空咄咄」[668]になってしまった。どうやらマルクス・レーニン主義の経典的著作には手を触れられなくて、全力を尽くして『資本論』にかじりついていたが、メモもろくに取れなくて、段落だけ書き取っており、自分では分かっているつもりだが、実は半分しか理解できなかった。筆を振るうことに慣れた人として、読むだけで、筆を執らないということは、１日働いていないようで、夜寝る時、「虚糜太倉粟」[669]と感じ、人民の「アワ」に対して申し訳なく思う。私から離れていかない、時々訪ねてきた友達がわずかにあり、彼らは私が暇で何もすることがないのを見て、私に回想録を書こうと勧めた。しかし、私の頭には「帽子」があり、背中には「重荷」があり、家族も子孫もみな巻き添えを食い、立てる碑もなく、懺悔する過ちもなく、私はただの１文字も書けない。魯迅先生は、創作できないなら、翻訳しようと言った。翻訳も私の本業と言っていい。しかし、外国語の作品はとうの昔に空っぽになってしまい、

667　ここにある「労改」は、「労働改造」を指す。

668　「書空咄咄」は中国語の熟語であり、「憤慨」などの意味を表す。また、「書空」も「本が空っぽになった」と理解してもいいため、掛け言葉として使われていると思われる。

669　「虚糜太倉粟」は、「国家の食糧を無駄遣いする」ことである。

封資修[670]の罪状で持ち去られたか、自分の家族でさえも、量り売りで古物商に売り、製紙工場でパルプに使われたか。(中略)考えてみれば、近代文学のほうに少し詳しいため、友人の黄源さんから『芥川龍之介集』を借りて、興味深く読んで、芥川の短編小説に着手した。

(中略)四五天安門事件[671]後、私は門を閉ざして家に引きこもり、自分の偏愛した作品を選び、再び元の職業に戻り、翻訳を始めた。これを日課とし、あるいは現実、苦痛から逃がれるための手段とも言える。書き慣れた人が、長い間、執筆を中止せざるを得なくなった後、自分の手書きの原稿用紙が溜まっていて、ますます厚くなるのを見て、何よりもまず労働の喜びを手に入れた。そういえば、芥川が当時の私の日常生活を豊かにしてくれただけでなく、毎晩寝るとき、今日一日を虚しく過ごしていないと感じた(中略)。しかし、翻訳したのは、発表や出版を目的としているわけではない。

(中略)後書きで本当に言いたいのは、(中略)国家の近代化建設のためには、安定と団結が最も重要であり、一部の恩怨は忘れ去るべきだが、あの十年浩劫[672]、永遠に忘れてはならない、二度と起こしてはならないのである。後書きはここまで。】[673]

楼適夷は、1950年代に人民文学出版社副社長から『译文』、『世界文学』など翻訳文学誌の編集委員まで務めてきた[674]。しかし、その１０年後、すなわち文革期に入っ

670 「封資修」とは、「封建主義、資本主義、修正主義」である。

671 「四五天安門事件」とは、1976年4月5日、同年1月に死去した周恩来に捧げられ花輪を当局が天安門広場から撤去したことに怒った民衆が起こした抗議運動である。李城外『追憶の文化大革命』(上巻：咸寧五七幹部学校の文化人)萩野脩二、山田多佳子訳(ボイジャー、2014年6月)2007頁を参照した。

672 中国語の「浩劫」は「動乱」の意味を表す。中国における「十年浩劫」は、１０年の動乱の意味で、特に1966年から1976年までの「文化大革命」を指す。

673 楼適夷「书后」、芥川龍之介『芥川龙之介小说十一篇』楼適夷訳(湖南人民出版社、1980年5月)165-171頁。

674 李城外『追憶の文化大革命』(上巻：咸寧五七幹部学校の文化人)萩野脩二、山田多佳子訳(ボイジャー、2014年6月)13頁を参照した。

てから、1950年代にはまだ中国の著名な作家、文学翻訳家であった楼適夷は、「幹校」で「労改とあまり差がない」「再教育」を受けなければならず、人々から軽蔑された対象になった。楼適夷の文化大革命に対する思いは、『芥川龍之介小説十一篇』の後書きから、かすかに浮かび上がってくるだろう。1976年4月から6月にかけて、楼適夷は芥川龍之介の短編小説を１１篇翻訳した。しかし、「1976年がどんな年だったのか、4月がどんな日々だったのか」というと、楼適夷からみれば、「いつものごとく、夜が明ける頃は、特に暗い、寒い」のである。文化大革命終息直前でありながら、楼の感じた「暗さ」、「寒さ」は「四五天安門事件」に由来すると考えられる。楼適夷は1976年4月の抗議運動に１回しか参加していなかったが、当局の調査を受けた[675]。「反動」的な「知識分子」という名の「帽子」と「重荷」を背負った楼に対して、その「暗さ」、「寒さ」は、「再教育」の再来、文革の再来への不安と恐れだと考えられる。楼適夷は、芥川作品を「翻訳したのは、発表や出版を目的としているわけではない」と明言した。強烈な精神的なストレスの中、翻訳そのものを「現実、苦痛から逃がれるための手段」としていた。また、翻訳という行為から、「労働の喜びを手に入れ」、「日常生活を豊かにし」、「虚しく」ない毎日を過ごした。また、後書きの最後に、楼適夷は「あの十年浩劫、永遠に忘れてはならない、二度と起こしてはならない」ことを繰り返し強調した。すなわち、文革の波乱において、孤独と恐怖の中にある楼に対して、翻訳というのは一種の救済だったと言える。

文革期に出版される機会のなかったこれらの「潜在翻訳」は、文革期の外国文学の翻訳活動に対する研究の中で、見過ごしてはいけない、高い研究価値を持っている資料だと考えられる。訳者による自主的な翻訳活動に、訳者が自分の文学の美意識に忠実で妥協しなかったという訳者の反骨精神が見られる[676]。そこには、無理やり引き受けさせられた翻訳任務から脱出し、自由に作品を読み、訳し、そして文字にするという行為への憧れと欲求も見られる。翻訳者が出版できないのを承知の上で、自分の理念と一致している作品に手をつけたのは、文革期の文学一元化への声なき抵抗だったと考えられる。

675　楼適夷「书后」、芥川龍之介『芥川龙之介小说十一篇』楼適夷訳（湖南人民出版社、1980年5月）167-168頁。

676　馬士奎「文革期间的外国文学翻译」、『中国翻译』第24巻第3期（2003年5月）68頁。

第3節　　読者の視点から見る文革期の翻訳

5.3.1　　読者と編集者、翻訳者の相対的な関係

文革期に翻訳された外国の文学作品は、読者に政治的な立場を強制的に受け入れされた。読者と編集者、訳者の相対的な関係について、前述した、『摘译』1976年第1期に掲載された「答读者——关于《摘译》的编译方针【読者に答える——『摘译』の編訳方針について】」から読み取ることができるだろう。

読者の翻訳作品の芸術性への不満に対して、『摘译』の編訳組は、「你和你的朋友对《摘译》感到不满足，这是由于你们的要求和《摘译》的任务不尽一致的缘故【あなたとあなたの友達が『摘译』に満足できないのは、あなた達の要求が『摘译』の任務とは一致していないからである】」[677]と答えた。編集者は、作品を翻訳する目的は、読者の文学的嗜好にこたえるためではなく、政治的な任務を果たすためであると明記した。読者の好みが文革期の翻訳作品の選定において考慮に入れられていなかったと考えられる。

また、読者が編訳組への手紙にて「我在单位里看到了你们编的《摘译》，觉得新奇，便借了几本带回家看。我的几个朋友知道了，也都纷纷来借，不到几天，几本书便被我们翻完了【職場であなたたちの編集した『摘译』を見て、物珍しいと思い、何冊を借りて持ち帰って読んだ。何人かの友人にそれが知れ渡り、彼らもみな借りに来た。数日足らずの間に、私たちは何冊も読み終えてしまった】」[678]と自分で述べた。読者が友人に「内部翻訳」を貸すという行為に対して、編訳組は「《摘译》是一本只供有关研究部门和专业单位参考的内部刊物。(顺便提一下：不是为了批判和研究，只是单纯的阅读，甚至为了“欣赏”，而在人们中间流传，那是不对的。)【『摘译』は関連研究部

677　《摘译》(外国文芸)編訳組「答读者——关于《摘译》的编译方针」、『摘译』1976年第1期(1976年1月)172頁。

678　《摘译》(外国文芸)編訳組「答读者——关于《摘译》的编译方针」、『摘译』1976年第1期(1976年1月)171頁。

門や専門単位にのみ参考資料として提供する内部刊行物である。(ついでながら：批判や研究のためではなく、単純に読むため、さらに「鑑賞」のために人々の間で広められているのは間違いだ。)】」[679]と批評した。読者が「鑑賞」の目で文革期の翻訳作品を読むというのは「間違い」だと端的に指摘した。文革期の翻訳活動において、編集者が相対的に優位的な立場に立ち、読者を導いていたと考えられる。

5.3.2　文革期の「地下読書運動」

前述の通り、文革期における「内部翻訳」は中国大陸特有の１つの出版方法であり、公開出版されておらず、一般の民衆の手に入らなかったため、読者が極めて特定されていた。文革期において、外国の訳本を読むという行為そのものも一種の「政治资本【政治的資本】」[680]と見做された。しかし、文革期に一部の幹部や知識人階級が様々なルートから内部発行の翻訳作品を入手するようになり、またものすごいスピードで友人の中で伝わり、当時の青年読者へ与えた精神的な衝撃と影響は大きかった[681]。「限制、左右国民思维【国民の思惟を制限し、支配する】」ことを目的とした文革期の翻訳作品も、当時の若者の「启蒙的教科书【啓蒙的な教科書】」[682]になっている。

文革期の「地下読書運動」[683]について、当時の北京師範大学外国語学院の学生であった安希孟によると、文革の後期において、一部の書店が解禁され、当時内部発行された訳本が古本市場にも入り、学生が手に入れることが可能になっており、そのときは知識不足のため、難解な部分が多く、また学生や教員と交流することはできなかったが、これらの訳本を通して得た外国の知識には新鮮さが感じ、当時の安にとってのどの渇きを潤すような貴重な物だった[684]。

679　《摘译》(外国文芸)編訳組「答读者――关于《摘译》的编译方针」、『摘译』1976年第1期(1976年1月)172頁。

680　廖七一「翻译批评话语：1966―1976」、『东方翻译』2018年第3期(2018年)14頁。

681　印紅標「文革後期における青年たちの読書と思想的探求」土屋昌明訳、『専修大学社会科学研究所月報』第585号(2012年3月)68-80頁を参照した。

682　廖七一「翻译批评话语：1966―1976」、『东方翻译』2018年第3期(2018年)14頁。

683　宋永毅「文化大革命中的異端思潮」、『二十一世紀』1996年8月号(1996年8月)54-64頁などを参照した。

684　安希孟「安希孟回忆录(七)――乱世读书」、『记忆』2015年第125期(2015年2月)69-72

また、北京大学を卒業した政治学学者の王紹光は、文革期の翻訳作品に対して、「這些書是當年的槍手貨，因為它們是打開通往世界外部的窗口，人人希望先讀為快，書在朋友之間周轉效率極高，有的書甚至異地流動【これらの本が当時の人気商品であるのは、外部の世界へ通じる窓だったからだ。誰でも最初に読みたがり、友達の間に効率よく回されており、さらに一部の本が他の都市に渡されたこともある】」[685]と述べた。文革期の訳本に対して、当時の読者の一部は「个人化的审美阅读【個人的な審美に沿った読み方】」[686]をした。その中で、「人情味和人道主义精神【人情味と人道主義精神】」[687]を感じ取り、「新鮮な驚きと感動を覚えた」[688]読者もいた。翻訳から外国文化を味わい、思想的啓蒙を獲得した[689]読者もいた。外国作品にある「对人物内心复杂性的描写【人物の内心の複雑性に対する描写】」[690]に心を動かした読者もいた。さらに、孫軍悦は『現代中国と日本文学の翻訳：テクストと社会の相互形成史』において、「こうした限定した読者に向けて刊行された書籍は、様々なルートを通じて、当時の若者たちに計り知れない知的愉楽を提供」する[691]と述べている。

文革期の翻訳作品に対して、読者の読み方や選択により、一種の「脱政治化」された傾向が見られる。読者の読み方は、編集者や翻訳者の予想した結果を覆して、「与

頁を参照した。

685　王紹光「拓展文革研究的視野」、『二十一世紀』1995年10月号(1995年10月)101頁。井延鳳「笔记本、中转站与消隐的把关人――“文革”地下文学的手抄传播载体及其特色」、『中国文学研究』2019年第3期(2019年9月)170頁も参照した。

686　查明建、謝天振『中国20世纪外国文学翻译史』(上)(湖北教育出版社、2007年2月)763-764頁。

687　鮑爾吉・原野「《摘译》之忆」、『档案春秋』2010年第2期(2010年)52頁。

688　辻田正雄「1971年の出版工作座談会について」、『仏教大学文学部論集』第94号(2010年3月)135頁。

689　楊義主編、周発祥、程玉梅、李艶霞、孫紅、張衛晴著『二十世纪中国翻译文学史』(十七年及“文革”卷)百花文芸出版社(2009年11月)231頁。

690　陳丹燕「白皮书时代的往事」(原題「“你到底要什么”――白皮书时代的往事」、原載『书城』1998年第4期5-7頁、1998年)、陳丹燕『上海的风花雪月』(上海文芸出版社、2015年7月)310頁。

691　孫軍悦『現代中国と日本文学の翻訳：テクストと社会の相互形成史』(青弓社、2021年2月)24頁。

翻译初衷迥异的感受和结论【翻訳の最初の目的とはまるっきり違っている感受と結論】」[692]に達している。さらに、文革に対する全面的にネガティブな評価の下で、イデオロギーを訴え、政治的な目的で存在したと思われる翻訳文学には読者を引きつける芸術性の要素も含まれていたと考えられる。

692　楊義主編、周発祥、程玉梅、李艶霞、孫紅、張衛晴著『二十世紀中国翻译文学史』(十七年及“文革”卷)百花文芸出版社(2009年11月)232頁。廖七一「翻译批评话语：1966―1976」、『东方翻译』2018年第3期(2018年)14-15頁も参照した。

第6章　　結論

本論文では、1966年から1976年までの中国の内政、外交政策を分析しながら、政治イデオロギーの宣伝を達成するために翻訳された日本の文学作品とその原作との比較検討を通し、文革期の中国における日本文学の翻訳実態を比較文学の視点から系統的な考察を試みた。

第1章「序論」では、先行研究を検討した上で、日本文学の翻訳実態の課題に接近する研究方法について考え、先行研究で残された課題を、文革期の翻訳活動の実施状況、翻訳された日本の文学作品の数量とジャンル、翻訳対象の選択基準、翻訳作品から見られる翻訳ストラテジー、編集者や訳者の外国文学に対する解読方法、翻訳テクストと原文テクストとの違いと当時の中国の時代背景と社会状況との関わり、賛助者、翻訳者、読者の翻訳活動における役割についての７つの研究設問に設定した。

第2章「文化大革命期の翻訳活動」では、歴史的な観点と中国の対外関係の視座から、外国文学の全体的な翻訳事情を概観し、翻訳作品の刊行形式と、翻訳活動の方針を手がかりとして、文革期に翻訳された日本の文学作品を分類し、整理した。

文革期の外国文学に関わる翻訳活動は、おおよそ「1966年から1971年まで」、「1971年から1976年まで」という２つの時期に分けられた。前期は、毛沢東や江青らの文革派の指示により、ソ連の修正主義文学への批評を除き、ほかの外国文学の翻訳活動はほぼ停滞した。後期に入り、外国との交流が活発になったことが契機となり、翻訳の重要性が再び確認され、新しい文学活動が始まった。それにより、ソ連、アメリカ、日本という三ヵ国の文学作品は政治上の目的で中心的に紹介、翻訳された。

文革期の外国文学の翻訳は、主に「公開翻訳」、「内部翻訳」、「潜在翻訳」に分けられた。小林多喜二の作品など、政治イデオロギー的に「間違い」のない作品は、「公開翻訳」の中心となった。「内部翻訳」は、政府の幹部や一部の研究者の「批判の参考に供する」ため、一般の市民は買えない、各出版社が内部的に発行した訳書及び内部向け定期刊行物に発表された翻訳作品である。「内部翻訳」として出版された日本の文学作品の数は、他の訳本より圧倒的に多い。「潜在翻訳」は、当時の翻訳活動の基本方針に背馳していたため、訳者が出版不可能を知りながら、個人的な意志に

基づいて自主的に翻訳を始めて、文革後発表した翻訳作品である。「内部発行」された専門的な翻訳雑誌『摘译』において、「文芸を通して、ソ、米や日などの国における社会思想、政治と経済状況を指摘し、反帝反修とブルジョア階級の批判のために、材料を提供する」という文革期の翻訳活動のおおよその方向性が見られる。

第3章「文革期における日本文学の選択基準」では、翻訳作品の出版説明、前言、後記、及び評論などへの検討を行うことにより、文革の頃、翻訳対象として選択された日本の文学作品の外部に見られる全体的な翻訳ストラテジーをまとめた。さらに、比較文学の視点から、同時期に翻訳されたソ連、アメリカ、日本の文学作品のそれぞれの特徴を分析した。

文革期の翻訳活動において、編集者や翻訳者は、訳本の「出版説明」や評論などの中で、作品の「正しい」解読方法を読者に説明していた。翻訳作品の出版説明などの検討を行った結果、文革期の翻訳対象として選択された日本の文学作品に共通する特徴を、「特定作家の代表作と関連作品」、「労働者の階級闘争と革命運動を宣揚する作品」、「軍事、戦争の面から、反帝国主義、反修正主義を唱える作品」、「日本の深刻な経済、政治、社会問題を反映する作品」、「日本における文学活動の紹介」という５つに概括することができる。

小林多喜二、三島由紀夫、山田洋次など、「特定作家」の作品が文革期に翻訳、出版されたのは、作家本人の政治的な立場、作家と中国との関係などと密接に関わっている。そして、毛沢東の「工農兵」の文学方針を実行するため、日本の「労働者の階級闘争と革命運動」を宣伝し、プロレタリア階級の闘争性と革命性を賛美する作品も翻訳対象とされた。また、編集者が「反帝国主義、反修正主義を唱える」翻訳作品の前言などで、日本の軍国主義を猛烈に批判した。深刻な社会、政治、経済問題を反映する作品は、かなりの比重を占めている。日本の経済危機やインフレーション、農業問題、石油問題から、ブルジョア階級内部の闘い、政治上の不安定や、国家機構の腐朽、犯罪問題、高齢化問題、青少年の精神障害に至るまで、指摘された。また、日本文学界における文学活動の紹介、中国文学の翻訳などに関わる情報も翻訳された。

文革期において、「ソ連とアメリカとの『デタント』と『世界制覇』」や『「時代の英雄」の造形』を反映するソ連文学、「アメリカの黒人運動」に関わるアメリカ文学、「中日国交の正常化」に言及した日本文学も中心的に翻訳された。翻訳作品の編集者は、三ヵ国の社会イメージを政治イデオロギーの都合に従って造形する傾向が見

られる。作品の種類、出所、掲載時期など、作品の外部に見られる全体的な翻訳ストラテジーについて言うと、翻訳活動の編集者らは「映画のシナリオと演劇の戯曲」、文革期の中国と深く繋がりをもつ「日本共産党(左派)」の機関紙と関連紙より掲載された作品、1970年代以降に発表された「現代作品」などを好んで翻訳する傾向が見られる。また、翻訳、評論活動においては、「各労働者階級」が積極的に参加していた。文革期に出版された文学作品は、主に政治イデオロギーの基準で判断されており、その「芸術性」は重要視されていなかった。

第4章「文革期における日本文学の翻訳ストラテジー――作品の分析を中心に――」では、文革期に翻訳された作品を検討対象とし、翻訳者の出版目的と原作者の執筆目的における意図的なギャップを翻訳作品の前言、後記などを分析しながら、翻訳テクストにおいて意訳、省略、抄訳、増訳、減訳といった翻訳方法の使用、翻訳テクストと原文テクストとの違い、翻訳テクストに見られる意図的な注釈などを考察した。

文革期において、小林多喜二の３作『沼尻村』、『不在地主』、『蟹工船』がすべて中国の民衆を指導する「公開翻訳」として出版された。中国の学術界で、政治イデオロギーの影響を受け、小林に対する評価は終始一貫している。その人物が「優秀なプロレタリア文学の代表者」であり、その作品が「戦闘性に富んだ革命文芸作品」である。そして、文革期の初頭から、三島由紀夫が「文化大革命に関する声明」などを発表した時点より、三島とその作品には「反文革」、「反共」という印が刻み付けられていた。『憂国』と『豊饒の海』４部作に対して、翻訳者は「武士道」、「ポルノ」、「軍国主義」、「天皇制」などの要素に満ちているという政治的な評価を下した。現在の中国の学術界における三島文学への評価に、いまだに文革時代の影響が残っている。有吉佐和子『恍惚の人』が翻訳対象として選択された理由には、日本の深刻な高齢化問題と関係することもあり、有吉が中国と密接な関係にあったこともある。

次に、日本の農業、石油問題に関わる作品への関心の高まりは、当時中国自身の政策に由来する。「農業は大寨に学べ」や「工業は大慶に学べ」運動の推進により、1970年後の中国の農業、石油産業の発展は相対的に一時的な安定期に入っていた。文革期における『穂波のゆくえ』、『故郷』、『油断！』などの日本文学の翻訳は、当時中国の農業、石油産業の集団化と社会主義化とつがなりがあるという可能性がある。また、翻訳者は作品の「出版説明」において、日本の農業や石油の破綻を指摘することにより、中国の政策上の優位性を暗示し、「自力更生」の戦略を唱えたように見受

けられる。更に、文革期に提唱された、楽観主義と科学の現実性を重視する科幻小説論をもとに、終末論をテーマとした『日本沈没』、『ノストラダムスの大予言』などの日本のSF作品は批判の対象となった。作品の梗概を「摘んで」翻訳した結城昌治『不良少年』の訳文において、翻訳者は政治的な目的に応じて、読者の注意を「青少年のメンタルヘルス」の社会現象や「少年少女の恋」からそらして、犯罪問題、暴力問題及び公害問題などに移し、日本の社会的不安定を中国の読者に提示した。

上記の作品の原文テクストと翻訳テクストとの対照を行うことにより、訳文には誤訳、意訳、増訳などが存在しているが、全体として、文革期の翻訳者は原文テクストを忠実に翻訳したと言える。原作の行為主体である原文の作者と翻訳の行為主体である翻訳者という両者が作品を通し、読者に伝えたい内容には意図的なずれが確かに見られる。しかし、訳者は自分の政治イデオロギーに従った作品への解読方法を、翻訳テクストにおいてではなく、出版説明や前言、訳注などで表現している傾向がある。

外国作品の訳文において、省略や削除などの翻訳手法も訳者に使われている。限られた翻訳時間、原作の字数の膨大さ、訳者本人の関連する背景知識の欠如などにかかっている。省略や削除により、原作の物語性の完成度、登場人物の造形などがある程度損なわれたが、独立した文学作品として捉えられると、各訳文は構造的にバランスが取れているため、翻訳作品の読者にとって作品の主旨を理解するのに全体的に差し障りがないと考えられる。

訳者が翻訳テクストにおいて実施した翻訳ストラテジーから、文革期の「禁欲主義」、「婦女の力」の重視、対ソ日米の敵対意識、外国との交流制限など、当時の社会背景を読み取ることが可能である。また、訳本の翻訳テクストには、「堕落分子」、「造反」、「変節分子」、「資本家」、「階級」、「旧人物」などの「文革言語」も散見する。『沼尻村』、『不在地主』、『蟹工船』、『憂国』、『恍惚の人』などの作品の翻訳者は当時の日本文学研究者の第一人者たちが担当しているため、訳本の質もかなり高い。訳者は翻訳テクストにおいて、中国の成語、慣用句、修辞的技巧の対句を巧みに用い、簡潔で練られた訳文にした。さらに、翻訳者が中国の読者の表現習慣を意識し、違和感を感じさせないため、意訳の翻訳手法を用いたことも見られる。また、文革期の作品は複数の訳者により翻訳されることが多いため、外国作品に対するごく大まかな翻訳方針が存在しているが、各作品における具体的な翻訳ストラテジーが統一されておらず、各翻訳者により決められた。

第5章「文革期における日本文学の翻訳作品に関わる人々」では、文革期の翻訳活動における賛助者、翻訳者の果たしたそれぞれの役割、読者の翻訳作品への読み方、また賛助者、翻訳者と読者との相対的な関係などについて考察を行った。

文革期において、翻訳活動の完全な組織化、計画化、統一化が求められていた。文学の創作方法として唱えられた「指導者、創作者、群衆」の「三結合」の中で、翻訳活動の賛助者は「指導者」の立場に立ち、翻訳活動の計画、翻訳対象の選択など、翻訳ストラテジーにまつわるすべての「思想を提供」した。しかし、文革終結後、「歴史決議」の公表により、文革全面否定論が流行し、「権力機構に仕え」ながら、「権力機構」の中にいた賛助者たちも、文革後の歴史清算に直面せざるを得なかった。賛助者の「指導者」から「犯罪者」への道には、時代的なアイロニーが見られる。

外国語と外国文学に関わる仕事に従事した翻訳者には、文革の当初から、「反動的」、「右派分子」というレッテルが貼られていた。1971年に翻訳活動が再開されたとはいえ、翻訳者には作品の翻訳に関して厳しい規制が課せられていた。文革期に翻訳された日本文学は、ほぼ「集体署名」、「偽名署名」、「署名無し」の形で署名されたことから、訳者の独立性と自主性は認められていなかったと言える。また、一部の訳者は、文革期に出版される機会がないと知りつつも、外国文学の翻訳に着手し、文革期の文学一元化への無声的な抵抗と見做される。

文革期において、編集者は政府の主流のイデオロギーに従い、相対に優位的な立場に立ち、読者を導いていた。また、民衆の文学作品への欲求から「地下読書運動」も生まれた。古本市場で買ったり、友人の中で伝わったりして、外国の文学作品を入手した読者は、その作品から精神的な衝撃を受けた。読者の文革期の翻訳作品に対する読み方は、本来の出版目的とはまるっきり異なり、「脱政治化」された要素が見られる。

文革期において、『毛沢東選集』、『毛主席語録』など中共と国家指導者の著書を英語、ロシア語、日本語などに翻訳し、中国の革命経験を宣伝することによって、国際世論に影響を与え、自らに有利な国際環境を形成する[693]ことが対外的に重要であっ

693　滕梅、呉菲菲「翻译政策作用下的国家翻译机构——以中央编译局为例」、『外语教学』第36巻第4期(2015年7月)111-112頁。

た。同様に、中国国内の読者に対して中国語に翻訳された外国の文学作品は対内的に指導の役割を果たしたと考えられる。

文化大革命の時代において、外国文学の作品は、国家機関が対内的なプロパガンダを目的として翻訳したものであるため、翻訳対象や翻訳方法に関連する文革期の全体的な翻訳ストラテジー全般は、政治イデオロギー、賛助者の解読方法、文化的背景、社会的状況など、さまざまな要因に影響されていたと考えられる。文革後の中国での文学研究の持続的な発展につれ、翻訳対象の選択などの翻訳ストラテジーは変化していった。文化大革命の時代に重視された原作にある政治的要素、社会的要素より、原作の質と文学性、市場と読者のニーズなどに注目する出版社が増えてきた[694]。しかし、文革当時、翻訳活動の賛助者や翻訳者たちの考えには、これらの要素は一切なかった。すなわち市場と読者など、相対的に政治上の地位が下の人のニーズは考慮に入れられていなかった。1966年から1976年までの翻訳活動において、規定された政治イデオロギーと異質な思想を包容する姿勢は見られなかったと言える。

翻訳活動の中で、翻訳者は翻訳ストラテジー、政府と賛助者、文化的背景などから、厳しい制限を受けながら、外国文学の翻訳に対して一種の柔軟性を持っていたと考えられる。訳者は自分のできる範囲内で原文テクストを忠実に翻訳した上で、翻訳テクストにおいて直訳や意訳を柔軟に併用し、中国社会の特性に合わせて増訳や削除を重ね合わせ、当時に忌避された性的描写や複雑で難解な科学的な記述などを省略した。読者が異文化を理解する際に、誤解が生じないように、両国の社会意識上の差異に配慮し、訳者はその欠落を補ったりしている。

文革期の翻訳文学に思想上の単一性と制約性があることは認めなければならないが、読者の読後の反応からすれば、文革期に翻訳された外国文学は、翻訳の最も基本的な機能である外国文化や異国情緒の移入[695]という役割を果たしていた。また、文化大革命期の翻訳文学により、当時の中国の社会文化、政治文化と日本文学の衝突が明らかになり、さらに当時の外国文学の受け入れの程度、範囲、基準も明らかにされた。

694　洪錦雪「操控理论视阈下的小说英译特点和策略研究――以贾平凹的《高兴》英译本为例」(福建師範大学修士学位論文、2019年6月)67-68頁。

695　謝天振「翻译研究“文化转向”之后――翻译研究文化转向的比较文学意义」、『中国比较文学』2006年第3期(2006年)8頁。

1981年の「歴史決議」の採択から影響を受けた中国の文学界、学術界において、文革期の翻訳活動は、「翻訳の政治的功利主義の極端な表現」[696]であり、「外国文学の真の姿を歪曲する」[697]と指摘されたが、文化大革命期の翻訳作品が、政治的な目的で中国の文壇に登場したとしても、それが単に政治的な道具としてではなく、外国文化交流の手段としても受け入れられていたことは、当時の読者の反応から明らかである。読者が翻訳作品を通し外国を想像、理解するという点は、文革前も、文革期も、あるいは今も変わっていない。文革期の読者は、与えられた「正しい思想」を受け入れるのではなく、自分の思いで作品を理解し、自分の考えで作品を解釈し、自分の感情で作品を受け止めていると考えられる。それは、統一されたイデオロギーに対する個人の反発とも言え、文化大革命という奇妙な時期に、全体的な社会環境を暗黙のうちに受け入れてからの選択とも言える。

文化大革命に対して、１０年間の「文化断层【文化的断層】」[698]という評価がしばしば見られるが、文革期の翻訳は「文化大革命後の思想解放運動の地ならしを果たした」[699]のである。文革後、「“文革”期间的思想禁锢被打破，人们的思想意识与价值取向开始呈现多元化状态【「文革」期の思想的かせが打ち破られて、人々の思想意識や価値観が多元化の状態を呈し始め】」[700]、「人们排队购买外国文学作品【人たちは外国文学の作品を買うために行列し】」[701]、「中国翻译的空前高潮【中国翻訳の空前の高まり】」[702]を巻き起こした。文革期に翻訳された外国文学の創作手法も、後から

696　馬士奎「塑造美国形象——“文革”期间对美国当代文学作品的译介」、『临沂师范学院学报』第31卷第2期(2009年4月)67頁。

697　馮至「继续解放思想，实事求是地展开外国文学工作——在中国外国文学学会第一届年会上的报告」、『外国文学研究』1981年第1期(1981年)6頁。

698　張小平「论新时期以来的中国先锋戏剧」(復旦大学博士学位論文、2007年4月)1頁、陳丹青「人文与教养」、2008年9月15日『作家文摘报』、高衛華「中华民族传统文化三个传播断层反思」、『现代传播』2012年第11期(2012年11月)21-26頁などがある。

699　孫軍悦『現代中国と日本文学の翻訳：テクストと社会の相互形成史』(青弓社、2021年2月)24頁。

700　李晶『当代中国翻译考察(1966–1976)——“后现代”文化研究视域下的历史反思』(南開大学出版社、2008年9月)155頁。

701　馬士奎「文革期间的外国文学翻译」、『中国翻译』第24卷第3期(2003年5月)69頁。

702　李晶『当代中国翻译考察(1966–1976)——“后现代”文化研究视域下的历史反思』

現れた若手作家の参考になり[703]、文革後１０年の「新時期文学」に影響を及んでいる[704]。文革期の外国文学の翻訳作品が少なかったからこそ、翻訳の持つ影響力は、肯定的であれ否定的であれ、数倍にも膨れ上がっていた。これは、この時代が持つ特別な力だったと考えられる。作品の文学性や翻訳の稚拙さは別として、閉ざされた時代に、外国の「新鮮さ」が入ってきたのは意味のあることであった。文革期の翻訳に潜在した文学的な影響力は、文革後の中国の翻訳文学、現代文学の発展を加速し、歴史的脈絡の中で「触媒」という重要な役割を果たしたと考えられる。

本論文は、中国大陸の「文化大革命」期に翻訳された日本文学を研究対象とし、当時の中国の内政と外交政策を分析しながら、文化大革命という特殊な時期の翻訳活動に焦点を当てて分析した。先行研究においては、この時期の日本文学の中国語訳の特徴の全体的な傾向についての概説的な指摘にとどまっており、個々の事例について具体的かつ詳細に考察されることはなかった。本研究では特徴を浮き彫りにするにふさわしい作品をいくつか選択した上で、翻訳の様相を具体的に吟味し分析することを旨とした。翻訳研究はある意味で言葉の研究であり、研究が実証的であるためには、具体的な言葉の変換の様相の例示が不可欠であると考えられるからである。こうした検証を通じて同時期の翻訳の特徴の全体像をイメージすることが可能になったと考えられる。本論文は、政治イデオロギーと密接な繋がりを持った文革期の翻訳活動の本質をより深く理解し、文革期の日本文学の翻訳を中国の翻訳史に位置づける一助となると考えられる。

（南開大学出版社、2008年9月）155頁。

703　馬士奎「塑造美国形象――“文革”期间对美国当代文学作品的译介」、『临沂师范学院学报』第31卷第2期（2009年4月）67頁。

704　查明建、謝天振『中国20世纪外国文学翻译史』（上）（湖北教育出版社、2007年2月）763-764頁。

参考文献(刊行年順)

(同じ刊行年の文献は著者名、作品名の拼音順と五十音順とする。)

【文革期の日本文学の翻訳】

・単行本

西野辰吉『晨霜路上』龐春蘭訳(作家出版社、1966年5月)。

日本反動作家　三島由紀夫『忧国』訳者不明(人民文学出版社、1971年11月)。

日本反動作家　三島由紀夫『天人五衰』訳者不明(人民文学出版社、1971年12月)。

戸川猪佐武『田中角荣传』復旦大学歴史系、経済研究所、国際政治系、上海中医学院、上海新聞出版系統“五・七”干校翻訳組等訳(上海人民出版社、1972年8月)。

日本反動作家　三島由紀夫『暁寺』訳者不明(人民文学出版社、1972年8月)。

田中角栄『我的履历书』秦新訳(商務印書館、1972年8月)。

馬弓良彦『田中角荣其人』復旦大学歴史系、政治系、上海中医学院等訳(上海人民出版社、1972年9月)。

日本反動作家　三島由紀夫『奔马』訳者不明(人民文学出版社、1973年5月)。

田中角栄『大臣日记』吉林師範大学日本研究室訳(商務印書館、1973年5月)。

小林多喜二『沼尾村』李徳純訳(人民文学出版社、1973年5月)。

小林多喜二『蟹工船』葉渭渠訳(人民文学出版社、1973年10月)。

小林多喜二『在外地主』李芒訳(人民文学出版社、1973年10月)。

日本反動作家　三島由紀夫『春雪』訳者不明(人民文学出版社、1973年12月)。

山田洋次等『故乡——日本的五个电影剧本』石宇訳(上海人民出版社、1974年6月)。

内徳・卡爾黙『阿维马事件』鐘衛訳(上海人民出版社、1975年4月)。

松本清張『日本改造法案——北一辉之死』吉林師大日本研究室文学組訳(人民文学出版社、1975年4月)。

有吉佐和子『恍惚的人』秀豊、渭慧訳(人民文学出版社、1975年4月)。

遍照金剛『文镜秘府论』周維徳校訂(人民文学出版社、1975年5月)。

吉田精一『现代日本文学史』斉干訳(上海人民出版社、1976年1月)。

橋本忍、山田洋次、広沢栄、熊井啓『日本电影剧本《沙器》《望乡》』訳者不明(人民文学出版社、1976年3月)。

五味川純平『虚构的大义——一个关东军士兵的日记』本社翻訳組訳(人民文学出版社、1976年3月)。

戸川猪佐武『党人山脉』(小説《吉田学校》第二部)訳者不明(上海人民出版社、1976年6月)。

小松左京『日本沉没』李徳純訳(人民文学出版社、1975年6月)。

堺屋太一『油断』渭文、慧梅訳(人民文学出版社、1976年8月)。

・『摘译』掲載分

阿・格列鮑涅夫、尤・拉兹曼「礼节性的访问」訳者不明、『摘译』1973年第1期(1973年11月)。

阿・斯彼什涅夫「夜晚纪事」、『摘译』1973年第1期(1973年11月)。

阿・約爾金「核潜艇听到警报出发」訳者不明、『摘译』1973年第1期(1973年11月)。

卡爾敏「熊熊燃烧的大陆」、『摘译』1973年第1期(1973年11月)。

《摘译》編訳組「出版说明」、『摘译』1973年第1期(1973年11月)。

佐洛托特羅波夫(海軍中佐)「鸢门」訳者不明、『摘译』1973年第1期(1973年11月)。

「齿轮座创作新话剧《美枝子的同伴们》」、『摘译』1973年第2期(1973年12月)。

監督：今井正、脚本：鈴木尚之『海军特别少年兵』葉新斌訳、『摘译』1973年第2期(1973年12月)。

監督：山本薩夫、脚本：武田敦、山田信夫『战争和人・末集』薛毅訳、『摘译』1973年第2期(1973年12月)。

吉川徹也「日本电影向何处去」廖望訳、『摘译』1973年第2期(1973年12月)。

吉川徹也「谈不上什么反战——评今井正的《海军特别少年兵》」廖望訳、『摘译』1973年第2期(1973年12月)。

「纪录影片《是人民的力量恢复了日中邦交》摄制完成」、『摘译』1973年第2期(1973年3月)。

歯輪座劇団集体『波涛』薛毅訳、『摘译』1973年第2期(1973年12月)。

歯輪座劇団集体『冲绳的早晨』陽新訳、『摘译』1973年第2期(1973年12月)。

歯輪座劇団集体『春雷』石宇訳、『摘译』1973年第2期(1973年12月)。

齿輪座劇団集体『河流下游的市镇』瞿麦訳、『摘译』1973年第2期(1973年12月)。
杉田光二「竹根——多喜二被害四十周年」薛毅訳、『摘译』1973年第2期(1973年12月)。
「《艳阳天》等中国文艺作品译成日文发表」、『摘译』1973年第2期(1973年12月)。
中原瑛「白色的桥」薛毅訳、『摘译』1973年第2期(1973年12月)。
佐古誠「颠倒了的侵略战争史——评山本萨夫导演的《战争和人・末集》」薛毅訳、『摘译』1973年第2期(1973年12月)。
弗朗西斯・福特・科波勒、馬裏奥・普佐『教父』石恒訳、『摘译』1974年第1期(1974年1月)。
剣刃「一股颠倒黑白的逆流——评苏修美帝合伙对所谓“黑人新浪潮”影片的吹捧」、『摘译』1974年第1期(1974年1月)。
克裏斯廷・亨特『我是怎样经营起食品杂货业的』程征訳、『摘译』1974年第1期(1974年2月)。
尤金妮亜・科利爾『山芋馅饼』程征訳、『摘译』1974年第1期(1974年1月)。
「美国黑人女诗人举行集会纪念菲利斯・惠特利的诗集出版二百周年」、『摘译』1974年第2期(1974年2月)。
「《人民之星》发表文章　批判胜山俊介的电影剧本《小林多喜二》」、『摘译』1974年第2期(1974年2月)。
「日本出版访华诗集《火红的海》」、『摘译』1974年第2期(1974年2月)。
山内久、桂明子、熊井啓『朝霞之诗』薛毅訳、『摘译』1974年第2期(1974年2月)。
「苏修文艺界为柯切托夫举行葬礼」、『摘译』1974年第2期(1974年2月)。
約瑟夫・万鮑「蓝衣骑士」閔鏑訳、『摘译』1974年第2期(1974年2月)。
奥基耶・約塞利安尼「趁大车还没有翻倒的时候」上海師大外語系俄語三年級工農兵学員集体翻訳、『摘译』1974年第3期(1974年3月)。
「获得一九七三年度日本主要文学奖的作品」、『摘译』1974年第4期(1974年4月)。
結城昌治『不良少年』薛毅訳、『摘译』1974年第4期(1974年4月)。
「日本《电影旬报》杂志发表1973年度十部最佳影片」、『摘译』1974年第4期(1974年4月)。
「日本宣扬世界末日来临的小说畅销」、『摘译』1974年第4期(1974年4月)。
「齿轮座剧团演出新作《一个出发点》」、『摘译』1974年第5期(1974年9月)。
郭季竹「是朋友还是敌人？——评《秘密活动》」、『摘译』1974年第5期(1974年9月)。

「美化警察的影片充斥美国影坛」、『摘译』1974年第5期(1974年9月)。

温特・懐特「自由」美徳訳、『摘译』1974年第5期(1974年9月)。

伊・別里亜耶夫「秘密活动」崔恵之訳、『摘译』1974年第5期(1974年9月)。

原作者：山崎豊子、改編者：山田信夫『华丽的家族』(第1部)上海師大外語系日語教研組訳、『摘译』1974年第5期(1974年9月)。

埃倫・道格拉斯『光明的使徒』豊華訳、『摘译』1974年第6期(1974年11月)。

「河原崎长十郎《天平之甍》在东京公演」、『摘译』1974年第6期(1974年11月)。

「授奖仪式怪事多」、『摘译』1974年第6期(1974年2月)。

原作者：山崎豊子、改編者：山田信夫『华丽的家族』(第2部)上海師大外語系日語教研組訳、『摘译』1974年第6期(1974年11月)。

尤里・特里方諾夫「交换」上海師大外語系俄三工農兵学員集体訳、『摘译』1974年第6期(1974年11月)。

「黑人影片《分崩离析》上演」、『摘译』1974年第7期(1974年12月)。

彭浦機器廠工人　陳大康「彩票的力量」、『摘译』1974年第7期(1974年12月)。

有馬頼義「钉鞋带」修敬訳、『摘译』1974年第7期(1974年12月)。

華西裏・舒克申「红莓」上海師範大学外語系翻訳組訳、『摘译』1974年第8期(1975年3月)。

M・弗拉索夫「时代所要求的主人公」吉揮訳、『摘译』1974年第8期(1975年3月)。

「《摘译》(外国文艺)1973-1974年总目录」、『摘译』1974年第8期(1975年3月)。

艾倫・徳魯里「尼尼微和推罗重现」復旦大学外語系外国文学評論組訳、『摘译』1975年第2期(1975年5月)。

范毅平「行将就木者的梦呓——评苏修、美帝两篇预言未来的小说」、『摘译』1975年第2期(1975年5月)。

脚本：八住利雄、監督：舛田利雄『诺斯德拉达缪斯的大预言』安可訳、『摘译』1975年第2期(1975年2月)。

卡賛采夫「比时间更有力」迅行訳、『摘译』1975年第2期(1975年5月)。

「日本“话剧人社”演出中国话剧《雷雨之前》」、『摘译』1975年第2期(1975年5月)。

聞闖欽「是谁走到尽头了？——评《诺斯德拉达缪斯的大预言》」、『摘译』1975年第2期(1975年2月)。

謝苗・拉什金『绝对辨音力』(『摘译』1975年増刊)上海外国語学院俄語系三年級師生

訳(上海人民出版社、1975年5月)。

「《新日本文学》杂志登载短文《通货膨胀下的文艺时评》」、『摘译』1975年第2期(1975年5月)。

上尼古拉・雷日赫「万卡・普罗斯库林」復旦大学外語系俄語専業75届工農兵学員集体訳、『摘译』1975年第3期(1975年6月)。

米哈依爾・阿列謝耶夫「俄罗斯的田野」復旦大学外語系俄語専業75届工農兵学員集体訳、『摘译』1975年第4期(1975年7月)。

濱野博「和子死后」容容訳、『摘译』1975年第5期(1975年8月)。

金子総一「少年和鸽子」宜音訳、『摘译』1975年第5期(1975年8月)。

K「妄图以小资产阶级人性论歪曲革命作家的形象——批判胜山俊介著电影剧本《小林多喜二》」文耀訳、『摘译』1975年第5期(1975年8月)。

勝山俊介「小林多喜二」斉邁、漳泉訳、『摘译』1975年第5期(1975年8月)。

「资料：小林多喜二简介」、『摘译』1975年第5期(1975年8月)。

鮑利斯・阿納申可夫「劳动过程所构成的……」褚戟訳、『摘译』1975年第6期(1975年10月)。

上海電機廠五・一工人大学文科班　范毅平「在“HTP”的掩盖下——苏修社会生活面面观之三」、『摘译』1975年第6期(1975年10月)。

仲禾編集「《水浒》在外国」(ソ連)、『摘译』1975年第6期(1975年10月)。

復旦大学外語系外国文学評論組「以暴力对付暴力——读美国电影剧本《迷路前后》」、『摘译』1975年第7期(1975年11月)。

復旦大学外語系現代英語研究小組編集「《水浒》在外国」(米英)、『摘译』1975年第7期(1975年11月)。

蘭斯頓・休斯など「黑人诗歌十首」司馬平訳、『摘译』1975年第7期(1975年11月)。

馬文・埃克斯「黑鸟」林驤華訳、『摘译』1975年第7期(1975年11月)。

詹姆斯・鮑德温「迷路前后」復旦大学外語系部分英語教師訳、『摘译』1975年第7期(1975年11月)。

「戴维・G・杜波依斯写的长篇小说《……还要请他唱》出版」、『摘译』1975年第8期(1975年12月)。

達明、賀焰「两个剪影——评美国剧本《二号街的囚徒》、日本短篇小说《小虫的土葬》」、『摘译』1975年第8期(1975年12月)。

「歌颂黑人和白人工人团结斗争的新闻记录片《这里没有藏身之处》」、『摘译』1975年第8期(1975年12月)。

「进步黑人电影工作者的队伍不断壮大」、『摘译』1975年第8期(1975年12月)。

森村誠一「小虫的土葬」金錚訳、『摘译』1975年第8期(1975年12月)。

上海外国語学院日語教研組編集「《水浒》在外国」(日本)、『摘译』1975年第8期(1975年12月)。

尤利・格拉契夫斯基など『苏修短篇小说』(『摘译』1975年增刊)復旦大学外語系俄語専業75届二班工農兵学員など訳(上海人民出版社、1975年12月)。

「《摘译》(外国文艺)1975年总目录」、『摘译』1975年第8期(1975年12月)。

漫画「我们总不能老是这样会见吧」、『摘译』1976年第1期(1976年1月)。

《摘译》(外国文芸)編訳組「答读者——关于《摘译》的编译方针」、『摘译』1976年第1期(1976年1月)。

B・卡西斯「新藤兼人走自己的道路——资产阶级的习性和艺术家的命运」海宇訳、『摘译』1976年第2期(1976年2月)。

上鋼三厂　梁賛魯「新藤兼人的道路和苏修叛徒的险恶用心——评苏修对日本电影《我的道路》的吹捧」、『摘译』1976年第2期(1976年2月)。

新藤兼人『我的道路』上海外国語学院日語教研組訳、安可校、『摘译』1976年第2期(1976年2月)。

科林・梅森「人质」復旦大学外語系外国文学評論組訳、『摘译』1976年第3期(1976年3月)。

漫画「“帝国主义者!”“殖民主义者!”」、『摘译』1976年第3期(1976年3月)。

上海戯劇学院　奚文熙「谁是当今世界的巨人?——评美国出版的澳大利亚长篇小说《人质》」、『摘译』1976年第3期(1976年3月)。

阿・卡尤洛夫「大学?只有进大学吗?」上海師範大学蘇修文学評論組訳、『摘译』1976年第4期(1976年4月)。

愛麗米拉「光明与阴暗」吉林師範大学樊岫岩訳、『摘译』1976年第4期(1976年4月)。

符拉基米爾・田徳里亜科夫「毕业晚会后的一夜」上海師大外語系俄語三年級工農兵学員及部分教師訳、『摘译』1976年第4期(1976年4月)。

奥維迪奥・馬丁斯など「美国黑人诗歌二首」江聞序訳、『摘译』1976年第5期(1976年5月)。

查爾斯・H・小富勒「觉醒」上海師範大学中文系外国文学教研組　鐘聞訳、『摘译』1976年第5期(1976年5月)。
赫伯特・斯托克斯「两度相信魔鬼的人」田濱訳、『摘译』1976年第5期(1976年5月)。
揚・潘傑列耶維奇・徳魯采「榲桲飄香」孫培倫訳、『摘译』1976年第6期(1976年6月)。
詹姆斯・A・米切納『百年』(『摘译』1976年増刊)龐渤訳、朱仲学校(上海人民出版社、1976年6月)。
原作：石川達三、監督：山本薩夫「日全食」安可訳、『摘译』1976年第7期(1976年7月)。
安妮・羅曼「回击之歌」史起訳、『摘译』1976年第8期(1976年8月)。
木村琴美『金色稲浪今何在』上海外国語学院日語教研組訳、『摘译』1976年第8期(1976年8月)。
瓦列里・戈爾布諾夫「该做个有志气的好男儿」上海外国語学院俄語専業76届工農兵学員、部分教師訳、『摘译』1976年第11期(1976年11月)。
作者不明「日本战后三十年的思想文化」上海外国語学院日語専業、上海師範大学中文系外語文学教研組訳、『摘译』1976年第11期(1976年11月)。
艾薩克・巴謝維斯・辛厄「暮年的爱情」田濱訳、『摘译』1976年第12期(1976年12月)。
小松干生「雨中的无人售票车」上海師範大学干校日本班訳、『摘译』1976年第12期(1976年12月)。
「《摘译》(外国文艺)1976年总目录」、『摘译』1976年第12期(1976年12月)。
作者不明「日本战后三十年的思想文化」(続)上海外国語学院日語専業、上海師範大学中文系外語文学教研組訳、『摘译』1976年第12期(1976年12月)。

【単行本】

・中国の書籍

ジュール・ヴェルヌ『八十日环游记』逸儒翻訳、秀玉筆録(世文社、1900年)。
ジュール・ヴェルヌ『月界旅行』魯迅訳(進化社、1903年)。
小林多喜二『蟹工船』潘念之訳(大江書舗、1930年4月)。
小林多喜二『蟹工船』適夷訳(作家出版社、1955年3月)。
小林多喜二『党生活者』李克異訳、適夷校(作家出版社、1955年4月)。

O・胡捷「论苏联科学幻想读物」王汶訳、O・胡捷等『论苏联科学幻想读物』(中国青年出版社、1956年6月)。
小林多喜二『不在地主』震先訳(作家出版社、1956年8月)。
杜金采夫『不是单靠面包』白祖芸等訳(作家出版社、1957年8月)。
小林多喜二『小林多喜二选集』(第2巻)金中、周鴻民、李長信訳(人民文学出版社、1958年6月)。
小林多喜二『一九二十八年三月十五日』適夷訳(人民文学出版社、1958年9月)。
農民　劉勇「我拿起了笔杆子」、華中師範学院中文系編『建设共产主义文学』第1辑(華中師範学院、1958年11月)。
小林多喜二『小林多喜二选集』(第1巻)適夷、王康、震先訳(人民文学出版社、1958年12月)。
小林多喜二『小林多喜二选集』(第3巻)舒暢、李克異等訳(人民文学出版社、1959年4月)。
高玉宝『半夜鸡叫』、高玉宝、胡万春『半夜鸡叫』(上海文芸出版社、1961年10月)。
中華書局辞海編輯所修訂『辞海试行本』(第10分冊　文学・語言文学)(中華書局辞海編輯所、1961年10月)。
小林多喜二『安子』楼適夷訳(上海文芸出版社、1962年4月)。
浩然『艳阳天』(作家出版社、1964年9月)。
大公報社人民手冊編輯委員会編『人民手册』1964(大公報社、1964年10月)。
小林多喜二『小林多喜二小说选』適夷等訳(人民文学出版社、1965年2月)。
編集者不明『关于国际共产主义运动总路线的论战』(人民出版社、1965年3月)。
紅代会南京大学委員会編『读报手册』(紅代会南京大学委員会、1969年4月)。
上海市出版革命組編『充分发挥笔杆子的战斗作用』(新華書店、1970年7月)。
湖南師範学院中文系編『把文艺战线的大革命进行到底』第1辑(出版社不明、1970年8月)。
李雲徳『沸腾的群山』(人民文学出版社、1971年1月)。
著者不明『国际知识』(湖北人民出版社、1972年4月)。
人民出版社編『国际知识』第4輯(人民出版社、1972年8月)。
武漢師範学院《学習手冊》編写小組編写『学习手册』(出版社不明、1972年10月)。
四川師範学院中文系文芸理論教研組編『文艺名词解释』(四川師範学院中文系文芸理論

教研組、1973年3月)。
「日本“公害”问题严重」、吉林師範大学政治教育系編『政治经济学』(参考材料上)(吉林師範大学政治教育系、1973年8月)。
天津南開大学政治経済学系世界経済教研室編『战后帝国主义经济几个问题』(天津人民出版社、1975年3月)。
丸山静雄『东南亚与日本』石宇訳(上海人民出版社、1974年5月)。
著者不明『国际知识资料』第3輯(山東人民出版社、1974年5月)。
安徽師範大学歴史系《社会発展史》編写組『社会发展史』(安徽人民出版社、1976年4月)。
有吉佐和子『恍惚的人』秀豊、渭慧訳(人民文学出版社、1979年6月)。
芥川龍之介『芥川龙之介小说十一篇』楼適夷訳(湖南人民出版社、1980年5月)。
葉永烈「科学幻想小说的特点」、葉永烈『论科学文艺』(科学普及出版社、1980年6月)。
中国青年出版社編『科学幻想小说选』(中国青年出版社、1980年6月)。
葉永烈「论科学幻想小说」、黄伊編『论科学幻想小说』(科学普及出版社、1981年5月)。
逼照金剛『文镜秘府论校注』王利器校注(中国社会科学出版社、1983年7月)。
鄧小平「关于发展工业的几点意见」、鄧小平『邓小平文选』(第2卷)中共中央文献編輯委員会編(人民出版社、1983年7月)。
小林多喜二『小林多喜二小说选』文潔若等訳(人民文学出版社、1983年7月)。
著者不明『落洼物语』豊子愷訳(人民文学出版社、1984年2月)。
有吉佐和子『非色』李徳純訳(上海訳文出版社、1984年6月)。
有吉佐和子『暗流』梅韜訳(中国文聯出版会社、1984年11月)。
邱嵐編『中国当代文学』(遼寧教育出版社、1986年6月)。
有吉佐和子『暖流』唐月梅訳、薛強編(春風文芸出版社、1986年6月)。
中国版本図書館編『1949-1979翻译出版外国文学著作目录和提要』(江蘇人民出版社、1986年7月)。
三島由紀夫『春雪』唐月梅訳(中国文聯出版社、1986年12月)。
李徳純『战后日本文学』(遼寧人民出版社、1988年2月)。
潘允康『在亚社会中的沉思——社会学者对社会的警告』(中国婦女出版社、1989年3月)。
汪志「科学小说的时代精神——看科教电影的启示」、汪志『论科学小说』(中国広播電視出版社、1989年12月)。

三島由紀夫『春雪・天人五衰』文潔若、李芒、文静訳(中国友誼出版公司、1990年12月)。
武斌『石油文学初论』(石油大学出版社、1991年1月)。
楊健『文化大革命中的地下文学』(朝華出版社、1993年1月)。
曹治雄『当代中国的出版事业』(下)(当代中国出版社、1993年8月)。
李徳純『爱・美・死――日本文学论』(中国社会出版社、1994年7月)。
衛広益「毛泽东与大小“参考”」、毛沢東生平和思想研討会組織委員会編『毛泽东百周年纪念：毛泽东生平和思想研讨会论文集』(中冊)(中央文献出版社、1994年10月)。
三島由紀夫『弓月奇谈』申非、許金龍訳(作家出版社、1994年12月)。
唐月梅『怪异鬼才三岛由纪夫传』(作家出版社、1994年12月)。
三島由紀夫『爱的饥渴 午后曳航』唐月梅、許金龍訳(作家出版社、1995年3月)。
三島由紀夫『假面自白 潮骚』唐月梅訳(作家出版社、1995年5月)。
三島由紀夫『天人五衰』林少華訳(作家出版社、1995年5月)。
三島由紀夫『春雪』唐月梅訳(作家出版社、1995年6月)。
三島由紀夫『忧国 仲夏之死 短篇小说集』唐月梅等訳(作家出版社、1995年6月)。
三島由紀夫『金阁寺』唐月梅訳(作家出版社、1995年7月)。
三島由紀夫『奔马』許金龍訳(作家出版社、1995年8月)。
三島由紀夫『阿波罗之杯 散文随笔集』申非等訳(作家出版社、1995年10月)。
三島由紀夫『晓寺』劉光宇、徐秉潔訳(作家出版社、1995年10月)。
有吉佐和子『嫉情人生』応冀、戴郁芬訳(四川文芸出版社、1996年3月)。
本書編委会編『中华人民共和国国史全鉴(1949-1995)』第3卷(1960-1966)(団結出版社、1996年4月)。
葉渭渠、千葉宣一、ドナルド・キーン主編『三岛由纪夫研究』(開明出版社、1996年5月)。
中共中央文献研究室編『周恩来年谱(1949-1976)』下卷(中央文献出版社、1997年5月)。
熊井啓、俞虹『熊井启的电影 从《望乡》到《爱》』森川和代訳(中国電影出版社、1997年8月)。
江曾培、馮牧主編『中国新文学大系 1949-1976』(第2集 文学理论)(上海文芸出版社、1997年11月)。

吳亦俠、劉成果編『中国发展全书』(農業巻)(国家行政学院出版社、1997年12月)。
王奕紅「《假面的告白》和《金阁寺》刍议」、陳敬詠、章祖德主編『外国文学论集——世纪末的探索与思考』(訳林出版社、1997年)。
有吉佐和子『战争新娘 一个吧女的人生自述』南敬銘、郭東昉訳(遠方出版社、1998年3月)。
三島由紀夫『三岛由纪夫小说集 禁色』楊炳辰訳(中国文聯出版社、1999年1月)。
武国友『交锋与转折』(解放軍文芸出版社、1999年1月)。
陳思和主編『中国当代文学史教程』(復旦大学出版社、1999年9月)。
三島由紀夫『春雪』唐月梅訳(中国文聯出版社、1999年9月)。
三島由紀夫『沉潜的瀑布』竺家栄訳(中国文聯出版社、1999年10月)。
三島由紀夫『纯白之夜』汪正球、王建新訳(中国文聯出版社、1999年10月)。
三島由紀夫『恋都』唐月梅、林青華訳(中国文聯出版社、1999年10月)。
三島由紀夫『走尽的桥』唐月梅等訳(中国文聯出版社、1999年10月)。
劉杲、石峰主編『中国出版五十年纪事』(新華出版社、1999年12月)。
三島由紀夫『残酷之美』唐月梅訳(中国文聯出版社、2000年4月)。
三島由紀夫『太阳与铁』唐月梅訳(中国文聯出版社、2000年4月)。
李芒「三岛由纪夫的反动言行不能翻案」、『采玉集』(訳林出版社、2000年5月)。
閻暁宏「新中国图书出版五十年概述」、『中国出版年鉴』(2000)(中国出版年鑑社、2000年10月)。
鄒振環『20世纪上海翻译出版与文化变迁』(広西教育出版社、2000年12月)。
中共中央組織部、中共中央党史研究室、中央档案館『中国共产党组织史资料』(第6巻“文化大革命”时期(1966.5-1976.10))(中共党史出版社、2000年)。
三島由紀夫『丰饶的海』許金龍等訳(北京燕山出版社、2001年1月)。
王向遠『二十世纪中国的日本文学翻译史』(北京師範大学出版社、2001年3月)。
韓明謨『20世纪百年学案：社会学卷』(陝西人民教育出版社、2002年5月)。
葉渭渠『扶桑掇琐』(湖北教育出版社、2002年5月)。
尹鴻、凌燕『新中国电影史：1949－2000』(湖南美術出版社、2002年11月)。
彭放編『黑龙江文学通史』第3巻(北方文芸出版社、2002年12月)。
三島由紀夫『春雪』唐月梅訳(北京出版社、2002年)。
周思源、黄悦、宋長宏編『20世纪中国文学史纲』(北京語言大学出版社、2003年7月)。

唐月梅『三岛由纪夫传』(新世界出版社、2003年10月)。
「中共中央转发国家经委党组《关于工业学大庆问题的报告》的通知」、中共大慶市委党史研究室編『中国共产党大庆历史大事记述』(黒竜江人民出版社、2003年10月)。
羅選民編『外国文学翻译在中国』(安徽文芸出版社、2003年12月)。
查明建「文化操纵与利用：意识形态与翻译文学经典的形成——以20世纪50、60年代中国的文学翻译为中心」、汪介之、唐建清編『跨文化语境中的比较文学』(訳林出版社、2004年5月)。
André Lefevere編『翻译、历史与文化论集』(《*Translation/History/Culture A sourcebook*》、上海外語教育出版社、2004年7月)。
方華文『20世纪中国翻译史』(西北大学出版社、2005年2月)。
王德威『被压抑的现代性：晚清小说新论』(北京大学出版社、2005年5月)。
韓啓瀾「跨越性别分界："文革"时期的铁姑娘形象和知青」、王政、陳雁『百年中国女权思潮研究』(復旦大学出版社、2005年7月)。
孟昭毅、李載道編『中国翻译文学史』(北京大学出版社、2005年7月)。
姜長青『20世纪70年代末、80年代初中国经济调整研究』(中共中央党校、2006年5月)。
劉書楷、郭思敏編『中共党史辨疑』(中央文献出版社、2006年8月)。
李伝松、許宝発『中国近现代外语教育史』(上海外語教育出版社、2006年9月)。
王曉元「意识形态与文学翻译的互动关系」、厳辰松主編、《解放军外国语学院学报》編集部編『中国翻译研究论文精选』(上海外語教育出版社、2006年11月)。
查明建、謝天振『中国20世纪外国文学翻译史』(上)(湖北教育出版社、2007年2月)。
亨利・斯各特・斯托克斯『美与暴烈　三岛由纪夫的生与死』于是訳(上海書店出版社、2007年7月)。
羅平漢『"文革"前夜的中国』(人民出版社、2007年12月)。
譚琳、姜秀花主編『中国妇女组织发展的理论与实践』(社会科学文献出版社、2007年12月)。
三島由紀夫『三島由紀夫精品集』唐月梅訳(復旦大学出版社、2008年5月)。
李晶『当代中国翻译考察(1966−1976)——"后现代"文化研究视域下的历史反思』(南開大学出版社、2008年9月)。
小林多喜二『蟹工船』葉渭渠訳(訳林出版社、2009年1月)。
周佳栄『開明書店與五四新文化』(中華書局(香港)出版有限公司、2009年4月)。

賀紹俊『共和国60年文化发展』(中国大百科全書出版社、2009年9月)。
楊義主編、周発祥、程玉梅、李艶霞、孫紅、張衛晴著『二十世纪中国翻译文学史』(十七年及“文革”卷)百花文芸出版社(2009年11月)。
三島由紀夫『奔马』許金龍訳(上海訳文出版社、2010年12月)。
三島由紀夫『春雪』唐月梅訳(上海訳文出版社、2010年8月)。
三島由紀夫『暁寺』竺家栄訳(上海訳文出版社、2010年12月)。
三島由紀夫『天人五衰』林少華訳(上海訳文出版社、2011年4月)。
有吉佐和子『恍惚的人』李煒訳(南海出版会社、2011年7月)。
克里斯托弗・羅斯『三岛由纪夫之剑』王婷婷訳(江蘇人民出版社、2012年1月)。
許立以『春天的脚步——许立以回忆录』(華齢出版社、2012年2月)。
豊一吟『我的父亲丰子恺』(人民文学出版社、2013年9月)。
三島由紀夫『春雪』文潔若、李芒訳(重慶出版社、2014年3月)。
孟昭毅等『中国东方文学翻译史』(下)(昆侖出版社、2014年4月)。
三島由紀夫『奔马』許金龍訳(上海訳文出版社、2014年4月)。
三島由紀夫『春雪』唐月梅訳(上海訳文出版社、2014年4月)。
三島由紀夫『天人五衰』林少華訳(上海訳文出版社、2014年4月)。
三島由紀夫『暁寺』竺家栄訳(上海訳文出版社、2014年4月)。
三島由紀夫『天人五衰』文潔若訳(重慶出版社、2014年8月)。
瑪格麗特・尤瑟納爾『三岛由纪夫，或空的幻景』姜丹丹、索叢鑫訳(上海三聯書店、2014年10月)。
楊珍珍「养老问题中的社会责任与个人救赎——《恍惚的人》论」、『科学发展・协同创新・共筑梦想——天津市社会科学界第十届学术年会优秀论文集』(下)(天津出版社、2014年)。
三島由紀夫『奔马』許金龍訳(九州出版社、2015年3月)。
三島由紀夫『春雪』唐月梅訳(九州出版社、2015年3月)。
三島由紀夫『天人五衰』林少華訳(九州出版社、2015年3月)。
三島由紀夫『暁寺』竺家栄訳(九州出版社、2015年3月)。
三島由紀夫『奔马』張林訳(重慶出版社、2015年5月)。
三島由紀夫『暁寺』劉光宇、徐秉潔訳(重慶出版社、2015年6月)。
陳丹燕「白皮书时代的往事」(原題「“你到底要什么”——白皮书时代的往事」、原載

『书城』1998年第4期5-7頁、1998年)、陳丹燕『上海的风花雪月』(上海文芸出版社、2015年7月)。
李秉奎『狂澜与潜流：中国青年的性恋与婚姻(1966-1976)』(社会科学文献出版社、2015年7月)。
王友貴『20世纪下半叶中国翻译文学史：1949-1977』(人民出版社、2015年9月)。
三島由紀夫『奔马』陳德文訳(人民文学出版社、2015年10月)。
三島由紀夫『春雪』陳德文訳(人民文学出版社、2015年10月)。
三島由紀夫『天人五衰』陳德文訳(人民文学出版社、2015年10月)。
三島由紀夫『暁寺』陳德文訳(人民文学出版社、2015年10月)。
田雁主編『汉译日文图书总书目 1719-2011』(第2巻 1949.10-1999)(社会科学文献出版社、2015年10月)。
夏征農、陳至立主編『大辞海』(第17巻 中国文学巻)(上海辞書出版社、2015年12月)。
鄒振環「“死屋”中的“隐形铁窗”——“文革”后期的《摘译》研究」、王宏志主編『翻译史研究』(2015)(復旦大学出版社、2015年12月)。
孫縄武「关于“内部书”的杂忆与随感」(原載『中华读书报』2006年9月6日)、孫縄武『孙绳武诗文集』(人民文学出版社、2016年3月)。
銭暁宇『现代中国大文学史论』(第3巻 幻想文化与当代中国的文学形象)李怡主編(羊城晚報出版社、2016年5月)。
王向遠『中国外国文学研究的学术历程』陳建華主編(重慶出版社、2016年9月)。
国家教育研究院『生命科学名词』(元照出版、2016年11月)。
於麗萍編『中日翻译文化交流史』(遼寧大学出版社、2016年11月)。
馮客『文化大革命：人民的歴史1962-1976』向淑容、堯嘉寧訳(聯経出版事業公司、2016年12月)。
宋永毅主編『文革五十年：毛澤東遺産和當代中國』(上巻)(明鏡出版社、2016年12月)。
澁澤龍彦『三岛由纪夫追记』双双訳(広西師範大学出版社、2017年8月)。
武田雅哉、林久之『中国科学幻想文学史』(下巻)李重民訳(浙江大学出版社、2017年9月)。
田雁『日文图书汉译出版史』(南京大学出版社、2017年12月)。
李丹「《朝霞》和《学习与批判》的文学批评刍议」、徐興無、王彬彬主編『文学研究』(第4巻 1)(南京大学出版社、2018年9月)。

三島由紀夫『三岛由纪夫精品典藏集 春雪』唐月梅訳(作家出版社、2021年3月)。

・日本の書籍

井坂錦江『水滸傳と支那民族』(大東出版社、1942年5月)。
小林多喜二『党生活者・地区の人々・沼尻村』(青木書店、1964年9月)。
毛沢東「アメリカ黒人の人種差別反対の闘争を支持するよう呼びかける声明」、中国研究所編『新中国年鑑』(1964年版)(極東書店、1964年4月)。
外務省アジア局中国課『中共農村人民公社:最近における動態の分析』(外務省アジア局中国課、1964年)。
福島正夫『中国の文化大革命』(御茶の水書房、1966年)。
現代アジア社会思想研究会編『毛沢東思想と中国の社会主義:中共革命の再検討』(現代アジア出版会、1967年4月)。
川添登、犬丸義一『中国の文化大革命:その根源と矛盾』(青木書店、1968年1月)。
草野文男『毛沢東思想と文化大革命』(民主主義研究会、1968年)。
毛沢東「小さな火花も広野を焼き尽くす」(《星星之火、可以燎原》、執筆時間:1930年1月5日)、中国共産党中央委員会毛沢東選集出版委員会編『毛沢東選集』(第1巻)(外文出版社、1968年)。
三島由紀夫『春の雪』(『豐饒の海』第1巻)(新潮社、1969年1月)。
三島由紀夫『奔馬』(『豐饒の海』第2巻)(新潮社、1969年2月)。
上別府親志『中国文化革命の論理』(東洋経済新報社、1971年2月)。
三島由紀夫『曉の寺』(『豐饒の海』第3巻)(新潮社、1970年7月)。
山崎正夫『三島由紀夫における男色と天皇制』(グラフィック社、1971年8月)。
三島由紀夫『天人五衰』(『豐饒の海』第4巻)(新潮社、1971年2月)。
戸川猪佐武『小説党人山脈』〈第2部〉(流動社、1972年3月)。
山崎朋子『サンダカン八番娼館——底辺女性史序章』(筑摩書房、1972年5月)。
有吉佐和子『恍惚の人』(新潮社、1972年6月)。
小松左京『日本沈没』(上)(光文社、1973年3月)。
小松左京『日本沈没』(下)(光文社、1973年3月)。
松本清張『砂の器』(上)(新潮社、1973年3月)。
松本清張『砂の器』(下)(新潮社、1973年4月)。

磯永秀雄『燃える海：磯永秀雄訪中詩集』（長周新聞社、1973年11月）。
五島勉『ノストラダムスの大予言――迫りくる1999年7の月人類滅亡の日』（祥伝社、1973年11月）。
結城昌治『結城昌治作品集』第6巻（朝日新聞社、1974年1月）。
小林多喜二『蟹工船・不在地主・暴風警戒報』（青木書店、1974年6月）。
大塚雅彦「解説」、結城昌治『不良少年』（中央公論社、1974年10月）。
毛沢東『文化大革命を語る』竹内実編訳（現代評論社、1974年12月）。
堺屋太一『油断！』（日本経済新聞社、1975年7月）。
三島由紀夫「反革命宣言」（原載『論争ジャーナル』1969年2月号、収録『文化防衛論』「第1部　論文」、新潮社、1969年4月）、『三島由紀夫全集』（全35巻）「第34巻　評論　10」（新潮社、1976年2月）。
ジュール・ヴェルヌ『八十日間世界一周』田辺貞之助訳（東京創元社、1976年3月）。
三島由紀夫、川端康成、安部公房、石川淳「文化大革命に関する声明」（原載『東京新聞』1967年2月28日）、『三島由紀夫全集』（全35巻）「第35巻　補遺　雑纂　詩他」（新潮社、1976年4月）。
高橋勇治、重沢俊郎『中国社会主義の問題点』（日中出版、1977年5月）。
有吉佐和子『有吉佐和子の中国レポート』（新潮社、1979年3月）。
結城昌治『不良少年』（中央公論新社、1980年5月）。
マルグリット・ユルスナール『三島あるいは空虚のヴィジョン』渋澤龍彦訳（河出書房新社、1982年5月）。
坂本義和、松本繁一編『変動するアジア国際政治』（アジア経済研究所、1984年10月）。
『筑摩現代文学大系』63「芝木好子・有吉佐和子集」（筑摩書房、1984年11月）。
別宮貞徳『翻訳と批評』（講談社、1985年2月）。
加々美光行編『現代中国の挫折：文化大革命の省察』（アジア経済研究所、1985年3月）。
神原達『中国の石油産業』（幸書房、1985年4月）。
山田洋次『山田洋次作品集』（第8巻）（立風書房、1985年7月）。
李徳純『戦後日本文学管窺――中国的視点』杉山太郎等訳（明治書院、1986年5月）。
安藤正士、太田勝洪、辻康吾『文化大革命と現代中国』（岩波書店、1986年7月）。
竹内実編『転形期の中国』（京都大学人文科学研究所、1988年）。
神原達「中国石油産業、歴史的経緯と将来展望」、神原達編『中国の石油産業』（アジ

ア経済研究所、1991年3月)。
小島朋之『脱社会主義への中国』(芦書房、1992年11月)。
小嶋正己『中国社会主義企業の展開』(千倉書房、1993年5月)。
浜勝彦『中国:鄧小平の近代化戦略』(アジア経済研究所、1995年3月)。
ジェラール・ジュネット『パランプセスト:第二次の文学』和泉涼一訳(水声社、1995年8月)。
安藤武『三島由紀夫「日録」』(未知谷、1996年4月)。
高橋和巳『逸脱の論理』(河出書房新社、1996年11月)。
三島由紀夫『花ざかりの森・憂国――自選短編集――』(新潮文庫、1997年6月)。
都築政昭『寅さんの風景:山田洋次の世界』(近代文芸社、1997年8月)。
山田洋次、朝間義隆『男はつらいよ』(第5巻　青春篇)(ちくま文庫、1997年9月)。
小林弘二『20世紀の農民革命と共産主義運動:中国における農業集団化政策の生成と瓦解』(勁草書房、1997年11月)。
志水一夫『大予言の嘘――占いからノストラダムスまでその手口と内幕』(データハウス、1997年11月)。
堺屋太一『明日を読む』(朝日新聞社、1997年12月)。
スコット・ストークス・ヘンリー『三島由紀夫　生と死』徳岡孝夫訳(清流出版、1998年11月)。
葛慧芬『文化大革命を生きた紅衛兵世代:その人生、人間形成と社会変動との関係を探る』(明石書店、1999年1月)。
許光俊「五島勉、『ノストラダムスの大予言』への道」、許光俊編著『99年の滅亡を夢見て』(青弓社、1999年7月)。
小島朋之『現代中国の政治:その理論と実践』(慶応義塾大学出版会、1999年7月)。
ジュール・ヴェルヌ『月世界旅行』高山宏訳(ちくま文庫、1999年8月)。
徳岡孝夫『五衰の人　三島由紀夫私記』(文藝春秋、1999年11月)。
高田勇、伊藤進編訳『ノストラダムス予言集』(岩波書店、1999年)。
大里仁士、古川正紀『21世紀社会の安定化条件』(九州大学出版会、2001年4月)。
神原達『中国の石油と天然ガス』(アジア経済研究所、2003年1月)。
山田和夫『日本映画の歴史と現代』(新日本出版社、2003年8月)。
岩佐昌暲『文革期の文学』(花書院、2004年3月)。

須藤真志『20世紀現代史』（一藝社、2005年3月）。
花井等、岡部達味編集『現代国際関係論』（東洋経済新報社、2005年4月）。
真銅正宏『小説の方法――ポストモダン文学講義』（萌書房、2007年4月）。
今川晃、牛山久仁彦、村上順『分権時代の地方自治』（三省堂、2007年8月）。
唐木圀和『中国経済近代化と体制改革』（慶應義塾大学商学会、2007年10月）。
藤濤文子『翻訳行為と異文化間コミュニケーション：機能主義的翻訳理論の諸相』（松籟社、2007年12月）。
川西玲子『映画が語る昭和史：いつもヒロインたちがいた』（ランダムハウス講談社、2008年8月）。
末次玲子『二〇世紀中国女性史』（青木書店、2009年5月）。
古川孝順、金子光一『社会福祉発達史キーワード』（有斐閣、2009年5月）。
長谷川啓之監修、上原秀樹等編『現代アジア事典』（文眞堂、2009年7月）。
坂元昌樹、田中雄次、西槇偉、福澤清『漱石文学の水脈』（思文閣、2010年10月）。
モナ・ベイカー、ガブリエラ・サルダーニャ『翻訳研究のキーワード』藤涛文子、伊原紀子、田辺希久子訳（研究社、2013年9月）。
李城外『追憶の文化大革命』（上巻：咸寧五七幹部学校の文化人）萩野脩二、山田多佳子訳（ボイジャー、2014年6月）。
中津俊樹「『プロレタリア文化大革命』研究からみる日本人の中国認識――文革終結以後の動向を中心として」、代田智明、谷垣真理子監修、伊藤徳也、岩月純一編『戦後日本の中国研究と中国認識　東大駒場と内外の視点』（風響社、2018年3月）。
馬場公彦『世界史のなかの文化大革命』（平凡社、2018年9月）。
安田峰俊『性と欲望の中国』（文藝春秋、2020年5月）。
川村一彦『江戸の群像・歌川国芳』（歴史研究会、2020年6月）。
孫軍悦『現代中国と日本文学の翻訳：テクストと社会の相互形成史』（青弓社、2021年2月）。

・その他

Paul Clark, *Popular Chinese Literature and Performing Arts: in the People's Republic of China 1949-1979*, University of California Press, 1984.

Richard King, *A shattered mirror: the literature of the Cultural Revolution*, University of British Columbia, 1984.

Yibing Huang, *Contemporary Chinese Literature: From the Cultural Revolution to the Future*, Palgrave Macmillan, 2007.

Vasil Teigens『スペースレース』C.S.B.Equipment訳(Cambridge Stanford Books、2014年)。

【雑誌論文】

・中国の論文

若沁(夏衍の筆名)「关于“蟹工船”」、『拓荒者』第1期(1930年1月)。

鲁迅「《蟹工船》出版预告」、『文艺研究』創刊号(1930年2月)。

B・薩巴林「科学幻想小说：工程师的失踪」符其珣訳、『开明少年』1949年第49期-第53期(1949年)。

馮雪峯「英雄和群众及其他」、『文艺报』1953年第24期(1953年)。

西野辰吉「夜间的营火」張夢林訳、『译文』1958年第9期(1958年)。

卞之琳、葉水夫、袁可嘉、陳燊「十年来的外国文学翻译和研究工作」、『文学评论』1959年第5期(1959年)。

劉振瀛「论西野辰吉的反美短篇小说」、『世界文学』1963年1月号(1963年1月)。

葉周陳「日本“现实主义研究会”召开首次全国会议」、『世界文学』1964年3月号(1964年3月)。

周斌、応年「日本各界人民隆重集会纪念小林多喜二被害三十周年」、「世界文艺动态」、『世界文学』1963年4月号(1963年4月)。

渭渠「日本革命文学运动简况」、「世界文艺动态」、『世界文学』1963年9月号(1963年9月)。

渭渠「日共出版《赤旗文学丛书》」、「世界文艺动态」、『世界文学』1963年12月号(1963年12月)。

毛沢東「对中央音乐学院的意见」、『群众反映』第79期上(1964年9月)。

卞立強「日共中央出版第二部批判现代修正主义文集《通向革命文学的路标》」、「世界文

艺动态」、『世界文学』1964年11月号(1964年11月)。
石宇編、賽潔華絵『看图识字』第2期(1976年4月)。
上海師範大学中文系外国文学教研室「批“洋为帮用”——揭露“四人帮”利用苏联文学搞篡党夺权的罪恶阴谋」、『外国文学研究』1978年第1期(1978年)。
公盾「为儒勒・凡尔纳的科学幻想小说恢复名誉」、『出版工作』1979年第3期(1979年3月)。
朱金和「浅谈日本小说《恍惚的人》」、『复旦学报』(社会科学版)1979年第2期(1979年3月)。
趙朴初「《〈文镜秘府论〉校注》颂」、『社会科学战线』1979年第2期(1979年5月)。
李德純「战后日本文学概貌」、『世界文学』1979年第5期(1979年10月)。
亢泰「世界科幻小说大会」、『读书』1980年第3期(1980年2月)。
張朝柯「小林多喜二对典型化的认识和实践」、『辽宁大学学报』(哲学社会科学版)1980年第6期(1980年12月)。
李德純「日本当代三作家」、『外国文学研究』1980年第2期(1980年)。
常言「苏联的科学幻想小说」、『外国文学研究』1981年第1期(1981年)。
馮至「继续解放思想，实事求是地展开外国文学工作——在中国外国文学学会第一届年会上的报告」、『外国文学研究』1981年第1期(1981年)。
邱江揮「试论中国科幻小说的发展」、『安徽大学学报』(哲学社会科学版)1982年第2期(1982年)。
盧敦基「可读的科幻小说」、『读书』1983年第6期(1983年4月)。
王泉根「论外国儿童文学对中国现代儿童文学的影响」、『浙江师范学院学报』1983年第3期(1983年)。
著者不明「科幻小说的不良倾向」、『文艺理论研究』1983年第4期(1983年)。
蘇波「日本著名女作家有吉佐和子逝世」、『世界文学』1984年第5期(1984年10月)。
莫邦偉「日本文艺界哀悼有吉佐和子突然逝世」、『译林』1984年第4期(1984年12月)。
範作申「日本名作家有吉佐和子逝世」、『外国文学研究』1985年第1期(1985年1月)。
王貴「略谈石油文学的内容及特点」、『文艺评论』1985年第4期(1985年8月)。
李德純「不知疲倦的探索者 悼念有吉佐和子」、『读书』1985年第3期(1985年)。
朱迎平「中日文化交流的奇葩——《文镜秘府论》」、『文史知识』第8期(1986年8月)。
李德純「“殉教美学”的毁灭」、『日语学习与研究』1987年第4期(1987年8月)。

陳泓「荒唐时代的“怪胎”文学——中国文革文学与日本国策文学初探」、『现代日本经济』1987年第5期(1987年10月)。
陳思和「当代文学观念中的战争文化心理」、『上海文学』1988年第6期(1988年6月)。
『世界文学』(日本作家三島由紀夫特集)1991年第1期(1991年)。
万革非「《中国科幻小说史》导言」、『云梦学刊』1993年第4期(1993年12月)。
陳思和「民间的浮沉——对抗战到文革文学史的一个尝试性解释」、『上海文学』1994年第1期(1994年1月)。
葉渭渠「“三岛由纪夫现象”辩析」、『外国文学』1994年第2期(1994年2月)。
唐月梅「鬼才三岛由纪夫的文学世界」、『外国文学』1994年第3期(1994年3月)。
唐月梅「三岛由纪夫的一生」、『外国文学』1994年第3期(1994年3月)。
唐月梅「关于三岛由纪夫“武道”新论」、『日本研究』1994年第2期(1994年)。
唐月梅「文艺上古典美之展现——三岛由纪夫美学思想的核心」、『外国文学评论』1994年第4期(1994年)。
『外国文学』1994年第3期(1994年)。
王紹光「拓展文革研究的视野」、『二十一世紀』1995年10月号(1995年10月)。
宋永毅「文化大革命中的異端思潮」、『二十一世紀』1996年8月号(1996年8月)。
尾崎秀樹、李德純「关于战后日本文学的对话《节译》——从中国的观点出发」(原文の出所は日本雑誌『世界』1986年8月号)董防訳、『世界文学』1997年第2期(1997年)。
陳思和「试论当代文学史(1949-1976)的“潜在写作”」、『文学评论』1999年第6期(1999年11月)。
豫・宛人「中国石油科技五十年纪实(1949～1999)』続、『石油科技论坛』1999年第6期(1999年12月)。
丁東「“写作组”初探」、『东方文化』1999年第2期(1999年)。
杜継文「科学与预言」、『中国宗教』1999年第1期(1999年)。
李德純「三岛由纪夫论」、『国外文学』1999年第3期(1999年)。
靳彪、趙秀明「“文革”十年间的中国翻译界」、『天津外国语学院学报』2000年第1期(2000年3月)。
查明建「意识形态、翻译选择规范与翻译文学形式库——从多元系统理论角度透视中国五十——七十年代的外国文学翻译」、『中外文学』第30巻第3期(2001年8月)。

李雯「中西科幻小说界定之比较」、『成都教育学院学报』2002年第8期(2002年8月)。
謝天振「译者的诞生与原作者的“死亡”」、『中国比较文学』2002年第4期(2002年10月)。
李德純「唯美而畸恋的梦幻世界——三岛由纪夫论之一」、『中国社会科学院研究生院学报』2002年第6期(2002年)。
馬士奎「文革期间的外国文学翻译」、『中国翻译』第24巻第3期(2003年5月)。
池田大作「我以“人”的名义写作——忆有吉佐和子女士」(原載『聖教新聞』2001年5月15日)卞立強訳、『作家』2003年第8期(2003年8月)。
王友貴「意识形态与20世纪中国翻译文学史(1899-1979)」、『中国翻译』第24巻第5期(2003年9月)。
李平「中国における日本文学研究の現況」、『日本文化研究』第9輯(2003年10月)。
黄禄善「是“科幻小说”，还是“科学小说”？」、『上海科技翻译』2003年第4期(2003年)。
胡星亮「论苏联戏剧左倾教条与中国当代戏剧」、『文艺争鸣』2003年第4期(2003年)。
李德純「抱残守缺的“武士道”说教——三岛由纪夫论之二」、『中国社会科学院研究生院学报』2003年第5期(2003年)。
尹家民「“文化大革命”中的梁效、罗思鼎写作组」、『党史博览』2004年第10期(2004年10月)。
郭建中「关于SCIENCE FICTION的翻译问题」、『上海科技翻译』2004年第2期(2004年)。
丁東「“文革”写作组兴衰录」、『文史博览』2005年第19期(2005年10月)。
葉渭渠「学术腐败风漂洋过海——读《从三岛由纪夫的国际会说起》随感」、『日本新華僑報』2006年1月号(2006年1月)。
史義軍「“罗思鼎”和“朝霞”事件」、『炎黄春秋』2006年第2期(2006年2月)。
馬士奎「翻译主体地位的模糊化——析“文革”时期文学翻译中译者的角色」、『临沂师范学院学报』第28巻第5期(2006年10月)。
劉忠、劉国忠「“文革”时期的社会生活及其对后现代文化的影响」、『甘肃理论学刊』2006年第6期(2006年11月)。
劉舸「百年中国文学中的日本形象演变研究」、『中国文学研究』2006年第4期(2006年12月)。
謝天振「翻译研究“文化转向”之后——翻译研究文化转向的比较文学意义」、『中国比

较文学』2006年第3期(2006年)。
王向遠「当代日本作家的中国纪行」、『燕赵学术』2007年春之巻(2007年7月)。
吳麗萍「文化大革命中的女紅衛兵」、『二十一世紀』第68期(香港中文大学、2007年11月)。
朱学勤「“凌伊”先生」、『南方人物周刊』2007年第26期(2007年)。
唐月梅「日本文学与当代中国邂逅的命运」、『日本研究』2008年第1期(2008年3月)。
李晶「贯穿20世纪中国翻译史的意识形态操控行为」、『天津外国语学院学报』第15巻第5期(2008年9月)。
張国俊「权力话语与文革时期的外国文学翻译」、『华南农业大学学报』(社会科学版)2008年第4期(2008年10月)。
李剣鳴「改革开放以来的中国美国史研究」、『史学月刊』2009年第1期(2009年1月)。
管興平「漫议“石油文学”」、『长江大学学报』(社会科学版)第32巻第2期(2009年4月)。
馬士奎「塑造美国形象——“文革”期间对美国当代文学作品的译介」、『临沂师范学院学报』第31巻第2期(2009年4月)。
汪芸「三岛由纪夫研究在中国的发展历程」、『文学教育』2009年第4期(2009年4月)。
謝天振「非常时期的非常翻译——关于中国大陆文革时期的文学翻译」、『中国比较文学』2009年第2期(2009年4月)。
孫志詳「国内翻译的意识形态维度研究回顾与展望」、『上海翻译』2009年第2期(2009年5月)。
何世龍「中国石油文学研究30年」、『长江大学学报』(社会科学版)第32巻第3期(2009年6月)。
胡備、李欣「三岛由纪夫在中国的接受与研究」、『河北工程大学学报』(社会科学版)第26巻第4期(2009年12月)。
馬場公彦「“文化大革命”在日本(1966～1972)——中国革命对日本的冲击和影响」、『书城』2009年第7期(2009年)。
張治「晚清科学小说刍议——对文艺作品及其思想背景与知识视野的考察」、『科学文化评论』第6巻第5期(2009年)。
楽融「从一份捐赠书目看日本左翼文学对中国的影响」、『上海鲁迅研究』2010年春(2010年2月)。
章剣鋒「“文革”上海写作组的那些事儿」、『南风窗』2010年第8期(2010年4月)。

徐江「《朝霞》双刊与“文革”后期其它刊物的相互关系研究」、『当代文坛』2010年第4期(2010年7月)。
田俊武「“冷战”影响下的西方文学及其宗教意识」、『西安外国语大学学报』第18巻第3期(2010年9月)。
鮑爾吉・原野「《摘译》之忆」、『档案春秋』2010年第2期(2010年)。
丁東「剖析“写作组”」、『炎黄世界』2010年第3期(2010年)。
方厚枢「内部发行图书出版的历史记忆」、『党史博览』2010年第12期(2010年)。
孫学民「“文化大革命”期间的经济建设――(1966～1976)」、『黑龙江史志』2011年第2期(2011年1月)。
馬士奎「“文革”未出版的外国文学译作」、『博览群书』2011年第2期(2011年2月)。
胡庚申「生态翻译学的研究焦点与理论视角」、『中国翻译』2011年第2期(2011年3月)。
車曉彦、劉昭「论大庆石油文学创作的总体特征」、『学术交流』2011年第11期(2011年11月)。
武善增「论“文革文学”话语在1964年的生成」、『江苏社会科学』2011年第4期(2011年)。
張宇寧「论1980年代大庆石油文学与人道主义文艺观」、『学术交流』2012年第5期(2012年5月)。
許俊德「浅谈铁人文学的产生和发展」、『大庆社会科学』2012年第3期(2012年6月)。
張大海、馬新宇「大庆石油文学的创作风格」、『大庆社会科学』2012年第3期(2012年6月)。
高衛華「中华民族传统文化三个传播断层反思」、『现代传播』2012年第11期(2012年11月)。
王友貴「从1949-1977年中国译史上的翻译需要审视“中华学术外译”」、『外文研究』第1巻第1期(2013年3月)。
劉苹、李松「“文革”语言特征研究述评」、『重庆理工大学学报』(社会科学)2013年第4期(2013年4月)。
焦雲俠「意识形态对文革时期美国文学翻译的操控――以荣如德的《爱情故事》译本为例」、『攀枝花学院学报』第30巻第6期(2013年12月)。
呂新雨、王紹光、黄万盛など「70年代中国」、『开放时代』2013年第1期(2013年)。
王向遠「当代中国的日本文学阅读现象分析」、『名作欣赏』2014年第1期(2014年1月)。
吳中傑「政治漩涡中的写作班子」(上)、『书城』2014年第2期(2014年2月)。

何輝斌「内部发行外国戏剧的考据与研究」、『文化艺术研究』第7巻第2期(2014年4月)。
董暁「论“文革”时期俄苏文学在中国的命运」、『广东社会科学』2014年第2期(2014年5月)。
李德純「三岛由纪夫：疲惫生活里的英雄梦想——残酷青春物语」、『中日关系史研究』2014年第3期(2014年8月)。
楊暁輝「“越境”的场所——从《有吉佐和子的中国报告》看中国生态问题的文学思考——」、『潘阳湖学刊』2014年第1期(2014年)。
張桂丹「鲁迅与小林多喜二笔下农民形象比较研究」、『山花』2014年第24期(2014年)。
鄭瑞君「“灰皮书”、“黄皮书”在社会的流传及其影响」、『新闻界』2014年第22期(2014年)。
安希孟「安希孟回忆录(七)——乱世读书」、『记忆』2015年第125期(2015年2月)。
王知常口述、金光耀、金大陸、李遜取材、諸穎政、李信之整理「我与《学习与批判》等刊物」、『炎黄春秋』2015年第3期(2015年3月)。
滕梅、吳菲菲「翻译政策作用下的国家翻译机构——以中央编译局为例」、『外语教学』第36巻第4期(2015年7月)。
温虎林「叙事的延伸与升华：《水浒传》连环画考述」、『宁夏大学学报』(人文社会科学版)2015年第4期(2015年7月)。
魏承思「“文革遗老”朱永嘉」、『南方人物周刊』2015年第23期(2015年8月)。
王雪明、劉奕「中国百年科幻小说译介：回顾与展望」、『中国翻译』2015年第6期(2015年)。
吳萍「从英雄主义到人道主义——苏联反法西斯战争文学的嬗变」、『俄罗斯文艺』2015年第1期(2015年)。
趙稀方「思想改造与翻译转型」、『中国翻译』2015年第1期(2015年)。
范豫魯「论中国石油文学的演变」、『西安石油大学学报』(社会科学版)第25巻第2期(2016年4月)。
李春「《翻译通报》与建国初的翻译改造」、『文艺理论与批评』2016年第4期(2016年7月)。
孫沛東「京滬知青階層化的個人閱讀」、『二十一世紀』2016年第8期(2016年8月)。
王峰「科幻小说何须在意“文学性”」、『探索与争鸣』2016年第9期(2016年9月)。
楊華麗「“科学小说”：不容忽略的历史存在」、『绵阳师范学院学报』第36第6期(2017年6月)。

南和志「中国石油外交与中美缓和」、李放春、夏亜峰等「中国社会主义和改革道路的新思考」、『开放时代』2017年第1期(2017年)。
廖七一「翻译批评话语：1966—1976」、『东方翻译』2018年第3期(2018年6月)。
余栄琦、黄燕芸「从生态翻译学看“文革”十年的苏联文学翻译」、『长春理工大学学报』(社会科学版)第31巻第4期(2018年7月)。
聶煒、張白樺「文化浩劫中的译者意志」、『重庆交通大学学报』(社会科学版)第18巻第4期(2018年8月)。
舒熳「一步一步走向黎明——浅析小林多喜二《蟹工船》中的渐变性描写」、『大众文艺』2018年第19期(2018年10月)。
張瑶、候敏、孫文静、趙悦、唐暁恬「大数据下的石油文学」、『神州印象』2019年第5期(2019年5月)。
詹玲「启蒙视野下的中国科幻小说发展流变」、『学术月刊』2019年第4期(2019年7月)。
井延鳳「笔记本、中转站与消隐的把关人——“文革”地下文学的手抄传播载体及其特色」、『中国文学研究』2019年第3期(2019年9月)。
朱建宏「石油精神永放光芒——再论玉门石油精神与石油文学」、『新西部』2020年2月下旬号(2020年2月)。
季淑鳳「《翻译》月刊编译出版考论：1949—1951——新中国第一份瞭望世界的期刊」、『安康学院学报』第32巻第3期(2020年6月)。
操楽鵬「“十七年”文学翻译批评的场域、路径与进程——以译家书信、日记为中心」、『中国翻译』2021年第4期(2021年)。

・日本の論文

「中国人民政治協商会議共同綱領」(1949年9月)、『季刊法律学』第17号(1954年1月)。
川端康成「われわれはなぜ声明を出したか——芸術は政治の道具か?(座談会)」、『中央公論』1967年第6号(1967年5月)。
「中国共産党中央委員会主席毛沢東同志のアメリカ黒人の抗暴闘争を支持する声明」、『アジア経済旬報』第719号(1968年5月)。
結城昌治『不良少年』、『中央公論』1970年12月号(1970年12月)、1971年1月号(1971年1月)、1971年3月号(1971年3月)、1971年4月号(1971年4月)、1971年5月号(1971年5月)。

山田洋次、朝間義隆『男はつらいよ　柴又慕情』、『キネマ旬報』1972年夏の特別号(第582期、1972年7月)。
山田洋次、宮崎晃『故郷』、『キネマ旬報』1972年11月下旬号(第591期、1972年11月)。
渡辺恒雄「『青嵐会』を論ず」、『文芸春秋』第52巻第8号(1974年7月)。
熊井啓「『サンダカン八番娼館・望郷』の撮影にあたって」、『キネマ旬報』1974年10月上旬号(1974年10月)。
脚本・廣澤栄、熊井啓『サンダカン八番娼館　望郷』、『キネマ旬報』1974年11月下旬号(1974年11月)。
橋本忍、山田洋次『砂の器』、『シナリオ＝Scenario』31(1)(318)(1975年1月)。
木村寿美『穂波のゆくえ』、『新日本文学』1975年6月号(1975年6月)、1975年7月号(1975年7月)。
上杉忍「日本におけるアメリカ黒人史研究の歩み」、『一橋研究』第30巻(1975年12月)。
竹内實「『水滸傳』批判について」(創立五十周年記念論集)、『東方學報』第52巻(1980年3月)。
喜田昭治郎「中国と第三世界――『条約』の締結状況からみた中国外交――」、『国際政治』第76号(1984年5月)。
松澤明「中国の石油事情」、『石油技術協会誌』第51巻第4号(1986年7月)。
吉田知子「『老い』の問題を予見――有吉佐和子『恍惚の人』」、『新潮』第85巻第12号(1988年12月)。
助川徳是「『恍惚の人』有吉佐和子」、『国文学解釈と鑑賞』第54巻第4期(1989年4月)。
田中仁「中国文化大革命考：菊地昌典氏の所論をめぐって』、『歴史科学』121号(1990年7月)。
橋口豊「冷戦下の米・ソ覇権システムと第三世界」(2)、『名古屋大學法政論集』第171巻(1997年12月)。
上野千鶴子「『恍惚の人』と『黄落』のあいだ」、『小説トリッパー』1998年春季号(1998年3月)。
村崎百郎「終末論という“電波”」、『ユリイカ』(特集　終末論)1999年2月号(1999年2月)。
大町公「〈ボケ〉る前に：佐江衆一『黄落』の提起したもの」、『奈良大学紀要』第28号(2000年3月)。

岩佐昌暲「文革期の地方文学雑誌について」、『言語文化論究』第20号(2005年1月)。
鈴木正信、浜勝彦「或る中国体験：混沌の時代・回想と省察」、『創大中国論集』第8号(2005年3月)。
中村律子「高齢者福祉制度の離陸期：1950年から1970年における老人の制度化過程の議論を中心に」、『現代福祉研究』第6巻(2006年1月)。
秋山洋子「中国女性NGOの発展　解題」、『国立女性教育会館研究ジャーナル』第11号(2007年8月)。
堺屋太一「ベストセラー近未来予測小説『平成三十年』執筆から10年　厭な予測がかなり当たっている」、『週刊朝日』第113巻第35号(2008年7月)。
吉村拓三「文革期における『私』と『公』をめぐって」、『紀要』(愛知大学国際問題研究所)第132号(2008年9月)。
久保田裕子「翻訳者・三島由紀夫と村上春樹の文化戦略」、『日本文学』(特集　近現代文学における〈交通〉)第57巻第11号(2008年11月)。
藤崎宏子「介護保険制度と介護の『社会化』『再家族化』」、『福祉社会学研究』第6巻(2009年6月)。
辻田智子「文革期文芸の一考察：『春苗』の書きかえを中心として」、『京都産業大学論集』(人文科学系列)第42巻(2010年3月)。
辻田正雄「1971年の出版工作座談会について」、『仏教大学文学部論集』第94号(2010年3月)。
テレングト・アイトル「アジアにおける三島文学：自決後40周年によせて」、『北海学園大学人文論集』第45号(2010年3月)。
岩崎菜子「現代中国の伝統文化復興と蘇る『水滸伝』もの」、『アジア遊学』第131号(特集「『水滸伝』の衝撃――東アジアにおける言語の接触と文化受容」、2010年4月)。
金一虹「振り返り再考する――中国文化大革命期のジェンダーと労働、そして『鉄の娘』運動――」大橋史恵訳、『ジェンダー史学』第6号(2010年)。
鳥羽耕史「小松左京『日本沈没』とその波紋：高度成長の終焉から『J回帰』まで」、『日本文学』(特集　《成長》の中の戦後日本文学再検討)第59巻第11号(2010年)。
崔学松「中国文化大革命期における外来言語文化受容をめぐる論争」、『北東アジア地

域研究』第17号(2011年10月)。
三宅康之「中国の『国交樹立外交』、1965〜1971年」、『愛知県立大学外国語学部紀要』第43号(地域研究・国際学編)(2011年)。
孫軍悦「悪と罪――文化大革命直後の中国大陸における日本推理映画の〈翻訳〉について」、『日本文学』第61巻第2号(2012年2月)。
印紅標「文革後期における青年たちの読書と思想的探求」土屋昌明訳、『専修大学社会科学研究所月報』第585号(2012年3月)。
辻田智子「映画『南海長城』について：中国当代文芸政策に関する一考察」、『京都産業大学論集』(人文科学系列)45号(2012年3月)。
八塚正晃「中国共産党の『歴史決議』をめぐる政治過程(一九七九―一九八一)」、『法學政治學論究：法律・政治・社会』第93巻(2012年6月)。
馬慧嬌「『文革』時期における日本文学翻訳に関する一考察――単行本のテキスト対照を中心に」、『饕餮』第21号(2013年9月)。
加藤靖子「中国における女性の就業・教育・政治参加――改革開放前後を中心に――」、『東京大学大学院教育学研究科紀要』第53巻(2013年)。
藤崎宏子「ケア政策が前提とする家族モデル　1970年代以降の子育て・高齢者介護」、『社会学評論』第64巻第4号(2013年)。
田村容子「革命叙事と女性兵士――中国のプロパガンダ芸術における戦闘する女性像」、『地域研究』14巻2号(2014年2月)。
藤濤文子「翻訳とパラテクストとしての挿絵――プロイスラーの作品を例に――」、『国際文化学研究：神戸大学大学院国際文化学研究科紀要』第42巻(2014年8月)。
河原清志「翻訳ストラテジー論の批判的考察」、『翻訳研究への招待』第12巻(2014年10月)。
八塚正晃「文革後期の中国における対外開放政策の胎動」、『アジア研究』60巻1号(2014年10月)。
王桂新、戴二彪「中国における少子高齢化の実態，発生要因と対策」、『ワーキングペーパー』2015年第7期(2015年3月)。
李妍淑「中国のジェンダー法政策推進過程における婦女聯合会の役割(2)」、『北大法学論集』第65巻第6号(2015年3月)。
北場勉「1900年感化法の制定過程に関する社会政治的考察」、『社会福祉学』第56巻第3

号(2015年)。
桑島由美子「現代中国におけるフェミニズムと文化研究――戴錦華を中心として――」、『言語と文化』第34号(愛知大学、2016年1月)。
金光洙「中国の高齢化の要因と経済的影響」、『現代社会文化研究』第62巻(2016年3月)。
李錚強「時代とともに変化してきた呼称語」、『中国語の環』第102号(2016年4月)。
孫若聖「日本における新時期文学翻訳の黎明期と黄金期」、『通訳翻訳研究』16巻(2016年)。
叢小榕「文化大革命期の芸術作品におけるイデオロギーと芸術的表現手法について」、『明星大学全学共通教育研究紀要』第1号(2019年3月)。
苗鳳科「中国における日本近現代小説の受容研究：一九七二～一九七八年」、『中央大学国文』第62号(2019年3月)。
大野公賀「文化大革命期の中国知識人――豊子愷の思想と作品について――」、『東洋法学』第63巻第2号(2020年1月)。
徐涛「中国のアイデンティティの変容：東アジア近現代史の視点から」、『筑紫女学園大学研究紀要』第16号(2021年1月)。
高山陽子「中国における労働模範の身体表象に関する一考察」、『国際関係紀要』第30巻第1・2合併号(2021年)。

・その他

Shuyu Kong, “For Reference Only: Restricted Publication and Circulation of Foreign Literature During the Cultural Revolution”, *Yishu: Journal of Contemporary Chinese Art*, Volume 2(Summer), 2002.
Yukiko Koshiro, "Beyond an Alliance of color: The African American Impact on Modern Japan", *Positions east asia cultures critique [special issue: the afro-asian century]* , Volume 11 Number 1, Duke University Press, 2003.3.
Lingchie Letty Chen, "Contemporary Chinese Literature: From the Cultural Revolution to the Future by Yibing Huang", *China Review International*, Volume 17 Number 2, University of Hawai'i Press, 2010.

【学位論文】

・中国の論文

林小波「“四清”运动研究」(中共中央党校博士学位論文、2004年5月)。

劉瓊「文革语言研究」(山東大学修士学位論文、2006年5月)。

謝治国「新中国能源政策研——对新中国能源政策发展过程的考察分析」(中国科学技術大学博士学位論文、2006年5月)。

朱雪琴「虹影与三岛由纪夫比较论」(華中科技大学修士学位論文、2006年5月)。

黄正楷「1950年代中共新華社《内部参考》的功能與轉變」(国立政治大学修士学位論文、2006年)。

張小平「论新时期以来的中国先锋戏剧」(復旦大学博士学位論文、2007年4月)。

羅巧玲「中国新时期以来的俄苏文学译介专刊研究」(華東師範大学修士学位論文、2009年5月)。

陳鳴「Translation of Foreign Literature in Contemporary China: A Study from the Perspective of Manipulation Theory(1949-2008)」(山東大学博士学位論文、2009年8月)。

郭東峰「中共政治动员研究——以“工业学大庆”为例」(華東師範大学修士学位論文、2010年5月)。

陸秀英「中国当代翻译文学系统中主体间关系的生态分析——以《世界文学》期刊为例」(上海外国語大学博士学位論文、2010年5月)。

陶艶梅「新中国初期三十年农业发展」(西北農林科技大学博士学位論文、2011年5月)。

張明「论改革开放与中国对日本文学的翻译」(南京師範大学修士学位論文、2012年2月)。

程春梅「20世纪中国文学中的贞节观」(山東大学博士学位論文、2012年4月)。

黄巍「“文革”时期女性形象政治化研究」(首都師範大学博士学位論文、2012年5月)。

顔東「关于《蟹工船》中人物描写的翻译研究报告」(吉林大学修士学位論文、2012年5月)。

肖翔「中国工业化中的政府作用研究(1949-2010)」(中共中央党校博士学位論文、2012年6月)。

楊静傑「日本无产阶级文学(1921-1934)在中国的传播」(上海外国語大学修士学位論文、2012年12月)。

馬修論「影像呈现与重构：新中国纪实影片研究(1949-1976)」(上海大学博士学位論文、2013年9月)。
廖迅喬「认知视角下《人民日报》社论(1966-1971)的批评语篇分析」(北京外国語大学博士学位論文、2014年6月)。
武菲「符号化政治与社会运动："文化大革命"时期的歌曲研究」(中共中央党校修士学位論文、2014年6月)。
陽勇「毛泽东与新中国钢铁工业研究」(湘潭大学博士学位論文、2014年11月)。
李雅静「"文革"时期标语研究」(河北大学修士学位論文、2016年5月)。
劉世虎「当代歌曲与社会历史发展关系研究(1949-1989)」(東北師範大学博士学位論文、2016年6月)。
王岩「有吉佐和子眼中七十年代的中国农村——以《中国报告》为中心」(西安外国語大学修士学位論文、2016年)。
魏婷「1970年代中国共产党对国外环境污染问题的认识——以《人民日报》报道为例」(武漢大学修士学位論文、2017年5月)。
余思嘉「严歌苓"文革叙事"的超性别意识」(湖南理工学院修士学位論文、2017年6月)。
王姍姍「三岛由纪夫研究在中国」(湖南大学修士学位論文、2018年6月)。
洪錦雪「操控理论视阈下的小说英译特点和策略研究——以贾平凹的《高兴》英译本为例」(福建師範大学修士学位論文、2019年6月)。

・日本の論文

蔡鋒「中国における農村土地制度の変遷の原因とその成果に関する歴史的研究　建国期から改革開放期までを中心として」(関西大学博士学位論文、2015年9月)。
須川渡「戦後日本におけるコミュニティ・シアターの形成と展開」(大阪大学博士学位論文、2016年3月)。
上原かおり「近現代中国におけるSFおよび科学普及読物の研究：1930年代の『科学小説』『科学小品文』を中心に」(首都大学東京博士学位論文、2017年11月)。

【新聞記事とその他】

・『人民日报』

西野辰吉「早晨，在落了霜的路上」龐春蘭訳、李芒校、1961年6月4日『人民日报』。
「接见正在我国访问的许多日本朋友并同他们亲切谈话　毛主席说：日本人民斗争的前途是光明的」、1961年10月8日『人民日报』。
「全世界无产者联合起来反对我们的共同敌人」、1962年12月15日『人民日报』。
「关于国际共产主义运动总路线的建议——中国共产党中央委员会对苏联共产党中央委员会　一九六三年三月三十日来信的复信」、1963年7月20日『人民日报』。
毛沢東「支持美国黑人反对种族歧视斗争的声明」、1963年8月9日『人民日报』。
「从国外进口“洋油”的时代即将一去不返　我国石油产品基本自给」、1963年12月26日『人民日报』。
「大寨之路」、1964年2月10日『人民日报』。
「学大寨志　长大寨风　走大寨路　山西和京郊广大干部社员添干劲挖潜力努力改变生产面貌」、1964年2月10日『人民日报』。
「用革命精神建设山区的好榜样」、1964年2月10日『人民日报』。
「崇高的榜样」、1964年4月20日『人民日报』。
「大庆精神　大庆人」、1964年4月20日『人民日报』。
「永不卷刃的尖刀——记大庆油田一二〇二钻井队」、1964年4月25日『人民日报』。
「在岗位上——大庆油田李天照采油井组纪事」、1964年5月6日『人民日报』。
「在革命化的道路上——大庆油田工人座谈会记录」、1964年5月21日『人民日报』。
「他们是怎样看、怎样做思想政治工作的？——大庆油田基层政治工作人员座谈会记录」、1964年6月1日『人民日报』。
「在第三届全国人民代表大会第一次会议上　周恩来总理作政府工作报告」、1964年12月31日『人民日报』。
姚文元「评新编历史剧《海瑞罢官》」（原載『文汇报』1965年11月9日）、1965年11月30日『人民日报』。
「中国共产党中央委员会通知」、1967年5月16日『人民日报』。
毛沢東「支持美国黑人抗暴斗争的声明」、1968年4月16日『人民日报』。
「毛主席语录」、1968年12月22日『人民日报』。
「贫下中农一封来信——记本溪市十三中易莉莉到农村落户」、1968年12月22日『人民日报』。
「响应毛主席伟大号召，到农村安家落户」、1968年12月22日『人民日报』。

「用革命的舆论粉碎反革命的舆论」、1969年5月27日『人民日报』。
「日本军国主义复活的又一铁证」、1970年11月29日『人民日报』。
「日本舆论强烈谴责日本反动派导演的“三岛事件”丑剧　日本人民必须加强反对军国主义的斗争　指出佐藤、中曾根之流和三岛是一丘之貉」、1970年12月4日『人民日报』。
「一个危险的信号」、1970年12月4日『人民日报』。
「朝鲜《劳动新闻》就“三岛事件”发表评论　谴责美日反动派加速复活日本军国主义　指出佐藤反动统治集团是培植右翼法西斯组织的罪魁祸首」、1970年12月5日『人民日报』。
「无耻吹捧法西斯分子三岛　竭力贩卖军国主义思想　日本反动派利用“三岛事件”加速军国主义化」、1970年12月18日『人民日报』。
「三岛由纪夫阴魂不散　日本反动派为这个法西斯狂徒大搞“葬礼”　鼓吹继承“三岛精神”宣扬“武士道”和“大和魂”」、1971年2月20日『人民日报』。
「日本反动派力图恢复“天皇制”　要重建封建的军事法西斯专政，再走对外侵略扩张的老路」、1971年6月11日『人民日报』。
「揭穿佐藤政府搜罗炮灰的骗局——评日本反动影片《啊，海军》」、1971年7月20日『人民日报』。
1972年『人民日报』元旦社説「团结起来，争取更大的胜利」、1972年1月1日『人民日报』。
「垄断资本和反动政府加速军国主义化和追逐高额利润的恶果　日本“公害”严重难于解决　各地兴起保护自然资源、争取生存权利、反对垄断资本残害人民的斗争」、1972年2月22日『人民日报』。
「“公害”祸及日本富士山」、1972年3月28日『人民日报』。
「“公害”是资本主义的不治之症」、1972年3月28日『人民日报』。
「新年献词」、1973年1月1日『人民日报』。
「日本人民纪念小林多喜二遇害四十周年　日共(左派)中央号召继承他的革命遗志创作新的革命文艺作品」、1973年3月11日『人民日报』。
「日本各地万余渔民集会和示威反对公害」、1973年6月26日『人民日报』。
「强烈抗议垄断资本污染海水损害渔业生产　日本千叶和熊本两县渔民进行斗争」、1973年8月13日『人民日报』。

「日本茨城县渔民示威反对污染湖水」、1973年8月27日『人民日报』。
「以色列向埃及和叙利亚发动新的侵略进攻　埃及叙利亚武装部队奋起反击取得战果」、1973年10月8日『人民日报』。
「埃叙部队继续英勇抗击以色列侵略　埃军在运河东岸向前推进　叙军在戈兰高地多次击退敌人」、1973年10月9日『人民日报』。
「超级大国对以色列的“援助”」、1973年10月10日『人民日报』。
「各国舆论谴责美苏策划停火阴谋破坏阿拉伯解放斗争　阿拉伯人民决心摆脱超级大国独立自主斗争到底」、1973年10月31日『人民日报』。
「苏美加紧争霸中东竞相增强军事实力」、1973年10月31日『人民日报』。
「日本公害日益严重　各地群众多次示威抗议垄断企业制造公害危害人民」、1973年12月28日『人民日报』。
「日本一小撮反华反共势力又在蠢动　“青岚会”叫嚷同蒋帮加紧“合作”破坏日中友好关系」、1974年2月2日『人民日报』。
「一个值得注意的动向」、1974年2月2日『人民日报』。
「猖狂反华反共　竭力煽动复活军国主义　日本一小撮右翼反动势力加紧活动　这是日本政局中一个值得注意的动向，它正遭到人民的强烈反对」、1974年3月17日『人民日报』。
「大寨之路就是斗争之路——狠批林彪贩卖孔老二“中庸之道”的反动谬论」、1974年3月17日『人民日报』。
「日本反华反共分子决没有好下场」、1974年3月23日『人民日报』。
「何英副外长会见阿拉伯国家驻华使节和巴勒斯坦解放组织驻京办事处主任」、1973年10月21日『人民日报』。
氷心「火树银花里的回忆」、1984年5月2日『人民日报』。
「日女作家有吉佐和子去世」、1984年9月3日『人民日报』。
胡挈青、舒乙「有吉佐和子，你走得太早」、1984年10月9日『人民日报』。
林林「人去文采在——悼有吉佐和子女士」、1984年11月9日『人民日报』。
李德純「苦涩中的深沉美——纪念有吉佐和子逝世七周年」、1990年12月5日『人民日报』。

・その他

『少年法』(1948年法律第168号)。

『中国月報』第63-64号(外務省アジア局中国課、1964年)。
「林彪同志委托江青同志召开的部队文艺工作座谈会纪要」、1966年4月18日『解放军报』。
戦鼓編委会「誓与修正主义文艺黑线血战到底——纪念《在延安文艺座谈会的讲话》发表25周年」、1967年5月2日『战鼓』創刊号。
于会泳「让文艺界永远成为宣传毛泽东思想的阵地」、1968年5月23日『文汇报』。
Lurie, "We can't go on meeting like this.", *Newsweek*, 1975.7.21.
Peter Gwynne et al., "The U.S.-Soviet space link-up", *Newsweek,* 1975.7.21.
「毛主席关于《水浒》的谈话」、『中央文件』1975年196号(1975年8月)。
Lurie, "'Imperialist!' 'Colonialist!'", *Newsweek,* 1976.1.12.
「第Ⅱ編　アジア　第4章　華国鋒政権下の対外政策の展開」、『国際年報』第19巻(日本国際問題研究所、1977年)。
「少年警察活動規則」(2002年国家公安委員会規則第20号)(2002年9月)。
内閣府編『青少年白書：青少年問題の現状と対策』(平成14年版)(2002年)。
「让学者回归学者学术回归学术——访日本文学专家叶渭渠先生」、2005年10月14日『文汇读书周报』。
張福生「我了解的“黄皮书”出版始末」、2006年8月23日『中华读书报』。
陳丹青「人文与教养」、2008年9月15日『作家文摘报』。
NHK番組『戦争証言アーカイブス』(「終戦で覆った街と人々」、放送日：2015年8月9日)。
国立研究開発法人科学技術振興機構　中国総合研究・さくらサイエンスセンター編集『中国の科学技術の政策変遷と発展経緯』(2019年)。
「北京大学图书馆」(https://www.lib.pku.edu.cn/portal/cn)。
「孔夫子旧書网」(https://www.kongfz.com/)。
「南京图书馆」(http://www.jslib.org.cn/)。
「全国图书馆参考咨询联盟」(http://www.ucdrs.superlib.net/)。
「上海图书馆(上海科学技术情报研究所)」(https://library.sh.cn/)。
「中国国家图书馆・中国国家数字图书馆」(http://www.nlc.cn/)。

付録

付録①——文革期に翻訳された日本文学の単行本一覧

付録②——雑誌『摘译』に翻訳された日本文学の作品と関連作品一覧

付録①——文革期に翻訳された日本文学の単行本一覧

No.	発行年月	出版社	作品	翻訳者	原作者	原作刊行	刊行年月	ジャンル
1	1973年5月	人民文学出版社	沼尾村	李徳純	小林多喜二	青木書店	1953年	中・長編小説
2	1973年10月	人民文学出版社	在外地主	李芒	小林多喜二	青木書店	1953年	中・長編小説
3	1973年10月	人民文学出版社	蟹工船	葉渭渠	小林多喜二	青木書店	1953年	中・長編小説
4	1966年5月	作家出版社	晨霜路上	龐春蘭	西野辰吉	記載なし	記載なし	中・長編小説
5	1971年11月	人民文学出版社	忧国	記載なし	三島由紀夫	記載なし	記載なし	中・長編小説
6	1973年12月	人民文学出版社	春雪	記載なし	三島由紀夫	記載なし	記載なし	中・長編小説
7	1973年5月	人民文学出版社	奔马	記載なし	三島由紀夫	記載なし	記載なし	中・長編小説
8	1972年8月	人民文学出版社	晓寺	記載なし	三島由紀夫	記載なし	記載なし	中・長編小説
9	1971年12月	人民文学出版社	天人五衰	記載なし	三島由紀夫	記載なし	記載なし	中・長編小説
10	1972年8月	商務印書館	我的履历书	秦新	田中角栄	日本経済新聞社	1966年5月1日初版、1972年4月1日7版	自伝・伝記
11	1973年5月	商務印書館	大臣日记	吉林師範大学日本研究室	田中角栄	新潟日報事業社	S47.9.1	自伝・伝記
12	1972年8月	上海人民出版社	田中角荣传	復旦大学歴史系、経済研究所、国際政治系、上海中医学院、上海新聞出版系統「五・七」幹校翻訳組等	戸川猪佐武	鶴書房	1972年	自伝・伝記
13	1972年9月	上海人民出版社	田中角荣其人	復旦大学歴史系、政治系、上海中医学院等	馬弓良彦	ダイヤモンド社	1972年6月15日	自伝・伝記
14	1974年6月	上海人民出版社	故乡 日本的五个电影剧本(以下)	石宇	以下	以下	以下	映画のシナリオ
			故乡		原作、監督：山田洋次、改編：山田洋次、宮崎晃	『キネマ旬報』	1972年第591期	
			啊，无声的朋友们		原作：有馬頼義、改編：鈴木尚之、監督：今井正	『キネマ旬報』	1972年第578期	
			男人的烦恼——柴又恋情		原作、監督：山田洋次、改編：山田洋次、朝間義隆	『キネマ旬報』	1972年第582期	
			忍川		原作：三浦哲郎、改編：長谷部慶次、熊井啓、監督：熊井啓	『キネマ旬報』	1972年第579期	
			约会		原作：金志軒、斎藤耕一、改編：石森史郎、監督：斎藤耕一	『キネマ旬報』	1972年第576期	
15	1976年1月	人民文学出版社	日本电影剧本《沙器》《望乡》(以下)	記載なし	以下	以下	以下	映画のシナリオ
			沙器		橋本忍、山田洋次	『Scenario』	1975年第1期	
			望乡		広沢栄、熊井啓	『キネマ旬報』	1974年11月下旬号	
16	1975年4月	人民文学出版社	日本改造法案——北一辉之死	吉林師大日本研究室文学組	松本清張	『群像』	1972年5月号	映画のシナリオ
17	1975年4月	人民文学出版社	恍惚的人	秀豊、渭慧	有吉佐和子	新潮社	1972年	中・長編小説
18	1975年6月	人民文学出版社	日本沉没	李徳純	小松左京	光文社	1973年	中・長編小説
19	1976年3月	人民文学出版社	虚构的大义——一个关东军士兵的日记	本社翻訳組	五味川純平	文藝春秋	1973年	中・長編小説
20	1976年6月	上海人民出版社	党人山脉	記載なし	戸川猪佐武	流動社	1972年4月5日3版	中・長編小説
21	1976年8月	人民文学出版社	油断	渭文、慧梅	堺屋太一	日本経済新聞社	1975年	中・長編小説
22	1975年5月	人民文学出版社	文镜秘府论	周维德校点	遍照金剛	記載なし	記載なし	文学理論
23	1976年1月	上海人民出版社	现代日本文学史	齐干	吉田精一	筑摩書房	1972年第8版	文学史

付録②――雑誌『摘訳』に翻訳された日本文学の作品と関連作品一覧

No.	発行年月	号数	作品	翻訳者	原作者	原作刊行	刊行年月	ジャンル
1	1973年12月	1973年2期	前言	なし	記載なし	なし	なし	出版説明
2	1973年12月	1973年2期	河流下游的市镇（话剧）	瞿麦	齿轮座剧团集体	記載なし	1973年1月25日	演劇の戯曲
3	1973年12月	1973年2期	春雷（话剧）	石宇	齿轮座剧团集体	記載なし	記載なし	演劇の戯曲
4	1973年12月	1973年2期	冲绳的早晨（话剧）	阳新	齿轮座剧团集体	記載なし	記載なし	演劇の戯曲
5	1973年12月	1973年2期	波涛（话剧・梗概）	薛毅	齿轮座剧团集体	記載なし	記載なし	演劇の戯曲
6	1973年12月	1973年2期	暴风雨的船台――《波涛》主题歌	廖望	記載なし	《文艺战士》	1972年7月1日	詩歌
7	1973年12月	1973年2期	红纸鹤（话剧・梗概）	叶新斌	記載なし	《长周新闻》	1973年8月22日	演劇の戯曲
8	1973年12月	1973年2期	白色的桥（短篇小说）	薛毅	中原瑛	《文艺战士》	1971年9月1日	短編小説
9	1973年12月	1973年2期	致春斗、国劳的斗争（诗）	廖望	白松哲夫	《文艺战士》	1973年6月1日	詩歌
10	1973年12月	1973年2期	竹根――多喜二被害四十周年（诗）	薛毅	杉田光二	《人民之星》	1973年3月6日	詩歌
11	1973年12月	1973年2期	日本电影向何处去（评论・摘译）	廖望	吉川彻也	《文艺战士》	1971年4月1日	文学・文芸評論
12	1973年12月	1973年2期	颠倒了的侵略战争史――评山本萨夫导演的《战争和人・末集》（影评）	薛毅	佐古诚	《长周新闻》	1973年9月5日	文学・文芸評論
13	1973年12月	1973年2期	战争和人・末集（电影剧本・梗概）	薛毅	导演：山本萨夫　编剧：武田敦、山田信夫	《电影旬报》	1973年7月	映画のシナリオ
14	1973年12月	1973年2期	谈不上什么反战-评今井正的《海军特别少年兵》（影评）	廖望	吉川彻也	《长周新闻》	1972年10月11日	文学・文芸評論
15	1973年12月	1973年2期	海军特别少年兵（电影剧本・梗概）	叶新斌	导演：今井正　编剧：铃木尚之	《电影旬报》	1972年7月	映画のシナリオ
16	1973年12月	1973年2期	齿轮座剧团二十年来所走过的道路――一九七二年十月十四日在齿轮座剧团成立二十周年庆祝大会上的报告	廖望	日笠世志久	《文艺战士》	1972年11月1日	文学・文芸評論
17	1973年12月	1973年2期	动态（如下5则）	記載なし	記載なし	以下	以下	動態・記事
			日本山口县出版文艺季刊《流域》			《人民之星》；《长周新闻》	1973年5月9日；1973年8月31日	
			山口共同映画社摄制纪录片《胜利的歌声响彻四方》			《长周新闻》	1973年4月25日	
			纪录影片《是人民的力量恢复了日中邦交》摄制完成			《人民之星》	1972年11月7日	
			《艳阳天》等中国文学作品译成日文出版			《文艺战士》；《长周新闻》	1973年	
			齿轮座创作新话剧《美枝子的同伴们》			《长周新闻》	1973年9月9日	
18	1974年2月	1974年2期	朝霞之诗（日本电影剧本・摘译）	薛毅	作者：山内久、桂明子、熊井启 导演：熊井启	《电影旬报》	1973年10月	映画のシナリオ
19	1974年2月	1974年2期	日本文艺动态（2则）	記載なし	記載なし	以下	以下	動態・記事
			日本出版访华诗集《火红的海》			《人民之星》	1973年12月	
			《人民之星》发表文章 批判胜山俊介的电影剧本《小林多喜二》			《人民之星》	1973年12月7日	
20	1974年4月	1974年4期	不良少年（日本中篇小说・梗概）	薛毅	结城昌治	《中央公论》	1970年12月～1971年5月	中・長編小説
21	1974年4月	1974年4期	日本文艺动态（3则）	記載なし	記載なし	以下	以下	動態・記事
			日本宣扬世界末日来临的小说畅销			記載なし	記載なし	
			获得一九七三年度日本主要文学奖的作品			記載なし	記載なし	
			日本《电影旬报》杂志 发表1973年度十部最佳影片			《电影旬报》	1973年	
22	1974年9月	1974年5期	华丽的家族〔第一部〕（日本电影剧本）	上海师大外语系日语教研组	原作者：山崎丰子 改编者：山田信夫	《电影剧本》	1973年12月号	映画のシナリオ
23	1974年9月	1974年5期	日本文艺动态（2则）	記載なし	記載なし	以下	以下	動態・記事
			齿轮座剧团演出新作《一个出发点》			《文艺战士》；《人民之星》	1974年4月	

No.	発行年月	号数	作品	翻訳者	原作者	原作刊行	刊行年月	ジャンル
			日共（左派）机关报《人民之星》 批判第七十次芥川奖获奖作品《草剑》			《人民之星》	1974年3月12日	
24	1974年11月	1974年6期	华丽的家族〔续・第二部〕（日本电影剧本）	上海师大外语系日语教研组	原作者：山崎丰子 改编者：山田信夫	《电影剧本》	1973年12月号	映画のシナリオ
25	1974年11月	1974年6期	日本文艺动态（4则）	記載なし	記載なし	以下	以下	動態・記事
			河原崎长十郎《天平之甍》在东京公演			《人民之星》	1974年5月24日	
			日本文艺杂志《流域》同人会 对日本无产阶级文学的重新探讨			記載なし	記載なし	
			日本齿轮座剧团发表自我批评文章：《克服右倾，高举无产阶级文艺路线的红旗前进》			《人民之星》	1974年3月	
			苏修大搞日苏电影交流			《每日新闻》	1974年5月25日；1974年6月11日	
26	1974年12月	1974年7期	钉鞋带（日本短篇小说）	修敬	有马赖义	《小说现代》	1971年10月	短編小説
27	1974年12月	1974年7期	日本文艺动态（2则）	記載なし	記載なし	以下	以下	動態・記事
			日本大批作者退出笔会			《每日新闻》	記載なし	
			齿轮座的新作品《对明天的誓言》			《人民之星》	1974年8月23日	
28	1975年5月	1975年2期	是谁走到尽头了？——评《诺斯德拉达缪斯的大预言》	なし	闻闯钦	なし	なし	外国文学批判・評論
29	1975年5月	1975年2期	诺斯德拉达缪斯的大预言（日本电影剧本）	安可	编剧：八住利雄 导演：舛田利雄	《电影旬报》	1974年8月	映画のシナリオ
30	1975年5月	1975年2期	日本文艺动态（二则）	記載なし	記載なし	以下	以下	動態・記事
			日本“话剧人社”演出中国话剧《雷雨之前》			《文艺战士》	1974年10月1日	
			《新日本文学》杂志登载短文 《通货膨胀下的文艺时评》			《新日本文学》	1974年11月	
31	1975年7月	1975年4期	用黄金喂肥的猪（日本短篇小说）	廖望	丰田行二	《问题小说》	1974年5月	短編小説
32	1975年8月	1975年5期	编者的话	なし	記載なし	なし	なし	外国文学批判・評論
33	1975年8月	1975年5期	妄图以小资产阶级人性论歪曲革命作家的形象——批判胜山俊介著电影剧本《小林多喜二》	文耀	K	《人民之星》	1973年12月7日	文学・文芸評論
34	1975年8月	1975年5期	小林多喜二（电影剧本）	齐迈　漳泉	胜山俊介	《文化评论》	1973年	映画のシナリオ
35	1975年8月	1975年5期	资料：小林多喜二简介	なし	齐迈　漳泉	なし	なし	資料・作家紹介と作品紹介
36	1975年8月	1975年5期	少年和鸽子（短篇小说）	宜音	金子总一	《赤旗》	1972年7月	短編小説
37	1975年8月	1975年5期	和子死后（短篇小说）	容容	滨野博	《赤旗》	1972年7月	短編小説
38	1975年12月	1975年8期	两个剪影——评美国剧本《二号街的囚徒》、日本短篇小说《小虫的土葬》	なし	达明 贺焰	なし	なし	外国文学批判・評論
39	1975年12月	1975年8期	小虫的土葬（日本短篇小说）	金铮	森村诚一	《大众读物》	1975年	短編小説
40	1975年12月	1975年8期	《水浒》在外国	なし	上海外国语学院日语教研组	なし	なし	資料・作家紹介と作品紹介
41	1976年2月	1976年2期	新藤兼人的道路和苏修叛徒的险恶用心——评苏修对日本电影《我的道路》的吹捧	なし	上钢三厂 梁赞鲁	なし	なし	外国文学批判・評論
42	1976年2月	1976年2期	新藤兼人走自己的道路——资产阶级的习性和艺术家的命运（苏修评论文章）	海宇	B・卡西斯	《文化报》	1975年7月20日	文学・文芸評論
43	1976年2月	1976年2期	我的道路（日本电影剧本）	上海外国语学院日语教研组译　安可校	新藤兼人	《电影旬报》	1974年9月	映画のシナリオ
44	1976年7月	1976年7期	日全食（日本电影剧本）	安可	原作：石川达三 导演：山本萨夫	《电影旬报》	1975年9月	映画のシナリオ
45	1976年8月	1976年8期	金色稻浪今何在（日本中篇小说）	上海外国语学院日语教研组	木村寿美	《新日本文学》	1975年6、7月	中・長編小説
46	1976年11月	1976年11期	日本战后三十年的思想文化(日本评论文章)	上海外国语学院日语专业　上海师范大学中文系外国文学教研组	記載なし	《长周新闻》	1975年8-10月	文学・文芸評論
47	1976年12月	1976年12期	雨中的无人售票车（日本短剧剧本）	上海师范大学干校日语班	小松干生	《戏剧》	1976年	演劇の戯曲
48	1976年12月	1976年12期	日本战后三十年的思想文化〔续〕（日本评论文章）	上海外国语学院日语专业　上海师范大学中文系外国文学教研组	記載なし	《长周新闻》	1975年8-10月	文学・文芸評論